山岳

第四年

山岳會

第二號

山岳

第四年
第二號

本號目次

（明治四十二年六月三十日發行）

圖版

口繪

間の嶽（白峰）の半腹より農鳥山、間の嶽（赤石）　田村政七氏撮影
惡澤嶽、赤石山及び其他の諸峰を望む　三枝威之介氏撮影
信州木崎湖　辻本滿丸氏撮影
雪の大沼　石崎光瑤氏撮影
順王山より人形山を望む　高野鷹藏氏撮影
富士裾野及び側火山（十里木附近）　榎谷徹藏氏筆
燒嶽火口壁の展望

挿圖

雪の黑檜山（三枝氏撮影）さんぢやが瀧（石崎氏撮影）山中鳶ヶ峰の絶頂（石崎氏撮影）嘉門次小屋（高野氏撮影）上條嘉門次（高野氏撮影）樽前山頂新噴出のドーム形峰（神東氏寄贈）樽前山頂（ドームの一破片と佐藤ジャーガーの一行（神東氏寄贈）、第二回大會會場（高野氏撮影）陳列場、其一、其二（高野氏撮影）、落合村より北方釜無川下流を望む（小川氏寫）（以上寫眞銅版）。
鳥海本社後より仰ぐ新山絶巓（大平生）湯野濱に於ける鳥海山遠望（大平生）醫王山頂よりの展望（石崎氏）唐松峠より東望（中村氏）赤石楔狀地（中村氏）其他木版十數個（以上木版）

本欄

木曾御嶽　志村鳥嶺……一頁
赤城榛名の殘雪　岩佐定一……一一

鳥海山　大平晟……一八
岩鷲登山記　千葉草水……三〇
越中國醫王山に遊ぶ記　石崎光瑤……三六
日本河川志（其二）　高頭式……四六

雜錄

○登山の意義（梅澤親光）○山の名（梅澤親光）○裾野なる名稱に就て（烏水）○燒岳（大平晟）○乘鞍の堂守と穗高の仙人（大平晟）○信州高原落葉松の色彩（丸山晩霞）○登山者の便秘と下痢（二階堂保則）○信濃湖水の深度（U・K・生）○横嶽登攀遊草（篠原志都兒）○本州中央山岳地氣温表（梶谷徹藏）○白馬嶽植物採集記（沼尻好）○日本アルプス探險者諸君に（百瀨亥三松）○越中劍嶽先登者に就て（辻本）○屋久島八重嶽について（井上玄一）○日本山岳志跋（久保覜）

雜報

○樽前山の噴火諸報○信州燒嶽の噴煙益す熾○武州御嶽山大祭登山者○南極の大活火山○ペンク博士講演○淺間山大鳴動○富士山上の天拜所○英國軍醫雪中登山○鐵道開業哩程○比律賓の火山破裂○勘察加探險隊○報告○諏訪湖底の大古遺跡○淺間山郵便局○富士山の晩雪○高山植物保護願○導者、松澤菊一郎の死

會報

○本會名稱の改正○會員章の制定○會費未拂込の會員諸君に告ぐ○『山岳』の殘本發賣に就きて○『山岳』御注文御斷はり○飛驒山岳會の成立○會員通信○第二會山岳會有志晩餐會○内外雜誌交換目錄○前號正誤○新入會員
山岳會第二大會の記

附錄

○赤石山脈の話　理學士中村新太郎　○陸地測量部發行地圖一覽表

間の岳（白峰）の牛腹より農鳥山、間の岳（赤石）惡澤岳、赤石山及び其他の諸峯を望む

Nodorisan, Ainotake, Warumawa-dake, Akaishizan and peaks beyond, seen from the slope of Ainotake of the Shirane-Range. Photo. by M. Tamura

田村政七氏撮影

辻本滿丸氏撮影

湖　崎　木　州　信

The Lake of Kizaki, Shinano. Photo. by M. Tsujimoto.

三技威之介氏撮影

沼　大　の　雪

The O-numa under snow. Photo. by T. Saegusa.

石崎光瑤氏撮影

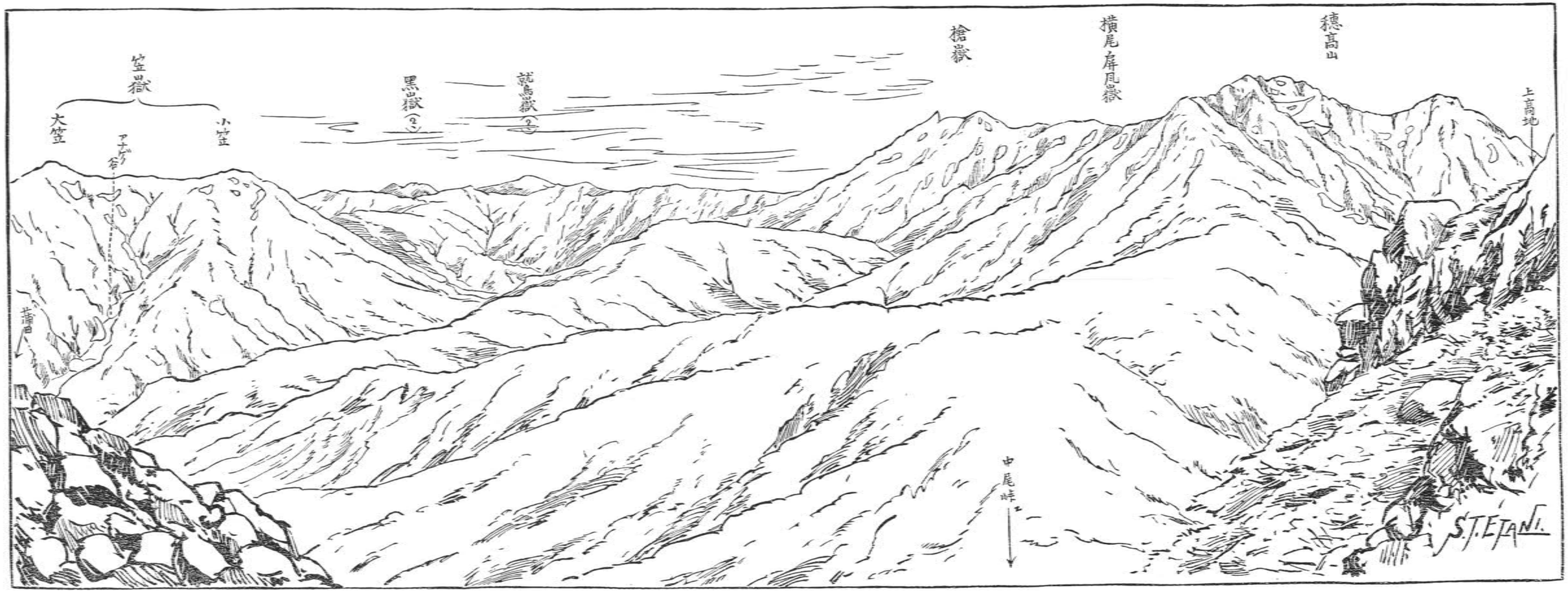
順王山より人形山を望む

Ningio - yama, from Jun - wo - zan. Photo. by K. Ishizaki.

高野鷹藏氏撮影

富士裙野及ビ側火山（十里木附近）

The Piano and mamelon of Fuji, from near the hamlet of Juriki.
Photo. by T. Z. Takano.



燒嶽火口壁の展望　　榎谷徹藏氏筆

THE VIEW FROM THE YAKEDAKE CRATER. DRAWN BY T. YETANI.

◎木曾御嶽　志村

山岳

第四年第二號

明治四十二年
六月三十日發行
（禁轉載）

木曾御嶽　其一

志村烏嶺

一、よし御嶽は俗了すとも、無限の秋風に浴して、古驛の雨に泣かんかな。

曾て、御嶽に登りし友人の書中に曰はく、木曾御嶽は、登路よくひらけ、黒澤口の如きは、七合目の小舍に、風呂ありて入浴すべく、頂上に於ても、飲食に不自由なし、されど頗る俗化

一

せり。

と、自然に憧憬すること甚だしき余は、俗化と聞きて、日本アルプス中の雄峰御嶽に對し、一種嫌惡の念を起せり。故に追年、各地の高山に登攀せしも、未だ木曾に入らず。本邦にて富士に次ぎて有名なる、御嶽には登らんともせざりき。

（然れども、こは所謂食はず嫌ひなりき）。

或人曰はく、

谿谷の美は、木曾谿を以て、天下の最と爲す。

或人曰はく、

鬱蒼たる、御料林を點綴せる木曾の紅葉は、海内無双なり。

又或人は曰はく、

木曾川は、源を東西筑摩郡界の鉢盛山より發し、管内流域二十二里、全長五十八里、沿岸多くは花崗岩にて、千山重疊の間、巨岩老樹相迫りて、木曾萬壑の勝を天下に爲す。

と、猶ほ彼の昔は、橋畔の茶店、聲々客を呼んで、橡餅を鬻げる櫻澤、今はたいかん。奈良井の古驛、鳥居の峠、御六櫛の名と共に、聞えたる籔原の短亭。京の大原女にも比すべき小木曾女、巴ヶ淵、山吹横手、旗揚ゲ八幡、鞍馬橋、氷ヶ瀨、木曾棧、寐覺床、其他御嶽、駒ヶ嶽は更らにも云はず、特に余が心を惹きしは、此等の名勝舊跡のみにあらず、曾て草枕を讀みて『今の世に旅するもの、國道の到る處に、昔榮えて今衰へたる古驛なるものゝ多きを見ん、而して其の古驛なるものゝ、いかに荒凉寂寞たる光景を呈したるかに傷心せざるものは稀ならん、壁落ち、庇傾きたる大なる家屋の、幾箇となく、其道を挾みて立てる、旅亭の古看板の幾年月の塵埃に黑みて、纔かに軒に認めらるゝ、傍に際立ちて白く、夏蔭の籠の日に光れる、驛のところどころ、家屋途絶えて、里芋、大根、唐蜀黍などの畑のそこはかとなく連りたる、殊に、白髮の老爺の喪心したるやうに、默して背を日に曝したる、皆これ等古驛に於て常に好く見る所の景なり、其處には墓塲のくされたる如き臭充ち〳〵て、新しき生命ある空氣は、少しだになく、住へる人さへ遠くこの世を隔てたるにはあらずやと疑はる』、嗚呼、風情ある木曾の古驛、木曾名所圖會、木曾路之記其他木曾道中記の數種を讀みて、益々荒凉たる古驛を訪はんとするの念禁ずる能はず、

よし御嶽は俗了すとも、無限の秋風に浴して古驛の雨に泣かんかな。

二、木曾の古道

木曾は吉蘇、岐蘇、吉祖、或は岐岨と書く。續日本紀に、大寶二年始めて開美濃國岐蘇山路とあり、又同書に和銅六年七月、美濃、信濃の堺徑道險阻にして往還艱難なり、仍通吉蘇路とあり。こゝに美濃、信濃の堺徑道險阻とあるは、即ち惠那嶽、神の御坂の險路を云ふなり。最古の東山道の官道は、木曾を經由せずして、左の各驛を過ぐ、

美濃國惠那郡坂本より、

神の御坂を越えて、

薗原、伏屋里、伊那郡阿智驛、育良驛、賢錐驛、宮田驛、諏訪郡深澤驛、筑摩郡覺志、わたり驛、清水驛、錦織驛、小縣郡浦野驛、麻績驛、亘理驛、多古の驛、沼邊驛、長倉驛、境碓氷嶺、上野碓氷郡坂本。

三、木曾街道

古代東山道の官道は、美濃より惠那山神の御坂越えを經て、今の伊那郡に入りたるなり、此御坂越えは頗る難道にて、今昔物語に、信濃國守藤原陳忠といふ人、任畢て上りけるに、御坂を越ゆるとて、馬ながら谷に落入りし事見えたり、此御坂越えの難道を避けんが爲めに、木曾路を開かれたれども、此新道も頗る困難なりしものゝ如し、萬葉集に、

信濃路は、今の沿道、かりばねに、あしふましむな、くつはけわがせ。

の句あり、以て當時の狀況を追想すべし、しかのみならず、木曾街道には有名なる棧の難所あり。

恐ろしや、木曾の掛路の、丸木橋、ふみ見るたびに、落ぬべきかな。

雲も猶、下にたちける、かけはしの、はるかに高き、木曾の山みち。

等の詠あり、されば木曾の新道開けて後も、中世まで東山道の驛路は、伊那郡の舊道を經たり。然して、木曾街道は、其後幾度か改修して、昔の棧の險を避けたり、今の福島及上松の間なる棧の如きは、木曾川の岸に石壁を作り坦々たる大道、砥の如し、されば後世には、

あやふさは、名のみ殘りて、今更に、渡るに安き、木曾の棧。

道廣き、御代にこそあれ、あやふさも、昔語の、木曾の棧。

等の詠あり、木曾街道は全道に六十九次あり、其の眞の木曾に屬するものは、十一驛とす即ち、

馬籠驛、妻籠驛、三留野驛、野尻驛、須原驛、上松驛、福島驛、宮ノ越驛、藪原驛、奈良井驛、贄川驛。

四、飛驒山脈

木曾の地域、南北二十一里、東西十里と稱す、其の西方に蜿蜒たるは、乃ち飛驒山脈吾人の所謂日本アルプスの連嶺たり、其の雄渾、本邦山脈中の最たり。此山脈の地質構造は、頗る複雜なれども、一般に其の基盤を爲すものは、片麻岩古生層より成れども、之れを破りて迸發せる深成岩たる、花崗岩、石英班岩、玢岩等なり。特に新火山岩は、各所に噴出凝結して、御嶽、乘鞍等の峻峰となり、其の脈北走して穗高、槍と爲り、白馬の連峰に終る。何れも劍戟の如き攢峰矗々として、天を摩し雄俊を極む、山頂到處、奇岩怪石磊々として盛夏と雖も白雪を冠し、一般に人跡少なき、深山幽谿にして、走獸跡を潛め、飛禽影を沒す。

五、木曾山脈

東方は木曾山脈にして、前者に比すべからずと雖も、亦一方の雄たり。此山脈は南方遠く渥美灣頭に起り、信濃に入りては、御嶽に對する駒ヶ嶽附近に於て最偉大なり、其の北端は松本平に終る、地體北部古生層より成り、大部分は領家片麻岩、花崗岩より成る。此連脈中の高峰は惠那山、神坂山、烏帽子嶽、駒ヶ嶽等とす、其の駒ヶ嶽の如きは、山體鮮麗なる花崗岩より成り、山勢秀拔、峰巒峥嶸、巍勃として蒼穹に崛起せる有樣は、げにや木曾山脈中の盟主とぞ覺ゆ。

六、木曾は山深く谷幽邃

飛驒山脈及木曾山脈の兩山脈は、何れも木曾川の沿岸に聳立するにあらずして、幾多の連嶂峰巒を隔てゝ背後に控へたり。されば標高一萬尺の御嶽も、鳥居嶺の頂に於て僅かに其の山巔を望むのみ。故に御嶽登山者も、福島より西に進むこと二里、合渡峠の頂に於て、初めて其の山容の全班を望むべし、駒ヶ嶽に於ても亦然り、街道より駒ヶ嶽を望むことを得る所甚だ尠なし、彼の甲州釜無川の沿岸より、地藏、鳳凰、八ヶ嶽を望むが如く、山麓より山巔まで一眸の中に集むること能はざるなり。故に吾人は木曾街道を旅行して、御嶽、駒ヶ嶽等の頭髮を天の一角に望むとき、谷益々幽邃に、山愈々深きを覺ゆ。

七、木曾森林

木曾の山々は、鬱蒼たる森林を以て蔽はる、其の大部分は、有名なる木曾御料林たり、其の地域、一町十五ヶ村に亘り、面積十萬五千餘町歩。林相概ね美にして針葉樹の單純林か、或は針葉樹及濶葉樹の混淆林たり。針葉樹中、扁柏、花柏、羅漢柏、金松、槇の五種は所謂木曾の五木と稱せらるゝものなり、其の發育の美事なる、雲を凌ぐの直幹、矗々として高さを競ひ、林下晝猶ほ暗く、實に太古の趣を存す。

徳川幕府時代に、木曾全土尾州藩の有となるや。寳永年間、有名なる五木制度を定められ、五木の伐採を禁ず、禁を犯す者あれば死刑に處せらる俗に、

「木一本に首一ッ」

と稱へられ、盗伐者の心膽を寒からしめぬ、之れ此大森林の今日ある所以なり。

太古の儘なる森林の美を味はんと欲するものは木曾溪に來れ、自然界に於て最森嚴なる者は此始原的森林にあらずや、神は此森嚴なる殿堂に在り、惡魔も亦此暗黑なる森林を住所とす。彼の御嶽王瀧口の開山、普寛行者が、清瀧の附近に到るや、惡魔路を遮りて進む能はず、行者乃ち三七日間護摩を焚き、其の灰を練つて夜叉の面を作り、之れを杖頭に掲げて進む、惡魔之れに恐れて害を加ふる能はざりしとか、此神話的物語りも清瀧附近の林中に入れば、吾人をして無限の感興を起さしむ。

八、木曾溪の美

木曾溪の美は、靜寂森嚴なる森林と、其の間に活躍奔騰せる、木曾川の清流とにあり、前者は靜、後者は動。前者に萬世不易の色あり、後者は千變萬化を以て其の本體とす。前者は何者に遇ふも頑として其の色を變せず、後者は行く所として其の形を變せざるなし。前者に奪ふべからざるの操あり、後者は常に變通の妙を極む。木曾は森林と奔流實に對照の妙を極む、兩者相纏絡して、愛に木曾溪の絶勝を生ぜり。木曾溪の美を歌はんとするものは、其の森林の莊嚴を歌はざるべからず。木曾溪の美を盡かんとするものは、其の奔流の妙を忘るべからず。木曾溪より、森林を除かば、木曾無きなり。木曾溪より、奔流を去らば、木曾無きなり、

嗚呼木曾の美は森林にあり、奔流にあり。

九、發　程、長野、鹽尻間（川中島、……姥捨、……明科、……松本、……鹽尻）

中央東線によりて、長野驛を出發せしは七月の下旬。川中島の早旦。萬斛の涼風車窓を吹けども葉末にきらめく旭光は人をして午後の炎熱を想はしむ。

世に聞えたる姥捨も、剛れては特に看るものなし。

汽車冠着の隧道に入りては、異樣に響く車聲に先づ不快を覺え、臭烟と炎熱とに苦しまざるはなし、麻績、西條を過ぎて、明科に至れば、松本平前面に開け、右方遙かに日本アルプスの一角を望むべし、有明の青嶂、常念、蝶ヶ嶽等皆吾人を迎ふ。

車窓より松本市街の粉壁を左に眺め、此平地の南端桔梗ヶ原の一停車場、鹽尻に下車す。

僻邑の一停車場、素より客を待つ車夫も居らねば、重荷を抱いて行く商人風の男もあり、發車時刻に後れしと、脛もあらはに走せ付けたる村孃もあり、停車場附近には、殺風景なる數軒の旅舍、飲食店あるのみ、兎角新開地の停車場程、趣味なきはなし。

桔梗ヶ原は、鹽尻の外、宗賀、廣丘、芳川等の數村に亘れり。

○　　賴支峯

戰血消來霜葉殷　　茫々往時白雲間
龍虎爭鬪都無迹　　雲外依然甲斐山

○　　加茂眞淵

ものゝふの草むす屍年ふりし
秋風寒しきちこうが原

旌旗に疑ふ尾花も見ねず、茅茨悉く鋤き返へされて、一面の桑園となり、八千草匂ふ古の面影、又見るべからず。

四名の旅客と同車し、馬車にて洗馬に向ふ。

十、洗馬より奈良井（鹽尻、一里……洗馬、三十町……本山、一里……櫻澤、一里　贄川、一里三十町……奈良井）

洗馬驛は、木曾溪に入るの關門たり。

秀絶なる木曾の群山、清冽なる木曾の溪水、余が多年憧がれたる木曾溪、目前に現はる、嗚呼天下無比なる此溪山の神韻に觸れて、縱まゝに吾が吟懷をやらむ哉。

松本平の一端、爰に來りて、全く究まり、奈良井川の河岸僅かに中仙道の街道を通ずるのみ、又寸尺の平地なし、崖に臨み、山に據り、道を挾みて立てる家々、古は街道往來の客によりて、繁華なりしも、今は不便なる、此街道を往復するの風流漢もなければ、其の衰殘の狀見るに忍びず、此街道筋の村々、皆農蠶を以て生業とし、朽敗せし招牌に、僅かに昔の名殘を止め、軒傾き壁落ち、數代僕を代へて磨きし大黑柱も、今は大方光りを失ひ、吾人をして轉々斷腸の思ひあらしむ。

牧野、本山、日出鹽等の宿驛、皆荒敗、衰退の狀見る影もなし、洗馬より一里三十町、奈良井川に落つる小溪あり、櫻澤といふ、これを渡れば、所謂木曾路なり、昔は橋畔の茶店、聲々客を呼びて、橡餅を鬻ぎしとか。

芭蕉

木曾のとち浮世の人の土產哉

中田と呼べるところにて、晝飯を爲す、此附近中央西線の鐵道工事最中にて、石を運ぶ馬車、煉瓦を積みたる車の往來、絡繹として絶えず、幾百の工夫山を崩すあり、谷を埋むるあり、石を割る爆聲には、山神も膽をや消さん、土を運ぶ人車、鐵道は行人を防ぎ、紅旗を振つて信號を爲すあり、鐘を鳴らして、時を報ずるあり。混亂殺風景の狀、木曾溪あつて以來、始めて看るの光景なり。

赤色なる煉瓦の橋礎は、幽邃なる木曾の風景と調和せず、深碧の水は、土砂の爲めに汚濁し、所謂物質的文明のありがた味は、此幽邃なる木曾の深溪にまで進入し來り、あらゆる自然を滅盡せんとす、『伊太利は藥商染工等に售らんが爲めに、毎年九月より、四月に至るまでの間、月桂樹、石榴、黃楊等の綠葉を剝いで、日耳曼、墺太利、魯西亞の諸邦に輸入するが爲めに、綠木は兀立して、倒影地に落つること細く、人其の影に憩はず、馬その下に繫がれずなりぬと、又之を聞く、瑞西國の山中製鋼鐵の爲めに、煤烟その玻璃鏡の如き湖面に雲屯し、蘇格蘭土第一の美はしき水流は、アルミニューム採製の用となり、ゼルサレムの棕梠に巢ふ鴿も、安眠を得ずなりぬ』と人の叫びしは、遠き異邦の事と思ひしに、今吾人をして、同樣の嘆を發せしむ、木曾風景の破壞費は、一哩貳拾餘萬圓の巨額なり。

中央西線設計者は、此工事は風致を害するよりも、寧ろ風致を添ふる考にて、考案中なりとか、果して然るか。

汽車の聲、地に轟きて、行獸跡を潛め、汽笛の怪音、四邊の山々に反響して、飛禽影を沒し、幾年月に染められし紅葉、翠滴らんとする新綠、煤烟の爲めに汚され、晝間は白旗の信號、夜間は紅燈、青光、闇にひらめき、木曾の森林は皆搬出

せられて赭山となり、水涸れて礫とならば、如何にしてか風致を添ふべき、廿世紀の文明なる者は、實に如斯、木曾溪の破壞又如何ともすべからず、今自然の破壞を恐れて、設計を左右する如きは不可なり、鐵道は至便なる方法を以て設計すべきなり、彼の碓氷峠に於けるアプト式を看よ、天下の嶮と呼ばれたる碓氷峠、アプト式鐵軌實にふさはしき設計なれども、其結果今將たいかん、アプト式は、碓氷に何等の貢獻することなく、交通を妨ぐる事實に甚だしとす、般鑑遠からず、木曾鐵道の設計者、夫れ三思せよ。

贄川、宮澤を經て奈良井驛に近づくや、地藏坂の手前にて一制札を見たり、記文に地藏坂工事中、鐘を鳴らし赤旗を振るときは、行人止まれとの旨記されたり、人の心膽を寒からしむる警鐘の亂打、革命の色とか云ふなる赤旗の翩飜、轟然たる爆聲と共に、巨岩土砂の雨を降らす、かくてもなほ、木曾溪の風光は、破壞せられしと云ふ能はざるか。

十一、奈良井（奈良井、一里半……藪原）

地藏坂附近を過ぐれば、右方は鳥居峠の連脈屋脊に崩れんとし、左は奈良井川の奔湍軒下に迫る、山と水との間に、細く長き破驛。

これ、奈良井の宿。

古の繁華の跡は、夢と消えて、こゝは又一きはの衰頽、見るからにあはれなり、をりから降り來る細雨、帽端をかすむる山風、一きは冷涼、吾人の胸には、限りなく旅の淋しさを覺えぬ。

えちごやと云ふ旅店の、前にて馬車を捨て、之れより徒歩して、鳥居峠を越えんとす。

十二、鳥居峠

奈良井川は北流して、信濃川の水となり、

木曾川は南流して、東海の波となる。

此兩川の分水嶺鳥居峠、海拔四千五百五十一尺。日頃胸中に描きし此峠と、今、面のあたり見る光景とは、餘りに其の差の、甚だしきに驚きぬ。他人の紀行を讀み、詩歌を誦し、余の想像せしは、草短かく、花瘦せたる、丘陵起伏し、前を望めば藪原の碧蕪指點すべく、後を顧れば奈良井の谷は夢の如く、路傍には僅かに、よし簀にて圍ひし、あはれなる一茶店、主はもとより、白髮の老媼、風雨多年、木理晒白の一小鳥居、御嶽に向つて、將さに倒れんばかりに立ち、土を小高く盛

りたる祭壇には、覺束なき白幣二三。
かくて此峠は、いかにも、物淋しく、世離れたる詩的の處と思ひしなり、然るに事實は、全く之れに反せり。
到處荒敗せし木曾街道の宿驛を見たる眼には、いかにも立派なる茶店、壯漢二名休憩せる客の爲めに、しきりに周旋し、其の屋内を通過せざれば、遙拜所に至る能はざるが如きは、あまりに俗惡利己的なり、壯大にしてしかも新らしき石の華表、拜殿さへも立派にて、想像せし如き者にあらず、南方眼界廣けれども、他の三面は何の眺望もなし、鳥居峠は實に趣味索然たるところと覺えぬ。
南方木曾溪の籔原驛の碧蕪を望むと、信飛境上日本アルプスの、深厚なる溪谷を望むの景とは、狹隘なる木曾溪を旅行する人々の眼には、頗る壯快を覺ゆべきも、雄偉の景に馴れたる登山者の眼には、左程の感興も起らざるなり。
名物に甘きものなく、名所に何とやらは、こゝにも亦。

十三、籔　原（籔原、一里三十町……宮越）

御六櫛の名にて、知らぬ者なき籔原は、奈良井程の舊驛なり、鳥居峠は信濃川と木曾川との分水嶺なるのみならず、木曾溪を南北に分つ一大障壁たり、見よ。
峠の北麓奈良井と、南麓なる此籔原とを比較して。
前者は一般の言語風俗、純信濃的にして、東京越後方面の感化を受けたれども、籔原に至れば、大に之れに反し、全く尾張的なり。
水は低きに就きて下流に流るれども、人は河流に沿うて源流に遡れり、純信濃的勢力は、信濃川に沿うてこの峠の北麓に達し、尾張的勢力は、木曾に沿うて、南麓に來れり、而して鳥居峠は、此兩者の間に、劃然たる堺線を引けり。
木曾に旅する人よ、希くは此峠の南北によりて、言語の音韻にまで、大差ある事に注意せよ、而して小なりと雖も、如何に山嶺が、人文發達に及ぼす影響の、大なるかを理解せよ。
余の籔原に入りしは、既に夕陽西に傾きし頃なり、爰にて再び馬車を雇ひ、其の仕度を待つ間に、不意の雷雨、山地には、有勝ちの事なれども、今日なほ四里を行きて、福島に至らんとの豫定なりしかば、此雨の爲めに、妨げられんことを恐れぬ、然れども、暫時にして雨も止みぬ。直に馬車を驅りて、福島に向ふ、路屈曲多けれども、坦々たり、籔原、三留野間は、政府の事業繰延べの結果、中央西線、工事中止中なれば、到處古のまゝなる木曾溪の風光を、縱まゝにする事を得た

り。

十四、義仲の舊里（宮越、一里三十町……福島）

日義村の地籍、虹の如き山吹橋の深潭に臨むところを、巴ヶ淵と名づく、其の舊道ありしところを、山吹横手と云ふ、山上に狼煙臺の跡あり。山吹横手の紅葉は、木曾溪第一の美觀と稱せらる、此附近は巴御前出生の舊里とか、進むこと僅かにして、河中に巨岩あり、松樹を戴く小杖ヶ岩之れなり、小杖とは義仲の母の名に因めるなり、此地義仲に關する舊跡多く、旗揚八幡宮、古城址、德音寺等皆沿道にあり、宮越驛を經て福島町に入る。（嗣出）

赤城榛名の殘雪

岩佐定一

一、赤城山

今湯の澤温泉を立つ、昨日大胡を立つて直に赤城に登る筈であつたが、荒山を往來する雲は時に薄らぐことがあるとはいへ、又いつしか濃くなつて、しかも始めの山と來て居るので遂に此温泉に泊り込んだのである、家は總計三軒ばかり、凡て宿屋をして居る樣だ、湯は冷泉を木の湯桶に入れて火を加へるので臭味共に感じない、茲は海拔二千幾尺とか岩の隙間、木立の蔭には未だ白い者を止めて轉た夏の涼味を忍ばしめる、昨夜は炭の香を飽く迄嗅いだ。

で昨日午後はなす事もないので十町計だと云ふ瀧澤の不動を見物した、雪解に道の惡い坂を五六町上つて峠の頂に出た、其背を傳つて走る小い道を直角に向ふに峠を下る。頗る急だ、夫れを可なり下れば堂がある、雪と氷との中に孤島の樣に立つて居る、傍の大きい岩の上にも極めて小い堂がある、鎖で登るのである、又下る、谷底に下つて小沼から流れると云ふ川に出る、丸木橋を渡つて階段を上れば大きな杉の木立の下に不動の堂がある、其背部は岩、其れに穴があつて本尊は居られるらしかつた、寺から少し上つて瀧がある、大瀧と云ふ、かなりの瀧で白く水を落す樣は壯大に見える、然し肌に粟を立てゝの冬の瀧見物は餘り感心せぬので早々引き返へした。

今朝大洞迄上るのだ、二里だと云ふ、湯の上の小い觀音堂の傍から上り始める、稍急なる上りが半町計り、春に追はれる

冬の落伍者が屯ろして居るらしう雪が顯れて來た、三十分計りの後道が小さい瀧の下に出る、瀧と云つても水は岩壁に堅く凍つて白い絶壁を作つて居る、左と右とは見上ゞる計りの上に空を見せ葉を振り落した灌木が其間に茂つて居る、こゝで道を失つた、分らぬけれどもこゝ迄來た道だ、先はない筈はない、夫れ共道を誤つたのであらう、兎に角上迄行けば分ると上り易い樣に見えた左側の急勾配を上り始める、獰猛なる急坂で木の枝に頼らんとして握れば朽ちて居るので容易に折れる、踏み付ける土は輕鬆なるものでずるりと滑る、四十五分計りで笹原となつて峯の背に達した、此處で今上つた谷を隔てゝ向側の黄色なす枯草の中に、一筋黑い道が山の脊を上下に走つて居るを見た、自分は谷を反對に上つたのだ、で道に出るべく谷を上る。

空は晴朗とは云へないが南方は遙に打ち見渡される、其遙か末の方むく〳〵と立つ山々、横にのたうつ線の上に一層又一層、上方の者程其蒼黑色は薄れて最上層のものは雪色に輝く、即ち南部上州甲州の山々である、頭を轉じて赤城連山を見る、最も左側に樊噲がやはか我主に一指さゝせじと肩を高く聳やかすは荒山、其右に低い峠—外輪山らしい—を隔てゝ深い謀を藏して悠然と座するは張良とも見るべき地藏、其右に當るべき黑檜は未だ見えぬ、いづれも斑々たる白雪を甲うて居る。

道なき笹原、夫を辿り辿つて終に右の峯と合して道に出た、漸々右に曲る、黑い土の三尺幅のだら〳〵上りである、道の雪は段々其量を增して遂には端の小部分のみを殘して他を凡て埋める、止むを得ずして雪を踏めば脛は優に埋まつてしまう、雪の下の少しの空隙をちよろ〳〵と音して水が流れる、近頃の暖氣に溶けた雪が流れて居るのであらう、優しからずや、一分上は厚い冬の其下を、物待ち顏に春は流れつゝあるのだ。左は數百尺の谷頗る急にして、雪は其上に帶いた樣に積つて居る、恐ろしい音を立てるのは雪崩であらう、冬の春に碎かるゝ音も聞かれる。谷を隔てゝ向ふの方に炭燒の煙が暖かさうにあがる。

益多くなる雪を蹴つて舊外輪山頂に達した、荒山地藏嶽は直接火口原の中に眼前に連り、黑檜山は地藏の右の肩をこつそり覗く樣に顏を出して居る。

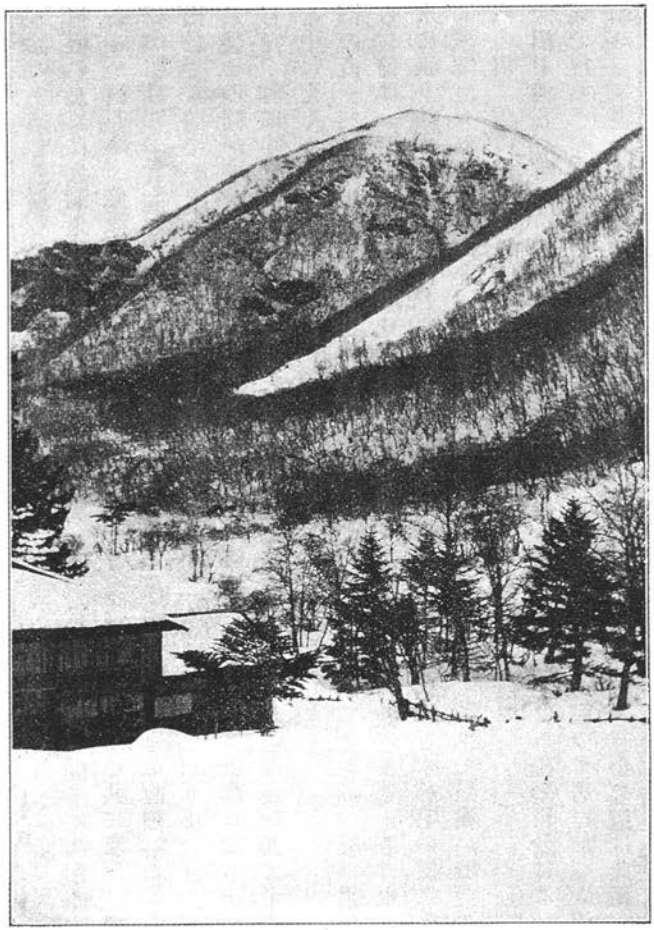
ふと顧みれば雲漲つて中にも一團の先鋒は早既に手近い峯に逼つて來た、さア大變だ、此未知のしかも道路の跡少しも殘らぬ此地、雲霧の中を如何にして驅け拔けやう、しかも見下ろす廣き火口原、白雪地に滿ちて道は何處か知るに術もない。漸くにして鞋痕の雪上を下るものあるを見出し得た、地藏と荒山との間の底部に向つて居る、しかも思ふ、此雪中黑檜と地藏との間の方位にあるべき大洞に至らずして果して何處に行く人があるだらうと、で猶豫なく之を追ふ。雪は步々脛を

埋める、昨今の暖氣は雪の上部を溶解して踏みつけられた雪も難なく踏み込む、冷い事夥しい、點々見た黑土も今や少しも見えなくなつた、道は漸々地藏の右に向ふ、木立に入る、地には躑躅らしい灌木が繁つてそれもどれ丈の高さあるやら、枝の先きのみ見えて植物の温氣は雪を溶かすので其圍りには幾分の餘裕が出來て居る、濕つた枯草が大沙漠のオアシスの樣に折々見える、木の枝などが梢も雪を堀つて深く埋もれて居る、一旦表面に落ちたのであらうが雪をとかして深く沈んだものらしい、先に脛を埋めた雪は今や膝を埋むるものあるに至つた、足痕は稍堅く、之を辿れば僅に踏み込む事を免るるけれども、五分と踏み誤まればザクッと足は二尺の下にある、手は支へんとして何の用もなく、脚絆は度々踏み込んだために下つて、草鞋は紐がはづれてぬけてばかり居る、少しく左に轉じ少しく急となつて地藏の右に連る丘を廻る、山腹一面に破れて絶壁をなし、赤土黑岩裸々たる所を谷を隔てゝ見つゝ又少しく左に轉じ、少し計り小屋がある、之を訪ねれば人は居ない、少し行けば又小屋がある、前は即ち小沼で一面に凍つて五六人の人夫が氷を切つて居る、此小屋は其貯藏所なのだ、其所に居た男へ、大洞はと問へば今十町計で、其本道は前廻つた丘と地藏との間を通るのださうだが、今は小沼を渡つて左へ左へと上り地藏の殆んど直下を向ふ側に下ればいゝと敎へる、今迄自分を導いた鞋痕は彼等のもので、前訪れた小屋は其寢處であるのだ、夜の寒さ、淋しさ等冬の山の一つ家の事を思ひながら、二町計り小沼の氷上を、滑らんとする足を踏みしめつゝ涉る、氷の表面は少しく融けて水が薄く溜まつて居る、頭から頭巾を深く被つてがんじきをつけて働て居た一人が御寒う御座いましたらうと挨拶する、餘り拔けるので草鞋をぬいで居のを茲で又つける、格別寒さも感じなくなつた。

渡り終つて少しく左に向つて上る、少しにして後方聲あり曰く、『まだ左の方に行くんだよ』、唯々諾々左する、雪は益深うして股を沒すること再三に止まらず、上り終り地藏の方に近く道路らしきがある、之！と之を追へば十間にして又見るを得ない。疲れたる足を所々の木の根に許り殘る一片の土上に休めて後方を顧みれば地藏と荒山との間黑雲滿ち滿ちて、雲と地との隙に僅ばかり夕燒の樣な朱赤色に、黑味を帶びた地獄で燃えると云ふ釜の下の火と思はれる嫌な條が見える、益急ぐ、黑檜は繁る林の上にのつたりと立つ。

鞋痕があつた、進んで之に從つて行けば道は下りとなつて雪は益々深くなる。木の根の雪は溶けて三尺計りの穴を生じて居るが、其根は未だ見ることは出來ぬ。鞋痕上を辿つて行くも必ず膝を沒し、五歩甚しきは毎歩にして腿を沒するのである、一歩一歩足を引き上げるに苦む事甚だしい、疲れるとは云へ寒いため休む事も出來ぬ、林に入る、此時雨あり點々と帽緣を打つ、益急ぐ、急ぐとは云へ雪に踏み込みつゝ行く足のどれ丈の道を進み得やうぞ。

下方欝たる杉の林を見る、之が赤城社に違ひない、次で大沼（オーヌ）の氷面が見える、次でうれしや大洞の家！が、あゝ、此大洞の家を咫尺の地に見つゝ動かぬ足を漸々に動かしたタイムの如何に長かりしぞ、而して漸々にして目的の家に達して圍爐に赤く燃えつゝある火を見たる時の如何に嬉しかりしぞ。雨の足は急に早くなつた。



赤城黑檜山（三枝威之介氏撮影）

しかし呼べども答ふる人もない、とは云へ爐の火より見るも人はすぐ歸るだらうと、先づ火を盛にして冷えたる體、濡れたる服を焙りつゝ待つ。

思へ二里の道費したる所實に四時間計である、途中の困難は察し得られやうと思ふ。よし防寒の具を一通り備へられて居たとするも、よし一斤のパンは豫備食として雜嚢の中に入れられて居たとするも、此初めての地、しかも深雪の中を事なくして玆迄來り得たるは實に幸福と思ふと共に、案内をさへ連れなかつた無謀をつくづく思はざるを得ない、謝す鞋痕よ、余が今悲なく大洞の家に温を取り得たる幸福を。

女が來る、大沼に氷切りに行つて居たが雨が降るので歸つて來たと云ふ、自分が湯の澤から來たと云ふので、『小暮道なればよく郵便配達が來るし、もし夫が來なければ男をやつて雪を踏ませるので道は大丈夫、しかも兩三日前主婦が前橋に下りたので十分判然して居たのだが』と云つて、自分が本年の初登山者で、五月になれば大分登山者のある事などを語りつ

つ榾を折り焚いて火を盛にして呉れる。

部屋に入つては常に炬燵に蹲まつて地圖を檢し日記をつけた、何かの事で炬燵を拔け出やうものなら其寒い事夥しい、茶を持て來た時女が『時期が惡いので菓子も何もありません』など話す、主婦も食糧品を調へに行たのだが雪のために牛も馬も通はないで困つて居るさうだ、こんな時に登つたのが惡いのだと笑つて茶を呑む、一呼一吸白い霧を散る。夜食には鑵詰の牛肉を煮返して添へてあつた。

宿帳の裏には大洞猪谷春雄とあつて、中を開けば、紙を新にして欄外に明治四十一年三月二十六日付始めと黑々と書いてあるが嬉しい。風激しく吹いて前山後岳枯林颯々と鳴つて寂しさと共に寒さが加はつて來た。

夜が明ける、窓を開けば天は晴れて居るけれども、萬物皆凍つて寒氣凜烈、下に降れば十八度(華氏)であります と敎へる。

出發となつてがんじきを履いて黑眼鏡をかけた男二人は大沼の氷切り場に行くと云ふので同伴して呉れた、自分の脚絆と足袋との間がすいて居るので、それでは御危う御座いますから、御卷きなさいと宿の女が呉れた布を卷いて勢よく踏み出した、雪は昨夜の寒さに全く凍つて小さい粒々となつて堅く、踏み込む恐は寸毫ない、丁度照る日は雪に反射して强く目を中にえぐり込む。

門の直ぐ前に赤城社がある、雪は四壁を埋めて戸は何處も閉ぢてある、杉の黑い影のみがゆら〳〵と雪の上に搖めいて居る、前は一面皚々たる大沼で、雪の見えぬ所々は厚い氷で濃綠色に見える、氷の厚は二尺だと云ふ、右の隅にある小島は氷に張り詰められてちよこなんとして居る、沼のほとりに枯れた木が毛の樣にぼつ〳〵と立つ、氷の果に高く聳えて連るは積雪斑々たる外輪山で、大沼を圍り來つて斜右の所に殊に勝れて黑檜がどつかと座る。あゝ壯大なる冬の美を見ずや、氷の沼！雪の山！之に映る旭！

大沼を渡る、雪のある所は其摩擦によりて滑らぬが、氷の上は草鞋の自分には稍危險である、男はがんじきがあるので平氣で行く。昨日小沼を渡つた時は暖かつたせいか表面に水が溜つて居たが、大沼の水面は悉皆氷。

斜め左に渡り終つた所に氷小屋がある、いつもならば陸を經べき小暮道は此傍から登るのである。少しく登つて顧みれば白樺の木立の上に黑檜が嚴然と空間に不規則なる八字の線を畫いて居る、窪んだ谷間などの外白い色は餘り目に入らぬ。暫くにして少しく下つて地藏の後の平地に出る、鞋痕が判然と堅くなつて雪の上に常に殘つて居る、犬の足痕らしきも見える、兎の糞も雪の中に埋もれて居るがあつた。

大沼から十町も來た頃急な崖となる、茲あたり日がよく當るのか雪は稍溶けて眞黑い山の土は樺色のさびれた草と共に斑

をなして居る、其爲に道―草鞋の痕は途絶えてしまつた、十町許りで新坂（シンザカ）と云ふ急な坂がありますと云つたのは、之であらうと思ふが、下り口が分らないので、それを見定めるために、右側の小高い丘に上つた。（小い道があつた）

上つて驚いた、見よ、眼を西に放つ時はたと視官を打つは榛名の山影、突兀天を衝くの勇姿、其後方に當つて寒風吹き暴ぶ北洋の、蒼黑の波上に浮ぶ氷山の樣に頂の一部を顯はして悠然熱き氣を吐くは銀白輝く淺間の高峯、左は白さは白かれ、我はと黑き浪横に續く武甲の連山、右は雪浪日に閃く三國山列、小野子、子持は近く右側に双立する、見下ろせば、平面廣く延ぶ上州の野の、其中頃を横に黑ずんだ白色に斷つは坂東太郎の大河、蜿蜒走る所に沿ふて所々一團をなすは實に人間の作る村である、町である、市である、高きに登つて見下ろす時、憐ならずや人の子よ、汝が大なりと誇る村や町や乃至市は、大なる注意の後僅に見出さるゝのである。

顧みて谷間を下へ下へと下る鞋痕の位置を慥めて下る、然り足痕、其雪上に痕したる人の僅の仕事、夫れは今は余を導くに十分であるけれども、果してどれ程のタイムを保ち得るのか、人は其最大の努力によりて、何かの仕事を殘さんとするを、自然はタイムを派して一方から之を瓦解し去るのである。

急な崖で三脚の尖端を一歩一歩雪に突立てゝ下つて行く、一町ならずして終つた。雪は不相變深い、然し石の如く堅く凍つて踏み込む恐のない雪上を下りに下る快さ、實に何とも云はれずいゝ。左側に地藏温泉道と云ふ杭が立つて居る、可なり大きい道らしい、參謀本部二十萬分ノ一地形圖宇都宮圖幅小暮からの登路に、荒山と地藏との間を經て小沼の傍で折れ、赤城祠に達する道は之ではあるまいかと思ふ、自分の今通つて居るのは荒山地藏の左の點線がそれである。

白い雪が溶けた清い水は谷川となつて流れて居る、雪は漸く減る、かくて道の形が見えると共に、雪どけの泥濘歩むに頗る困難を感ずる。箕輪（地質調査局地形圖には三ノ輪とあるが宿の男はかう敎へた）は十軒許り家があつて各牛馬を養つて居る小い村で、玆に至つて雪は全くない。

山はと顧みれば、黑檜はいつしか見えずなつて、地藏は照る日に暖か味を帶びて懷しさうな顏をして居る。牛馬を放つ牧馬の門をすぎて開墾地に出る、掘立小屋が數軒あつて皆荒蕪地開墾に從事して居るのだ。丁度居た男に澁川への道を問へば、米野箱田をすぎて行くんだと云ふ、地圖を見れば山の裾を迂廻する事になる、それよりは峠越の道はなからうかと見れば丁度右の山を越えるらしう小さな道がある、よし澁川に直接出なくとも廻るよりは近からうと夫を取つた。新しく出來たらしい小い道だ。登り終れば道が數本に分れて居るが眞直に進む、此處からも何も障害もなく前に擴がる大パノラマを見る事が出來る、下るに從つて淺間は終に榛名に隱れてしまつた、自己の大なる人格によりて初めて他の人格の大なる

を知り得る樣なものだらうと獨りほゝえむ。

道は屢數條に分れる、其時は常に榛名を標準として夫れに向ふものを取つた、小松林に入る、立派な植林で木は皆二間位の高さ、夫を各同一の間隔によつて整然と育てた樣著しく目立つ、大松林に入り小松林に出、遂に麥畑を見る、森をすぎ畑を越え、南小室に出て、白梅紅梅の匂を嗅いで、一旦分れた春に又出遭つた。梅匂ふ村、麥青き畑をすぎ下りに下つて遂に八崎の利根川の渡を針金に傳はつて渡る、榛名は沈まんとする日に暗色に彩つて奇峰の錯雜妙に、赤城も餘光を受けて莞爾(につこ)と『今日』を送つて居る。

二、榛名山

昨夜伊香保に着いたのは七時頃であつた、阪になつた道を車夫に從つて小路を辿り辿り岸權に着いた時はランプの明い光が輝いて居た。湯に入つた、二坪か三坪ほどの湯坪、一方から管で湯が落ちて居る、暗いのでよく分らなかつたが湯は少し濁つて居たやうだ、臭はない。上る蒸氣に部屋は一杯で横に伸ばした疲れた體はいゝ氣持になつて睡りかゝつて來る、と義太夫がありますから聞きに御出なさいと番頭が云ふ。

私は温泉に入ればいつも阿蘇の柳木(トヤノキ)を思ひ出す、時は六月の末頃、下を流るゝ白川の瀨音が喧しく聞えて、前に聳ゆる俵山の絶壁に點々閃々たる螢の光、雨がしよぼしよぼ降つて居る、其時自分は澄み渡つた湯の中に體を浸して、自分ながら自分の身の石膏像の樣に美しいのに見とれて居るのだ、あゝ其時の感は今尙忘るゝ事が出來ない。

何となく寒くなつたやうだ、宿帳を持て來た番頭が雪が降り出しましたと云ふ。其雪が今朝起きて見れば一寸五分許りも積つて空は重く曇つて居る、正面の小野子及子持の中腹に白い雲が幕を張つた樣に漂ふ。赤城は雲の中に深い睡に沈んで居る。

伊香保に多い細工物を賣る店も雪のためと少し早いとで未だ店を開いて居ない、小さい橋がある、湯元への道は橋を渡らずに左に向ふ、自分は右に行く、湯元から流るゝ水は濛々と白霧を立てゝ、人の體を流るゝ血管の樣に一條の暖氣を雪の中に通じて居る。

上りは茲に初まる、上りとは云へ爪先の僅に上るを覺ゆる位で可なり急な崖を之の字形に導いて居る。雪の上には未だ新しい二の字が見える、向ふの峯に雲が走る、崖盡きて家が二三軒ある、二ッ岳の湯は茲から左に分れると云ふ。之からは尙緩になつて兩側に小松が繁つて居る、古い雪は二三日前迄に溶けて流れたらしく昨夜の寒で凍つて、雪を踏めば、めり

めりと音して底の氷が破れる、雪は積んだ許り、未だ堅く凍る餘裕がないので赤城の雪の木綿の樣にざら〳〵として居たに反して、之は絹の樣にツル〳〵とする。

地に低き藤袴の枯莖から、天を突く榛の木に至る迄、此寒氣に水分が凝つて透明玲瓏なる白色の珊瑚と化して居る。曾て阿蘇に登つた時、八合目の茶屋で躑躅の枝に硫黄を流したものを苦しい思をして買つて歸つた事があつたが、それは人工、之は天然の巧、かれは汚ならしい黄色、之は一點濁りない白色、水晶か金剛石か、美の極だと思ふ。

一軒の古びた家がある、白い雪は其暗い色を益暗くして見せる、此から榛の牧場に入る。

前に降つた雪は途の一方に掃きよせられて道丈は一段低くなつて居る。めり〳〵と氷の破れる音に下に水はないかとひやひやする。

雪は火口原を埋めて滿目一白、榛の木が寂しげに所々に立つて居る、原を隔てゝ聳ゆるは榛名不二、頂は雲に被はれて見えぬ、左の二つ峯以下の山々も雲がかゝつて朦朧として居る、後方の人聲に振返つて見れば白い雪の上に黑い點三つ、其二つの小いは小供らしい。冬枯の木が岸を繞る榛名湖の水は半ば凍つて中頃に半圓形の界を流固の二體の間に作つて居る、其溶けて重く靜に澱む水の面には正面の榛名不二が影をひたして居る、一呑山が其影の中に小さく見える。湖を遠く取り捲くは外輪山、冬を飾れる頂高う湖に映る樣も此世と遙に懸絶して居る、アルプス！余は大アルプスを思はずには居れぬ。

昨日見た大沼は一里餘、此榛名湖は三十四町とか、共に火口原湖周圍の樣もよく似て居る、唯其高さの異なるため、一は深い巧を藏し、一は愛すべき小波を浮べて居る。

湖畔に一小亭がある、夏の涼しさを思ふ。二三軒家がある所から少しく左に登れば所謂天神峠で、鳥居が立つて其赤い色がいやに目につく。湖は目の下に美しく輝いて、不二の頂に雲がかゝつた。

これからは只下りに下る道、森々たる杉林の中に入つて榛名神社に着いた、つゞら岩、蠟燭岩、こんな小細工に何の興味が湧かう。社は小高い所にあつて榛名川のさゝやかな清流を控へて居る、雪は神の淨めと降つて清淨の感が起る、前の茶屋によつて名物「しんきう」と云ふ麥の粉の團子樣の物を食ふ、其味例の如し。榛名山町にて雪消ゆ。

大道とは云へぬが車が通ふ程なので苦しくはないが面白みもない、只下りに下る、榛名の山々は雲に隱れて遂に最後の握手をなすことを得なかつた。室田に着けば一路坦々、東に走つて高崎に着いて、汽車によつて此夜東京に歸る。

鳥海山（出羽探山記の三）

第十一　蕨岡　大平晨

二十一日午前七時三十分、手向を發し、郊外に出づれば、鳥海山は端然として北天に聳え、其八合目附近の大殘雪は、夏尙心を寒からしむ。

八時三十分、路傍の小丘、老松三株の下、高丈許の石塔あり、「湯殿山鐵門上人」と刻せる、大文字を見る。

十時十分、狩川の入口「右はゆりおか道　左羽黑山湯殿山道」側面に「旹元文六年酉年二月四日」（おかはをかとすべきを）と刻せる石柱を路傍に見る。

十一時二十分、我邦三急流の一なる最上川を、渡船にて渡る、昨日の驟雨にて、濁浪漲りたるため頓に五割の增稅に接しぬ、左岸を溯ること一里餘の淸川には、昔時出羽の按察使、關門を設けし所、尙溯れば、兩羽の間、山迫り川狹く、懸崖相連ること三四里、古口には、四十八瀧の勝ありと云ふ。

此日朝、手向にては、溫度七十五度なりしが、日中は九十度に昇り、炎暑の外寇に、將た飢渴の內亂に惱めども、茶店なければ、難行苦行を打凌ぎ、午後一時嬉しくも、町めきたる山寺といふに著し、「鳥海山參詣者休所」と看板揭げし茶店を認めて、早速荷物を卸し、冷水拂拭にて、元氣を恢復し、携帶せる團飯征伐に取りかゝりしに、此日は盆の十三日なりとて、如才なくも、主婦は「餅と交換しては」と申し出づ、素より好物、いかでか異議あるべき、而も餡餅と、雜煮餅と、御好次第、數椀平げ、途すがら餅舂く音のみ聞かされて、不平なりし腹の蟲も、玆に至りて漸く落附きぬ、此間鳥海山より三山に向ふといへる、白衣の道者隊に、行き交ふこと屢なりき。

山寺と連續せる、松嶺の市街を過ぎ、二時三十五分、相澤より人車を驅ること三里、觀音寺にて、砂糖罐詰等を購入す、蓋し此方面より、鳥海山に登るには、此等の準備品は、該地の外、辨ずべき所なければなり、尙車行一里許、飽海郡蕨岡村大字上蕨岡に到着せしは、五時三十分とす。

急勾配の石階を登ること一町許、蕨岡口之宮と稱する、大物忌神社あり、社務所に就き、鳥海山の圖、及び講社拜式を求め、其周旋により、神職鳥海秀賢氏に投宿す、此地鳥海山の南口に當り、高距約三百尺、戶數數十、菓子屋數軒あり、

新風土記に據れば、蕨岡の東に、安部貞任の墟ありと云ふ。

此夜道者の、鳥海山頂より降れるもの、或は登らんとするもの、十數人、隣室に雜居し、置酒祝宴を張り、頗る雜沓せり、予は社務所の注意により、特に離れたる、一段高き座敷に導かる、上蕨岡は、臺地の西腹に位し、眼下小平地を隔てて、直ちに日本海の皓波を望むべし、入浴晩餐をすませば、謖々風に動ける老松の間、日輪將に碧海に浴せんとし、爽快の景、日中の苦熱を忘れしむ。

第十二　鳥海山頂の籠城

二十二日午前三時、起床、西の戸を開けば、殆ど圓き月輪は、今や將に西海に沒せんとし、深紅燃ゆるが如く、其好景は、昨夕の日沒を凌ぐこと數等、入月の美觀壯觀、此の如きは、予が未だ曾て接せざる所とす、やがて導者時田茂吉（四十歳）なるもの來りて、「彗星が見えます」といふ、前庭に出で、双眼鏡に照せば、東南の空に當り、其長く稍曲りて引ける光狀、頗る明なり。

四時五分、人色未だ辨せざる曉を冒して、上蕨岡を出發し、一里にして縣道と別れ、右の方山逕に入る、逕は鳥海南側の裾野を横ぎるものにして、殆ど樹木なく、唯矮草の亙れる樣、火山裾野の形式を呈しぬ。

五時三十分、駒返に至る、小屋あり、茶菓を鬻ぐ、稍登りて、路右清泉あり、牧牛彼方此方に群れ遊ぶ、其數二百に及べりと云ふ、前は近く、地を穿てる、月光川を隔てゝ、鳥海の尖峯、僅かに雲に入り、其左方、笙ヶ嶽山頂の起伏せるを仰ぎ、後は遠く、鳥海山頂の缺塊、飛びて生せりと傳ふる、飛島より、左に我越後の粟生島、佐渡ヶ島など、いと明に見參に入りけるに、「佐渡がこれ程能く見えては、天氣は怪しい」とは、小屋老媼の豫言、「當らねば幸也」とは、山人の心願なりけり、右の方、日光川との間、湯の臺の温泉あり、炭酸泉に屬すと云ふ。

駒返より約半里にして、路右數歩、杉樹の下、清泉涌き出づ、六時二十分、岐路に接す、右せるは樵路なれば、左に下り、崖側を辿れば、雜木林の裡、ハクサンヲミナヘシ、アハモリショウマ、ツバメオモト、アカモノなどを見る。

三角標を立てたる、蓬萊（又鳳來）山側を巡り、七時二十分、箸王子（又八王子）の小祠に著す、高距約二千四百尺、荷物を運ぶ牛も、此より以上に登ること能はざれば、牛戻の稱あり、箸王子の祠は、保食神を祀り、出張の神職、參詣者を改むる所とす、蓋し頂上參拜證は、金貳錢五厘を納めて、口之宮社務所より、受領すべきものなり、然るに我等が後より登り來れる、七八人の青年團體者は、此事を知らずして、參拜證を携帶せざりし爲め、非常に狼狽せる樣、氣の毒なり

しが、歎願の末、此出張所より、證明書を得しが如し、祠右數町下れば、白瀧赤瀧の二條あり、白瀧は低けれども、赤瀧は約十五丈、炭酸鐵を含み、水色茶褐色を呈すれば、かく名けしなりと云ふ、淺間山赤瀧の類なり。

木立を過ぎ、八時十五分、高距約三千五百尺の、西物見（ニシモノミ）といふに出づれば、眼界大に開け、路は熔岩磊々たる上に通じ、同五十分、八丁坂を攀ぢ、小屋に少憩し、名物力餅を試む、黑砂糖を醬油に溶きたるを、汁粉とぞ云ふなる、高距約四千二百尺とす、此附近より漸く偃松を見、矮小なるミヅナラ、タカネナヽカマド、クマザヽ、フジザクラの間、ハクサンフウロ、イハキキャウ、シラネニンジン、ツハブキなど、相交はる、程なく火山灰砂を距り、緩斜の濕原にかゝる、之を御田（オタ）の原と稱す、往々殘雪に接し、雪水より成れる、小溪流多し、九時四十分、河原宿（カワラジュク）（高距約四千九百尺）の小屋に休み、名物の素麪を試む、屋前を流るゝ、幅數間の雪水河中に浸せることゝて、冷冽驚くべし、導者時田は、飯を携帶せず、到る所の小屋、必ず名物の伴食にあづかり、此處にては、大々的數杯を平げ、流石は心に恥ぢてか、予が支拂はんとせるを辭せしが、別に自らも支拂はざるは、歸途に支拂ふものか、將た始終參詣者を案内すればとて、機密の威德あるものにや、彼れ初め各處に於て、『此處は何米の高あります』など、如何にも勿體らしく語りしが、後予が屢々空盒晴雨計によりて、手帳に記入するを見、怪しき顏附もて質問をなし、爾後俄かに高距の說明を廢せるのみならず、態度の大に變せるも可笑。勿論彼が標高說明は、出鱈目なりけり。

御田原より、草本帶に入り、偃松は稀なるも、アヲノツガザクラ、ガンカウラン夥しき裡、ミヤマキンバイ、シナノキンバイ、キングルマ、チングルマ、イハイテフ、コイハカガミ、キバナノコマノツメ、ウスバスミレ等點綴す。

大雪路（オホユキヂ）と稱する、傾斜の雪上を横ぎること數十町、右崖に移り、程なく又十數町の小雪路と名くるを經、巖岡口登路中、急峻第一の稱ある、十餘町の莇坂（アザミザカ）を攀ぢ登れば、莇坂大神あり、ミヤマアザミ多ければ、かく名けしなり、沿道延命大神、水呑大神、牛戻大神、傳石（ツタヘイシ）大神、八丁坂大神、河原宿大神、御田原大神、雪路大神など、八百萬の大神在しまし、奇々妙妙、神名共進會の觀あり、中には石彈、熔岩碎片などを、神體とせるは、滑稽も亦極まれるものかな。

雪面は、波紋狀の突起を呈し、日中と雖も堅くして、僅かに足跡を印するのみ、此雪面往々、幅數寸の障壁狀なせる、半透明の堅氷、長く亙れるものあり、或は熊手を以て、上方より下方に、擦過せるが如き痕跡の、幅數間に及べるものあり、甲は殘雪の裂罅を、流れし水の氷結せるもの、乙は、壞落せる雪塊の、擦下せるものならんか。

十一時二十五分、御峯（オミネ）に達す、高距約七千尺、例に依り、御峯大神あり、是れ即ち鳥海頂上新火山に對する、外輪山の一突起にして、外輪山は、これより東北に彎曲し、文珠嶽、伏拜嶽（フシヲガミ）、行者嶽（ギヨウジヤ）、虫穴（ムシアナ）、風岩（カザイハ）、七高山（シチカウザン）など名くる峰頭相連

り、之を七五山連嶺と稱す、されど素より火口壁の突起なれば、判然たる山峰を呈するなく、高低の差甚だ少し、外輪山中、七高山比較的最高く、一等三角點あり、路は此外輪山に沿ひて、七高山に通ず、風岩七高山の間、右に降るは、由利郡矢島道とす、外輪山は頗る薄く、外側即ち東南側は、急傾斜をなし、内側は絶壁、昇降するに堪へず、唯僅かに人工を加へ、鐵梯鐵鎖によりて昇降せり、此人工昇降口は、伏拜嶽の北側にあり、伏拜嶽とは、新山宮祠を、正北に拜すべければ、斯く名けしなり、我等は此鐵梯鐵鎖に縋りて、火口内壁を降り、殘雪と熔岩裂塊磊々たる狹き火口窪、所謂千蛇谷（又千者谷、或は千歳谷と云ふ）とを經、新山半腹に位せる、鳥海山本社に達せしは、正に午時とす、蕨岡より約六里、土人は九里と稱す、導者時田に、賃金八拾錢を給し、直ちに歸らしむ、予昨夕、口之宮社務所に就き、剛力料の定額を質問せしに、別に規定なきも、八拾錢乃至壹圓位にて可ならんとの答なりき、想ふに先達は、數人若くば十數人の團體を率ゐ、御都合次第、一人より何程宛として集金し、あはよくば、一日數圓にも上ることあるものゝ如し、予が實見せる所によれば、或先達は、團體の客一人につき、四拾錢づゝ徴收せしものあり。

我等が莇坂にかゝりし頃より、風起り、雲霧去來せしが、本社に達せし時は、濃霧咫尺を辨せず、濃霧は遂に霧雨となり、風亦漸く烈しくなりければ、空しく行者堂に蟄居するに至りぬ。

鳥海山は「てうかいさん」、又「とりのうみやま」と云ひ、飽海嶽（羽黒山年代記）、北山（義經記）又羽山の古名を有し、出羽富士の尊號あり、羽後國飽海由利の兩郡に跨り、山體は傲然十餘里の間に蟠踞し、超然群峰を拔き、雄渾の景、壯大の觀、實に東北第一の名山たるに恥ぢず、本山火脈、北は岩木山に、南は月山に亙り、所謂鳥海火山脈を作り、而して本山實に之が盟主たり、口之宮に於ける、鳥海山神社畧緣起に據れば、直立六千四百六十尺とあり、出羽風土記には、周囲三十二里十三町十間、高十七町八間五尺一寸二分とありて、如何にも御丁寧至極なるが、之を改算するに、約六千一百七十餘尺となる、されど地質調査所本庄圖幅に據れば、本山の最高點、即ち新山の絶巔は、海拔二千百二十三米突と註し、予が空盒晴雨計の概示によれば、二千三百米突ありて、約七千五百尺以上なるが如し。

中島理學士によるに、鳥海火山は、層狀火山にして、其外形規律正しき圓錐形を呈し、稻村嶽、舊火山、新火山の三重火山丘より成立し、各丘は、二重式火山を形成す、新火山は、七五山連嶺の火口壁を以て圍繞し、北方に開口せる馬蹄形をなし、中に新山及び荒神嶽の中央丘あり、舊火山は、笙ヶ嶽の火口壁を繞らし、南方に開口し、中に鳥の海の爆裂口、及び鍋森の塊火山あり、稻村嶽は、舊火山の北方に離れたる、最舊火山なるが如しと、三代實錄によれば、貞觀十三年四月八日、山上に火あり、土石を燒き、又聲あり雷の如し、山より生ずる所の川は、泥水溢れ、其色青黑、臭氣充滿、人聞

くに堪へず、死魚多く浮ぶ云々。

本山は、笙ヶ嶽の西方に連れる觀音森あり、更に海中に突出せる三崎(ミサキ)ありて、之を北東より望めば、純然たる金字狀をなせど、南方より望めば、恰も臥牛の如しと稱す。

鳥海山本社は、大物忌神社(オホモノイミ)と稱し、新山の南側にありて、南面し、桁行四間、梁間二間、檜造にして、高き火山岩の石垣を繞らす、祭神は、豐宇氣毘賣神、若宇賀賣神、保食神にして、用明帝の朝、正一位を授けられ、出羽の國一之宮の勅額を賜ふ、今は國幣中社に列せらる。

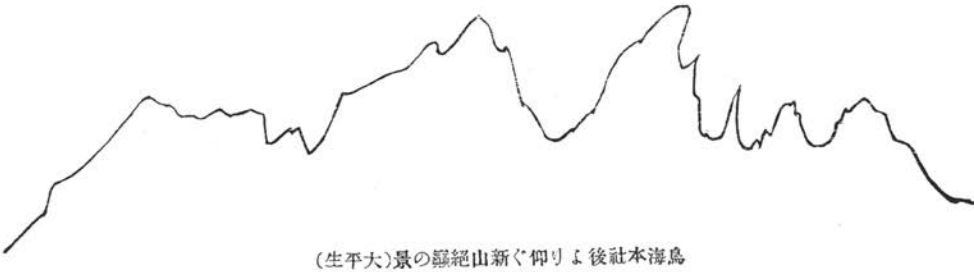
本社に向て、左に社務所あり、右に行者堂あり、社務所の南方にも、行者堂あり、廣各四間二間、蓋し本社は、二十年毎に改築し、其舊材を行者堂に轉用せしによる、皆繞らすに、高七八尺の厚き石垣を以てせり、社務所に隣接せる行者堂には、二人の使丁ありて、詣客の需めに應じ、飲食品を供す、一宿料三飯にて五拾錢、素より飯と、單純なる味噌汁とのみ、米を携帶せるものは、汁だけ供し、木賃として、一宿貳拾錢を徵收す、酒は一升七拾錢、詣客依りて以て寒氣を防ぎ、快を取るもの多し、此夜道者の宿泊せしもの六十餘人、頗る雜沓を極め、方言の不通夥し、堂内堅炭を用ひ、幸に燻烟の難を免かる。

本山は、陰曆六月一日に開き、八月八日に閉づ、一年の詣客、約五六千人なりと云ふ。

社務所には、神職數名出張す、予は主典大西千里氏の厚意により、特待を受け、防寒用として、毛布數枚を借り、且つ予には、汁の外、一二品の副食物あり、薇、麩、茄子、南瓜、茗荷、若布等、此籠城中に於ける汁の實とす。

二十三日、風益烈しく、濃霧は宛然密雨の觀あり、此日、本庄中學生の團體十數名、矢島口より、八合目邊まで登りしも、所謂御山の荒れなるものに辟易して、下山せりとて、同時に登りし道者連二十人許、到着せしが、莫蓙や油紙を纏へばとて、何等の効なく、全身濡鼠の如く、中には凍えて倒れ込み、殆ど人事不省に陷りしものさへあり、翌日風霧の稍緩めるを窺ひ下山しぬ。

此夜、大西主典、銘酒を持ち來り、本山天界の產たるダケニンジン（白根人參）の浸し物、及び下界よりの到來物林檎などを下物とし、款話數刻に及び、下戸博士の山人も、其厚意に醉ひぬ、氏曰く、これまで師範中學などの學生、續々本山に登り來り、山艸徒らに胴亂に滿つるも、殆ど其名稱を知るものなし、我等は之を草毟(クサムシ)りと渾名しぬ、中には我等神職に質問するものなどありて、毎度閉口せしが、明日天候佳ならば、山上の散策を共にし、實物示教を蒙りたしと依賴しぬ、氏は吹浦(フクウラ)の人、年齡三十前後、元來虛弱の質なりしが、屢山上生活を試み、ダケニンジンの如き、天界の產を食せる故に



鳥海本社後より仰ぐ新山絶巓の景（大平生）

や、健康增進の効、顯著なるを認めしと云へり、新山熔岩は、複輝石富士岩として、絶好の標本なればとて、先年大學より採集に來りしこと。笙ヶ嶽、觀音森の間にある猿穴（サルアナ）と稱するものは、火口の保存餘程完全なること。大物忌神社の口之宮に就ては、蕨岡吹浦の爭ひを調停し、明治十五年より、二ヶ所を口之宮と稱し、頂上本社の行事は、隔年之に當ることゝせるも、頂上及び蕨岡登路の半途に位せる箸王子も、吹浦領地なること。十數日前、宮中顧問官男爵南部甕臣氏の、吹浦口より登山せしこと。大西氏物語の片々とす。

二十四日朝、風霧依然、咫尺辨ぜざりしが、十時頃より漸く緩和となり、斷霧の間、屢微に日光を漏しければ、髀肉の歎に堪へざりし山人、如何でか躊躇すべき、早速油紙外套に身を固め、輕裝出發、先づ社後の新山に向ふ。

仰ぎ見る新山の頂、岩塊峥嶸として裂け重なり、矗々鑿を立つるが如く、尖々刃を植うるが如く、斜なるもの、横はれるもの、狹隙あり、彎曲あり、或は屹然巨屋をなし、或は窪然陷穽をなす、蓋し奇絶凄絶の極と謂ふべし。新山又享和ヶ嶽と稱し、享和年間の噴出にかゝり、最新火山なれは、岩面霉爛作用を受けず、頗る堅緻にして、暗灰色を呈し、殆ど砂礫土壤の片影をも認めざれど、稀に蘚苔附着の間、ガンカウランの極めて矮生せるを見る、岩塊堆積の間、草鞋の摩擦によりて、僅かに認め得べき通路を辿れば、頭上の巨岩は、將に壓し來らんとし、脚下の岩塊、時に動搖す、或は蝸附絶壁をよぢ、或は身を横たへて、狹き裂間を經、漸く絶巓に達すれば、身は恰も妖怪塲裡に立てるが如し、西方脚下に荒神嶽あり、綠草の之を被覆せるは、新火口内に於て、新山よりも、古き噴出に係ればなり。

岩塊絶壁の罅隙に、岩雀（イハスヾメ）の巣ふを見る、形下界雀の三倍大にして、灰褐色に黑白斑あり、其聲細くして鋭し、好でミヤマダイコンサウの子實を食ふと云ふ、岩罅又岩蜘蛛多し、暗灰色にして白斑あり、出沒頗る敏捷なり。

荒神嶽を巡り、再び本社前に引き返し、七五山連嶺を攀ぢ、七高山巔に立てば、西方絶壁の下、狹き千歳の雪溪を隔て、新山と對し、東南は、外輪山の外側、或は急に、或は緩なる傾斜をなして、裾野を作り、遂に庄内平野に及び、虫穴の東側、數十町の下方、藍池の湛へるは、

鶴間池にして、爆裂口址なちん、七五山連嶺は、火山灰砂及び熔岩露出し、草木の發育不良にして、僅かにガンカウラン、コメバツガザクラ、イハギキャウ、イハオトギリ、ミヤマカウゾリナ、ミヤマリンダウ、イハナシ、コケモヽ、シラタマノキ、ヨツバシホガマ、アキノキリンサウ、ダイモンジサウ等散點し、其内側には、イハウメ、イハベンケイ、シラネニンジン多く、又本山の名物たる、テウカイフスマ、及びイハブクロは、此火口壁より、火口丘に蔓延し、甲は纖莖半ば匍匐し、細葉淡綠、五瓣の白花は、半ば透明を呈し、乙は暗紫色の肥莖硬立し、多肉の廣葉は、光澤深綠を帶び、淡紫色の大花は、歪鍾狀を呈し、甲は飽くまでも清楚純潔、乙は飽くまでも豪放不羈なるは妙なり、予が白花のイハブクロを採集せるに、神職は始めて見し所なりといへり。

遠山尙雲霧に鎖され、展望佳ならず、剩へ曳杖未だ二時間に及ばずして、本山復た風霧の裡に葬られ、予は再び堂内蟄居の身とはなりぬ。

此日は、道者輩一人の登り來れるものなく、十六疊の行者堂内、獨り一疊の席を占めたる予と、火鉢とのみ、唯聞く、屋上を掠むる天風、軒端に落つる天滴。

二十五日、風勢益烈しく、堂舍振動し、身は恰も船中に在りて、波浪に掀飜せらるゝが如く、雨の如き密霧は、斜に横に地を拂ひ、屋を擊ち、猛烈矢よりも疾く、凄絶愴絶、天上天下悉是空、風は始終、約十秒の間歇を有ち、倏忽として來り、倏忽として去り、前衞なくして、直ちに、麾下の肉薄を見るは、下界絶無の現象となす、天地は唯晦冥、晝夜の別なく、臥しては風霧を夢み、起きては風霧を見詰む、此日亦道者の、登り來れるもの一人もなし。

御山の荒れ、數日に亙りて、茲に通厠の厄に接しぬ、これ獨り予のみならず、神職然り、使丁然り、本山元來、便所の設なく、堂外數十間の東、千者溪谷、熔岩凹窪の處、所謂頂天跨石の便所なれば、御用の際は、數枚の油紙、若くば莫蓙を以て、頭上より纏ひ、其上を繩もて、幾重にも縛し、上體を低めて、岩角に抱き附き、風難霧難を防ぐ樣、奇とも怪とも、何とも形容すべきなし。

通厠の件は、尙滑稽として、一笑に附すべきも、茲に一顰にも附すべからざる、一大事件あり、糧食是なり、頂上糧食に限りあること、山麓吹浦の口宮に於ては、既に熟知のことにて、二十四日運び上ぐる豫定なりしも、連日の山荒れにより、未だ來らず、二十五日には、殘す所の米僅かに五合、あゝ此五合は、神職四人、使丁二人、及び予、合計七人の生命のよりて繫る所なりと思はゞ、豈心細き限りならずや、乃ち應急粮食徵發の爲め、萬難を凌ぎ、目的を達すべく、使丁の一人久村重則を、鳥の海遙拜所に遣はす、鳥の海遙拜所は、吹浦道にあり、頂上本社を降ること約一里、籠堂ありて、幾

分の糧食も有るべければなり、午後五時頃、鳥の海遙拜所より、少許の米到著す、先きに遣りし使丁は、鳥の海に留まり、鳥の海の堂守、藤枝義雄は、倔强のものなればとて、代はりて來れるなり、而も僅かの風間を候ふては走り、風至れば岩角に蝸附する有樣なれば、非常の時間を費せる由物語りぬ、此男我等に取りては、熊本籠城の谷村計助なりと謂ふべし。

二十六日、風霧依然たり、本山は予が此行の主眼とする所なれば、十分の見學を得んものと、只管天候の恢復を待ちしこと、茲に四宿五日、而も遂に恢復の見込も立たざれば、遺憾ながら、此日藤枝を案内とし、下山すべく決しぬ。

本山は、加賀白山の如く、雲霧に鎖さるゝこと多ければ、其標高に比し、殘雪の多量なる一因ならんか、然し神職の言によれば、斯く長期間の山荒れは、殆ど無類なりとのことなり、行者堂の側に、高約四尺、口徑四尺許の巨槽二個を置き、常に殘雪を運び入れ、其溶くるを待ち、一切の使用に供するものなるが、前日の空槽、一夜にして、溢るゝばかり溜れるは、霧の如何に大にして、且つ密なるかを察するに足れり。

風は始終、東北方即七高山方面より吹き下ろし、火口の開放方向に吹き去れるが如し、唯此物凄き山荒れの中、氣温甚だ降らず、且つ其昇降の差、甚だ少かりしは、幸とする所なり、左に其温度を示さん。

二十二日	朝	七六 廐岡	晝	六二 鳥海山頂	夕 六〇 同上
二十三日	朝	六〇 鳥海山頂	晝	六二 同上	夕 五六 同上
二十四日	朝	五六 鳥海山頂	晝	五八 同上	夕 五八 同上
二十五日	朝	五八 鳥海山頂	晝	六〇 同上	夕 六〇 同上
二十六日	朝	五八 鳥海山頂	晝	六八 鳥の海	夕 八〇 吹浦

右の如く、鳥海山頂、五日に亙れる温度中、最高六十二度、最低五十六度、其差の僅かに六度なりしは、高山の荒れとしては、珍らしきことゝす。

午前八時、頂上の本社を辭し、荒神嶽の西側を横ぎり、火口の開放向千者谷に沿ひ、西北に降り、熔岩崔嵬の間、殘雪を踏む、所謂小雪路なり、此溪谷を直進せば、東大澤の深谷に陷らん、本社より約半里にして、左方の崖側を攀ぢ登る、所謂七五三懸（シメカケ）にして、新火山外輪壁上とす、草木生ひ茂り、シャクナゲ、ツヽジ、カヘデ、クマイチゴ多し、こゝより緩斜なる御田原をなし、小池多く、チングルマ、キングルマ、ウメバチサウ、ミヤマクワンザウ等を見る、小窪溪に下り、

間もなく、鈍圓錐形をなせる灰砂の小丘、即ち八丁坂といふを越え、幾度か風を岩陰に避け、九時三十分、鳥の海遙拜所に著す、標高約五千六百尺とす、附近偃松を見る、遙拜所は、舊鳥海の本社なりしが如し。

鳥の海遙拜所には、吹浦より神職一名出張し、傍に二間三間大の茅舍あり、宿泊するに足る、此處舊火山外輪山の北壁上、外側に位し、幅甚だ狹きも、屋後の岩塊は、屏風をなして、能く暴風を防ぎ得といへり。

予が遙拜所に休み居るや、小瀧口より登り來れる、白衣の道者十數名、相會して休憩し、予が山頂五日の籠城、及び兵糧攻に陷りし物語りに、耳を傾け、同情の感に打たれけん、其携帶せる粽を寄附せるもの多く、知らぬ旅路に、人情の至味を覺えぬ、彼等は此處にて遙かに、頂上の本社、及び鳥の海を拜し、直ちに下山の途に就くものなり、頂上まで登らずして、此處より引返す詣客多ければ、遙拜所の稱ある所以なり。

時に本山頂上は、尙濃霧深く之を鎖せど、遙拜所附近より下界は、漸次晴れ渡り、遙かに男鹿半島及び佐渡ヶ島まで、双眸に入る、乃ち鳥の海を探檢すべく、輕裝屋後に登れば、擂鉢狀なせる鳥の海は、脚下にありて、予は其鉢の緣に立てるなり、上緣周回約一里、一投足にして降り得べく、近く見えし湖底も、內側急斜、熔岩突兀、甚だ降り易からず、二十餘分を費し、湖底に達し、昔は大鵬來り游ぶとぞいふなる、靈水もて、久し振りの盥嗽をなせば、實に「毛呂毛呂乃都美計賀禮美會伎波羅比天須賀須賀志」。

鳥の海は、貞觀年中の爆裂口なりといひ傳へ、畧圓形をなし、其西南內側には、殘雪尙多く、融水流れて、火口底に注ぎ、湖底徑約百間、西部は淺くして、砂汀を存するも、東部は深くして、碧色を呈す、無口の此湖、水量の增溢せざるは、其水南方に滲出するによれりと云ふ、湖の南西壁上には、宛然鍋を倒し伏せたる如き圓丘あり、鍋森と稱す、全山偃松笹を以て被覆す、遙拜所より、馬背の如き狹き峯を傳ひ、西すれば笙ヶ嶽に至らん、峯頭缺刻多く、之を望むに、笙に似たれば、此名ありと云ふ、是れ舊火山外輪山中、最著大なるものとす。

鳥の海附近、山草最豐富、其主なるものは、イハイラフ、イハカヾミ、ミヤマリンダウ、チングルマ、キングルマ、アヲノツガザクラ、ヒナザクラ、キンカウクワ、ムシトリセキシヤウ、ヨツバシホガマ、キバナノシホガマ、ハクサンイチゲ、ウメバチサウ、イハヒゲ、スギラン、ミネハリキ、ハクサンオホバコ、テウジギク等とす、予は飯豐、月山及び本山に於て、一もべニバナツガザクラに接せざりき。

予が鳥の海湖底探探の際、二回雲霧の襲擊に遭遇せしが、落下せる霧滴の强勢なること、宛も拋擲砂礫に觸るゝ感ありき。

鳥の海の優遊二時許、茅屋に歸着休憩すれば、堂守藤枝は、予が爲めに心盡しの味噌汁を調へ、且つ予が貰ひ受けし粽に着けよとて、白砂糖など出しければ、代價を拂はんとするに、辭して受けず、頂上よりの途中、予が山草に就き、實物示教せしに報いんとてなり、其志嘉すべし。

此日未明、矢島口より頂上に登れりといへる道者七名、骨格逞しき先達に從ひ、此小屋に休み、吹浦に下るべき由語りければ、予が荷物の負擔を先達に依賴し、共に遙拜所を出發せしは、午後一時三十分とす。

舊外輪山の外側、鳥の海泥流の趾、芝生の傾斜地を馳せ下り、同五十五分、大雪路を經、河原宿に著す、雪路及び河原宿と稱するは、蕨岡及び吹浦兩方面にあれど、此處は別に宿すべき小屋もなし、且つ此方面の殘雪は、到底蕨岡道の壯觀には比すべくもあらず、河原宿より小溪流に沿ひて右するは、小瀧道とす、此處よりは全く雲霧去來の域を脱し、日本海上白帆指點すべし、顧れば本山頂上は、濃霧尙密封す、山神何ぞ其靈を秘するの甚だしさや、下山の後、山麓人々の語る處によれば、予が籠城の五日間、下界は唯暴風のみにて、空晴れ渡り、一滴の降雨もなかりしと云ふ、天界氣象の絶異驚くべし。

二時十分、吹浦道第一の險たる、蔦石坂上（又傳石坂）に出づれば、義經ならぬ我輩も、尙一躍、海渚に達し得べく、脚下直ちに吹浦、酒田を認むるも、而も其間頗る遠きものなり、集塊熔岩磊々たる急坂を、飛ぶが如くに馳せ降り、同四十五分、坂下に達す、高距坂上は約四千六百尺、坂下約三千一百尺とす、此坂にて、山上に米運ぶ人夫數名に逢へり。

三時二十分、一の鳥居（二五〇〇尺）に著く、此間ササ、カヘデ、ナラ、マンサク、フナ等あり、而も矮小にして灌木の狀をなす、此時同行の道者等、二日間の睡眠不足と、且つは强行軍との困憊にや、芝上に横はるや、日光に浴びつゝ、直ちに華胥に遊べるもの、大半なりき。

一の鳥居以下、芝生の緩斜廣原、熔岩散點の間、芒、桔梗、女郎花など之を綴れる、所謂鳥海の裾野を進めば、衆皆其單調と、飢渴とに倦み苦める折、四時二十分、足左下冷泉涌出の處ありと、先達の教に、一同馳せ寄り、牛飲も啻ならず、漸く勇を皷し、五時四十分、吹浦に著す、頂上より約六里、土人は九里と稱す。

口之宮に詣で、大西主典の紹介書により、社務所に禰宜敷地笠麿氏を尋ね、旅舍高橋屋に投ず、此夜敷地禰宜來訪し、親切にも、鳥海山に關する記錄を示し、且つ繪圖三葉を寄贈せらる、此地戸數約二百、本山は蕨岡、吹浦兩口共、例の袖乞の絶無なるは嬉し。

抑鳥海山の裏日本に於けるは、猶富嶽の表日本に於けるが如きか、其海岸より直ちに昂起せる、其超然群巒を拔ける、

其切頂圓錐狀を呈せる、其植物五帶を完備せる、其山容の秀麗なる、何ぞ其相似たるや、之を裏日本の富嶽と稱するも、誰か溢美となすものあらんや、若し夫れ火山研究の多趣味、熔岩劈裂の凄愴、高山植物の豐富、大殘雪の壯觀は、東海の富士、遠く本山に及ぶこと能はざるなり、而して矢島口は、仰望の美と、喬木帶の旺盛を以て優り、蕨岡口は、沿道休憩の設備と、途中飲用水の多きと、視界の變化と、大殘雪の壯觀とを以て優り、吹浦口は、歷史的火山の趣味と、鳥の海の神韻と、山艸の豐富とを以て優れるものと謂ふべし。

第十三、吹浦の羅漢岩

朝飯前の課業として、吹浦の名物、十六羅漢を探るべく、二十七日未明起き出で、海岸を迂廻すること十町許にして、目的地に達し、先づ海潮もて顏を洗ひ、羅漢に拜謁す、地は鳥海の西脚、海に突出せる處、即ち熔岩の浸蝕作用によりて、幾分屹立せるもの、之を荒崎と稱す、所謂十六羅漢は、此熔岩の自然形象を利用彫刻せるもの、大さ人身より大なるあり、小なるあり、高く立てるあり、低く坐せるあり、倚れるあり、聚れるもの、離れたるもの、仰げる、俯せる、亦多少の趣なきにはあらねど、餘り古雅ならざるものゝ如し。

傍に高さ十丈許なる、警報信號柱あり、沿海警戒の赤球を揭げぬ。

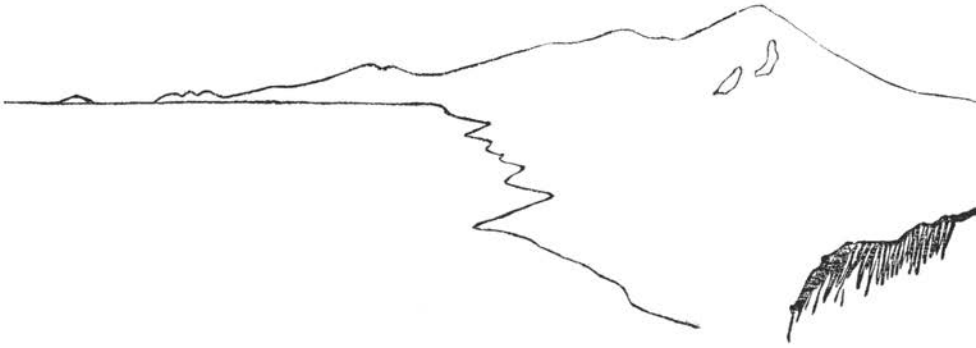
岩上に立てば、十六浬を隔つる飛島も、近く眼前に浮ぶ、偶予が傍に來れる漁夫は、彼島のものなりとて、島の周回三里あること、人口千人を有すること、材木岩、屏風岩などいへる、奇岩の景に富めることなど語りぬ、昔鳥海山戌亥の隅、飛び別れて海中に入り、飛島を生ず、島に風神小物忌神社鎭座すとは、地方の傳說なり。

此地北風沙を吹き、或は堤の如く、或は塚の如き形をなすもの、日々に變ずればとて、吹浦の名を得、昔時行人の惱める所なりし由、東遊記にも見ゆ、されど今は砂防の方法も立ち、復昔日の觀を呈せずと云ふ。

吹浦古福良（フイラ）と稱せしは、月光河口の灣曲、囊の形せるより起りしならんと云ふ。

第十四、庄內濱街道

此行予は、鳥海火山脈の北端、岩木山まで見舞ふべき希望なりしも、天候の爲め、あたら時日を空費し、休業の餘日迫れるを以て、急行歸途に就きぬ、二十七日午前七時、吹浦を出發し、月光川の下流たる、吹浦川の橋を渡り、藤崎郊北に立て、左顧すれば、偶鳥海山其白帽を脫して、別を告ぐるものゝ如し、而も其新山の尖々矗々天を刺せる、七五山の之を



湯野濱に於けるる鳥海山遠望（大平生）

護衛せる樣、いと明瞭に、我が網膜に映じぬ、手帳取出し、寫生し終れば、雲霧忽ち復之を秘しぬ、前面の月山亦其頂雲に入る。

藤崎より酒田まで、馬車に乘ること三里、酒田は羽州第一の大湊と稱せられ、舊酒井氏の領地にして、今は飽海郡衙の所在地となり、人口約二萬の都邑なれども、二十七年の震災により、其六分を灰燼とし、今尙舊態に復すること能はず、風俗淫靡に陷り、產業界の勢力は、全く鶴岡に占領せらると云ふ、「本間樣には及びもないが、せめてなりたい殿樣に」と、謠はれし、豪族本間氏の門前を過ぎ、渡船最上川を渡り、午後四時三十分、庄內樂園の稱ある湯野濱に入れば、浴客雜沓、旅館塡塞の有樣にて、海に幸なき山人、到る處謝絕に接し、辛うじて安藝ならぬ宮島屋といふに投宿す、予が室は、海中に突出し、白浪椽下を洗ひ、飛石の如く點綴せる岩上には、綸を垂るゝ人も見ゆ。

共同浴槽に投じ、終日の汗を拂て室に歸れば、先きに認めし一圍の密雲、今は見渡す限りの天を覆ひ、電光一閃、忽ち轟く雷鳴は、楯をも貫くばかりの、銀雨を伴ひ、水天一黑、旣にして驟雨一過すれば、日輪やがて西方極樂淨土に入らんとし、上には殘雲一直の下緣を作り、下海面の水平と並行して、日輪を挾むこと甚だ迫り、鮮光海を射て、暗波紫金を漂はす、右顧すれば鳥海の靈峯は、金字式の火山典型を、新霽の天に現し、其左方半腹の笙ヶ嶽は、東海富嶽の寶永山の如く、尙左方に遞下して、更に觀音森、三森の突起せる、飛島の水平線上に離れたるは、恰も箱根の諸山、豆南の諸島に比すべし、況や屈曲逶迤、白波沙汀を洗へる海岸を、山の此方に描くをや、又況や夕陽を反射して、奇き淸き紅を帶べる大殘雪を、山の胸に懸くるをや、山の秀、海の淸、日の美を併せ得たる此刹那、予は眞に脫俗の域に在るものなり、予は斷言す、鳥海の遠望、湯野濱を以て第一となす。

羽越國界の鼠ヶ關を經、松島の優美と、男鹿半島の豪壯とを兼ねたりと稱せらるゝ海府浦を探り、瀨波の大噴湯泉に浴し、乙の大日如來に詣で歸鄉す。

岩鷲登山記

千葉草水

旦、夕に、厭かず厭かず眺めてゐた岩鷲山に、この夏こそは登らうと思つて、同志を募つて見たが、思はぬ障碍が生じたり、違約があつたりして、うまく纏まらないので、單騎登山に決した、時は戊申八月二十日午前三時、町々は熟睡に入つてしまつて、電燈が道の上に茫とした光を送つてゐる、僕のスタイルが恠しいものだから、路に眠つてゐた犬共がこそ〳〵と避ける、薄氣味が惡るいから、サッサと行くと、町端で吠えつかれた、ヒョ……ヒョ……と口笛を鳴らせば、折角出しかけた聲を嚙みつぶして、ムウ……と唸つて簷下へ引込んだ、町を出ると暗い、星の影だにない、こんな時は目は開いてゐると云ふだけで何の役にも立たない、心耳を澄まして、北上の川瀬の音に沿うて行くと、並木松の街道に埋もれてしまふ、これからまた川に遠くなる、右手には安倍館の杉林が見える筈だが、今はたゞ闇の底の一小黑堆で、歷史もなければ色彩もない、道は右方へ緩るい弧を畫がいて曲がる、暫く行くと、地の底に通ふのではあるまいかと思はれる程、眞暗な松の隧道にかゝる、こゝからが桔梗咲く茨嶋の原、茨嶋へ這入つてからも、もう半里近く歩いたから、夜が明けるだらうと思つてゐるうちに、段々足下が見え、草原が現はれ、並木の間からは活々した朝の天使が顏を出す、今までは力味かへつて歩るいてゐたのだから、それ程とも思はなかつたが、夜道の獨ポッチは隨分淋しいものだ。

やゝ行くと鐵道線路の踏み切りがある、さうすると、次に來るのは種馬所の石門、それから……と、土橋があつて路を挾む七八戸の小村巢子、また五六町で岩鷲山と扁額のある鳥居が立つてゐる……と云つた風に、やゝもすれば、肝心の足よりは想像の方が拔駈けをやる、すると麥藁帽子に古洋服といふ怪しの登山客、肅々としてその足跡を追つて往く。夜が明けたばかりの靜かな街道、松は自然の翠蓋を翳ざして、頭に達するまで枝の垂れた處もある、鳥居の見えそめる邊で頰冠の男に遇ふた、東空が紅かつたものだから旭の射すのを豫期してゐたが、大分模樣があやしくなつて來た。

鳥居の側に一碑がある、右鹿角道、左柳澤道。

身仕度を終へて左へ折れると、逕の兩側は女郎花が眞盛りだ、桔梗も交つてゐる、稀にはヤマト撫子、マツバナデシコなど、やさしい草花も咲いてゐる、この間を畝り畝つて進むと一叢の松林に突き當る、松林を拔けると蓊鬱たる雜木林がある、大急で林間の路を通るとポツリ帽子を打つものがある、雨？と思ふ間にバラバラ降り出した、雨の登山！大降になつては結好ではないが、もう乘り出した舟だ、どうなるものか、行ける所まで行つて見やうと、拍手三つ、木精に響かして

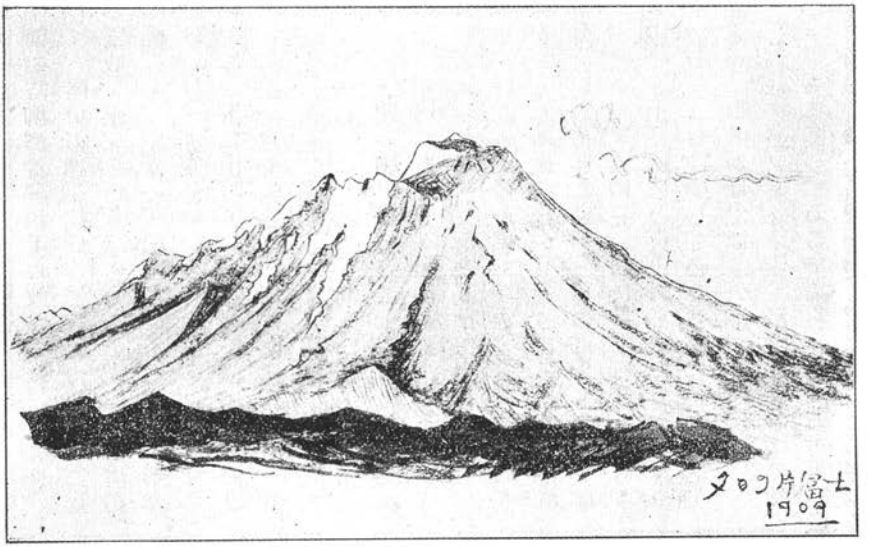
晴天を祈つて置いて、馬虻追ひながら一散に馳け出した。

午前七時柳澤着、拍手の效驗こゝに顯はれ、叢がる雲のカーテンを押し排けてお日樣が照らして來た、社務所へ一寸立寄つて、暗い杉林を拔けると、お山がヌッと聳えてゐて目に餘るばかりだ、誰でもこの林から顏を出す瞬間にお山の偉大なる靈威に壓せられる、といふよりは寧ろ淸高なる默示の電流が全血管に滲注するのを感ずる、形から云つても、崔嵬だの、峻嶮だの、劍だの、槍だのつて、一口に形容して終ふのは頗る當を失してゐる、仰げ、坐禪姿の全身像、綠の袈裟豐かに投げかけ、赤銅色の胸少しく露はして、寸草も止めざる頭には空碧の笠を戴く。

裾野は一里二十町とか、短かい草原で、何方を向いても櫛の木が多く野生してゐる、深山高原の氣候に馴れて、幹は石のやうな堅い皮で包まれ、柯には枯れながらも一冬落ちないで暮らすといふ深藍の厚い葉が大手を擴げたやうに獅嚙みついて、風が吹いたら鏘々として金石の音がしまいか、路のべには山はハハコの雪白な花やシホガマ菊などが咲き出でゝ野を裝飾つてゐる、スケッチしやうと思つて佇立つてゐたら赤蟻が五六疋ついた、うつかりすると囓りつかれるから急いで行くと、二三頭の駒が驚いたと云ふ風をして跳ねて行く、裾野の盡くる處、濶葉樹林の下に黑土の急な下坂がある、之が登山の第一關門である、鐵鎖に掴まつて降れば、薄暗い處にホトヽギスの花が二つ咲いてゐた、下り切ると、パッと明るい所に吐き出される、見廻せば千仞の谷底だ、左右には根マガリ笹が繁つてゐる、その間を分けて少々登つて行くと受取所と札をかけた板圍の小屋がある、主人は薪取りにでも出かけたであらうか、二三個の椀と鍋一個とが留守居顏に殘つてゐる、荷を下ろして崖の根から湧き出る冷水に咽喉を濡して食事を濟した、四邊を見廻せば、イケマ、ツルニンジンそれから名も知らぬ唇形花などが、奧の富士と鐫りつけられた碑の邊に咲いてゐる、此等の草花は深綠の笹の葉から垂落る滴を吸ふて、咲いて、人の見ぬ間に散り行くであらうなど考へて、恍惚として居ると、當歸の香が鼻をかすめる。

右手の赤土と鳶色の火山岩とで捏ね上げたやうな崖を攀る、鐵鎖があるのを見ると、雨降りなどには氷よりも滑るに違いないが、今日は少しも必要を感じない、登り詰めると一方は木立、一方は深淵に臨んでゐる、淵といつても、靛藍の水を渦卷いてゐるわけではないが、その代りに、十丈の雪に晒し上げられた、瑩徹玻璃の如き空氣が、幾億萬貫の重さに堪えで、高峻からヅシリ……滑べり落ちて滿々と堆積してゐる、深底には、その昔、噴火口から飛び出したまゝの怪岩も、夢みがちに睡つてゐるであらうが、彼方の斷崖の白樺の影が落ちてゐるのでよくは見えない、見詰むれば、大山住が欠伸する巨口ではあるまいかと思はれるこの深淵も、實は一片の皺に過ぎないのだから驚くの外はないのだ。

斜面を少し登ると、楢、ブナ、ムシカリなどの林に入る、逕の上には日光が丸く、長く零ぼれてゐる、とある岩蔭に車百合



の花が一輪咲いてゐた、格別な大木もないが、深山の氣が犇と胸に應へる、林が盡きると赤坂だ、冷たい勢か水蒸氣の蒸發するのがスイ〳〵と見える、全く陽炎ではない、これが三萬尺の空高く昇つて、凍つて、纖雲となるのかと思ふと面白い。

仰げば紫と綠とで疊みあげられたる天梯面を壓して聳立す、これが行手ぞと思へば壯快の極である、よく見ると遙か高い岩間に白點が見える、人ではないかとも思つたが、少しも動く風が見えないから、何だらうと、考へるでもなく、考えないでもなく歩く、暫くたつと話聲が手に取るやうに聞えた、路傍にはコケモ、ガルビーの玉を飾つてゐるし、チングルマは一二輪後れ咲きが見えた。

何處からか來た白雲が山巔に打つ突つて、碎けて、雪崩のやうに落ちて來た、折角顏を出したお日樣がまた隱れる、呆氣に取られてゐると、何時の瞬間にか雲の方向が反對になつて、壑間から逆流し始めた、曾つて書齋の窓から、雲が山々を包むのを眺めた時は、綿か布かのやうに、觸れたら手ざわりがよくはあるまいかと妙な考を持つたことがあるが、今其の中に立つと銀の霧の急流だ、千顆萬顆の微細の粒々が、草の葉を掠め、木の枝を搖つて行くのである。

雲に押し上げられて著いたのは、三合目の小屋である、雲が行き過ぎるとまた日光が漏れてくる、下山者と行き擦れに細徑を登るとまた林に入る、林といつても路の兩側に疎林があるといふまでだから、隨分炎熱を感ずる、漸々汗は流れる、渴を覺へることも頻りだ、水が流れさうな窪んだ岩などがあると、そこから水が湧いてくれればいいなと思ふ、青葉の枝があると、葉がくれに林檎の一個ぐらゐはぶら垂つてゐてもよささうなものだなど、他愛のない考へも起きて來る。

腰を沒するばかりな空溝の中を進むと、ヒョイと採集鑵に出逢ふた、鑵

の持ち主は僕の胸の邊までもある岩の上に立つてゐる、先程からゆかしう思つてゐた草花の、せめて名前だけでも聞くのは此の時ぞと「これは何と云ふ植物でしやう」「知りません」彼は氣の毒さうに答へる、「何かおもしろいものはありませんでしたか」「どうも珍らしいのはありませんかつた」と云つて行きすぎる。

喬木といふ樹はこの邊より姿を現さず、見ゆる程の草木の丈の短かさよ、裾野では未だ見えなかつた梅鉢草が咲いてゐる、濃綠の草の間からは黃花のシホガマの花が拔け出てゐる、こゝへ來て、初めて世間から一歩外へ踏み出した氣がする、燒砂利の急坂てなか〳〵捗がゆかないが、一歩〳〵と積んで行くと、矢張登ると見えて、餘程靑空に近くなつた氣がする、懷を緩ろげて、凉しい風を充分孕ませて、登つてゆけば、道の中央に巨岩が仁王立に立つてゐる、其側に五寸一尺と足場を作つて、一條の鎖をぶら垂げたのが我が登路、第二の關門だ、このあたりには人間の造つたものはたゞこの蟻の匐ふやうな徑と、赤く錆ついた鎖ばかりだ、あとはみんな鉅匠自然が有興の大作、燃ゆる空氣の流を亂してゐる谷間の遙か向ふには、縱線斜皺を搔き立てゝ、地熱の猛火を浴せかけて、鍊えあげた安山岩式の崖が屹立つてゐれば、橫の方には偃松のたくり廻つて作つた柔氈のなかに起伏する奇岩怪石、と云ひたいが、其んなお菓子を並べたやうなものは一つも見當らない、平凡も平凡大平凡な、何處の火山にもありふれた大岩小岩、四方八面に、思ひ切り大形の斧の痕を止めて、位置も配合もそち除けにして、勝手な向々に、轉がつたり、踞んだり、伸びたり、縮んだりしてゐる、それに炎々たる日光がドッと浴びせかゝると、萬能の御手に觸れたかのやうに、岩の身に血の氣が通ひそめて、其處此處に「ア、」と甦へる個々の息吹が宛然陽炎の湧き立つが如くだ、疑ふものは來れ、そこに生命を見ん夏の眞畫。

振りかへると、三合目の小屋が眼下に見える、例の赤坂に次いで裾野、裾野に續く北上の曠野、曠野を包んでゐる、水蒸氣の飽和し切つた空氣は、見渡たす萬象の色を吸ひとつて、紛々擾々たる人の世をば、幾億萬里の底深く沈めて終つて、裾野のみが黃に燃えて、鹿角街道の並樹が鼠色の毛絲を一本橫たへて、秒毎に新たなる色彩を織込めた大座蒲團を披展げてゐる。

八合目より少し北へ入らば水ありと聞いて、それを手頼に動き出すと、暫にして平坦な所に出た、八合目も不動平も（九合目）同平面に散在する、この邊一體は下から眺めると西肩に當る所で、種々な草花に蓋はれてゐる、八合目から北へ折れると、一町足らずで淸水が湧いてゐる、數間下流は石に吸はれてしまうが必定山神も下界に流すのが惜しいからであらう、然し湧口だけは饒かに流れてゐる、兩手と膝を突いて、龜の子のやうな格好をして連飮をやると、氷に擬ふ冷たさ、キリキリと咽喉を冷やして骨に徹する、また一口やつて頭を擡げると漸く我に歸つた、この山に登る者は先づこの命の水

を飲まされる、そして六魂を清淨にして、初めて天界を窺くことを許されるのだ、泉の邊には、ミヤマカラマツ、モミヂカラマツ、ツハブキそれから名も知らぬ幽花野草が質素な天の色に咲いてゐる、オヤマソバの花を踏み分けて不動平の小屋についたのは十二時十五分。

一泊の心算で持つて來た十個の握飯、腰に結びつけてここまで持つてくるのは容易なものではなかつた、生命の重さを知つたのはこれが始めてだ、携帶品を小屋に預けて、上衣を脱いで出ださうとしたら、急に寒くなつたので又戻つて上衣を着て出た、路と云ふ程のものはないが、燒砂に足の喰ひ込んだ消え勝ちの跡を稻妻形に登れば、岩桔梗の可憐な花が、五歩に三粒、十歩に二粒と砂利の間に小豆大な碧璃瑠の玉をこぼしてゐる、それが見えなくなると、岩袋に高根スミレの遲咲がポツポツある。

頂上についた、此處は噴火口の外輪の一角で、中央には妙高嶽と稱ふ豐富な褐色の山が盤礴と趺坐をかいてゐる、大濤小波を畝らしてそれを取廻いてゐるのは、この外輪山である、北部は錐の刄尖鋭く、越えて行く雲をば寸々に切り落して終ふ、當山最高所で藥師嶽と謂つてゐる。

想起す—初登山、燒くが如き八月の初旬、空よく晴れて靜かなる午後であつた、岩木、鳥海、早池峰などの諸山が遙かに見えたので、友と二人石に踞して、盛岡はいづこ、中學校の白壁は見えずやなど興じ居る横合から「もう日が落ちますぞ早くお鉢廻りを——」と小屋の主人の促すのを惜しみながら歩いて見ると、一週しないうちに、日は黃金の波紋を殘して沈んで終ふた……一里は大丈夫だなど語り合ふのであつた。

藥師の絕巔（初登山旭をみる）に立つてゐると、俯仰無限の奧の奧より底の底まで、不可測の大灰壁を塗り立て、兎もすれば自分の直ぐ側にある三角標すら見失ふのである、山もなく、川もなく、無論人の影もない、唯白雲の岩角に礫る音がヒユウヒユウと聞えるばかりだ、こうなるともう山にゐる氣はしない、自然に空高く浮び上つて來て雲の湧口に打突つたやうだ、滾々と流れ出る雲の泉、渺々茫々たる霧の海、打ち寄せては崩れ去り、崩れては捲き返へる自在の姿、かの咳唾珠をなすの天才でも、この壯大の片端に觸れたら、筆が木片のやうになつて、恐らく一句の一字も綴れないであらう、否否、赤裸々の自然の餘の偉大さとあまりの壯嚴とに逢着しては、人の世の一切の者は、結局、同化されて自然に歸つてしまうか、折節の辛き目に遇はされて驚嘆を超越して恐怖に陷るかである……無盡藏の雲の海。

暫く立つてゐると、却下雲少しく簿らいで、眼の下に湖水が見え、西に連なる亂嶂夢の如くに顯はれたかと思つたら倏忽隱れて終つた、今日は曇だから、陸羽二國の境を岩丈に結びつけて、糾紛と列を亂してゐる怪鎖那須火山脈の壯觀を擅に

することは出來ない、……或る好事者がこの山脈の横斷を企てたら、斷崖絶壁、鳥道すらないので、日に辛じて二里位しか進めなかつた、所々に藍甕のやうな湖水が在つて水禽が澤山居て人を恐れる風がなかつたとやら、而し横斷は成功しなかつたさうだ。

藥師よりは下り路だ、其處此處に駒草の鮮麗な花が咲いてゐる、總じて此邊の草花は平地のに較べると驚くばかり丈が短かい、思ふに平地の草花の丈の長いのは、高いお空を慕ふためで、朝々暮々の想は凝り積つて、美しい瓣々になつて、香はしき銀蓋になつて、莖の末に憧憬がれ出るのではあるまいか、此處のは、大地の懷に抱かれて、旦には彩雲の衣を纏ひ、夕には淨風鮮雨に養はれる、故に一華が動けば天香溢れ、一葉振へば甘露の玉が散る、美し七千尺の靈花。

止め度もなく湧き出づる想像の雲に卷かれて種々な熱を吐いてゐると、今迄氣のつかなかつた北口の小屋から、人の呼ぶ聲がする、何のことだか解らぬが、まづオ……と答へて、氣にも止めないでゐる、今し藥師よりなだれ落ちた白雲、恠しと見るまに、猛雨がけたゝましい響を立てゝ、襲ひかゝる、素破こそと狼狽するおかしさ、大急で四邊を見廻はしたが、隱れ塲所もないから、全速力で登口につき、一瀉千里の勢で小屋に（初登山新月をみる）歸つたらカラリ霽れて日光が漏れて來た。

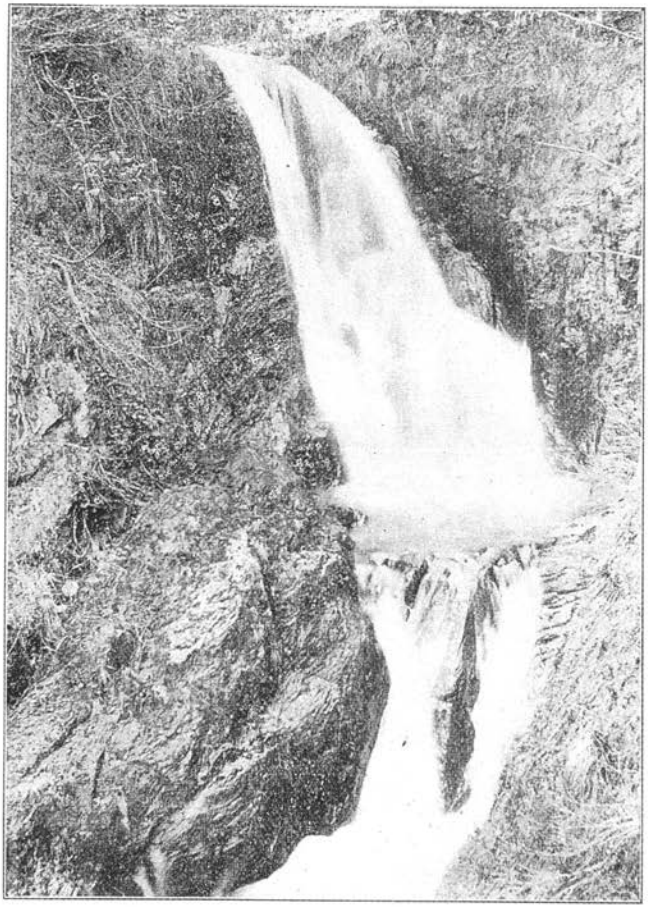
山神の惡戯好きには僕も降參して終つた、焚火に服を乾かして、徐ろに、露の玉を踏み分けて歩いて見ると、小屋の背後の大きな岩の裂目には、大文字草が咲いてゐた、虫とりスミレなども附着いてゐる、それを二株ばかり採つて、小屋に這入つたら午後二時であつた、宿泊る積りであつたが、同伴を二人得たので、急に思ひ立つて下山することにした、九時か十時ならでは盛岡へ著かれまいと云ふを聞き捨てゝ小屋を出た、さらば――。

登の四時間は下の二時間（採集などしなければまだ早い）に當る、大急で裾野に出た頃は、日は駒ヶ嶽連山に隱れんとして、野路辿る我等三人を朱に染めた、柳澤をすぎたは黄昏時、茨鳴の野の虫の聲を心ゆくまで聞いて、家に著いたのは豫定の九時。

越中國醫王山に遊ぶ記

石崎光瑤

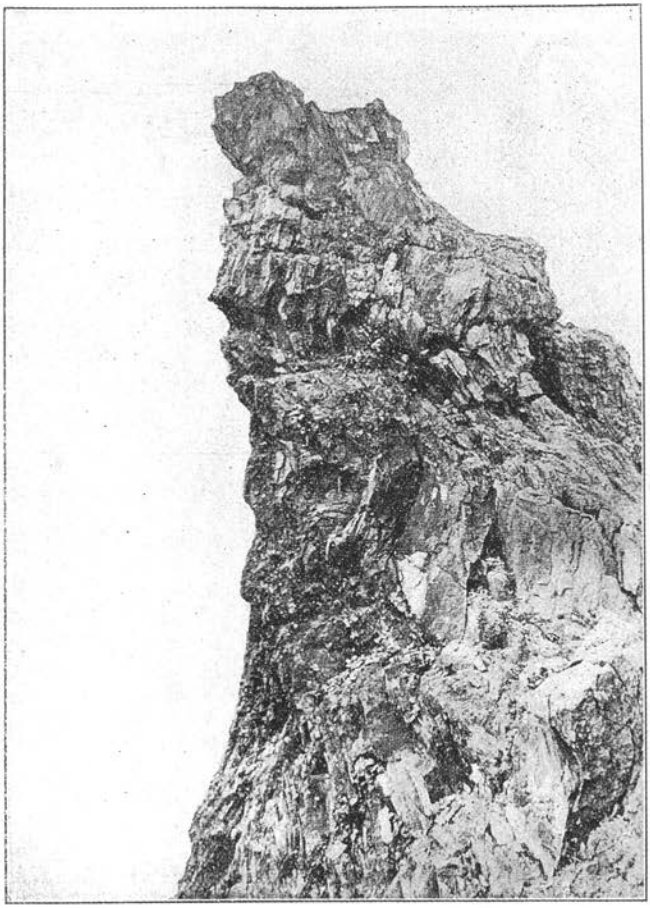
滿目皚々たる深雪に埋もれし礪波平原も、二十四番の春風吹き遍りては、梅櫻桃李一時に燎爛として、幾十の村落を、飾りしが、何時しか泥土に委して、今は早や、古櫸老楠の梢に、若葉萠え出でゝ疎らの葉越しに、淡月を愛づる頃とはなりぬ、一夕福光の西端、八幡神宮の森に逍遙し、社殿の後ろ鬱蒼たる大樹の隙間より、朧に霞める山野の風光に、眼を放てば、菜花の美しきは夜目に分ち難きも、濛の彼方、萬頃の水田に月光の浮動せるに、殘雪斑々たる醫王山の、此茫漠たる風光を統轄し、儼乎として、控ゆるを見る。



さんぢやが瀧　（石崎光瑤氏撮影）

余、生來自然を愛し、殊に山岳を熱愛す、春來能登半島に遊び、偶々稀有の暴風雨に會して、迅雷はためき、急霰飛び、海氣奔騰、荒濤澎湃として、十丈の岩を白盡し、直ちに走せて絶壁を衝くや、高潮雪華を噴き、空に漲る事三十丈、只看る、餘沫濛濛たるの裡、幾千條の白絲の飛瀑をつくりて、黝黑の巖壁を洗ふの壯觀を、蓋し該半島は、到る處概ね崎嶇崇巉の絶壁を以て、海に面し、危礁兀立、恰も怒猊渴驥の狀を作し、風景豪拔、眞に海に於ける、自由の表章地たるを失はざるなり、今や是に加ふるに海若の怒號を以てし、殆んど恐怖的快感の極致に達す、

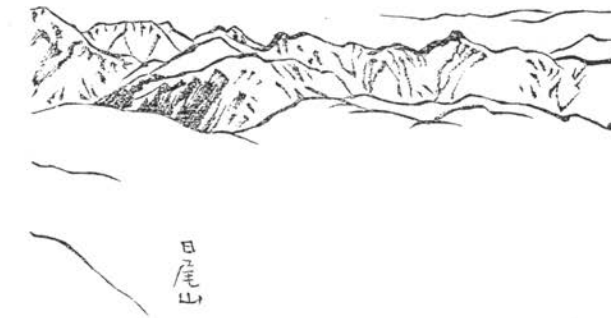
余、防水布に身を固め、岩頭に立ちて、此凄絶なる大活劇を觀る事多時、愕として、家に歸るを忘れたりき、されど斯くばりか、雄渾壯大の偉觀に接するも、未だ恐怖的壯美を感ずるに止み、終に大山崇岳に對する如き崇高無限なる造化の樞機に參する能はざるなり、如斯善美を盡せる海若の馳走振りも、一度思ひを山岳に馳すれば、又甚だ多と爲す能はざるなり、今宵、醫王の山塊を觀、遊意頻に動きて止まる處を知らず。



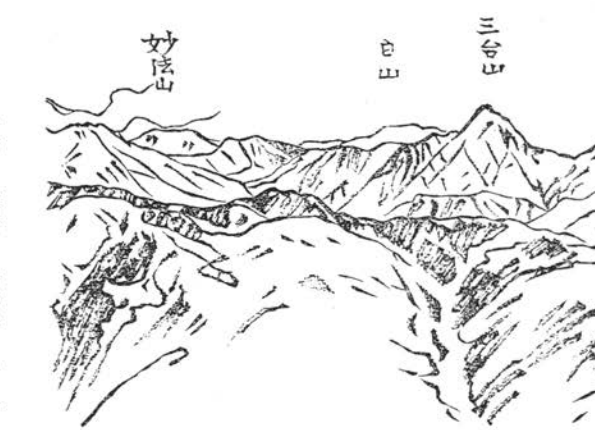
山中鷲ヶ峰の絶頂（石崎光瑶氏撮影）

醫王山は、加賀越中に跨り、山甚だ高きに非らざるも、又一方の盟主たらずんばあらず、標高を云はんか、僅に海拔三、一二三尺に過ぎず、されど嘗て、富士、淺間、妙高、白山、立山、白馬、等を一氣に踏破せし畏友より、眞に脚力を計るには、醫王こそ、絶好の試金石ならめとの言をも聞きぬ、珍奇なる植物、蝶類に豐富なりと云ひし博物家にも接しぬ、絶頂は嵐烈しくして草木枯瘁せりとの里人の言をも聞けり、此山に一萬尺の峰頭に於ける如き行樂は、元より望まる可くもあらざれども、槍舞臺の開かるゝを待つ間のわざとして、一遊を試み、久方振りにて、蹇める長脛を、踏み伸すも快なり、初夏の植物を愛づるも面白く、殘雪多き山頂に高寒と鬪ひて一夜の露營を試むるも、又無益の事にも非らざればとて、井村芳園、廣岡悅三の兩君と、議一決し快晴を見定めて、登攀せん事を約しぬ。

五月五日昧爽起床、六時輕裝して家を出づ、醫王山の登路數條あり、加賀金澤よりするもの、越中二俣（フタマタ）村よりするもの、

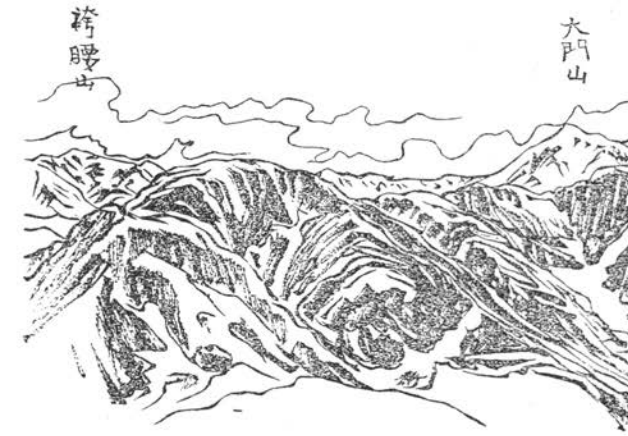


同東南面伊東谷よりするもの、及東面祖谷（ソダニ）よりするもの等是なり、而して祖谷方面より登攀するものを最も險路と稱せらる、余等同人、豈平凡易々たる路を選びて、山神が好意を辭するの愚を爲さんや、即ち小院瀨見往來に出で、祖谷を指して啓行す、麥浪青を漲らし、菜花處々に黃金の錦を織り、農夫、白馬を驅つて、忙はし氣に彼方此方に行き交ひ、或は淙々として流るゝ、小川の水の、耕田に漑へて、醫王の雄姿を倒寫せるなど、宛として繪の如き中を行き、巴塚の孤松を過ぎては、傑女が末路に思ひを馳す、小坂村に至りて、右折、祖谷村に入る、時に午前七時、村役場に至り、村長渡邊敏太郎氏に、好箇の案內者を紹介されん事を乞ひ、休憩す、氏百方人を派して聞合さるゝも、恰も農家の植付期に際し、擧げて野に在り、應ずる者なし、終に、同氏の厚意によりて、同所の小使を貸與さるる事を得、森田八郎平と稱し、齡五十路を過ぎ、醫王には精通せりとの、屈强の爺なり、聽て深く厚情を謝して、祖谷を出でゝ、山路に入る、疎々たる松林の間、ツボスミレ、マルバスミレ、スミレ、イワカヾミ、フデリンダウ、等咲き匂へり、二十町計も登り來れりと思ふ頃、右方展望稍々開け、眼下に南礪の水田を望み、遠く能登半島、及河北潟の一部を認む、更に急ぎ登攀す、路傍鮮紫多肉の大花を着けたるスミレサイシンを見つゝ、歩を進むれば、前山の分水嶺に達し、袴越、人形山等の山脈眼前に現はれ、殘雪斑々藍色を帶びたる山色、頗る賞す可し、足を停めて遲れたる人夫を待つ、附近殘雪融解して流るゝ處の兩側、純白淡紫の菊咲一輪草打交りて美し、不圖雜木林の間に、淡紅色の一花を認む、是イワウチワの咲けるもの、欣喜是を採す、イワウチワの高潔豐麗なるは、豫て知りつゝも、夏季高山登攀の頃は、每時、花の凋落後に際し、未だ其芳唇に接せざりしもの、今初めて是を見、喜悅禁ずる能はず、イワカヾミの濃艶野卑の色なく、コバノイワカヾミの矮縮の態無く、光澤ある常綠の葉を布きて、豐麗にして淸楚なる一花を、擡げたる風姿、嬌乎として、何をか談らんとするものゝ如し。分水嶺を越し



て谷に下り行く、下るに隨ひ坂路俄に急峻となる、階子坂の嶮是なり、前方の山稜に鳶ヶ峰の一角を望み、脚下淙々たる、溪流の巖に咽ぶを聽く、急坂下り盡くせば、二筋の溪流、左方の谷より來り會す、ャショ谷、ダオ谷等より發するものなり、渴を醫す可く、清烈珠の如き谷水を掬せんとするに、雪の如き純白のサンカエフの花瓣展轉散り落ちて、流るゝ水に浮み行く、溪流を徒渉して、急蛭の半腹を足踏みゞて通過すれば、今渉りし溪流の忽ち數丈の斷蛭となりて美しき飛瀑となり、層々三段をつくり、深碧の淵に注ぐを脚下に見る、サンヂャガ瀧と稱す、山麓の人々此處を以て、醫王山中嶮處の中に指を屈し、喋々誇大の言を吐くもの、所謂是池中の小蛙蒼海の大を知らざるの類ひ、今是を通過するに、決して安穩とは云ひ難くも、岩質硬剛優に足趾の據處を得、敢て危嶮を感せざるなり、余等は瀧の姿をカメラに收めたきを以て、人夫を殘し置き、草莖に縋り此急崖を下りて、三脚を組立て瀑布を撮影し、元の處に攀ぢ歸りて、更に前程を急ぐ、行く事少許にして、一條の細徑、矮樹繁茂せる間を潛りて峰に向ふを看る、新らしき木標あり、墨痕鮮明方角を示す、誰が惡戯にや、拔かれて地上に臥せり、余等起して、固く樹てゝ去る、程なく路二ッに岐る、一は即ち溪流に沿ひて、醫王山村二俣に出づるもの、一は山路を登りて、大池平に至るものなり、余等は大池を指して登り、程無く池邊に出づ、忽ち看る、山中幽寂の境に優遊せる數十羽の群鴨、驚き起ちて、一齊に水面に無數の波紋を殘して、羽音勇ましく飛び去るを。

大池の中央、巨石、嶋嶼の如くに横はる、池中、萍繁茂し落葉是に堆積し、蘆荻其上に密生し頑牢なる組織を作して水面に浮び、是に乘りて、歩めば宛然筏の如く、又船橋を渡るが如く、歩武に隨つて浮動す、如斯もの殆んど、池の半面を掩ふ、一奇觀と謂ふ可し、處々に窓を穿つ、覗ふに此混成筏の、厚味二尺餘に及べり、試みに棒を入れて水深を探るに、數十尋の底をなすものゝ如し、某年某校の學生、携ふる所の杖刀を以て、戯れに處々の根莖を裁斷し置き、後人の是を知ら



ずして、誤つて水中に陷りしを見、快哉を叫びたりとかや、淺猿しき心術にこそ、余等初めは、此筏を歩むに、底氣味惡かりしも、漸く其組織の狀態を熟知して、終には縱横に濶歩す、外面宛然沮洳の池の如く、ミツカシワなど夥しく生せるが、未だ花蕾固くして、僅に一二、白鬚草に似たる花瓣を露はせるのみ。

一行中央の巖上に座を占めて、午餐を吃し休憩す、時に午前十一時三十分なり、岩上約十人を座せしむ可し、池塘綠樹の影、水に沈み、微風戰々池面を撫づれば、銀漣水底の山影を搖かす、頗る畫趣あり茲に一枚撮影す、鳶ヶ峯の奇峯は、池の東方に聳峙し直立水面を距る四百六十尺（實測）傲然として、大池を下瞰す、腰間、キンカイバ、ヤマコブシの白花點々皓玉を鏤めたるが如し、昔は此巉岩の間に猛鷲巢を營みし由なれども、今はさる氣配だも見えず、池と峰との全景を撮影せんと、彼方此方と位置を更ゆるも、布置放大に過ぎて、印畫として面白からず、廣角のレンスを携へ來らざりしを悔ゆれども詮方なし、不滿ながらに一枚撮影す。塘邊一個の石像の傍らに、白堊の標札を建つ、四高學生の嘗て登山して設置したるもの下の如く記す。

大　池　（高二千〇五尺）

一鳶ヶ峰（二千四百六十五尺）へは左方の絶壁を攀づべし

一此附近の動植物

草木　ミツガシワ（藥草）ミヅオトギリ、ヌマハリヰ（以上池中）モウセンゴケ（瀧畔）タウキ（藥草）ダイモンジサウ、スヾタケ、ヒメシヤガ、ツル子コノメサウ、サンカエウ、オホバユキザヽ、イワカヾミ、サワオクルマ、カニカウモリ。

樹木　ブナ、マンサク、ソヨゴ、クロソヨゴ、ヒメモチ、ナンキンナ、カマド、クロウメモドキ、モミヂ、ミ子カヘデ。

動物　ハコネサンセウウヲ（瀧壺附近）。

一群峰の位置は余の憶測に出でたるもの、更に先ち鷲諸賢の斷定を仰ぐなり、正確なる測定は甚だ難し、一人稱すべき人形山の腰板恰も小肩に似たり、其狀如く高峰の二十萬分の一の圖に記し置く。

一里程二俣へ　一里二十八丁
福光へ　凡三里（險路）
鳶ヶ峰を經て絶頂へ　三十二丁
絶頂より金澤へ　四里四丁

明治四十一年六月　第四高等學校　北辰會遠足部

如此注意は大に一般登山者に趣味を惹起せしむるもの、誠に欣慕す可き舉にして、我等山岳同人の賛同の聲を惜まざるところ、書き振りより察するに岐路幾多の道標も、憶ふに同校の手際なる可し、謝す可き哉。

池を辭して、元と來し路を下り行くに、先には前路に氣を取られ、氣付かざりしに、今溪流の方を見下すに、美しき瀧一條、白練の如く樹間に隱見す、撮影せばやと下り近づく、長さ約六七間、青楓の葉を透して粼粼白沫を噴いて綠樹を濕ほす樣、箕面瀧に似て小さし、優しの瀧よと一枚撮影す、此澗邊サンセウヲの棲息せる由を聞きしかば、探り求めしも見當らず、エンレイ草の盛に開花せるを見る、戻りて、鳶ヶ峰に至る可く左方の細徑を攀づ、傾斜甚だ急にして、前者の踵は後者の額に接す、雜木路を塞ぎ、犇々と面を撲つ、既にして、鳶ヶ峰の頂上に出づ、頂上、猊驥の巨巖虛空に突出し一木一草無く、心膽をして寒からしむ、巖上より大池を下瞰せば、一個明鏡の如く脚下にあり、巖片を剝ぎて、池に向つて投ずるに、何處に落ち行くにや、唯微に、轉々憂々の聲を耳にするのみ、巖頭の撮影などして暫し時を費す。

遽然、白雲頻に東に馳する蒼穹に、一點の鳥影あり、飛翔の態度、尋常のものにあらず、倏爽にして漸々近づき來るを看れば、翼裏白斑を有せる一個の大鷲にして、悠々として高く余等の頭上を、三度、廣く環を畫きて、南方の峰を越えて飛び去りぬ、是より更に頂上に向つて進めば、蟻の戸渡りとも稱す可き嶮處あり、右方は山皮剝落赤裸々として、爛砂瓦礫を露はし直ちに大池に接す、若し一歩を

失して右方に墜落せんか、一片の肉餅と化するの外途無きなり、相警戒して過ぐ、此難所を越ゆれば、幾十株の老松地に俯し、風景一變して、庭園を徜徉するが如し、此處にも立標あり、登り來りし方を指して、曰く「鳶ヶ峯(下方の危岩)を經て絶壁を下らば大池二俣(又は戸室)に至る」、是より路は雜樹彌が上に生ひ茂れる密林の中を縫ひて進む、雜木、路の差別なく槎枒として、諸枝相拗樛し、細枝犇々と面に當り不快極まりなし、一上一下幾度か屈折して、遂に今夜の露宿地と定めたる、絶頂白禿に達す、頂上は平坦にして、中央に小かなる石祠あり、傍に例に依つて四高の設置せる標札有り下の如く記す。

醫王山絶頂白禿(三千百二十三尺)

一此絶頂ヨリ見得ベキ主ナル山岳

南　奥醫王山(順王山)、倉ヶ嶽、白山、三方山、奥三方山、千丈平山、高三郎山、見越山、大門山、赤摩不古山、三輪山、舉原山、東南袴腰山　東　立山連峯　北　寶達山

一里程鳶ヶ峰ヘ二十六丁　大池ヲ經テ二俣ヘ二里二十四丁　戸室ヲ經テ金澤香林坊ヘ四里四丁　奥醫王山(順王山)ヘ峰傳約一里(以下畧す)

斜陽已に西に在り、當に日本海に其姿を沒せんとす、井村、廣岡の兩君は、露宿地の撰擇、燃料の拾集等に奔走され、余は日沒間際なれども、明日の天候を慮りて、直ちに頂上にて四圍の山脈を寫生す、立山方面は、春霞靉靆として棚引き、望むを得ざるも、白山方面の展望、眼を驚かすものあり、近く順王山三臺山の頭を隔てゝ、戴雪猶深さに雪崩の痕跡縱横に印したる、大門山奈良嶽三方山大原山笠山鉢頭山の諸峰、何れ劣らじと連りたる光景は、樞鳥威(カシドドシ)澤潟威(オドシシオモメカオドシ)なんどの大鎧に身を固めたる猛り夫の、轡を並べて、英將の命を待つものゝ如く、目覺しとも目覺しく、其奥に連りて、三方崩嶽妙法山は是等群岳を拔き、白金物打ちたる、紫裾濃(スソゴ)の具足を着け、折からの落日の逆光線を半面に受け、金甲燦として、虚空に輝ける姿は、崇高雄偉、言語に絶ゆ、唯憾む、當面の盟主白山の、雲か霞か模糊として遮ぎり、朧に見ゆれども、確と寫生帖に輪廓を印するに至らざるを、既にして日當に半面を海に浸して、光力次第に微弱となるに及びて、筆を收めて、日本海を眺むれば、日全く沈みて餘光猶天空に放射し、手取川犀川淺野川等、淡く幾條の銀絲を引きたらんが如し。

露宿地は何處と見廻はせば、頂上を東に下る約二十間計の處に、焚火は炎々として燃えつゝあり、至れば燃料は山の如くに積み上げられ立樹を其儘の柱として、山椿の茂れるを伐り集めて墻壁を作り、以て颯々たる曉風の寒きを防ぐに備えられたり、圍座して晩餐を濟す、時に八時なり、携帶品の整理等して寢に就く、空澄みたらんには月明き夜なれども、陰雲深く月を隱し、月夜の美觀は失望に歸す、夜半屢々疎雨蕭々面に落ち、夢圓らかならず、時計を見れば一時を指す、偶々雲

稍々薄らぎ、妖雲斷續、月を呑吐し樹稍に滴る雫露を照らして、凄寥なる中に、美しさ譬へん樣無し、雨降り來りては、焚火の消滅せんを慮り、交る〳〵起きて、火勢を旺んならしむ、傳聞、舒明天皇の御宇、役の小角創めて此山を開き、爾來佛閣嚴然として甍を連ね、經藏建ち並びて、莊嚴なる靈域なりきと、今は荒廢して跡方も止めず、茫々たる叢中に、僅に礎石の埋もれたるを見るのみ、風聲水音、今も當代梵鐘の響き、振鈴の聲かと怪しまる。

朝三時、拂曉の光景を賞せんと、余獨草鞋引しめ頂上に出づ、冷風身に沁み耳朶に疼痛を覺ゆ、金石の海上無數の漁火瞬けり、趣は異れども、座ろに張繼が楓橋夜泊の詩を吟ぜずんばあらず、東空稍々白みて立山の輪廓を現出す、四時に至りて、日出でしも上層の雲の隔つる處となりて、日色薄く朝暾の美觀を失ひしも、溫和なる光線の爲、却つて立山連脈は峰峰の小變迄も明瞭に望み見るを得たり、一得一失の免れ難きは世上の常態なりけり今や四界皆夢より覺め展望亦洩らす處無し、北方、能登の寶達山低く淡霜模糊の中に現はれ、射水の二上山等烟波の如く皆是に冊づき、雲山の盡くる處、遠く岬を望む、南の方は昨日寫せし白山方面の連脈、今朝は拭へるが如し、四時三十分、鶴裳素冠の白山は、雲を掃つて初めて我雙眸に入る、稜々たる幾重の群雄の後に、悠揚迫らず、溫然玉の如き風貌を現はせる樣、雄々しくも又床しゝ、急遽大聲にて、友を喚びて共に觀賞して寫生す、幾程も無く、白山のみは雲の蔽ふ處となり、再び姿を現はさず、是白山の神靈、余等が衷情を汲み、寸時の對面を許せるものか、絕頂より三四丁西面に下りて、山コブシの咲き誇れるを前景として順王山の右肩より、遠く人形山を望めるを一枚撮影して露宿地に歸る。

午前七時三十分、順王山に向ふ可く白禿を發す、是より路全く消え、案内も是よりは入りたる事無しと述ぶ、榛莽狼籍たる中を突貫す、漸く分け入るに隨ひ、寸尺の空隙も無く堆雪の爲打重なりて偃蹇し鋭枝槎枒として身長を沒し、鐵の如き剛蔓是を結びて、頸に掛り胸を壓し行進遲々として捗取らず、辛うじて一山を越ゆれば、更に一山現はれて前進を遮るさま、心憎き事云はん方無し、雪崩の過ぎし後とて、萬枝悉く谷に向ひて、打重なりて倒れ臥せば、下らんとするや、雙手に確と上部の枝を握り、下方の亂枝に雙脚を支へ辛うじて降り行く、右せんとするも左せんとするも、中々に力及ばず、宛然急潮に漕ぎ入りし扁舟の、力なく押し流さるゝにも似たり、登らんとすれば、鹿柴の如くに身を苦しめ、瘦枝眼を衝き顏に當り、面を向けん樣も無し、斯る苦しみは熊笹等の中を分け行く如き快なるものに非らず、互に大聲相呼應し、聯絡を保ちつゝ、掻き分け踏み摧き、峰を越ゆる事四度、過ぐる處悉く雜木林の一色のみ、亂枝の虐待に雙手殆んど完膚無し、金縷梅山椿等咲き交り、山櫻の花瓣片々と散りて戎衣の袖に落つるも、詩情を動かすの餘悠無し、聽て小さき池のほとりに出で是より處々殘雪を渡りて、着々として進み十一時三十分漸く絕頂に達す、此處は「四高」の立標も無く、陸軍三角

標のみ白く晒されたるが山頂を獨占す、白禿より峰傳ひ一里とは果して「四高」の實驗に出でたるものにや如何に、聊か疑ひ無き能はず、三角標上に座して午餐を喫す、四圍の展望白禿の比に非ず、數分前の惡戰苦鬪の狀頓に消え、拍手快哉を連呼す、昨夜の春雨、今朝よりの鋭き陽光の爲、白雲蒸々、山腰に起り、セコンドの數經る毎に次第に擴がり、恐ろしき積雲となりて山を掩ふ、眺望も盡したれば紀念の撮影して零時三十分山頂を辭す。

先に陰欝なる壓迫に苦しめられしに懲りて、林中の突貫を避け、東南に面して長き殘雪の谷に向ひて連れるを發見し、急下すれば村落に出づる確信を持し案内に議するに、異議を唱へざるに依り進路を雪谿に取る、雪谿頗る長し、先に行進を障害され欝々の情、茲に散じ一行悠々として進む、忽ち傾斜急となり、衆交る〳〵轉倒する事一再ならず、先に遲々たる行進に、心腐らしたる吾れ、此處に至りて一瀉直ちに下方に快走せんと欲し、「年ころ鍛えし雪谿下りの早業見參に入れ申さんず」と意氣揚々杖を舵として雪上を滑るアルプス連嶺の大雪谿を想起して快限りなし、約二十間許降りし時、力杖ポッキと計り折れて用を爲さず、速力急に度を增し快走飛鳥の如し、止めんとするも止まらばこそ矢の如くに遙に飛ぶ、今にも欠陷に打入り巖に骨を挫かれんかと、今は早や事了れりと思へる中に、韓と計り谿の一角に身を打付けられ、痛さに眼も眩めきぬ、遙の上方には二君余の有樣を打睹り給へるに、弱味を見せじと跳ね起きて聲高らかに「如何に方々天晴なる早業には候はずや」と呼はれば答は無くて、拍手の音のみ谷間に響きぬ、後にて事の次第を打明くるに及びて哄笑の種となりぬ、打當りし處幸にして比較的脆弱なる礫土なりしを以て事なく濟みしも、若し稜々たる岩角なりせば由々敷大事を釀すに至りしや必せり、輕舉暴動は深く慎む可きなり、兩君の下り來るを待ちて再び雪上を歩す、此邊より傾斜緩漫となり、滑り轉ぶ慮ひ無し、雪谿漸く盡きんとして溪流露はる、雪谿の兩崖、植物多し、山延胡索(ヤマエンゴサク)纖憐縷の如き莖に藤色の花を着け山荷葉(サンカエウ)エンレイ草等夥しく咲き並べり、茲に採集しつゝ人夫の來るを待つ、待つ事多時來る可き樣なし、萬一誤つて不測の災を招きしに非らずや等案ずる折柄下り來りぬ、暫時休憩の後共に進む、雪谿に慣れざる人夫は前途を懼れて、山上を進まん事を主張し、路も無き山腹に攀ぢんとす、我は溪流傳ひの壯快なるを說きて暫しが程は爭ひしが、遂に人夫の言を納れて左方の山腹を攀づ、行く事少許にして、左より來る細流を越して進む、枯芒の倒れ臥せる山腹を歩む事とて、屢々足を辷らして、尻餅の滑稽を演ず、行く事多時一個の炭燒小屋有り細徑是より縷の如く、草間に隱見す人夫は蘇生りたる樣に歡喜の色面に溢る、再び細き溪流を涉る此附近一帶に畸形なる座禪草の累々として咲けるあり芳園君採り歸りて園地に移植せんとて根を堀りかけしに、異臭鼻を衝くに興醒めて、其儘に打捨てぬ、澗邊、叡山酸漿(エーザンカガベミ)淡き底紅の柔ら氣なる花を開ける樣、泰西名畫の天使の顏にも似て、優しき中に高潔なる品位を保てり傍にコチャルメルサウの、花色を怩ぢ

て叢中に隱るゝを見る、是より幾重の疊々たる山腰を迂餘曲折細徑を辿りて次第に歩を進め、程なく山麓に出で、路傍に咲ける石蕨の一莖十數輪を着けたる美しさに、摘み採りなどして三時半赤坂に出づ、此時天曇り電光閃めき驟雨、沛然として至る。仰ぎ見れば醫王の山頂密雲濛々として。隱れて見えず。一行天候の幸運に浴せしを喜ぶ。次いで才川村に出で會員谷村外次郎君を訪ひ嚮應を受け黄昏家に歸りぬ。

醫王山紀游

岐山木蘇牧

卅三盤

長向卅三曲。秋風吹客衣。亂山初日上寒樹宿禽飛。厨石（名巖）懸將墜。鎌溪曉不晞。險艱從此始。仄徑入天微。

梯坂

一峰逐一峰。復此梯頭倚。欲下幾躊躇。神慢憶遺體。俯臨千丈澗。雲深不見底。

黑巖

黑巖徑路絶。苔滑濕不乾。而無葛可挽。利石下攢攢。非有飛鳥翼。行人横度難。到此悔濟勝。舍杖空長歎。

鳶巖

巖巒陡然住。來自醫王山。微徑若懸瀑。而懸藤蘿扳。兩袖風張翼。吹上蒼莽驚。石骨作龜坼、靈醜桴炭然。崖腹劃崩豁。何年霹靂穿。孤稜竦厥石。似昂大嘴鳶。短松倚厥罅。如鮫蛇結盤。膝行心目警。吾足二分懸。險於部盧檜。墜有千丈患。驟首盼醫王。巍峨排青天。去去攀瑤草。庶俾壽埒籛。

醫王山

巨靈劈連山。北嶽分作兩（白山）秀出星昇間。玆山亦雄長。我來高持大夏笻。手捫列宿凌昊穹。諸巒束體盡臣庶。嫖巒撲亞青濛濛。惟辨金城萬維樹如蓁。犀麻（二水名）不盡還朗宗。提封百萬作雄鎭。高德偉略斜陽中。肘後五嶽圖。眼底滄桑變。日月無停丸。閱世苦郵傳。忽値采樵者。問我人間何事好。云是這裏棲群仙。胡不相期拾瑤草。浩歌置酒縹緲巒。立山白嶽指掌間。駱駝鸞鵠自茲始。烏乎俟婚嫁畢當何年。

大池

黄茅白葦秋四塞。劣有荒蹊屆池側。神龍寂寞疑有無。敗葉沈淵淚波黑。鳶巖千雪若玉蓁。下無根塿水府涵。褰裳試上石床坐。澹澹斜照收凝嵐。凄寒襲人不可駐。萬山深處孤蹤懼。

奥險清削、雄奇荒幻、無所不備、山川詩人兩相觸發、宜其有境心搜也、

三壺軒主批

日本河川志（二）

高頭式編纂

前號に漏れたること、及び其の後思ひつきたることを揭ぐ。

一、本書編纂の目的は、日本水系志の稿本を製作するにあり、即ち日本全國の河川、瀑布、湖沼を、出來得る限り迅速に網羅考證し、日本水系志と改め、然る後新材料に據りて、徐々增補訂正せんとす、其の速成を欲するが故に、誤謬特に多かるべし、大方の御叱正を仰ぐ。

一、我邦の地圖には、陸地測量部の二萬、五萬、十萬、二十萬分一圖あり、地質調査所の二十萬、四十萬分一圖あり、其他各書肆より發賣さるゝ、五十萬以下の眞地圖ありと雖ども、其の說明書とも見るべき、地理書に至りては、實に疎雜杜撰にして、彼の有名なる（大日本地名辭書）の如きも、山岳河川等の解說は、百萬分一圖の說明位と見て可なり、此等の書を基礎として、編輯する余が河川志なれば、二十萬以上の地圖を參考するの必要なし、且つ二萬、五萬の地圖は、未刊の分極めて多く、發刊の全部を取揃ふことも、容易にあらざれば、日本水系志稿本完成までは、主として二十萬分一圖を根據とせり、但し山岳の標高は、努めて正確なる詳圖に採るべし。

一、引用書の頁數は、各川の末尾に明記したれば、特殊の場合の外は、引用ごとに之を記せず、故に其の頁數を知らむと欲せば、各幹流の末尾を見るべし。

一、僅かに（六十五大川流域誌）に得たる、支川、派川の名に、黑點、批點を加へざるものは、其の所在不明のものと知るべし、前號七九頁に記したれば、以下解說を略す。

一、町村名は悉く丸善編輯の（市町村一覽）に據り、其の參考地圖として、嵩山堂の（日本大地誌）を採れり、是れ根本材料なる（日本地誌提要）の如き、町村合併以前の刊行にて、其の町村名は、一々現今の合併新町村名に改めざるべからざればなり、故に各川ごとに兩書を記載する筈なれども、煩を厭ひて之を略せり、中村鐘美堂の（市町村一覽）に據らざるは、取扱上不便なるのみ、他意あるにあらず。

園瀨川系

備考（大日本地名辭書）一二一五頁、此川を勝浦川（カツラ）の支流に作る、（大日本地誌）三五頁にも、同樣の記事あり、今ま（德島縣統計書）、及び（帝國地名大辭典）に據りて、暫く幹流となし、津田川を其の下流とせり、後考を待つ。

別稱　八萬川（ハチマン）、下流　津田川。

（帝國地名大辭典）河渠一一四頁に據る、同書一三二頁、津田川の條に曰く「德島縣名東郡に在り、別宮川の分派にして、源は德島市下助任村より分れ、西流東折して、德島市を貫き、海に入る、又、本川に富田橋、德島橋、福島橋等を架せり」、（大日本地誌）五六一頁「吉野川の一派、津田川の水は、西南より來りて、市の中央を數派に別れて貫流し、更に相合して一流となり、津田浦に至りて海に注ぐ」とあれども、津田川は、江灣の海に通づる、切れ目の名にして、福島川に架しとありて、津田川の名なし。故に取らず。

流域　阿波國名東郡（ミヤウトウ）（ナノヒガシ）。

諸書に據る。

發源　阿波國名東郡大影山の西北方佐那河内村。
（（帝國地名大辭典））、（（大日本地名辭書））一二一五頁、「輯製廿劍山圖幅」、「四十地形西部」參取。

流末　阿波國名東郡齋津村に至りて、津田川となり、大字津田浦にて、紀伊水道に注ぐ。
（（德島縣統計書））、（（帝國地名大辭典））參取。

河線　四里二十四町。
（（德島縣統計書））に據る、（（大日本地名辭書））一二一五頁、長さ五里に作る。

効用　(1)、河口の三角洲よく發達す、(2)、此川は水清らかにして、河畔晒木綿を業とするもの多し。
(1)、（（大日本地誌））一四六頁、(2)、（（帝國地名大辭典））一一四頁に據る。

土木工費と浸水面積　德島縣の調査に據れば、明治四十年度に於ける、園瀬川の土木工費は、一千百三十二圓餘に上り、同年度の浸水面積は、大字四ヶ村に亘り、被害反別二百二十八町歩、堤防の毀損、十四ヶ所、百九十九間、其の損失價額は、八百五拾圓なり。
（（德島縣統計書））四十年一六五、一七三、一六五頁に據る。

●園瀬川幹流　一に八萬川に作る、八萬郷を經由するを以て、此稱あるに似たり、其の流域は、阿波國名東郡の東南部にして、佐那河内村外二ヶ村に亙る、源を佐那河内村に屬する大影山（勝浦郡に跨がり、標高凡そ二千三百尺、閃綠岩より成る）に發し、東北流し、上八萬村大字上八萬（標高百六尺）に至りて、東に轉じ、眉山（德島市の西南方にありて、名東、板野二郡を界す、標高九百八尺、結晶片岩より成る）の南足を流れ、八萬村大字下八萬（勝浦郡勝占村大字論田浦の對岸）にて勝浦川に合し、更に分れて津田川といひ、齋津村大字津田浦に至りて紀伊水道に注ぐ、河線四里二十四町、同川に架せる法華橋は、木製にして、長さ十八間三、幅二間一あり。
（（德島縣統計書））三十五年二八頁、四十年一五五頁、（（帝國地名大辭典））一一四頁、（（大日本地名辭書））一二一五頁、「廿地形德島圖」、「輯製廿德島、劍山圖幅」、「四十地形西部」、「四十地質西部」參取。

勝浦川系

別稱　桂川、上流　福原川。
（（帝國地名大辭典））に據る

流域　阿波國勝浦郡。（カツウラ）

諸書に據る。

支川　立川、八多川、多々羅川、藤川、阪本谷、傍示川、

分川　大松川、

（德島縣統計書）四十年一六〇頁、（日本地誌提要）、（帝國地名大辭典）に據る。

發源　二源あり、(1)、阿波國勝浦郡高鉾村大字傍示字瀨津村殿河内山（トノカフチ）、(2)、同郡福原村字八重地（ヤヘヂ）。

（日本地誌提要）に據る、（德島縣統計書）、（大日本地名辭書）の二書福原村に作る、（帝國地名大辭典）一源を高鉾村大字傍示、雲草山に作る、（大日本地誌）「源を郡の西境なる旭丸山に發し」に作る、式按ずるに旭丸山は、雲草山の誤認ならむ、「輯製廿劍山圖幅」「四十地形西部」の二圖俱に勝浦郡の西境に雲草山ありて、名西、那賀（ナカ）の二郡に跨がれり、旭丸山は雲草山の西微南に位し、名西、那賀、麻植（チエ）三郡の界に在りて、勝浦郡に關係せず。

流末　阿波國勝浦郡勝占（カツウラ）村大字鶴岡（ツルタカ）新田に至りて、紀伊水道に注ぐ。

（日本地誌提要）、（帝國地名大辭典）に據る、（大日本地名辭書）一二三四頁、「勝浦村に到り海に入る」は、勝占村の誤認。

河線　十二里十七町。

（德島縣統計書）、（日本名勝地誌）に據る、（日本地誌提要）、（帝國地名大辭典）長さ凡そ十五里、濶四十間に作る、（大日本地名辭書）一二三四頁、「長凡十五里」に作り、同一二三一頁、「一郡全く一山谷に倚る、即勝浦川の流域なり、長徑八里、横幅二里、三里の間に出入すと雖、勝浦川は屈曲するを以て、長十里に上る、山海嶺澗所々に勝景あり」に作る、（大日本地誌）「全長凡そ二十八粁（約七里）とす」に作る。

航路　棚野村大字三溪（ミタニ）字横瀨（ヨコセ）（横瀨津ともいふ）より以下舸舟を通ずる六里餘。

（大日本地名辭書）一二三三、一二三四頁、（大日本地誌）五七七頁に據る。

効用　(1)、魚獲年額貳千圓に上る、(2)、河口の三角洲よく發達す。

(1)、（大日本地名辭書）一二〇四頁、(2)、（大日本地誌）第七卷一四六頁、「津田川、勝浦川の作れる新地と相接せり、此二河も亦下流に至りて、複雜なる分岐をなし、水量は吉野川に及ばざれども、三角洲の發達は、甚しき徑庭を見ず」に據る。

土木工費と浸水面積　德島縣の調査によれば、明治四十年度に於ける、勝浦川幹支八條の土木工費は、五千四百十一圓餘に上り、同年度の浸水面積は、大字十三村に亙りて、一萬五百一町歩、堤防の決潰一ヶ所、十六間にして、其の損失價格、三百六十圓、毀損、六十九ヶ所、一千三百四十一間にして、其の損失價格は、三千九十二圓なり。

（德島縣統計書）四十年一六五、一七四頁に據る、幹支八條を細別すれば、幹流、勝浦川、四、四四七、一七六、分川大松川、六二六、四六八、支川、八多川、一〇、六五一、多々羅川、一〇四、六〇七、藤川、六三、五〇〇、阪本谷、五九、六四〇、傍示川、五六、〇〇〇、小支川、金谷、四八、一〇五なり、同書大松川を派川に作る。

●勝浦川幹流

一に桂川に作る、其流域は、阿波國勝浦郡の全部にして、福原村外六ヶ村に亙る、地質學者の所謂勝浦盆地（或は勝浦盆窪地）是れなり、水源二あり、一は郡の西境なる福原村大字旭字八重地に發し、東北流して、福原川といひ。

箇考 「四十地形西部」に據れば、福原川は郡の南界に發し、西流して福原に至る、今まだ「輯製廿劍山圖幅」、（日本地誌提要）に據りて、之を取らず。

●●●

((日本地誌提要))、((帝國地名大辭典)) 四六、五九頁、「二十地形德島圖幅」、「輯製廿劍山圖幅」参取、((大日本地誌)) 小松島村大字前原にて二に分れ、更に合して一となりに作る。

其の對岸に於て、園部川と會し、更に分れて、名東郡界を東流し、大字鶴岡新田に至りて、紀伊水道に注ぐ、河線十二里十七町、濶四十間。

((日本地誌提要)) 第六冊阿波一六頁、((德島縣統計書)) 二七頁、((大日本地誌)) 第七卷三五頁、((日本名勝地誌)) 第八編二四八頁、((大日本地名辭書)) 一二三一、一二三四頁、((帝國地名大辭典)) 河渠五九頁、「二十地形德島圖幅」、「輯製二十德島、劍山圖幅」、「四十地形西部」参取。

那賀川系

別稱　長川、中川、上流　北川、南川。

((帝國地名大辭典)) に據る。

流域　幹流　阿波國海部郡、那賀郡。
支流

支川　桑野川、綱橋谷、前川、大戸谷、葛ヶ谷、請ヶ谷、赤松川、小谷川、中山川、加茂川、熊谷川、豐田川、南川、千本谷、船谷、久井谷、折宇谷、大谷、海川、蟬谷、出原谷、平谷川、古屋川、東川。

派川　岡川。

流域以下 ((六十五大川流域誌)) 九〇頁に據る。

發源　三源あり、(1)、阿波國海部郡奥木頭村大字北川村幸瀨山、(2)、同村大字折宇村勢河谷、(3)、同國那賀郡澤谷村大字岩倉村鎗戸山。

((日本地誌提要)) 一六頁に據る、((德島縣統計書))、((日本名勝地誌))、((帝國地名大辭典)) の三書、水源地を那賀郡澤谷村大字岩倉に作る、但し名勝地誌澤谷村は澤谷村の誤謬、((大日本地誌)) 三四、三五頁、「其上流二に分る、一は阿波、土佐の界にある日和田峠附近に發し、始めは東北流して劍山南側の諸流を合し、槇小屋山の北麓に出で、東方に轉じて彎曲甚だ多く、途に玉谷（玉谷の名不明なり、或は海部郡中木頭村大字平谷の誤植にあらざるか）に至る、他の一は劍山の東麓に發して、那賀郡の南部を東流するものなり、此の二流は各々約三十餘粁（凡そ八里）流れたる後、相合して那賀川の本流をなすものにして」云々に作る、((大日本地名辭書)) 一二三九頁、「水源二支あり、一は澤谷村大字岩倉、一は奥木頭村大字北川、並に劍山の南麓にあり、二澗東流七里、平谷の東に至り、相合ひ」に作る。

流末　阿波國那賀郡平島村大字中島浦と、富岡町大字辰巳新田との間に至りて、紀伊水道に注ぐ、或は富岡町大字豊益新田と、中島浦の間にして、辰巳新田は、其の三角洲中のものか。

（大日本地名辭書）一二三四頁、「輯製廿劍山圖幅」、「四十地形西部」參取、但し地名辭書、富岡町を村と記せるは、誤謬なり、（日本地誌提要）、（德島縣統計書）、（六十五大川流域誌）、（帝國地名大辭典）、（大日本地名辭書）一二三九頁、中島浦にて海に入るに作る、（大日本地誌）「富岡に至りて海に注ぐ」に作る。

河線　二十八里。

（德島縣統計書）、（日本名勝地誌）、（大日本地名辭書）一二三四頁に據る、同書一二三九頁、「長凡二十五里」に作る、（日本地誌提要）、（六十五大川流域誌）、（帝國地名大辭典）の三書、長さ二十八里十二町、濶三町二十間に作る、但し地名大辭典「濶さ三町三十間」は、三町二十間の誤謬ならむ、（大日本地誌）「川の長さ凡そ五十五粁（約十四里）に達す」に作る、短に過ぐるが如し、故に取らず同書五七七頁、「勝浦川の長さは十三四里」に作り、同じく五七八頁、「其長さ二十八里」に作る。

航路　延長十八里二十町。

（六十五大川流域誌）九〇頁に據る、（日本名勝地誌）、（大日本地誌）五七八頁、（帝國地名大辭典）の三書、下流十五里の間、舟楫を通ずに作る。

効用　(1)、那賀の一郡は、此川の水域を以て成る、(2)、漁獲年額五千圓に上る、(3)、河口には三角洲よく發達せり、(4)其兩岸は國内有名なる米作地なりといふ。

其の不便なる點を擧ぐれば、其の沿岸は概ね山巒重疊の地にして、平地を開けるは、僅かに加茂谷村大字楠根以下、末流少許の地に過ぎず。

(1)、（大日本地名辭書）一二三四頁、(2)、同書一二〇四頁、(3)、（大日本地誌）三五、一四七頁、(4)、（帝國地名大辭典）、不便の點、（大日本地誌）三五頁に據る、勝浦川の効用、參照すべし。

土木工費と浸水面積　德島縣の調査によれば、明治四十年度に於ける、那賀川幹支三條の土木工費は、二千七百九十六圓餘に上り、同年度の浸水面積は、大字五十六ヶ村に亙り、二千六百九十五町歩、堤防の決潰、十ヶ所、百五十二間にして、其の損失價格五百六十五圓、毀損、十三ヶ所、五十九間にして、其の損失價格百五十五圓なり。

（德島縣統計書）四十年一六〇、一六五、一七四頁に據る、幹支三條を細別すれば、幹流、那賀川、一、八〇八、九七九、派川、岡川、八六〇、〇五五、支川、桑野川、一二七、一九〇なり。

那賀川幹流

一に長川、又た中川に作る、德島縣第二の長流にして、吉野川と同じく縱谷を爲し、蜿蜒として那賀

郡を貫く、故に同全郡の地勢は、此の巨川に隨ふ、山谷廣大にして、平野は下流二三里の地あるのみ、其の流域は、阿波國那賀、海部の二郡にして、那賀郡澤谷村大字岩倉村外大字六十七ヶ村に亙る、水源三あり、一は海部郡奥木頭村大字北川村幸瀬山に發し、北川といひ、東南流し、一は同村大字折宇村勢河谷に發し、南川といひ、此の二川、大字西宇にて相會し、槇小屋山（郡の中央、稍や西部に位し、標高凡そ四千二百九十尺、秩父古生層より成る）の北麓に出で、東方に轉じ、彎曲すること甚だ多く、凡そ七里にして、那賀郡界に至る。

備考　（（六十五大川流域誌））八九頁、「一は那賀郡岩倉村に發し、南川と云ふ」とあるは、恐らくは誤謬ならん。

式曰く、以下三支川（（德島縣統計書））に據りて、左に錄す、同書は北川を以て、那賀川の一源となし、南川以下を支川とせるものゝ如し、然れども那賀川の發源地は、那賀郡澤谷村大字岩倉の外、記載せず。

◎南川　阿波國海部郡奥木頭村大字折宇に發源し、大字西宇に至りて、那賀川に入る、流程七里。

◎千本谷川　阿波國海部郡奥木頭村大字北川に發源し、同所にて那賀川に入る、流程三里。

◎大谷川　阿波國海部郡奥木頭村大字北川に發源し、同所にて那賀川に入る、流程三里。

雨霧瀑　阿波國海部郡奥木頭村大字折宇にあり、高さ十丈、幅八間、北川に入る。

（（日本地誌提要））一九頁に據る。

一は那賀郡澤谷村大字岩倉村鎗戸山に發し、東流し、亦た約七里にして、海部郡界なる宮濱村大字日眞に至りて、海部郡より來れる一水と合し、兩郡界を東流し、古屋川を右岸海部郡より容れ。

備考　鎗戸山の名は、（（日本地誌提要））、（（六十五大川流域誌））「（輯製廿劍山圖幅）」に據る、同圖を按ずるに、海部郡の西北端に位し、劍山の南方にあり、「四十地形西部」記名なし、（（帝國地名大辭典））鎗渡山に作り、（（日本名勝地誌））鑓渡山に作る、二書恐らくは非ならむ。

◎古屋川　阿波國海部郡中木頭村大字丈ヶ谷に發源し、北流し、大字大戸に至りて、那賀川に入る、流域大字四ヶ村にして、流程四里。

（（德島縣統計書））、「輯製廿劍山圖幅」、「四十地形西部」參取。

大釜瀑　阿波國那賀郡澤谷村大字澤谷にあり、高さ二丈、幅五間、新田瀑　同村にあり、高さ十丈、幅三間、千本瀑　同郡阪州木頭村大字木頭名にあり、高さ九丈、幅三間、基盤ヶ瀑　同郡宮濱村大字臼谷にあり、高さ六丈五尺、幅五尺餘なるも、懸崖ありて、二十仞、頂碁盤のごとくにして、數十人を座せしむるもの、淵に沈み、これに瀑布のかゝるを以て、碁盤が瀑の名あり、是は至るに爾ばかり嶮路ならず、老樂瀑（ラウラク）同郡加茂谷村大字水井にあり、高さ六丈五尺、幅一間四尺、午王瀑（ゴヲウノ）同村大字深瀬にあり、高さ九丈四尺、幅五尺、以上六瀑那賀川に入る。

（（日本地誌提要））一九頁に據る、碁盤ヶ瀑（（日本名勝地誌））二五六、二五七頁參取、（（帝國地名大辭典））瀑布二二頁、午王瀑の條、加茂村は加茂谷村の誤謬。

那賀郡に入り、古生層の山地を穿ちて、屈曲極めて繁く、遂に延野村大字鉢に至り、急に北東に折れ、鷲敷村大字和食町（或は大字土佐町？、標高二百一尺）を過ぎ、加茂谷村大字加茂に於て、再び東方に向ひ、大野村大字下大野より數

多の分流、或は分れ、或は合して、中に中野島村大字南島、岡、中原、柳島、横見等の三角洲を抱き、那東川を分ち、富岡町大字富岡町にて、右方より桑野川を入れ、仍ほ東に馳せ、富岡町と平島村との間に至りて、紀伊水道に注ぐ、河線二十八里、濶三町二十間。

備考 ((日本地誌提要)) 一六頁、「日眞柯に至り、二水相合し、雄村を經て北に折れ、水井村に至り、復東流し」とあれども、今ま((大日本地誌)) に據りて、之を取らず、((大日本地名辭書)) 一二三九頁、雄を雄島に作る、誤謬なり。

●那東川 (六十五大川流域誌、那奈川に作る) 阿波國那賀郡中野島村大字南島にて、幹流那賀川に分れ、東北流して西北に轉じ、阪野村大字常盤新田に至りて海に入る、流程凡そ二里。

((帝國地名大辭典))、「輯製廿劍山圖幅」參取、((日本地誌提要)) 一六、一七頁、其の南島より分派するを那東川と云、東北流、平島村大字苅屋に至り、海に入るに作る、((六十五大川流域誌)) 九〇頁、下大野村より分派し、苅屋にて海に入るに作る。

◎桑野川 阿波國那賀郡新野村大字荒田野の山中より發源し、東北に流れ、富岡町大字芥原に至りて、那賀川に入る、流域荒田野外大字二十ヶ村、流程六里二十四町。

((德島縣統計書))、((大日本地名辭書)) 一二三八頁、(同書長さ六里に作る)、「輯製廿劍山圖幅」參取。

((日本地誌提要)) 第六冊阿波一六、一七頁、((德島縣統計書)) 二七頁、((六十五大川流域誌)) 八九、九〇頁、((大日本地誌)) 第七卷三五、五七八頁、((日本名勝地誌)) 第八編二五六頁、((大日本地名辭書)) 一二三四、一二三九頁、((帝國地名大辭典)) 河渠一四九頁、「輯製二十德島圖幅」、「四十地形西部」參取。

雜　錄

登山の意義

我々は元來何しに山に登るのであらうか、等と云ふやかましい問題を論ずるのではない、たゞ登山と云ふ事の意味を少し考へて見たいので、勿論たゞ山に登ると云ふだけの話しだ、と云てしまへばそれきりですが、それだけでは何だか判然しないで、物足りない樣な氣がされるので、實は此一月の有志晩餐會の席上でも、この問題を持出して、二三の御說を伺つて大に面白く感じましたから、尙廣く諸君の御高敎を煩らはしたいと存じて、自分の考へだけを例に依て無駄言を幷べる事にいたしましたのです。

それにはまづ山と云ふものと、それの範圍とを定義をしなければ不完全なのではありますが、何分その問題は自身頗難解なもので、一寸云ひ切れませんからそこは常識的と云ふ語で御免を蒙る事にいたします、拔海何米突以上とか、傾斜何度以上とか云ふと、大分嚴密らしい樣ですが實にあんまりあてにならず、又最高點に最近人家の出外れからと云ふ樣な、事を云ふと如何にも實際的で、よささうに聞えませうが、事實にはあんまり合ひさうもないので、要するにその場合に相當した、適當な定義をと云ふ外はなからうかと思はれるのです。

それでこれだけの前置きをして、主題に入る事にしますと、ある山の範圍へ一歩でも踏ん込んだ以上は、その山に登つた、と云つても差支へはない樣にも思はれますが、それだけの事で登山と云つては何だか頗物足りないので、まづ箱根なら底倉か堂ヶ島あたりで引歸した、樣なもので山岳會員と云ふ點からでも、どうもそれを正しく登山とは云ひ切れない樣な氣がするのです。

で自分の第一案は登山と云ふ事には、たゞ登ると云ふ事の外に何等かの目的があつて、それを達したのを以て成効したるものと認める事にしたいと思ひます。その目的としては、それこそ十人十種でありませうから、或は博物の採集なり、或は神佛への參詣なり、又は單に頂上を極めると云ふ事とか、絕巓の日の出を賞したいとか、更にはたゞある感じを得るが爲だとか各自に異り又時と場合とに依ても變るべき性質のものでありませう、即高山植物の珍種を得やうと志して富士へ登つた人は、天候等の條件がよいとしても大抵失敗に終らねばなりますまい、まして古生層の岩石をとる目的で甲斐駒へでも甲州から昇降したなら、とても成効はあるまいと思はれます、人を見て法を說けと云ふ

教へではないが、應に山を見て目的を定めよと云ふべき次第になるのでありませう。ですからまるで不知案内の山になると、行て見ない内は適當な目的は定められず、從て目的如何によつては普通には少くとも二回引續て登つて、はじめて成効したと云ふ事が出來ると云ふ樣な事になりませう、それではあまり事が窮屈で面白くありませんから、そこで第二案としてはたゞ登山と云ふからには、なるべく總ての山岳に共通で、目的を達しうる樣な事を定めると云ふ事がよろしからうと思ひます、それには何が適當かと云ふ事が、實は最主眼なので最定めにくい點でありませう。こゝで一寸晩餐會の節の、御話しの二三を紹介いたしますと、柳田君はその山の神樣の御宮のある處即その山の頂上と、土地のものが見做す事が普通であるから、御宮に詣でる事を以て目的としたらばよからうと申されました、このお宮は兎に角少くとも奥の院をも含むのでなければならないでせう、それにしても山頂に別に神樣のない、白馬嶽と云ふ連中になると、この點は少々困る事でせう、然し大抵の山には夫々神樣が祭られてあらつしやるのですから、この御說で差支へはない樣なものでありますが、自分幷びに一味のものゝ内には必ずしも參拜の目的で登るのではなく、單に山に登る事を目的として行くので、その處へ行けば如何にも參拜はしませうが、どうもそれが主眼だとは正直には云へないと思はれます。

尙又辻本君は登山は頂上を極むべきであつて、即普通人間の登りうる最高處まで自己の體軀を運んで、登山の目的を達したとすべきものであると云はれました、即何々山脈の縱步と云ふ樣な場合には、出來うる限り高い處をよつて行くべきだと云ふ事になりませう、これは最高點と稱しうべきものが端なく直接に他の山に連つて居る例へば丹青山等には少々困りませうが、大抵な處では實際最よい定め方であらうと思はれますので、登山家連からなら異義の出樣もあるまいとは思ひますが、更に考へると、單に頂上をきはめたと云ふ事だけでは、隨分物足りない場合が多いだらうと思ひます、例へば雲霧の内を登つた際などは、身は實際に絕巔にあつたとしても、何が何やら分らずに要領を得ないで降つてしまつた後には、それで充分目的を達したとは思ひ得ないものでせう、勿論それで滿足される方もあるかも知れないが、大部分は左樣ではあるまいと思ひます、即不足がなく左程迄云はずとも少くとも相應に成効した、登山と云ふには多少その山の形とか、脈の工合とか云ふ事だけにでも、特質的な印象が殘るほどの事が滿足されなければなるまいと思ひます、成程夢にアルプに登つたからと云つて誇にはなりますまいが、圖や寫眞で充分その實況を想像し得た後の夢ならば、霧中の登山よりは印象の深いものがあるので、あへてまさるとまでは行かずとも同じ程度位の値はあるとしても霧と夢と音が似たと云ふしやれではなしに、大して不都合な事ではあるまいかと思ひます。

即まとめて云へば、その山の特質的な景色を充分に見得て

而して頂上を極めたら、それで登山の目的を達したと云ひうるものであらうと云ふ事になるのです。

然し以上の言は勿論大ざつぱに一つかみにした話しなので、特種な方面から見たら麓にあつても充分その山を研究し得たなら山に登らずとも登山した、と云ひうる樣な事になる人がある樣な事はありうるのでせう、それを一々、科學者は如何、文學者は如何、畫家は、哲學者はと、問題を分けて事細かに論ずる樣な日には、勿論自分の樣な青二才に出來る話しではなくなるでせうし、又この話しの主眼は何か種子をまいて、諸君の御高敎を仰いでこれの解決をつけたいと云ふ點にあるので、云はゞ隗よりはじめたと云た樣の次第なのですから、この最後の成案は頗漠然とした取とめのないものであるにも係らず、これで打切る事にいたします、實際この問題は一寸考へると、極下らない如何でもいゝ樣なもので、何も面倒な事を云はずとも登りさへすればよいではないかと云はれさうな事ではありますが、決して左樣ではないので、登山者と云ふ立場から見たら最初に胸に浮ぶべき事であらうと思ひます、然し今日明日に解決をせねば相成らぬと云ふ相な差迫つた事でもありますまいから、氣を長く考へて充分うまい案が出てほしいものだと、だらしなく引張りのばして申上る事にしましたので、實を云へば自分にも今少し立入つた考へもある樣にも思はれるのですが、何分うまくまとまりませんから、諸君の御高敎を種々伺つてから、再何か申上る機會もありませうから、その節までにまとめると云ふ手筈にいたしたいと存ずる次第でございます。

（梅澤親光）

山の名

山に限らず、一般に地名は、頗る曖昧な處が多い樣に思はれるのです、而してそれが山地に至つては人の氣が少ないだけに尙更甚だしい樣に思はれます。妙義の樣な開けた山ですら、種々な岩の名が案內者によつて、また見る方面によつて、いろ〳〵に變る事を思つたら、人跡の稀な山の名が區々なのはむしろ當然なのではありませうが、何分それでは不便でして、また氣持もよくないものでせう、例へばどちらにしても、分らないのにしても、惡澤嶽と云へば何だか判つた樣な氣もしますが、赤石山の側の高い山と云ふ樣に稱へたら、何だかさつぱり判らないものゝ樣に、すぐ思はれてしまうでせう、どうせ日本にはまだ全く信をおくに足る地圖は完成したものにはなし、地理書も然りと云た次第故、名も知れぬ處か、そんなものゝ有無さへも分つて居ない峰が、隨分に澤山あると云ふのは當然の事でして、白馬嶽と蓮華山とか、甲斐駒と白崩山とか云ふ樣な工合で『日本山岳志』中にある數千座の山の內には、隨分同じものの二つ三つに分けられてゐるのもあり得やうかと、思はれますと同時に、有數の高山で、名もなく記錄もない爲に、それに入らなかつたのも、多いであらうと思はれます、これは、旅行をなさつた方が、その通信を一行より二行なり、

會に御送りを下さると同時に、他人の紀行とか、又はある書物とかで見た事について、氣がつかれた樣な事、又は新に發見した事等を附記して送られると云ふ事にでもされたら、人數も多い事故、案外早く片が付きはしまいかと思はれます、而してこれを片付けると云ふ事は、山岳會の應になすべき使命で、一日も急ぐべき事であらうと思はれるのです、それで何と、何とは、異名同山だとか、同名異座だとか云ふ事の通信も、もとよりですが、新な即これまで名が一般に知られて居なかつた樣なものが最も欲しいので、それは例に依て方向と位置位では頗考へにくし、又云ひにくいであらうと思ひますので（紀行にしても、書きにくいでせう）之れには出來るだけ名を付けて頂きたいと思ふのです、それで、その名のつけ方について、一寸相談申したい事があるのです、それにどうせ新命名をやるのならば、どんな名にしてもよさゝうなものでありますが、なるべくは何かよりどころがあるものにしたいと思ひます、これには形とか何とかで名付けるのもよいでせうが、もし土地の人間がそれを何とかよんで居る樣な事があつたらそれを用ひられたいと云ふ事なのです、それは勿論なるべく信用のおける奴のを撰ばれたいが、多くの名があつたら、異名として書ておかれたら後にその土地へ行く人が、その爲に利を得る事は甚大であらうと思はれます、これで一般に左樣なのでして、世にある名で知れ渡つたれども特にある地方で別名を呼んだらそれを知て行く事が如何に便利であるかは考へても分る事だと存じます、それでその書きあらはし方は河田氏の發意になつた三名法が最便利でたしかでよからうと思ふのです即第一にその位置を信州とか甲州とか云ふ位の區分でいゝからしるし、次にその名とその後にその名を稱へた人の名をしるすので、例へばおなじみの横澤類藏が赤嶽と稱する山で信州にあるのなら。『信濃、赤嶽、類藏』と云ふ風にするのです、而してもし志村氏の黑嶽とよぶのがこれらしかつたら『信濃、黑岳、烏嶺氏』と一致する如し、と云た風な割註でも加へる事にでもして行つたらよからうと云ふ事なのです、もし新稱なら勿論命名者の名を明にすべきなのでせう。

而して後の慾はかくして集つた名を、かくの如くにして集まつた材料によつて取捨撰擇して、山岳會の基準名を作つて一般にこれを用ひさせる樣にしたいと云ふ事です（もとの名は異名になる事になりませう）、これが爲には同一の方面にしても出來るだけ多くの人の說を參照する事が最必要でありませう、而してその事業は會で自ら主としてやつてくれるか否かは分りませんが、材料の整理は勿論やつてくれて居る事ですから、早晩企てられ實行される事と見て、差支へはなからうと思ひます、この點に於てだけでも一行、數字の通信でもよいから、諸君が旅行せられた處を、どんなつまらぬ處でもよいから事務所まで是非御通信が願ひたいと申しておく次第です。

（梅澤親光）

裾野なる名稱に就て

余は先づ吾人の祖先が、裾野といふ語を作つて置いてくれたことを感謝する、凡そ今日の進んだ智識で、いかに腦漿を搾つても、裾野の二字ほど、簡約で、完全で、原形態と、その構造までを表現して、そして音樂的で、繪畫的で、意味の深い言葉が、他にあらうとも思はれない。

所謂裾野とは、一般に如何なる地相を作るものであるか。今暫く、代表的の裾野ともいふべき富士山のそれに就いて見ると、山形が所謂倒扇狀（極めて大ザツパの形容であるが）をして、頂附近が狹く急で、腹から腰、脚へと下へ向くほど、傾斜が緩やかになり、五六度の角度で、暢んびりと波を打つてゐる、その山麓の緩斜高原地が、則ち裾野である。平林理學士は『富士愛鷹調査報文』に於て、左の如く富士及び裾野を論ぜられてゐる。

傾斜は、山頂附近に於ては、殊に急峻にして三十二度、乃至三十四度を有し、是れより二十五六度となり、十七八度に減じ、俄然數度の緩坂をなして、長く其裾野を曳けり、其形は、四隅八面相似たるも、只だ獨り東側面のみは、寶永火口より噴出せる火山砂の爲め、稍々傾斜を減ぜり。

ミルン氏各方面の撮影より、此悠々たる裾野の曲線を論じて曰く、主なる火山の裾野は對數的曲線（logarithmic Curve）を顯はすと、語を換へて言へば、火山の外形は、直軸（Asymptote）の周圍に、此曲線を以て、一回轉せるものなり、而して其形態は、宛も粗露なる物質を積み上げ、その取るべき自然の形に一致せりと。

もし或美術論者の言ふ如く、曲線美の極致が、人間では裸體にあるとすれば、自然では、富士式の火山にあるに相違ない（本誌第二年第三號揣稿『甲斐山岳の形態美』參照）

吾人の祖先は、先づ富士山に於て、シムメトリカルで、さうして準人の美を發見した、その悠々空間に跨がれる立姿に於て、その白裝束に於て、そのひろげた花模樣の裾に於て。初めて富士を讃嘆した赤人の歌に、

田子の浦にうちいでゝ見ればましろにぞ
富士の高根に雪はふりける。

「白」が色に於ける位置は、原始の如く、虛空の如く、隨つて白色の富士山は、變化萬千の氣象が、作成する創造畫のカンヴアスである、この白い富士に目をつけて、先づ人格化したのは『更科日記』に、

さま異なる山の姿の紺青をぬりたるやうに、雪の消ゆる世もなく、積りたれば、色濃き衣に、白き袖きたらむやうに見えて、云々。

とあるのが始めである。文中の袖といふものは、現代の我我の眼に觸れない衣服であるから、どれほどまで、この形容が適應してゐるかは、解らぬけれど、袖は上襲の下に著るべき服で、間籠から來た名である、後世の小袖（諺に「貫ふものなら夏も小袖」のそれ）に當り、冬季は綿を入れて、二枚も三枚も重ねて、著たのださうであるから、先づ白無垢小袖位に見立てたものであらう。

後世、武女の紀行には、その上に襲ねて、

浮島が原より、富士の山近く見ゆ、いたゞきには、雪のたなびきて肩のほとりより雪いと白うかゝり、今めきたる裾濃の几張など、たてたらんさま

の、云々。

と女らしい觀察をした。

淨瑠璃の『曾我』には、

大磯の、燈火もほや更けわたる、短夜に、雪の光の皚々と、山の名に負ふ化粧坂、富士はおしろい、朝比奈が、云々。

右の中『更科日記』の作者阿佛は、右中辨菅原孝標の女、橘俊通の妻で、十三の歳の九月、東國から京に上つた旅日記に始まつて、康平元年、夫俊通の死亡で終つてゐる、平安朝時代の日記文としては、有名なもので、今から八百五十年ばかり前の作品である、武女や淨瑠璃は孰れも、德川時代のものである、こゝに引抄した計三節の文字は、白色の富士山を擬人にして、雪を肌にたとへ、衣になぞらへ又は顏料に扱つた適好の例證である、既に山が擬人にせられたから、その必然の結果として、山麓の高原が、人間の衣服に綠のある、裾なる名詞を冠らされたので、準人美の山から脚部に移つて來る、優美なる曲線を、裾に比べたのは、如何にも穩當な見方であらうと思ふ。

こゝに裾野なる稱呼を考へるに當つて、先づ裾といふ言葉の起因をたづねる、スはすゑ（末）の畧語である、ソは衣である、人名に衣通姫あり、貴媛の著たるを、御衣と敬稱し、衣の手に添ひたるを、衣手（袖）といふ、スソは則ち末衣である、『和漢三才圖繪』には『和名古呂毛乃須曾、一云岐奴乃尻』とある、キヌの尻と末衣と、同意である、そのやうな裾を長く曳いてゐる野原といふ意味であることは、今更說明するまでもないが、近代の俗謠に『雲の帶して空色小袖』と、富士山を唄つたのがある、帶だの、袖だの、裾だのと、日本の山岳で、古來富士山ほど、擬人扱ひをされたものは無い、就中、裾は末へ行つて長くひろがつて行くだけに、こゝに植物や動物から織り成された「模樣」が作られる餘地がある、即ちそれらの色調を渾融して「裾模樣」なるものが、浮き上つて見える。

淨瑠璃『小栗判官』にある、

外面の野邊に立ち出でて、都に知らぬ山畑や、一むら粟の鳥おどし、鳴子になるゝ友鶉、妹背兎の孕むてふ、桔梗が露に戯むるゝ、野菊、紫闌の亂れとは、袖も宛がら花摺衣、裾野に響く草刈笛、中略花を刈萱、女郎花、押分け々々々來りける。

の如きは、桔梗、野菊、紫蘭、刈萱、女郎花等の植物を野に配し、袖、花摺衣、裾などに綠を持たせてゐるこの淨瑠璃は、德川氏中世の作であるから、吾祖先から受け繼いだ、系統的思想を、覗ふに止まるに過ぎないが、既に古くからの言葉に「裾濃」といふのがある、これは今所謂、裾模樣などとは違つて、衣や、鎧の絲やが、上の方を淡く、下の方を濃く染め出したのでこの染色によつて、紫裾濃、青裾濃などいふのがある、紫式部の日記、行幸のくだりに「左衛門の內侍、御はかし取る、青色の無文の唐衣、裾濃の裳云々」又淸少納言の枕の草紙には「辛うじて采女八人、馬に乘せて引き出づめり、青裾濃の裳……などの、風に吹きやられたる、いとおかし」など、拾へば煩らはしいほどある。

今富士山に就いて言へば、紫裾濃は、鼠に暮れゆく夕暮の富士、紺裾濃は、富士山麓の熔岩に茂る森林の一帶でがなあらう。

裾濃衣の外に、地摺衣があり、花摺衣がある。地摺といふのは『榮華物語』初卷に「地摺の裳を著るなり」と見えて、何でも白地の絹に、物の形を摺りつけたものであるといふことだ、花摺衣といふのは、花の形や色を、そつくり衣に染めつけた、一種の自然染工で、能因法師の歌に「今朝きつる野原の露に吾濡れぬ、うつりやしぬる萩の花摺」又業平の歌に「武藏野の若紫の摺衣しのぶのみだれ限り知られず」など見えてゐる、ツマリ白絹に萩の花や、紫草の色摺をしたものであらう、富士山の裾野は、滿面宛らの地摺ではあるまいか、花摺衣ではあるまいか、その外、『飾抄』に「白河院歷覽、鳥羽殿東山之日、浮文指貫、着女郎花衣」とあるが、女郎花衣といふのは、どういふ衣裳か、今では解らない、ヤハリ女郎花を摺りでもしたものであらうか、二十世紀の殺伐塵埃世界で、花摺衣や、女郎花衣を著て、平安朝奈良朝、否、もつとむかしの空氣を吸つてゐるものは、富士山ばかりであらう。

富士山と麓野との關係は、麗人と裳裾の連想となつて來る、花野は則ち裾模樣の浮文である、「裾野」の二字が、繪畫的であることは、此意味に於て、間違つてゐるとは言へまい。前に引いた平林學士の文中、ミルン氏は富士對裾野の關係を「直軸の周圍に曲線を以て回轉す」と言はれたが、この

回轉を言ひ現はした古語に、裾回（すそわ）といふ、趣味のある言葉がある、『言海』には、

すそわ（裾回）麓のあたり「筑波根のすそわの田居も、住み馴れにけり」

とある、筑波山は火山では無いが、富士と同じく原野の中に孤立して、周圍を匝ぐることが出來るから、かういふ名詞も、自然出來るので、富士の證歌に、裾回なる言葉の見當らぬのは、遺憾であるが、裾野といふ語は、富士から及ぼして、今では全國火山の麓野の總名詞となつたわけである

富士火山から裾野の語が作られた理由は、以上で解るであらう、則ち(一)山と野との連續推移の間に生ずる形態的關係(二)兩者を共通する色調の漸減的關係等である、が此外に猶有力なる一原因がある、それは何であるかといふに、和歌から來た、修辭上の關係で、是れは裾野なる稱呼を作るのに與かつて力あるもので、最も看過ごしてはならぬのである。

日本の名所なるものは、單に「有名なる場所」といふのと違つて、初めは古歌に詠まれてから、資格を得たもので、萬葉集や、古今集に見える地名は、後人繼承して、之を「名所」にしてしまつた、換言すれば、古歌といふ古典的證券を得て、始めて「名所」の資格が生じたのである、例へば奈良朝の歌人は、多く大和を題材にしたので、萬葉には大和の地名が最も多く、隨つて大和が一山一水、名所の巢窟になり、山上憶良が筑紫に居たゝめに、筑紫の地名が見え、

大伴家持が、越中に居たゝめに、越中の立山も、富士と等しく最古の文學を有し、人麿のために石見國の地名が出、前に引いた赤人のために、富士をはじめ、東國の地名が出たといふ風で、それ等は皆所謂「名所」となつたのである、是は萬葉時代ではないが、在原業平が歌枕をさぐると稱して、東下りをすると、角田川が名所になり、都鳥が名鳥になるわけで、つまり名所があつて、歌が出來たといふよりも、歌に詠まれて、始めて名所になつたのである、富士も無論此類であるが、富士の裾野は、この意味でいふ名所では無からうと思はれる。

それは富士を詠じた歌は、萬葉集の赤人をさきがけとして、歷代の敕選和歌集、私集に、枚擧す可らざるほどに多い（余の校訂した『富士山大觀』參照）が、裾野といふ言葉は、萬葉にも、古今にも、新古今にも見えない。

富士山は萬葉時代から、比較的に精しく知られてゐたことは「富士の高嶺の鳴澤のごと」といふが如き、山體の部分的地名までが題材に使用せられ、その噴煙は戀歌の「胸のほむら」に喩へられ、現存せる日本最古の小說『竹取物語』には、帝が『いづれの山か天に近き』と宣はされて、富士山を祭壇に選ばれたといふほどであるから、此時分、既に日本最高の第一山としての認識があつたらしい、さうして不死の藥の壺をならべ、火をつけて、燃せたので、その山をふしの山といふと假托してある程であるが、裾野は見當らない、古今集で、試に原野に關係のある名詞を調べても、女郎花、藤袴、花薄、きりぐ〳〵す、撫子、もみぢ葉等があるが「秋の野」とあるのみで、裾野といふ言葉はない。つまり奈良朝、平安朝に見えなくて、鎌倉時代となつて、始めてあらはれたやうで、比較的近代の稱呼であるから、上記の意味でいふ「名所」ではない。

賴朝富士裾野の卷狩は、曾我兄弟で有名になつたが『吾妻鏡』には、富士野とあるのみで、富士裾野とは見えなかつたやうに記憶する、後世足利時代に出來た謠曲や、德川時代の淨瑠璃本や、物語本に、富士裾野とあつても、それ等は今擧げるに及ばぬ。

裾野なる名詞の見えたのは、十三代集の中なる『新後選』に土御門院の御製

藤袴きつゝなれ行く旅人の
裾野の原に秋風ぞ吹く。

が、おそらく初めかと思ふ（余の知れる限りに於て）『新後選集』は藤原爲世が正安三年後宇多の院宣により、後二條天皇の嘉元二年に選進したもので、今から六百年前に過ぎぬが、この歌の作者なる土御門院の御在世は、今より七百年前である。

次いでは『風雅集』に惟宗朝臣

ふじのねは晴れ行く空にあらはれて
裾野に下る白雨の雲。

である、此和歌集は、花園院の御自選で、御在世は約六百年前である。

以上二首の歌の中、後者は既に、その頃裾野といふ名詞のあつたことを認められるが、前者は在原業平の、有名な『から衣きつゝなれにし云々』の衣を、素として、總てその縁語から作つたといふ體裁の歌で、「藤袴」といふ野原に多い一植物の名の、袴に縁のあるところから、「きつゝなれ行く」と懸け、「旅人の」と起して「裾野の原」と承け、前の袴に照應させたのに過ぎぬから、果して裾野といふ地理上の稱呼が、既に存在してゐたのか、或は歌詞として、縁語の必要上、裾野といふ名詞を初めて拈出したのかは疑問である、殊に「裾野の原と」つゞけたところを見ると、音調上の關係もあつたであらうが、裾野といふ造語では、當時の人に解らないから「裾野の原」と列ねたのではあるまいか、尤も「何々野の原」といふことは、此外「泉野」の原（鴨長明、夫木集）「武藏野」の原（續古今、續拾遺其他）等、他にも隨分多いから一概に言へぬかも知れないが、これ等は下の句を名詞留めで、キッパリさせる音調上の關係から來たのであらう。

ともかく裾野の名稱が、初めて文字にあらはれたのは、土御門院の御製から始まつたらしい、當時は鎌倉政府が、建設されて、兵亂も一と先づ收まり、京洛と海道との交通も頻繁になり、從つて旅といふことが、人間行事の、最も必要重大なる件に見られたので、旅に縁ある、衣だの、裾だのといふ名詞が、詩語として盛に用ひらるゝに立ち至つたのは、裾野なる名詞を造るに有力の原因をなしたことゝ信ずる、『東關紀行』に蒲原の宿で、或家の障子に『旅衣すそ野の庵のさむしろにつもりもしるき富士の白雪』といふ歌が書きつけてあつたとしるされてあるが、この歌などは、旅衣、裾、狹莚などと、旅行用品を列ねた、代表的作品である。

猶一つは鎌倉時代の東海道は、德川時代のそれの如く、沼津三島から、箱根を越さずに、沼津方面の富士の、南麓から、今の佐野、御殿場方面、即ち富士裾野の最も優美なる發達を遂げてゐる、東麓を通過して、今の小山附近、即ち竹ノ下邊から足柄山を越えたゝめに、裾野を深く觀察する便宜を與へられたことが、原因をなしてゐるであらう。『東海道名所記』には『吉原より原は、正面(富士山の)にして、裾野まで鮮やかに』とあるが、此方面は殆んど凡べて愛鷹山や、又は沼津附近の小火山に妨げられてゐるから、裾野も到底東麓の充分なる發達を遂げてゐるのには及ばない。併し是れが總べてゞはない、前に修辭上の關係と言つたが、今度は音調上の關係を話すと、スソの二字は、サシスセソ縱行の清涼音に屬する。

スは澄む、涼し、透き通る、清々し、草に芒、花に清白、物に簾、金屬に錫、蟲に鈴蟲、衣に生絹など、孰れも氣持のいゝ音である（只一つ煤といふと汚らはしい反證が擧がるかも知れぬが、地名に煤を冠らされてゐるのは、相摸津久井郡、丹澤山脈の麓に、煤ヶ谷といふ山村がある、併しこの煤ヶ谷のスは竹のことである、「御篶刈る信濃の國」

の篠、即ち篠であるから、汚なくは思はれぬ、足柄の竹の下道、信濃の野麥峠は、皆篠竹の山路である。）

ソはあをそ（青麻）の如く、又「そよ吹く風」の如く、たそがれ（黄昏）の如く、そなた（和女）の如く和らかい感じのする音である、ソは秋の花野に冠らせる詞として、優美に思はれる、是れも此言葉に生命のある原因の一つとは、ならなかつたであらうか、前に「裾野」が音樂的であると、私の言つたのは、これをも其一に算へてゐる。

足利時代となつては、裾野なる名詞は、謠曲に最も多く散見する。

消えぬが上に積る雪の、見れば異山の高根々々を傳ひ來て、富士の裾野にかゝる、雲の上は晴れて青山たり、いづくより降るやらむ、雲より上の白雪は、（謠曲富士山）

清見ヶ關を打ち越えて、富士の裾野になりぬれば（熊野）

命をしかの隱ざと、富士のすそ野をからうよ……

さつき半のふじの雪、五月雨雲にふりまげて、かのこまだらや、むら山の、すそ野の鹿の星月夜、鎌倉殿の御狩の御遊（小袖曾我）

我等兄弟、人なみにまかり出、唯今富士のすそ野へと急候……我足柄や遠かりし、富士の裾野につきにけり……今更思ひしら雲の、かゝるや富士の裾野より、曾我に歸れば、云々。（夜討曾我）

其他猶多い、下つて德川時代の文學となると、もはや一々引用の煩に堪へない程であるが、以上であらかた、裾野なる言葉が、文學上地學上に、動かし難き權威を挾んでゐることが解るであらう。

（烏水）

◎雜錄　燒嶽

燒嶽

仙境　山は岩骨を露はし、骨白くして殘雪かと疑はしめ、水は深潭を作り、潭青くして藍靛を流すに似たり、山の俊傑、水の清冽、蓋し信飛の山脈、梓川の峽谷は、正に是れ絕域仙境と謂ふべし。

上高地温泉　仙境に温泉あり、上高地（カミカウチ）といふ（或は上河内に作り、土人は「カミグチ」と呼ぶ）、梓川の右岸（西岸）に位し、海拔約五千尺、人間の常住する島々（シマシマ）を距ること約六里、此間七千尺の德本（トクゼウ）峠ありて、懦夫をして辟易せしむ、温泉は文政年間の發見に屬すと雖、爾來僅かに風雨を凌ぐの小屋あるに過ぎざりしが、近年上高地温泉株式會社なるもの起り、三萬圓の資本を以て浴舍を建てしも、地遠隔にして、殆ど通常人の遊浴を見ず、唯山を探るの士、稀に休養を取るあるのみ、而して予と夏目氏とは、實に此稀客中のものなりき。

白骨と上高地　二十日の朝、白骨（シラホネ）温泉に浴せし我等は、其日の午後一時、身を上高地温泉の槽中に横たへぬ、前者は硫氣著しく鼻を衝くも、後者は殆ど無臭、前者は酸味强く、白濁乳の如きも、後者は殆ど無味、清澄にして、槽底の木理數ふべし、病毒を拂ふの評判は、前者之を專らにするも、俗塵を洗ふの効は、我後者を取らん、浴室の梁木に題せる「明治三十七日露開戰之歲六月吉日建之」との大文字は、是れ上高地温泉槽中に投じたる予が先づ眼底に映

せしものなり、泉源は浴室を距る二十間許の岩罅より涌出し、温度は約百十度（華氏）、泉質中性、多量の格魯兒、其他硫酸、加倔基、炭酸等を含有し、慢性婁麻質斯、慢性胃腸加答兒、創傷等に効ありと云ふ。

一浴の後、樓上の客室に坐すれば、前方近く梓川の渓流を隔てゝ、霞澤山に對し、山は矗々、犬牙天を嚙み、川は花崗岩斑岩の分解せし、白砂の廣き河原を穿ち、巨岩に激しては、忽ち白絮を吹き、雪花を飛ばす、屋後は雄峻無雙の穗高嶽を負ひ、南西には乳房狀なせる燒嶽の噴烟を望むべし、加ふるに淡靄濃霧忽焉去來、山愈奇に、水益妙、變幻極まる所を知らず、室は天井なく、壁に上塗なく、膳上亦甚だ淋しきも、山川の美景は之を償ふて大に餘あり、況や隣室同好の客あるに於てをや。

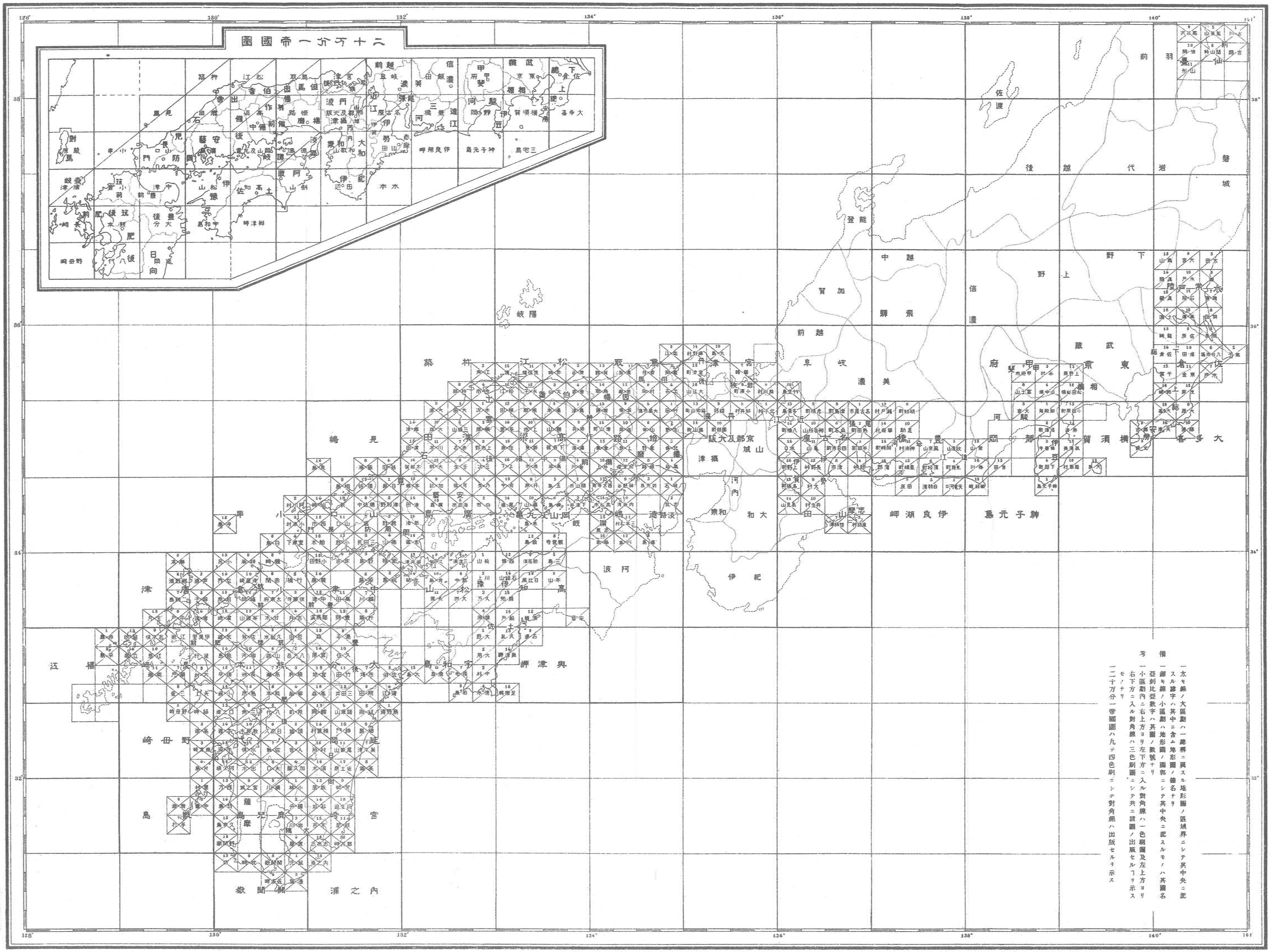
水彩畫家榎谷氏　客は榎谷徹藏氏、大阪の人、名刺の交換によりて、互に山岳會員一味の士たるを知り、談話は忽ち山岳に入りぬ、氏は山岳趣味を其得意の水彩畫に於て發揮し、昨年既に此境に遊び、槍嶽、笠嶽等を窮め、本年復、中房温泉より、燕、大天井、常念、蝶の諸岳を跋渉して此地に入り、筆を神秘の境に馳すること數日、其快心想ふべきなり。

燒嶽探險の企畫　我等は上高地に着するの翌日を以て、直ちに槍嶽を攀ぢ、次で穗高嶽に及ぼすべく、豫定し、十七日飛驒野麥より、郵書を以て、案内人雇入の件を當温泉場に依頼せり、然るに交通不便の爲め、郵書未著の厄に接し、俄かに案内を得ること能はず、去とて一日を空過せんとの如何にも惜しければ、茲に忽ち燒嶽探險の擧を企てぬ、燒嶽の登路は別に案内者の必要なければなり、而して榎谷氏の此行に加はりしは、興味を加ふること多大なりき。

上高地尻　二十一日朝、檢温器の五十四度を示せるは、宛然是れ秋冷の氣、人をして盛夏三伏の候たるを忘れしむ、午前七時三人打連れ、上高地の根據地を出發し、昨日來りし白骨路を復習し、二十五分にして「上高地林道起點」と書せる小木標に達し、白骨路と別れて右折し、中尾峠に向ふ、温泉場より此處に至るまで約半里、上高地冲積沙地の尻止りにして、象牙肌のシラカバは、淺綠風に靡けるカハヤナギと相伍し、カラマツ、シラベは、其下枝尙綠葉を存するに、幹上既に枯れて、白骨と化せるが多く、枝には淡綠灰白の、サルヲガセを垂れ、肌はツタ、コケを飾り、風色既に凡ならず、木の疎なる所、草之を縫ひ、草の茂れる所、花之を彩る、紫はアヤメ、キキャウ、青紫はトリカブト、マツムシサウ、紫紅はヤナギサウ、朱はヤマガンビ、白はシラヤマギク、ヨモギ、ドクゼリ、ヲトコヘシ、黃はヲミナヘシ、白黃はヤマヲダマキ、濃黃はオタカラコウ、ハンゴンサウ、剩へ舶來のマツヨヒグサまで、既に此幽境に侵入し、名殘の花の眠げなるもをかしく、ギシギシの莖も葉も紅に染みたるが、旭光に映じて、斗酒に醉ひたる猩々をも凌げるは更に怪し、スモヽに似たる大木の、而かも植えたらん如く並び立てるは、最れコナシにして其果

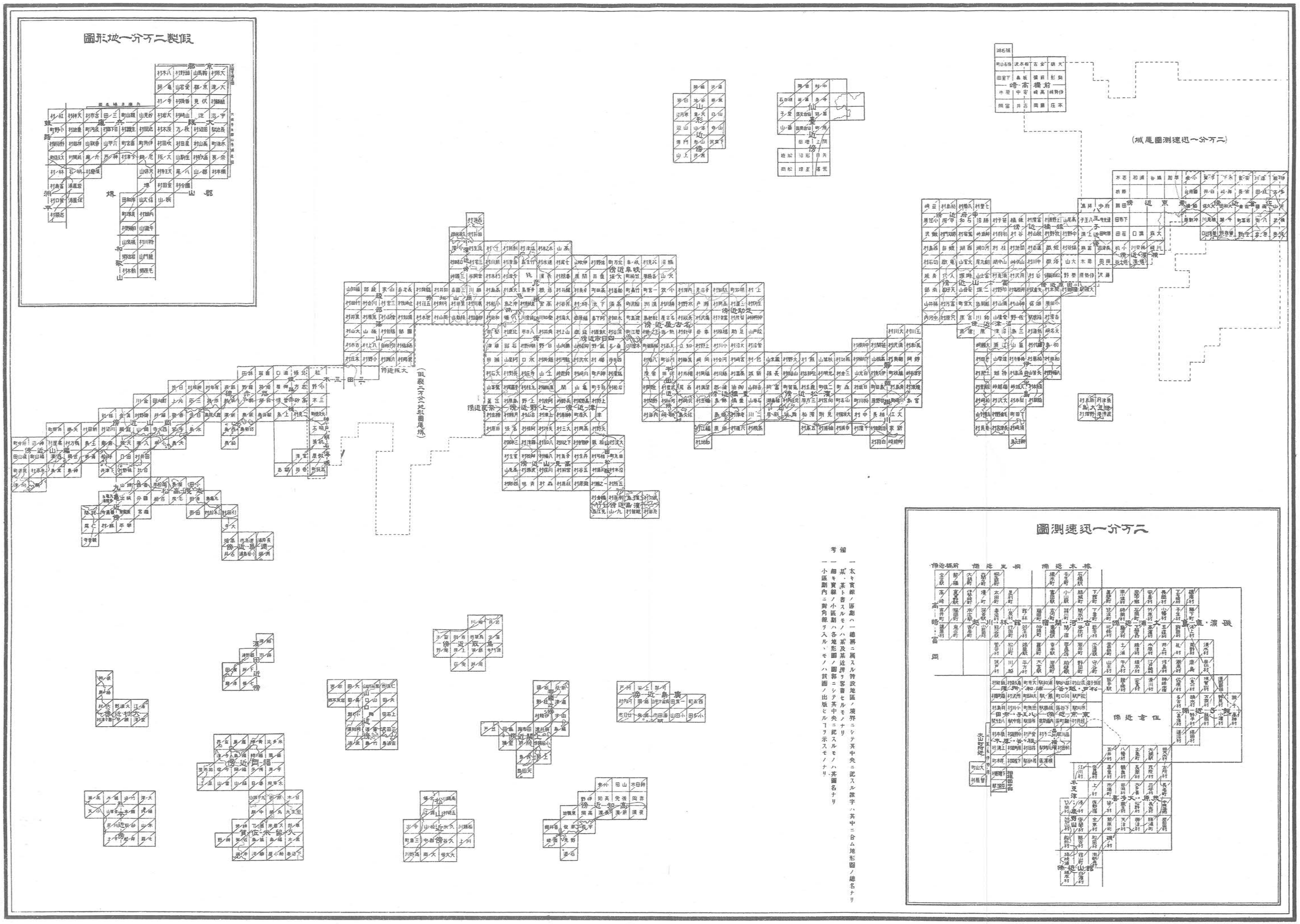
五万分一地形圖及二十万分一帝國圖發行區域一覽圖

明治四十二年三月製版



陸地測量部

二万分一地形圖發行區域一覽圖



實は、鹽漬、梅醋漬として食ふべく、味淋漬となさば、頗る佳味なりと云ふ。

中尾峠　爪先上りの中尾峠坂にさしかゝれば、モミ、ツガ、シラベなど翁欝として日光を漏さず、積りに積りし落葉は、軟かなること海綿の如く、之を踏めば足下千古の腐臭を放ち、身長よりも高き熊笹を分け進めば、露顆落ちて笠に聲あり、六葉の小皿に紅果を盛れるは、ゴゼンタチバナ、光澤著るき深綠の叢葉を開き、其眞中より瑠璃果の累々たる竿を捧ぐるは、ツバメオモト、褐色の簇果を着けたるはマヒヅルサウにして、コバノイチヤクサウは白花、淡紅花相伍し、ツルツゲは其對生の葉腋に、赤色の雙實を夾む、登るに從ひ、路漸く急、優々緩歩、路傍の山艸をおとづれば、ヨツバムグラ、クルマムグラ、イハカガミ、ミヤマカタバミ、チゴユリ、タケシマラン、タマガハホト、ギス、イハオトギリサウ、クロクモサウ、子バリノギラン、アキノキリンサウ、ミヤマカウゾリナ、アハモリショウマ、アカモノ、オヤマリンダウ等あり。

坂路上り盡せば、中尾峠の絶頂にして、眼界始めて開く、海拔約六千六百尺、丈餘の標柱あり、文字は風雨と戰ひ、既に討死せしも、正しく長野、岐阜の縣界たるを知りぬ、傍の小柱には「林一一六班」と註す。

上高地より約一里半、時計を窺へば、9を指せり、當面近く白檜三五章の背景として、一大深谷を隔て、二尖峰の相提携せるもの、左を大笠、右を小笠とし、更に右に亙りて、

槍、穗高の一部を望むべし、穗高との間眼前數十歩の小高き峰頭、樹枯れ石燒け、噴烟の小なるもの七八、左は燒嶽の大噴烟、時に響聲を送りぬ。

燒嶽攀登　正面の坂路を降るは蒲田(シマダ)温泉道なり、我等は縣界標柱の所より左折し、熊笹の裡、辛うじて人跡を辿り登れば、笹漸く矮縮し、笹の盡くる所路益急を加へ、石礫は黄白、灰白の色を浴びて、噴出物の俘を存し、磊々砢々、之を踏むに崩れ落ちて、後續者を驚かすこと屢なり、硫氣蒸氣の噴出は、右に左に前に後に、大小數十百、啾々聲あり、鞋下暖を感じ、奇臭鼻を衝く、仰ぎ見れば、滿山の草木は、燒死して、一種凄き暗赤色を呈し、半死半生のコケモ、コメバツガザクラ、ガンカウラン、イハウメ、イハヒゲありて、其間に餘喘を保てるは、有情の人爲めに悲むべく、シロバナシャクナゲの左枝爛れて、右柯痔せたる二三の花を擡ぐるに至りては、多情の人當に泣くべし。

淺間と燒嶽　予曩きに淺間を探り、壯絶烈絶の中、無限の美觀を感得せしが、今本山に於ては、凄絶惨絶の中、一點危惧の念なき能はず、是れ彼は、歳々刻々噴烟に强弱の差ありとはいへ、既に百餘年前の舊噴火に屬し、其大體に於ては、固定の觀あるに比し、此は昨年の新爆發にして、噴口尚ほ生氣あり活氣あり、況や彼の口大なりとはいへ、頂上唯一個を有するのみなるに反し、此は山體到る處、噴烟を見ざるなく、人をして脚下は悉く是れ焦熱地獄、其火力爵氣は、或は全山を破壞し了らざる無きかを疑はしむるに於てをや。

燒嶽　舊火山岩の絶壁節理、宛然高き石垣の狀をなせるを右に見、程なく燒嶽の頂上に達し、海拔八千尺の岩角に立ち、二日前乘鞍の岳頂より瞰下して、壯觀無比と讃美せし其噴烟の、今は痛く凄きまで感せる其火口の、我等が眼前咫尺に展開せしは、午前十時十分とす、中尾峠の頂上より約半里、時に耳を嘐々轟々の噴聲に欹て、身を白烟黑烟の噴氣に浴びつる三個の人あり、今朝平湯(ヒラユ)分面より登りし由物語り、直ちに下山しぬ、彼等は飛驒の人にして、年齡三十乃至四十位なりき。

本山は從來微弱の噴烟をなしつゝありし火山にして、頂上に舊噴火口を有し、其長徑一町餘、周回約五町、不正の半月形をなし、西南口壁は高く相亙り、上緣參差として、劒戟を植うるが如く、內面削絶節理ありて、甚だしく暗褐色を呈し、東壁は低くして厚く、灰泥之を蔽ひ、其色灰黄灰白なり、此低き東壁より、東方に向て一大龜裂あり、長約五十間、其北側は舊火山岩劒立し、南部は微に地辷の形跡を認むべく、裂線に沿て、著しき噴烟五ヶ所あり、蓋し今回(明治四十年十二月十一日)の活動は、其主力を舊火口に發し、餘力を全山に漏し、泥流は低き東壁より鍛谷に沿ひ、東南に押し出でたるもゝの如く、所謂爆發にして、熔岩噴出の作用を見ず。

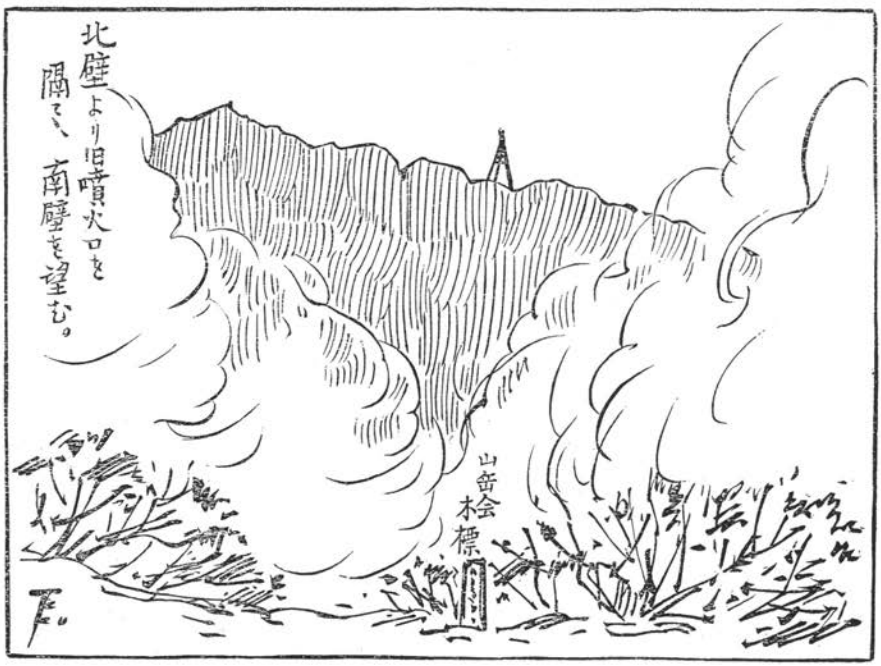
舊火口よりは、絶えず黑烟、白烟、青烟を噴出し、濛々として、口內を罩め、其底窺ふべくもあらず、時に風の烟を

吹くか、或は噴烟の薄ちぎし際、對壁の上に建てたる、測量部三角標の、稀に視界に入ることあり、流石測量部の役人方も、此光景に接しては、彼の三角標下に攀ぢ登り、執務せん勇氣も出でざるべし、本山の響鳴は、淺間のそれに比すれば弱し。

東壁より舊火口内に向て、突堤の如きもの出づ、長七八間、幅三四尺、堤端稍廣がりて、宛然蝌蚪の形をなし、所々竅孔ありて、盛に硫氣を噴き、四近の岩色、爲めに鮮黄、橙黄、赭黄、褐黄を呈し、其奇しき、其凄き、名狀すべからず、此突堤を渡り、天工の怪を探れる予が風姿は、忽ち槇谷氏の畫料となりぬ。

頂上の展望　此日は頂上、東微風にして、噴烟常に西に靡きければ、我等は東壁上を徘徊して、或は灰泥を集め、或は硫黄岩片を採りて紀念品となし、或は展望に、或は寫生に、優然自適數時間、東南には、木曾駒嶽の奥、白峰甲斐駒の山脈、蜿蜒起伏する所、淡雲點々伺候するあり八ヶ嶽は其左方に長揖して、我等が曩日の訪問を謝するに似たり、泥流を隔てゝ近く相對せる、本山支稜の全面、暗灰色を呈し、時ならぬ異樣の紅葉點々たるは、是れ爆發の災に罹りし偃松の遺體とす、此異樣の紅葉こそ、予が乘鞍頂上より瞰下して、岩石燒爛の色と誤認せしものなれ。

駈足もて、噴烟の裡を突貫し、火口の北壁に還り、眼を北方に放てば、笠ヶ嶽の東に當り、槍ヶ嶽の峰頭一劒天を刺せるあり、是れ槍ヶ嶽の所謂槍にして、此方面より見るときは、尖頭甚だ鋭利にして、且つ少しく東方に傾けり、穂



高は其東南に位し、參差巍峨たる尖峰は、人をして畏敬の念を起さしむ、三山殆ど不正の鼎立をなし、槍ヶ嶽は中央の最奥にあり、蓋し槍は其奇拔に於て、穗高は其雄峻に於て、笠は其穩健に於て、各特色を有するものと謂ふべし、連山の皺谷、殘雪之を埋むるにあらずんば、草木の剝離する所、山骨露はれて、雪と其白を爭ひ、其狀、上方より下方に向ひ、思ひ切て爬き下せる爪痕に、白堊を充たしたらん如し、特に笠ヶ嶽に於ては、鮮かに美しく、長く、縱に、眞直に、淺黃綠色の數條を劃せるを見る、是れ岩石崩壞擦下の爲め、一時露出せる岩面に、或種の草木のみを、新生せるものならんか、笠、槍の間、尾根の互に相重れる所、遠く僅かに峰頭を現せるもの、左は數個の尖頭を有し、右は緩斜の三角塔狀をなす、是れ黑嶽、鷲羽嶽、ならんとは、榎谷氏の說にして、此方面秀麗の大觀は、氏によりて紙上のものとなる、火口壁上に高二尺許の木標あり、表には「燒嶽登山紀念、山岳會」、裏には「明治四十一年八月一日」と署しぬ、傍に掛けたる油紙包は、何人の遺忘品にやと、開き見れば、我黨の雜誌『山岳』第三年第一號、及び會則二部ありて「燒嶽山神に獻ず」と記入せるは、心地よし。

笠嶽との間、脚下に深谷を瞰る、これ中尾の部落にして、蒲田溫泉亦此處にあり。

烟中の喫飯　我等は晝飯をしたゝめん爲め、火口北壁外側を降ること約數十間、噴烟を避くべく、屋大の巨岩屹立せるを背にして陣を取り、燒死せる假松を集めて之を焚き、握飯を炙らんとせしに、最初より全然炙らざりし握飯のことゝて、之を開けば、崩壞して概ね表包に附着し、殆ど無効に歸しけるも情なや、殊に屢噴烟中を突貫せることゝて、咽喉は、亞硫酸瓦斯の見舞にあづかり、痙攣疼痛を感じ、剩へ、握飯の內部まで、奇臭に染みて有難からず、予は其半ばを謹で燒嶽の火神に獻せしが、健啖博士の夏目氏さへ、退治の餘りに綺麗ならざりしも可笑、偶三人の壯年ありて、登り來り、我等が焚火するを見て、喫驚せる樣なりければ、「燒嶽の噴烟、尙は物足らねば、焚火もて助太刀せん考なり」と予が言へば忽ち起れる笑聲は、燒嶽の響鳴と相和しぬ、此日我等が一行三人なるに、先きには三人の頂上より降れるに逢ひ、今亦登り來れる三人に接するは偶然とはいへ、頗る奇、文珠菩薩も跳とならんか、三人者は亦飛驒人なり。

噴烟の多少　後に來れる三人は、噴烟の餘りに多量なるに辟易し、直ちに下山しぬ、我等今朝上高地に於て、本山を望みし際は、噴烟甚だ稀少なりしが、頂上探險中、漸次其量を增加せり、山麓人々の語る所によれば、午後は概ね噴烟增加すと云ふ。

下山　火山烟中、不動明王を學びし我等も、午後一時十五分、歸途に就くべく、頂上を辭じ、程なく中尾峠に達せんとせしとき、斐太中學生なりといへる二人に逢へり、今朝平湯より來れる由にて、痛く疲れたる樣なれば、頂上の程近きこと、壯觀なることなど物語り、之を鼓舞しぬ、

三時三十分上高地温泉塲に歸著す、時に檢温器は、七十二度を示せり。

偶明日燒嶽を探らんとて、投宿せる兄弟の二學生あり、東京の人にして、白石氏、兄を多士良、弟を宗城といひ、兄は第一、弟は第二高等學校に入學せる者、二君は先日、我等が乘鞍より降れる途中遭遇せし、十三名の登山團體に加はりしもの、直ちに我等が室に來りて、山話を交換せしは嬉し。

暗鬼病　燒嶽の探險、此の如く盛なりと雖、元是れ最近の爆發に屬し、全山半腹以上、悉く熱氣噴烟を以て滿たされ、登客概ね暗鬼病に罹れるが多きことゝて、偶風向により、響鳴を聞くこと稍高きか、若くば噴烟稍增すに於ては、早くも以て大噴出、大爆發の生ぜし如く臆想し、尻帆を學ぶもの無きにあらず、暴虎憑河の勇は、我固より與せざれど、さりとて火山の噴氣には、始終强弱あるものなるを知らざるぞ可笑しき、殊に某新聞記者主唱の本山探險隊の如きは、目的を達せずして、脆くも其背を本山に見せながら、而かも大々的の報道をなしゝは尙ほ可なれど、其末文に曰く「命の欲しきものは、本山に登るべからず」と、無責任も此に至りては寧ろ無邪氣と謂はんか、而して我等、其所謂命の欲しからざる徒となりしは、更に大に無邪氣の極と謂ふべきなり。

燒嶽餘論　燒嶽の噴烟に就ては、新聞紙の報ずる所、初より甚だ區々にして、或は硫黃嶽なりと云ひ、或は燒嶽なりと云ひ、或は燒嶽即ち硫黃嶽なりと云ふ、要するに山岳重疊の奥とて、親しく之を踏査するもの尠く、所謂口耳の說のみ、而して予は其第三者を取るものなり、地圖を按するに、信飛の國界、槍嶽、穗高嶽の南に燒嶽あり、燒岳の南に硫黃嶽、更に阿房山を經て、乘鞍嶽に連る、然るに測量部二十萬分一圖などには、硫黃嶽は國境に位し、其東南信濃地籍に入りて、燒岳を記し、甚だしきは、梓川の東方まで燒嶽を出張せしめしものあり、今實地に就て、之を觀察するに、中尾峠の頂上、路の北方數十步にして、七八個以上の小噴氣孔ありて、此邊一帶に緩斜の小隆起をなし、諸圖の示せる燒嶽の位置に相當すれども、特に山と稱すべき程のものを認めず、路の南方亦數町の處より、數多の小噴氣孔ありて斷續し、我等が探險の目的たる、最高點の大爆發口、即諸圖の示せる硫黃嶽の頂上に近づくに從ひ、噴烟益猛烈を呈せり、想ふに燒嶽とは、讀で字の如く、中尾峠の北方小隆起より、南方最高點の大爆發口に至る、噴烟連峰一帶の地に附せる遍稱にして、硫黃嶽とは、飛驒方面に於て曾て硫黃を採掘せるより起りし名なるが如し、而して此大爆發口を有する最高點を、信人は殆ど皆燒嶽といひ、飛人は或は硫黃嶽と稱するは、頗る注意すべき價値あるに似たり、但信濃の地に入りて特に燒嶽と稱すべきもの無きは明なり、山岳第一年第三號の口繪に於て、會員河野齡藏氏の撮影にかゝる「梓川に臨める燒嶽」は、正に此大爆發口を有せる最高點とす、予は再言す、硫黃嶽即ち燒嶽

なりと。

（大　平　晟）

文中所挿の木版は、榎谷徹藏氏のスケッチにして、前號北尾氏の「燒嶽噴火口に臨む記」に挿入せる、二個のそれも本文に連絡せる、同氏のスケッチを、割きたるものなり。（編輯記者）

乘鞍の堂守と穗高の仙人

（板殿正太郎翁と上條嘉門次翁）

乘鞍の堂守

山岳第三年第一號雜報欄に於て、會員榎谷徹藏氏の通信にかゝる「乘鞍嶽の新室堂」あり、此一記事こそ、昨年予が本山跋渉に便宜を與へしこと多大なれ、近頃飛驒山脈に向ひて、前人未到の域を探らんとするの氣風勃興し、曰く「日本アルプス縱走」、曰く「日本アルプス横斷」、曰く何、曰く何々、快心の報道に接すること頻々なり、予昨年八月中旬、木曾の方面より、御嶽を乘り越え、飛驒の濁川温泉（即ち嶽の湯）に降り、飛驒野麥より、嶽谷の瀧を經て、乘鞍嶽に登り、信州白骨温泉に降り、飛驒境上の中尾峠より、燒嶽を踏破し、上高地温泉に還り、穗高、槍と云ふ經路を取りければ、題して「日本アルプス縱走」と稱せんか。乘鞍嶽に於ては、近來慘死者を出したれば、啻に世人が恐怖心を抱くのみならず、剛力の如きも、暗鬼病にかゝるが多く、中には之を奇貨として、不當の賃金を貪らんとするの形跡なきにあらず、予が野麥に於て、辛うじて雇入れし剛力若下末吉の如きも（一日八拾五錢、口向ふ持）、曾て測量部員に從へりしことある者なるが、先年東京人士の案内をなしゝとき、案内料の外、多分の氣附（慰勞金のこと也）を貰へりなど、申し立てゝ暗に促すところあり、且つ出發の朝は、快晴なりしも、偶ま遠山の頂に、雲のかゝれるを見るに及んで、逡巡を始め、乘鞍の半腹に到りて一陣の霧の襲來に接するや、慘死者の談などを事々しく、持出して、頻りに「廻れ右」を請求する有樣、仲々厄介物なりき、此時予が唯一の心特みとせしは、前記榎谷氏の通信にかゝれる、新室堂の板殿翁にてありき、予は一方に於ては、天下の名山高峰を跋渉したる自身の經驗を、殊更に吹聽し、一方に於ては、新室堂には、常住の堂守ありを說き、漸く不承々々なる彼を說服し得たる程なりき。

新室堂は、本山の最高點劒峰の西方、山稜を傳ふること約八町にして、再び突起せる頂上、飛驒人の所謂奥院の傍にあり、堂は廣大なるも、用材完全を缺き、暴風雨に際しては、其侵入を免れず、一人の堂守ありて、米味噌位の準備を有せり、予等が投宿せし際は、頗る優良の菓子まで供しぬ、堂守は即ち板殿翁なり。

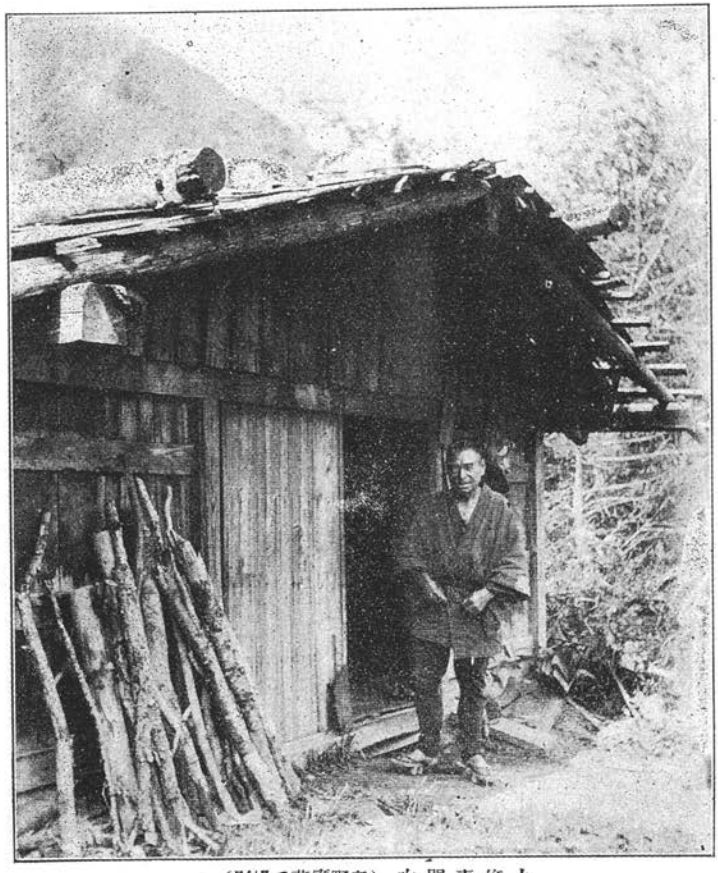
翁姓は板殿、名は正太郎、年齡五十許、飛驒國大野郡丹生川村の人、家には十七を頭として、三人の女子あり、他に家族なしといふ、翁は此三女子の世渡方法を立て、乘鞍開山の爲に、自身を犧牲に供し、室堂の建設やら、登路の修築やら、常住の堂守やら、乘鞍の名聲を世に顯はすべく、斡旋盡瘁せり、翁性剛毅不屈、其自信の强き、且つ任俠の

氣を負へる世多く其比を見ず、從て他の山上の堂守の如く、營利一點張のものにあらず、唯其科學的知識乏しくして、自信力の至强なる爲め、言行往々奇矯に失する嫌ひはあれど、蓋しかゝる境遇と性癖の人にありては已むを得ざる所ならむ、又彼が頑强にして、苟も迎合を事とせざるは、或は俗人の嫉視を釀すなきを保せず、彼は本山の爲に、天下を周遊し、資金を集めんとの計畫ある由を余に語れり。

彼曰く、本山は九月下旬より、十月上旬頃に亙りて、晴天多く、氣亦清ければ、展望最佳なり、又本山は、御嶽よりも一段高く、空氣の純潔なること、御嶽の比にあらず、希くば山岳會に於て、世の愛山家に紹介せられよなど、頗る自我中心の點なきにあらねど、彼が本山の爲に熱心に盡さんと欲する衷情に至りては、憫れむべきなり、彼又曰く、現今の新室堂は、用水燃料を得るに不便なると、且つは尖峰の頂にありて、暴風の難を免れ得ざるとにより、何れ北方の凹地を選定して堂を遷さん考なりと、好漢幸に自重自愛せよ。

穗高の仙人

乘鞍新室堂に關しては、梶谷氏の紹介により、多大の便宜を得たる予は、玆に穗高（ホタカ）の仙人を紹介して、聊か登山者の便を計らんと欲す、穗高の仙人とは、即ち有名なる上條嘉（カミジヤウ）門次翁なり。



上條嘉門次（高野鷹蔵氏撮影）

翁は信濃國南安曇郡島々の人、若年の時より、梓川の峽谷を以て、消光の地となし、穗高の東麓、宮川池の畔に小屋（方二間半位）を營み、冬は獸を狩り、夏は岩魚を獲、優遊自適四十餘年、今（明治四十二年）は六十三の老人なれども、矍鑠たる元氣は壯年を凌ぐ、翁の仙居は、宮川の池畔に位するを以て、或は宮川小屋の通稱あり、島々を距ること、約六里、此間七千餘尺の德本峠ありて、人寰との關門をなす、島々に於ける翁の實家は、生計頗る豐にして、土地の中流に位し、毫も翁が補助に待つものにあらざるも、翁が性磊落淡白、俗塵の裡にありて齷齪の生活を營むを好まず、自ら言ふ、十四歲のときより此峽谷に入り、深山幽谷を跋渉すること、玆に四十餘年、山々の稜の數、谷々の巨石の數まで、歷然腦裡に在りと。

近年信飛境上の諸山を探らんと欲するもの、概ね北は中房温泉、南は上高地温泉を根據とす、抑中房方面の剛力等が、獵夫横澤類藏の指導を仰ぐこと、猶上高地方面の剛力等が、仙翁上條嘉門次の配下に屬するが如し、二老の名聲は、實に南北に嘖々たるものと謂ふべし、而して烏水氏の所謂「頗る謙遜ならぬ類藏」すら、尙ほ尊敬を嘉門次翁に拂ふと云ひ、又山麓地方十數里の人々が、皆翁を呼で「嘉門次サ」と敬稱するに至りては、如何に其德望の大なるかを察するに足れり。

白骨温泉より、乘鞍及び附近の諸山に登る剛力料は、一日一圓（口雇主持）なれども、上高地に於ては、普通剛力

嘉門次小屋（山野鷹藏氏撮影）

は一圓五十錢（口向ふ持）嘉門次翁は二圓とす、而も翁は單に案内として應ずるも、剛力としては應ぜず、是れ客の擔荷を謝絶するといふ意、翁は實に區々たる擔荷夫を以て自ら居らざるなり故に嘉門次翁を案内とするものは、別に荷擔ぎ人夫を雇入れざるべからず、殊に島々方面より、剛力を雇ひ來るときは、天候の爲め、温泉場に滯在せんか、其日數中前記の賃金を給すべき、不都合を覺悟せざるべからず、予等始め翁を以て頗る高額なる賃金を貪るものなりと思へりしも、事情已むを得ざる所あり、翁を案内者として雇ひ入れぬ、（四十一年八月下旬）、予は豫想すらく、彼は體格偉大、相貌亦逞しき屈强漢ならんと、豈圖らんや、彼は肉附き稍豐かなるも、身長は尋常以下、顏面圓くして豐頰、常に莞爾として笑窪を湛ふるは、さながら仁慈なる大黑樣に似たり、言語淳朴、餘り多く語らざれども、亦敢て語らざるにあらず、而も言々趣味あり、語々親切ならざるはなし、彼曰く、「以前測量部の御役人を案内せしときは、一日三圓の賃金を申受けしも、御前樣方は、山の學問に御出でのことなれば、一日二圓で承知したわけだ、實は此年齡になりては、槍や穗高の天上へ行くのは厭だ、池（宮川池）や、川（梓川）で、岩魚を釣れば、遊び半分、烟草を吸ひながら、運がよければ、一日に三圓、不首尾でも一圓の上なれば、平均二圓は樂に取れるからの一」とは、彼が飾りなき實際談なり、彼は予等を槍嶽に案内するの途、行々梓川にて釣り得し十數尾（時價四五十錢）の岩魚は、悉く山上露營の際、予等に饗應しながら、其代價を受けず、曰く「旦那樣方の慰みにしたもの、案内の手間の遊びなれば、代金は受けませぬ」と。

當時上高地温泉にては、一日の宿料六十五錢、而も膳部麁末にして、白骨温泉とは、比較すべくもあらず、其高價と麁膳とは隱れもなき評判なりければ、翁は案内の途すがら、予等に告げて曰く、「温泉場は宿料ばかり高くて、食物粗末なれば、此後御出での節には、おれの小屋に泊りなさい、岩魚の御馳走は、澤山します、宿料は實費でよいから」と。彼は實に親切なる老翁なりき、山中に殆んど一個の類型を作れる、貪慾無慚の、所謂剛力輩と同一視したる予等が豫想は、誤りしなり。

彼は岩魚を釣りつゝ、時には其潑溂として綸に上りたるまゝを、生きながら口にすることあり、曰く「岩魚の眞味は、これでなうてはわからぬ」と。

彼は青鹿の毛皮を着しぬ、曰く「これは野宿には、身に濕氣を受けぬ効あり」と、彼は常に幽谷に自生せる蕗、山葵、蕨、獨活などを以て、副食物となす、曰く「清潔にして、娑婆の汚れなし」と、是れ彼が矍鑠たる所以か、彼は既往四十餘年間に於て、青鹿を獲しこと數百頭、熊は八十餘頭なるが、死ぬまでには百頭を獲んと語りぬ、其意氣や盛なりと謂ふべし。

或時翁、狩の爲めに深谷に入り、終日を暮らしければ、一夜の宿を借るべく、崖側の洞穴に入りて臥しけるに、臀に

觸れて動くものあるよと怪しむ程に、怪物は忽ち翁が肩に咬み附きぬ、噫態なりしか、さるにても、穴中にては如何ともなし難し、穴を出でゝ格闘せんと、そのまゝ穴の口まで這ひ出でしに、幸にも傍に立木ありければ、左手之に縋り、全身の力を右拳に込め、烈しく熊の鼻を衝きしに、不意を打たれし熊は、脆くも數十丈の崖下に轉び落ちけり翌朝遂に此熊を仕留めたりとは、翁が自慢の功名話なり、何等の快事ぞ。

彼は六十以上の頽齡なれども、槍嶽の絶巔、所謂槍を攀登するときには、輕快猿の如く、顧みては予等に警戒注意を加ふること諄々として孫兒を諭す如し、其溪流の徒渉、石上の飛行、之を見るに悠々遲々たるが如くにして、而も寸毫の無駄足なき爲め、其捗取ること、予等が汗みづくになりての急行にも勝れり、穂高に至りては、危岩磊々、徑路大に撰擇を要することゝて、數尠き案内者の中、特に嘉門次翁を煩はすを以て、最も策の上乘なるものとなすと云ふ。

翁や淳朴なり、親切なり、されば決して賃金の爲めにのみ動くものにあらず、故に登山者にして、彼が同意を得んと欲せば、須く眞摯の情を以て彼を動さゞるべからず、普通一般の剛力扱ひにして、彼を輕視せんか、一日數金を投ずるも、一旦厭やだと言ひ出したが最後、頑然として、應せざるなり、是れ彼が穂高の仙人、上高地の漁隱たる所以也。

（大　平　晟）

信州高原落葉松の色彩

七四

左は本年三月、病を信州田中温泉に養へる、水彩畫家丸山晩霞氏より、私に宛てた私信の一節である、信州高原の落葉松、山の雪、川の柳等に對する、色彩的觀察が、精緻を極めてゐるので、こゝに載せることにした。（烏水）

出發前夜は、非常の降雨でありましたが、二十一日の朝は、拭ふた樣な好天氣で、風も無く、暖かく、關東平野の春景色面白く感じられました、さて車窓に映じ來たるものは、紅白梅、榛の花、桃のふくれたる蕾、彼岸櫻の笑ひかけしもの、若草の野、青麥、如何にも若々しい春の氣が充ちてゐました。

碓氷嶺にかゝる、横川より登り行く鐵路の堤には、蒲公英なんどの花咲き、小流のあたりは、柳の花等面白くありました、八合目頃より、雪を見ました、昨夜の事は、この邊りは雪であつのです、九合一合と、雪は深くなりて、輕井澤に出づると、白妙の大海原でした。私は。かゝる光景には、小供のときより接してゐまして、決して珍らしくはありませんでしたが、久しく都塵に馴れし眼より、今更の如き感が起りました、右方碓氷より淺間山、離山、これは近い大濤で、くろふ山、たけ、烏帽子、三峰、廣野ヶ峰と、漸々遠く、小波の走る樣、何ともいふ事が出來ません、左方は佐久の諸山、立科、八ッヶ嶽より中央山脈のうねりより、遠く飛信の境なる日本アルプスのうねり、これが眼も

まばゆい程、白いのです、そして落葉松の林の、散點せるものは、大海原の小島とも見る可くか、落葉松は、一種の感を與へる、それは他の松や濶葉樹でない、荒涼とか、高潔とか、落葉松の風姿は、たしかに俗でない、仙骨を帶びてゐる、高原と落葉松、落葉松を望むと、空氣の清潔なる高地に入るといふ感が起る、落葉松の美は、四時共に面白ひ、初夏晩春の萠芽の、萠黃色は、鮮明で、他に多く見ざる特殊がある、盛夏の暗く明るい青綠色も、如何なる遠方より見ても、落葉松である事を知る、特別の色彩で、その繁茂せる樣は、丸味と深味を兼ねて、軟かく、時には暗青綠の雲かとも思はするので、遠く望み、近く眺め、又はその森林中に、這入ると、慥かに人間てふ事を忘れて、神々しくなる、秋の霜葉、又特殊の色彩がある、全體の上には、最も明るい、黃茶色であるが、時には紅點、赤黃等に發揮し、殊には夕日の投じるとき、雲間のもれ日に輝きたるとき等は、神の光かと思はるゝ事がある、春夏秋の美なるは申すまでもないが、冬の落葉松の美に至りては、余は未だ筆に上げた事が無い、多くは他の枯樹と一樣に見なして、別にこれといふ美も認めなかつたのであらふ、この度、白妙の、大波原に於ける、小島の落葉松を見て、明なる白と對比して、發揮されし色彩は、以下の如く、暗部は紫色、明*部即ち去年のびたる新枝は、太陽の光りに見るとき、赤味を含みし金色、カドミユームオレンヂの如く、影になりし部は、エルローオーカーに、紅を加へしもの、これが紫と、白との、對照であるから、寒いうちに暖ありて、一種高潔の色に感ずる、例へば年老けたる名僧等に接する感がありて、枯骨の裡にも、又暖かき處が見える、山の正しき輪廓を見るは、雪に掩はれし山である、大きな輪廓は、申までも無く、小さな「しわ」山の中の小山等、明かにその正しき形を知る事が出來る、淺間山等は、單に山とのみ思ふてゐたが、白なる淺間山は、圖の如く現はれて、輪廓のみにても深味と、遠近が現*はれる、太陽と空との附近のものゝ關係で、雪には異彩を放つ、金色のもの、紫色のもの、時に鮮綠を雪に見ました、二十一日の春日は、高原の寒い信州までが、暖かく、汽車中又いやに蒸し暑くて、苦しかつた、それがため、小諸邊より頭痛烈しく、それから先、河中島あたりまでは、眼を閉ぢて居つた、犀川の橋にかゝる、川邊を通じたる柳（コゲ茶）色の色彩を帶びて、川邊を繞ふてゐる光景は、信州高原なる、早春第一の景物です、信州の春陽公、先づ來つて、第一に柳の眠を醒ます、柳よりまだ早いのは榛の樹の花であるが、色彩暗色なるため、人目に入らぬので、他は冬そのまゝの光景なるに、川邊の柳のみ、先づ色づく、柳にも、青柳、葉柳、柳散る、枯柳等の景品があるが、柳の美は、春であらふ、しかも早春であらうと思ふ、景がよいとか、惡いとか、美とか、醜とか、名をつけるものは、人間であつ

て、人間に多く美觀を與ふるものが、景とか美の上乘となる、この點より、僕は柳の美は、早春と答ふるので、これは僕一人の美であります。

登山者の便秘と下痢

貴楮拜誦過ぐる日の晩餐會に於ける小生の發言に因みて御問合せの件々拜承仕候實は口を守ること瓶の如くならざりしを今に於て大に悔ゆることに候、素よりArztならざる小生が處方致候ことは出來不申候へども御書中にも相見へ候登山時の便秘又は下痢は一寸趣味あることゝ存候まゝ少少調べ申候、晩餐會の當時梅澤君及其他の多くの諸君は便秘に惱むと言はれ河田君は之と反對に下痢すと述べられたるやう相覺え居候、此便秘又は下痢の原因らしきものを列擧すれば概ね左の如くなるべしと存候。

一飲食物の變化に由る關係。

a、平素と異なれる食物を攝取すること（下痢又は便秘を來たす）。

b、食事時間の一定せざること（下痢又は便秘）及早食と爲ること（下痢）。

c、食物の量の平素より多きこと（下痢）少なきこと（便秘）。

d、食料を攝取すること少なきこと（便秘）。

e、刺戟性の飲食物を攝取すること少なきこと（便秘）。

二、身體の動作に由る關係。

f、身體を勞すること平素に過ぎ（下痢）特に急劇に全身の疲勞したるが爲め腸の蠕動をも微弱ならしむること（便秘）。

g、動作に隨伴し多く發汗すること（便秘）。

三、氣壓の低下に由る關係。

h、身體の水分の發散を盛んならしむること（便秘）。

i、高地に於ける神經障害の腸の神經にまで及ぼすこと（便秘）。

尙ほ詮索致候はゞ此外にも可有之候、されば胃腸が右の如き飲食物の變化に堪え能はざる人は逸早く傷害せられて下痢を起すべく候、而して胃腸が之に堪え得るまでに健全なる人は當然の結果として便秘すべきことかと存候、之に對する處置は第一に其原因を除くに在り候へども中には人力を以て如何にとも爲し難きものさへあり候事故所謂臨機應變の處置の外無之ことゝ存候、即ち便秘者下痢者共に胃腸を健全にし下痢者は相當の止瀉劑を用ゆべく便秘者は無害の下劑を用ゆることの外無之と存候、胃腸を健全ならしむべき藥品は數多かるべく候へども本邦人に取りて最も重要なるは澱粉消化劑に御座候澱粉消化劑としては第一にヂアスターゼ類を推すべくヂアスターゼ類に種々あるが中に最も優良なるは高峰博士發見のタカヂアスターゼに御座候、同品は他のヂアスターゼに比し効力强きのみならず其强度常に一定なるが故に使用上頗る便利に候殊に其錠劑は携帶

及服用に面倒なく登山者等には最も適當かと存候、其用量は毎食後直に一錠又は二錠宛水にて服するものにて之を持續すれば恐らく澱粉消化不良を發すること可無之候、下痢者は多く腸の澱粉消化不良に因るものなるが故に右タカヂアスターゼだに服し居らば自然に治すべく候へども若し止瀉劑を服せざれば安心ならずとならば羽田陸軍藥劑正の創製せるオイベリンなど然るべしと存候、本品にも錠劑ありて携帶服用に便利に御座候即ち一回一錠乃至二錠宛一日三回服するものに候、便秘者は水分を吸攝すること最も必要に候毎朝空腹時に食鹽少量を點じたる冷水一杯を飲用することは効あるべく候又晩餐會の當時承はりたる生胡瓜携帶說も妙なるべく候併し胃腸の勝れて健康なる人の外には御勸め致さず候、便秘者の用ゆべき藥品として推奬すべきはカスカラサグラダに御座候本品は北米南洋沿岸に產する植物にて北米の有名なる製藥會社パークデビスの研究員に依りて發見せられたるものに候無害にして安全なる緩和下劑にして常習便秘の特効藥として人の稱用するものに候、登山者の便秘は多くの點に於て常習便秘に酷似致候ことゝて全く副作用なく腸の蠕動を催進するを特長と爲せる本品は之にも亦同樣に奏効致候ことゝ相信し候、本品には右のパークデビス製のカスカラ糖衣錠と名くる錠劑あり携帶にも服用にも便利なるものに候即ち一回二錠づゝ一日三回服用(空腹時に)すれば翌日に至り快き便通を得べく候、斯くして日々持續し用ゆれば少なくも便秘の苦痛を免れ得んかと存候、便秘と下痢に就ては以上にて不完全ながら御答致たる積りに御座候、次に御書中に有之候齒痛に就ては常に齒痛ある人が氣壓低き地に行かれたらば當然あり得べきことゝ存候、チト登山者には無理なる注文に候へども大抵の齒痛は熱き湯(食鹽湯なれば更に可なり)にて含嗽すること兩三回なれば鎭痛するものに候、若しそれにても鎭痛せざれば……外用の豫備に沃度丁幾を携帶せられたるならば其……沃度丁幾一滴を齲窩又は齒槽に滴下せらるれば止み可申候、ロイマチスある人が登山せる場合には啻に齒痛のみならず其他の神經痛をも發する虞あるべく候。

小生自身の經驗に徵して斯かる人々は必ずアスピリンを携ふることを忘れてはならぬことゝ存候、本品には特異質ある人々ありて必ずしも一樣ならず候へども小生などには最も確實に奏効し其○、五瓦を一回服用すれば約十五六分時の後全く痛みを忘れ申候、されば一夜のアスピリンを八包つゝに包み(バラヒン紙を用ふ)て携帶し疼痛を覺えたる時一包又は二包を服用するを可とし候但し本品は成るべく食後に用ゆるを宜しとし候然らざれば胃腸を害するの虞あるが故に同時にタカヂアスターゼを併用すること然るべく候、其他山中りにて腦貧血を起し嘔氣嘔吐眩暈等を發したる場合には既に世に周知せられある興奮劑の服用然るべく候即ち少量のブランデー又はウイスキー等(若くは清酒にても燒酎にても)を與ふれば足ることゝ存候、若しそれにても無効ならばそは既に素人の手にては處置し能はざる

程度の者に可有之候こと故速に下山せしめざるべからずと存候、總じて賣藥等は患者に慰安を與ふるに過ぎざるものとて用ゐずして濟む場合には成るべく用ゐざるを良とし候、右申上候藥品は普通藥故何人にても購ひ得らるゝものに候現今の時價等をも添へて重て左に記し申候。

○胃腸を健全にすべき爲め總ての登山者が常用すべき澱粉消化劑

タカヂヤスターゼ錠　毎食後一乃至二錠

C. T. Taka-Diastase.

右百錠入一瓶　時價金一圓也

○下劑を起したる時用ゆべき止瀉劑

オイベリン錠　一回一錠乃至二錠、一日三回

C. T. Euberin.

右百錠入一瓶　時價金一圓三十五錢

○便秘者の服用すべき暖和下劑

カスカラ糖衣錠　二錠宛一日三回

S. C. T. Cascarasagrada.

右百錠入一瓶　時價金三十五錢

○神經痛の場合に服用すべき藥劑

アスピリン　一回〇、五瓦乃至一瓦（一瓦は我二分五厘

Aspirinum.

に當る）

右一弓入（約我七匁）時價和製は金十七八錢、バイエル會社製は金六十五錢　成るべくはバイエル會社製を可とし候。

右の外擦過傷などの豫備に絆創膏を、打撲傷などの豫備に沃度丁幾（携帶には不便なれども）を携ふるは強ち無用ならずと存候、絆創膏には近來北米より輸入せるジョンソンジョンソン會社製の亞鉛華絆創膏頗る便利に御座候即ち一インチ半インチ等の絲卷型に出來たるものは登山者必適に候本品の輸入元は東京日本橋室町の三共會社なれども著名なる藥店には有之ことゝ存候。

右甚だ粗畧に候へども貴問に御答申上候他は御尋に從ひ出來得る限り取調べ御參考に供すべく候。匆々不盡。

六月三日夜　二階堂保則

高野鷹藏樣

本篇は、會員二階堂氏が、忙中特に吾人の爲めに執筆されしものにして、吾々登山者の最も有益として感謝すべきなり。（たかの生）

信濃湖水の深度

橋本福松氏の談なりとて長野新聞に出でたる、信州湖水の深度、及び容積等、左の如し。（U. K. 生）

◎一番深い湖　湖沼の深さに就ては、漁夫の言に信を措くことをゆるさぬ、彼等は迷信其他の事情のために實際よりも深く思つてるのが普通である、田中橋本兩氏が實測の結果は青木湖が一番深い、勿論信濃の湖沼中での最深の湖である、四湖の實測の結果を並べて見ると。

湖名	最深部	平均深度
青木湖	五十八米	二十二米弱
野尻湖	三十七米	十五米餘
木崎湖	二十九米餘	未計算
諏訪湖	七米餘	三米

即ち面積に於て最大なる諏訪湖は深度に於て最小である、實に青木湖の最深度は諏訪湖の八倍餘、木崎の二倍に當つている、更に驚くのは、青木湖が深度に於て信濃第一であるのみか其容積に於ても第一であることである。

◎**青木湖の容積**　は七十七立方粁餘であつて、諏訪湖の容積の約二倍であると聞いたならば驚かないものは殆んど有るまい、實に青木湖は水量の最も多いことに於て信濃第一の大湖である、彼の廣さに於て第一であるところの諏訪湖もあはれ容積に於ては野尻湖に及ばざること遠く、木崎湖と伯仲の間にあるのである、以て彼れが如何に沼的の湖沼であるかが判かる。

◎**湖底の有樣**　最も簡單であるのは諏訪湖であつて其傾斜の如きも大に緩浸なるもので、試みに彼潴水を酌み干して其跡へ湖岸と同じく禾稻の類を植付けたとすれば人間の眼には殆んど平地であると僻見される程である、青木湖や木崎湖も比較的簡單で、其湖底には既に澤山の沈積物が堆積していることを示している、沈積物が多量に堆積したにも拘らず湖底の複雜であるのは野尻湖である、之れは野尻湖が其東方に聳えている斑尾山爆裂の碎片の堆積に因つて出來た湖であるからで其湖岸が非常に出入の多いと共に湖底が凸凹に富んでいるのである。

◎**湖中に島の在るのは**　野尻だけである、名は琵琶島と云つて周回六百九十米湖心の東北に嚴然と浮んでいる大層風景の佳い島で欝葱たる深林の中に辨財天祠を祭つてある昔は此島に渡るべく長さ四町に餘る橋を架けてあつたのであるが、維持費の多く費へるところから（此邊の深四米乃至八米）今は撤して跡かたもない。湖岸の出入の多いのは野尻に次いで青木湖であつて、彼青崎秋葉崎等は本湖第一等の景勝地をなしている、木崎湖及び諏訪湖の湖岸に至つては甚だ單純で隨つて湖岸に於ける勝地としては木崎湖に於ては森の城趾、諏訪湖に於ては小坂の觀音くらいに止まつている。

横嶽登攀遊草

今爰に横嶽と稱するは、蓼科山の東南隣にある、未だ世の人の多く足跡を印せざる一つの嶺峰なり。

村の某々等十數輩、郡界調査の爲め、横嶽横斷を企てたれば、予にも是非行けやなど薦むる者のあるを幸、元來數奇な山登りの事とて、一も二もなく同意なしぬ、母刀自何くれとなく用意し給ひ、發足の間際にも、子を思ふ親心に、猶も種々注意なし呉れしかども、そこ〳〵に聞き流し、拂曉立つて霜柱を踏みつゝ、山路に向ふ。年は明治三十八年、時は御嶽乘鞍の山頂、降雪の白きを見る十一月一日なり、

そよ吹く風も身に沁みて寒し。

さき庭の桃の木末に啼く雀嶽ゆく吾れにさちあれとなけ。

耶摩津美迺伊加里二不禮波恐ろしと波々乃命はくれぐれもいふ。

垂乳根の波々のみ情背負ひたる二個の握飯にこもりたるらし。

橋の上に眞白置く霜早や一人ふみて行きけん足跡が見ゆ。

坂のぼり里見返れば家煙しらしら明けに棚曳き渡る。

道追々爪先き上りとなりて、松林の一帶を過ぐれば、眼界とみに開けて、日も出でぬ、鳥も鳴きぬ。澄みきつたる空に雲なく、見渡す草野已に末枯れて、茫寞たる間、只僅かに點々松虫草の咲き殘るを見るのみ、行手を望めば、巍峨たる立科八ヶ嶽の連峰、今し朝霧の立分れんとしつゝ頻りに動くを見る。日露戰役に從軍して、久しく鄕土の山川に接せざりし吾には、今耳に聞くもの目に映ずる物、何たるを問はず、悉く感じよく、快云ふ可からず。

もろこしの禿根はげ山見し目には今見る野川繪をみる如し。

白雲のとばりたれたる八ヶ嶽硫黄嶽は半のみ見ゆ。

山裾迺あらゝ松原朝あけに啼きのともしき鳥の聲すも。

道の邊の千草八千草うら枯れて松虫草のたゞ咲くを見る。

二里餘の草野を辿り、楢、櫟、落葉松の群立を通り過ぐれば、既に横嶽山麓なり。暫くいこひ、後より來べき人々を待つ、程なく衆皆集まり、勢揃ひとなつて、瓢箪坂の急坂に懸る、行手を妨ぐ熊笹の幾條脊長けと延びて、いやが上にもいや茂り、困難一方ならず、掻き分け、踏み分け、轉轉幾度か辷り倒れつゝ、辛うじて十數丁を上れば、熊笹漸く絶へてカムギ（草の名）許りの僅かの平地あり、喜んで其一方に陣取り、頭大の握飯まづ一個を平らぐ。

山深く入りて思へば足乳根の梅干むすび尊とくありけり。

道を左にとつて、栂群れの小暗き中を暫く登れば、周圍里餘に亙るの平眼前に現はる。衆忽ち兩手を揚げて快哉を叫ぶ、誰やらがいふ幽仙境なりと、岩又岩を以て疊みなしたるが上に、苔厚く一面生ひたるの狀、宛然として青茶色の毛氈を敷きつめたるが如し。這松の點々生ふる有樣、立岩の工合、是れ正に人間の與かり知らざる天園なり。

噫面白の所や、閑もあらば、年々來て遊びたし抔語りつゝ、郡界に出でゝのぼる。

司等が國の境ときりれけるその跡どころ辿り行く

加裳。

横嶽のつがの木末の猿麻桙あまり長けば手にとり

て見し。

道愈々急にして、呼吸漸く迫る、誰一人物言ふものもなく、大玉の汗は額より頰につたひ、偶々目に入りては痛みを感じ、口に入りては鹽辛きを覺ゆ、岩頭に腰を卸せば、池一つ見へけり、尼池とぞ云ふなる、古老の物語りなどそゞろに偲ばれて。

秀岩ゆ遠見下せば巖がくり池の片面は見るすべもなし。

人の世をのがれんためと山深くこもりにけらしをみな子わはれ。

登ればのぼる程險にして、白檜帶を出れば、中腹なり、巨岩横はり、歩行甚だ困難を極む、大岩を攀ぢ上つては攀ぢ下り、歩一歩として、容易に足を踏むこと能はず此所「親捨場」とか云ふ。

親を捨て山に登ると山津美の神は怒りて降れる雪かも。

歸ることも出來ずといひて泣き出しゝその子の袖に雪猶降れり。

龜甲の池。四面這松を以て圍まれ、湛ふる水深からず、晝過ぐる陽光は、この池面を斜に照らし、底にある小石悉く浮けるが如く、龜甲に似たり、池岸の岩上に小祠あり、三高山龜甲池七面大明神。明治二十四年十月三日初登山開。佐久郡前山村行者竹内袈裟治開。と麗げに讀まる、池近き這松に休らひ、汗を拭ふ。

◎雜　錄　横嶽登攀遊草

這松のかくめる池に西日さし底の細石（サヽレ）のすき透り見ゆ。

現身の世も今の世の人なれや山を開くとこゝにこもりし。

底澄める池の岸べのかりゐはも今こぼたれて跡形もなし。

山祇の神をかしこみそこにあるみ池の水を飲む人も奈志。

這松帶に出でゝ、散り亂る松笠を踏みつゝ、頂に至れば、吹き上ぐる風、裾を拂つて寒さこと限りなし、三角測量臺の傍にて、這松を熾んに焚いて、一大騒ぎをなし、握飯を燒いて晝餉す、其焦げた眞ッ黑の握飯のまづさ加減たらなかつた、眼下に見ゆる南北佐久の稻田原は、時しも秋の收獲中なるが、田面悉く黑み居るを見ては、民衆の悲聲も偲ばれて、爲めに眉を寄せざるを得ざりき。東方に位せる妙義榛名の山々は、時惡しく雲霧中にあつて、見ることは出來ず。名にし負ふ富嶽の高峰も、同じく八ヶ嶽裏に隱れて見る能はざれども、穗高、乘鞍、御嶽、駒ヶ嶽、槍ヶ岳の諸高山は、屹々として天を摩し、指顧の間に見へ、近くは蓼科山の圓顱、八ヶ嶽の巖峰を見る可く、東北に當つて悠然と烟を九天に吐くは、淺間の火峰である、甲斐の金峰山麓よりいでゝ淺間裾野の稻田を横切り、北方へ延長して居る帶のやうな銀線は、千曲の淸流である。予はこの自然の大觀に接したる時は、實に人間といふ人間の思ひはなく、

只頭腦なる一物が、宇宙にある如き心地がした、實に壯大で實に神嚴なる光景で、何とも云ひやうのない感じであつた。

湯津磐の千岩迺上に立つ吾を吹き落さんと天つ風吹く。

火之神の昔すさびしいたゞきは松も生せず砂原にして。

這松をさわにし焚けば久方の天津御風に山鳴り渡る。

横嶽迺耶摩の眞ぼらにたく煙里の人らは如何にか見らむ。

横嶽の湯津磐村に苔むさず駒草少女さびゞ〳〵立つも。

横嶽の山にあるてふ七つ池五つを見れば日は片向きぬ。

阿米津神久二津御神の手力になりけんものか岩立の山。

栂の木をしげみあつけみ八千尋の谷つ底ひは常の闇加裳。

こゝにして不二ヶ根見へず見さくればいかし八ヶね左霧迷へり。

佐久人が馬養ふとかこひたる野邊の草原馬あそび見ゆ。

蓼科の山をひだりに佐久平稻田を見れば民泣く思ほゆ。

今年はも何處も同じ佐久のべわ五百の稻田に案山子見へなく。

久堅の雲遠長に帶をなすつかま野の原雨降るらんか。

淺間山雲湧き起りとこ立の名に負ふ煙は見るすべもなし。

頂の岩高ければ這松の上をあやぶみ這ひて越しけり。

うまし國信濃を圍み飛驒に亙る五百重群山雪早や置計梨。

下山の仕度して歸路に向ふ、是れから先きは眞下りなれども割合に危險な所が多い、岩角を横這ひに、或は辷り落ち、或は飛び落ち、這松の下を何度ともなく潛り拔け、道といふ道もない栂木立の中を、見通しに下ると、横嶽の裏山二兒ヶ池へ出た。

二兒ヶ池。いく世昔のことなりけん、さる事あつて夫婦二人とも、此池に來て姿を失ひしと言ひ傳ふ。女池男池と二つあれば、女男池とも云ふ、いづれも水漫々として蒼黑く、三方栂の木立を以て圍み、一見凄氣を覺ゆ、大旱の年、佐久人雨乞ひに來るの外、米食ふ虫らの到る所に非ずと云ふ、

八千尋の岩根下れば木がくりに二つの池はなかば見へつゝ。

池水を廣みうれしみ遊びけん小鳥のむれは高くと

びけり。
人の世をしげみこちたみ妹と背がこゝに失せけむ見れば悲しゆ。
横嶽迺山鳴りぞよみ荒るゝ夜を池の男神は妻訪ひすらし。
現世のなげきはひめて眞鏡と照れるみ池の水もにごさず。
雨乞ふと佐久の人らは鳴子もち山遠のぼりこゝに來るちふ。
荒金のひでる八月佐久人はをみなも交じり雨乞ふらしも。
かくみ立つ栂の木がくり蒼黑くたゝはす池の水のかしこさ。
しみ立てるつがの木ぬれゆ鳴る風に池のさゞ波たち〳〵止まず。
並み立たず白枯古木池際にいく世へぬらん知るよしもなし。
玉櫛笥二兒ヶ池につがの木のまばら白枯影をうつせり。
栂の木の中にまじりて白枯の影さゞ波にゆら〳〵するも。
檜つがの木むれのうす暗き中を、少し上つて下れば、半水無き何とかいふ池あり、此處にて直路をとりし人々の俟てるに遇ふ、暫くは休憩して池の眺めに時を移し、栂檜の密

◎雜　錄　横嶽登攀遊草

林中を拔け出れば、クワット明るくなつて、小笹しみ合ふ一條の道に合した、是れは即ち諏訪から、南佐久の臼田望月邊へ越すべき通路なのである。一同大河原峠に出た時は、太陽は將に暮れなんとして、僅かに名殘り惜しそうな光りを横さまに放つて、今向ひつゝある吾等の顏面を照してまばゆい。顧みれば横嶽山頂は最早白雲裡に鎖されて、峰頭亦見ることは出來ない、里餘の道は全くの夜に入り、漸々瀧温泉へ這ひつけた頃は、何日の月にや最う無くなつて仕舞ひ、そこらに鳴く虫の聲さへ幽かに聞ゆる程とはなつた、人々は一杯飲んで其勢で歸らうと、旺んに酒を呼んで、中々の大元氣であるが、予は癒へたとは云へ、病後の體である、腰を卸すや否や、忽ち全身に疲れを覺へて、何をする勇氣も出ない、そこへずらり横になつた其儘、いつしか魂は華胥の國へ遊んでしまつたのである。

終りに一言道案内的のものを記して置う。汽車は中央東線芽野驛にて下車。芽野驛より北山村湯川に至る、此間二里半能く馬車が通ふ。北山村湯川より瀧温泉に至る、此間一里、斜面至つて緩く、道幅も山道としては隨分廣い方で、可成りよい道で、歩行に苦しくはない。同温泉より横嶽までは何里あるか解らぬが、兎に角温泉を朝出發すれば、一日には樂に登山して歸ることが出來る。横嶽には高山植物は予の如き素人目では、至極乏しいやうに思はれるが、池が澤山あつて、山は一寸面白い山である、予は五つしか見なかつたけれど、池が七つは慥かにあるそうである。蓼科には立派な登山道が明いてるので、登攀に餘り困難も感じないが、横嶽には道といふべき、判然とした登山道がない、それに岩立の嶮が、所々あるので、登るには非常に困難する。蓼科山は登つて見れば、夫れ程でもないが、横嶽は登るに少なからず苦勞するだけあつて、登つて見て、充分苦勞甲斐のある

面白い山である。

（篠原志都兒）

本州中央山岳地氣溫表

左は一昨年八月より九月初めに亙れる旅行中、主として越中、飛驒、信濃、甲斐の各地に於て測りたる、氣溫表なり、溫度は凡べて華氏に據る。

（榎谷徹藏）

月	日	時間	溫度	場所	天候
八月八	日	後八時二十分	八六	大阪	晴
九	日	前六時二十分	八三	大阪北郊	淡曇
同	日	後〇時十分	八八	敦賀	微雨
同	日	同八時五十五分	八三	富山	曇
十	日	前五時十五分	七九	同	晴
同	日	同九時五十五分	七八	上大久保（イホリ）	雨
同	日	後〇時四十分	八二	庵谷	同
同	日	同四時十五分	八一	千貫橋（越中飛驒國境）	曇
同	日	同七時十五分	八〇	東茂住（モズミ）	淡曇
十一	日	前五時三十分	七七	同	同
同	日	後〇時十五分	八四	船津（ヅ）	同
同	日	同四時四十五分	八三	見座（ミザ）	細雨
十二	日	前六時	七七	同	斷雲
同	日	同九時三十分	七七	葛山隧道内（メゴロケ）	晴
同	日	同十一時	八五	田頃家	同
同	日	後三時四十五分	七八	平湯	同
同	日	同九時五十分	七五	同	同
十三	日	前六時	六七	同	淡曇
同	日	後〇時三十分	七六	同	晴
同	日	同十時四十五分	六六	同	同
十四	日	前五時	六一	同	快晴
十四	日	前九時十五分	六一	乘鞍鑛山事務所	快晴
同	日	後〇時十五分	八一	乘鞍山肩第一雪田	晴
同	日	同五時	六二	新室堂内	霧、風
同	日	同六時二十分	五一	同 堂外	同
十五	日	前四時十分	五二	同 堂内	濃霧、風雨
同	日	同五時十分	四七	同 堂外	同
同	日	後五時	六九	白骨	雨
同	日	同九時三十分	七二	同	同
十六	日	前六時十分	七〇	同	同
同	日	後一時三十分	七四	同	微雨
同	日	同十時三十分	六九	同	曇
十七	日	前六時二十分	六八	同	淡曇
同	日	同十時三十分	七三	檜峠頂	同
同	日	後〇時三十分	七九	大野川（シヽ）	同
同	日	同六時三十分	七七	島々〈	晴
同	日	同九時五十五分	七七	同	同
十八	日	前五時二十分	六八	同	快晴
同	日	同十一時三十分	七七	岩魚留小舍	晴
同	日	後五時三十五分	七三	上高地	同
同	日	同九時四十五分	七二	同	快晴
十九	日	前五時十五分	四八	同	同
同	日	後二時三十分	七六	赤澤小舍	晴
同	日	同六時三十分	七二	坊主小舍	同
二十	日	前四時四十分	四八	同 窟前	快晴
同	日	同七時三十分	五三	槍嶽絶頂	同
同	日	同九時	六〇	坊主小舍	晴
二十一	日	同七時三十分	五八	上高地	快晴
同	日	後〇時三十分	七三	同	同
同	日	同六時五十五分	六五	同	同

二十一日	後十時三十分	六三	上高地	快晴
二十二日	前五時五十五分	五三	同	同
同　日	同十一時五分	七四	德合峠頂	
同　日	後〇時四十五分	七七	岩魚留小舍	晴
同　日	同八時	七四	島　々	同
二十三日	前六時	七三	同	微雨
同　日	後〇時二十五分	七七	同	同
同　日	同八時十五分	七五	同	同
二十四日	前五時五十分	七五	同	同
同　日	後一時五分	七九	松　本	濡雨
同　日	同十時三十分	七九	甲　府	同
二十五日	前六時	七八	同	同
同　日	後〇時	八一	同	同
同　日	後九時三十分	七八	同	曇
二十六日	前五時三十分	七五	同	晴
同　日	後〇時十五分	八三	同	同
同　日	同二時三十分	八六	同	曇
同　日	同十時三十分	七九	同	同
二十七日	前六時	七九	同	同
同　日	後〇時	八三	同	淡曇
同　日	同九時	八一	同	雨
二十八日	前六時	七五	同	晴
同　日	後二時三十分	八五	同	同
同　日	同九時五十分	八四	同	同
二十九日	前六時十分	七八	同	淡曇
同　日	後一時七分	九一	龍　王	晴
同　日	同十一時二十五分	七五	奈良井	同
三十日	前五時三十五分	六九	同	同
同　日	後〇時三十分	八三	宮ノ越	同
三十日	後二時四十五分	八三	福　島	晴
同　日	同八時二十五分	八一	上　松	淡曇
三十一日	前五時三十分	七四	同	晴
同　日	同十一時十五分	八六	野　尻	同
同　日	後二時四十分	八六	吾　妻	淡曇
同　日	後十時五十五分	八三	中　津	曇
九月一日	前五時	七八	同　外れ	晴
同　日	同十一時三十五分	八六	能登川(近江)	同
同　日	後四時三十分	八九	大　阪	同

白馬嶽植物採集記

余は居常植物の研究に志あり、公務の餘暇時々赤城、榛名其他の山岳に登り、既に採集せる上毛の植物一千に近く、標本箱に充つるに至りぬ、想へば三十七年の夏、寺崎留吉先生の白馬嶽に上り、高山植物の豐富なること邦内無比なるを紹介せらるゝや、登山の念勃如として禁じ得ず、三十八年の夏を期し、應に白馬嶽に遊ばんとし、善光寺を距る五里の所に至りぬ、偶々天候險惡なるを以て果さゞりしが、再度の登臨を企てゝ、採集器と千餘の吸取紙とを準備して、下館より小山行列車に搭じ、小山にて兩毛線に轉乘し、高崎に至り、信越線にうつり、あぶと式の列車にて碓氷峠を越へ、輕井澤坂本等の諸驛をすぎ、篠の井にて下車し、同地に宿りぬ。

折りしも山麓なる蠶種製造業松澤佐治郎氏と同宿し、山の模樣、附近の狀況など知了するを得たり、余が心目は已に

恍然として雲際遙に聳ゆる白馬嶽の頂上にありき、明くれば蒼空一點の雲なし、中央東線の列車に乘じ、明科に下車せり、停車場より三四町過ぐれば、二百六十餘間の長橋あり、蓋し犀川橋にして、明治三十五年七月の竣工にかゝる、此邊特に山水の風光に富み、眼前近く有明山鍋冠山等を見る、七貴村に出で、會染、池田町、社、大町農貝川を渡り、木崎中綱青木の湖畔を過ぐ、山青く水白く、四邊の風光描くが如し、この附近、食虫植物なる毛氈苔に富み、三四里の所、路傍に並び生ず、已にして佐野坂に達す、見渡せば危峰雲際を拔きて白雪を覆ひ、實に思はぬ空に晴るゝ富士の根の概あり、更に前面に當り、峨々として峻岳の聳ゆるを見る、問はずして目的の白馬嶽なるを知る、余は、疲憊方に倒れんとす、既に夜に入る、折しも荷馬車曳の燈火を携へ來るに逢ふ、北城四ッ谷を問へば、八町内外なりと云ふ、乃ち、ひたばしりに走りて、松澤貞逸方に投ず、明日登山の趣きを傳へ、案内者の同伴を依頼し、初夜眠に就けり。明くれば空に密雲濛々たり、余の心身は既に連日の長途に疲れ果てぬ、而も畢生の目的を眼前に控ゆるに及んでは何物か其の壯圖を阻む可けんや、已にして朝餐を喫し、直ちに出發に向ひたり、剛力は戰時服裝の如く、倒れても大丈夫、水に入りても大丈夫といふ旅裝、携帶品としては食料二日分、食器、全部、其他鉈、火器、採集品、皆悉く麻嚢に收め、其の上に簑を著し、各々鳶口の如きものを携へぬ、余も亦笠と「ござ」とを與へられ、肩に採集用の胴藍を掛け、高山の客たるべき輕裝をなせり、偶々浮雲四方に漲り、風雨猛威を逞うせんとす、而も屈せずして一小畦畔を進みぬ。

已にして身は山中に入りぬ、この邊、時を得顏に咲き亂るるは、マツムシ草。ママコノシリヌグヒ。ボタンヅル。タヌキマメ。コマツナギ。ミシマサイコ。ヌスビトハギ。トリカブト。ヤナギラン。ヒメムカシヨモギなどなりき。かくして土橋を渡るや山愈々深く、北股の澤の右岸に沿うて進めば、左は一面の山、細流潺々、時々一小瀧をなし、凹地を縫ひ、偶々道を沒する所あり、漸くにして猿倉に著す、こゝにて一休をなし、晝尙暗き樹の下道を辿りつゝ、道すがら植物の多きを見る、驚くばかりなる大イダトリは、一大叢林をなし、莖長各一丈二三尺に達す、矢車草、ジャコー草、これ又大なること他に匹を見ざるなり、就中ミヅバセウの如きは、其の葉の徑三四尺に達するあり、植物の觀光に餘念なき間に、雨は無情にも、いや增して降り頻りぬ、丈餘の草叢の中を行く、全身悉く濕ひ、寒さは寒し、艱苦名狀すべからず、前に一小溪流あり、杓子澤といふ、流水峻急、若し足を水に投ぜんか身は方に潭底に掠め去られんのみ、而も案内するものゝ助力により、漸くにして彼岸に達するを得たり、水は冷かにして氷の如し、案内人云ふ、雪解けて水嵩增さんか、冷水云ふ可からずと、更に草生ひ茂れる小徑を縫へば、四五人の剛力と、洋服を著たる一人とに出逢ひぬ、想はざりき此洋裝の人は、曾て茨師の

學舍にあり、熱心博物學の教授に當られし志村先生ならんとは、余は實に地獄に於て佛に逢ひたらん心地せられぬ、時に雨はますます降り注ぎ、心ゆくばかり歡語するの暇なかりき、案内者云ふ、志村氏は現に長野中學にあり、高山植物採集者としては著名の人、此山に登山せられしこと實に六七回に及べりと、今彼の剛力の擔ふる植物のみにても、馬背に汗するに足りぬべし、余は昔水府に遊びし時、親しく其の教を受けしに、今や雲山遠く隔てたる、此處にて相見んとは、運命の奇なる、轉た感慨に堪へざるなり、かく思ひつゝ一小低地に至れば、一大石の下、小屋あり、白馬尻といふ、四邊寒くして雪の降り來るかと疑はれ、急ぎ薪を集めて、火を點じ、圓陣を作りて身を温め、晝飯を濟しぬ、味の美謂ふべからず、これより防寒の用意して、雨を犯しつゝ、本邦無比の大雪渓に向ふ。

一歩毎に注意を加へ、いや上りに登る、風は横さまに吹き荒さび、雨は狂瀾の如くに降り注ぎぬ、加ふるに前後より恐ろしき白雲飛び來り、行歩自在ならず、僅か三十町の間に、殆ど三時間も過したり、斯くの如く必死の苦境に遭遇し、漸くにして雪なき所に至れば、高山植物は隙間もなく咲き亂れ、赤きあり、白きあり、黄なるあり、何れも從來高山に登りたること無き余には珍奇の草木にして、植物の多き、實に本邦無比なるを知りぬ、片端より草刈る如く、採集し、疲れも何時しか忘れ果てぬ、春の蝶にあらねど、花より花へ浮かれありき、時の移るも知らざりき、況んや白雪皚々たるを眺めつゝ、自然の天惠に浴す、快哉を呼ばざるを得んや、案内者は「ネブカダイラ」と稱する所なりと言へり、こゝより上方は、所謂草本帶にして、白馬尻よりこゝに至る、所謂灌木帶に屬し、白馬尻より麓まで、落葉喬木帶なり、上れば登る程、寒氣いや增しに強けれど、尙草花爛漫として、美を競ひ、麗を爭ひ、もし誇張して言へば、花か、山か、見分るに由なきなり、此處は「御花畑」と名づく所なりとか、過ぐれば、地衣類や苔類多く、岩石風雪に曝され「ネブカビラ」（前とは別の）と稱する所なり、日は沒せり、强風は荒べり、加ふるに雨も烈しく、降り來るに、案内者を先きにし、尙も上れば、漸く小屋に著きぬ、嗚呼蜉蝣一介の身は今や一萬有餘尺の絶巓にあり、はるかに東方を望みて故郷の空を拜す、其れより小屋に入れば、案内者は點火の用意をなし、生木を集め來りて、乾きたる薪に混じ、火を點じ、夕飯の準備をなしぬ、余は焚火の邊りに座を占め、室内を窺へば、小屋とは名のみ、四圍石を積み重ねて、壁に代へ、疊六枚敷位にして、板の間に筵を敷けり、雨漏り甚だしく、室内に水流る、剛力と余は圓陣をつくり、中央の焚火を圍み、植物を談じ、山岳を語り、交る交る歡語せり、案内の一人なる丸山嘉吉氏は頭を垂れ、防雨の術なきに、「雨の下には隠れ家もなし」との嘆語を吐きぬ、余はその聲に應じて、「如何にせん高き、み山の上なれば」、と上の句を續きて、大笑を禁じ得ざりき、折から飯の準備も出來たり、汁も煮へたり、いざ突貫せん

と余先づ先鞭を著くれば、剛力共も劣らじと、進軍を續けぬ、一口食して見れば、ところ、どころに、生米混れり、時に剛力は初心なる余を呼びて、高山にては、空氣稀薄のため、米菜時々煮へざるなりと敎へぬ、飯後四方山の物語をなし、余の今日採集せる植物の名を問ひ、兼て名を聞いて未だ草を目睹せざりし植物の多きに自ら驚かるゝばかりなりき、室の外の寒氣は、あらん限りの勢を振ひ、一歩出てんか、身は刺るゝ如く、恐らく十分間も直立し能はざる樣なり、されば一夜焚火して室内を温め、寒氣を防ぐ、若し夫れ火力少しく衰へんか、身は宛として氷中に座するが如く、戰慄禁ずる能はざるなり、十二時頃になりしか、一人倒れ、二人倒れて、夢の國に遊びぬ、余は最後に二三時間眠りしが、其の中に、夜は明け離れたり、驚きて醒むれば、故郷にはあらで、身は高山の絶頂、一小石室の中にありき、今日も亦猛雨沛然、寒風凜然たり、剛力は朝飯の準備に汲々たり、余は笠簑を、唯一の友として、朝飯前、一草だも多く採らんと出發したるが、如何せむ風烈しくして、岩頭に立つ能はず、爬蟲類の如く、四足となりて地上を這ひ廻る折りしも、一陣の風吹き來つて、余が笠蓋を奪ひ去る、素破大變なりと、又も腹這ひながら逐ひ行けば、こはそも如何に、屏風を立てたる如き嶮坂、下は何百丈なるかを知らず、草はなし、小石あり、岩の碎片あり、深くして窺ふ可からず、かゝる恐ろしき所を過ぐること、二三間、漸く下り行けば、小石の上に達したる笠は、悠然憩ひ居れり、採らんとするも、手を支ふるに物なきを如何せん、若し二三寸の草をつかみ、手を伸さんか、草と共り計り得べからざる谷底に投せられん、時に風は尙笠を弄して、更に九仞の下に飛さんとす、偶々余は一計を案せり、鐵製の根掘器、これを土に深く挿し入れ、左手を以て之を擁し、右手を伸ばして、笠を拾はんにはと、直に之を實行して、無事に目的を達するを得たり、嬉しとばかり、又も被りて這ひ廻ること少許にして、石室に還り、暖をとりぬ、朝飯をはりて、後この山頂と、この石室とに別れを告げ、一同室外に出でぬ、時に風伯雨神、何時しかその獰猛力を收め、只名殘の白雲の去來するあるのみ、はるかに臨めば越中の立山を始め、附近の山々、蜿蜒として長蛇の飛ぶが如し、案内する者云ふ、天氣晴朗の日は、西北、北海の洋々たるを臨み、佐渡島、加賀の白山、西々南の御嶽燒嶽手に取る如く見るを得べしと、遺憾極まりなし、而も余が唯一の目的は、植物採集にあり、卽ちこゝを出でゝ、採集に從事し、岩カガミや虫トリスミレを得たり、續いて案内者はコマ草の花盛なるを、四五本拐り來りて余に贈呈しぬ、余は此時全く自然と同化して、何となく壯快の心地せられぬ、かくする中、又もや案内者は、吾が爲めにウルップ草を携へ來りぬ、熊のこれを好む事、猫に於ける「マタヽビ」の如きものあり、この草、海外にては露領シベリヤ、日本にては千島、ウルップ島に多く産すと云ふ、今や滿開にして、其葉硬く、紫色の花を開きぬ、余等は夢心地に四邊を獵り、

チキンクルマ等を採りぬ、此地絶頂に近くして、地衣苔類多く、這松の地上を這ひ廻れる、亦尠なからず、折しも上方一間程より、丸き石飛び下りぬ、仔細に四傍を窺へば、山兎の余等を見て跳ね出したるなりけり、それより下山の途につきぬ。今採集せる植物の數種を左に錄す。

白馬アサツキ。白馬キ。白馬ナヅナ。千島ギキョウ。岩ギキョウ。コケモモ。ミヤマハナワラビ。ミヤマヒメハナワラビ。ダイレイジン草。リンネ草。ハコロモ草。四葉シホガマ。ミヤマキンポウゲ。クルマユリ。白根ニンジン。ミヤマコケリンダウ。コバノツメグサ。千島リンダウ。ウラジロタテ。ダウヤクリンダウ。シマユキアケボノ草。白山イチゲ。ミツバハウツキ。タカネウスユキ草。大葉ホトトギス。ミヤマアハガイリ。シロバナダイモンジ草。千島セキショウ。ミヤマダイコン草。ナンキンコザクラ。ソバナ。其他。

俯して前面を臨めば、濃雲幾十里の間に漲り、眼界の極まる所、一山脈を控へ、其中最も高きより白烟天に冲するを望む、案内するもの云ふ、淺間の山是れなりと、自然の光景の雄大なる、坐ろに塵世の感を忘れしむるものあり、折りしも前面に左手の山より、一大石の落下し來り、下方の石に當りて、碎くる音凄じきを聞く、これに驚きて案内を見れば、一人も居らず、こはそも如何にと思ふ間に、彼等遙か彼所より、四五本の木を切り來り、麻繩にて其の本を結び、これに荷物を結び付け、毛布を其の上に敷き、余に坐上せんことを乞へり、余は珍らし半分、躍り乘れば、剛力は麻繩もて余を曳き、この一大雪渓を眞逆に下らんとす、土俗これを芝橇（シバソリ）と名く、いざ御用心の聲と諸共、急轉直下の勢を以て下る、愉絶快絶、筆舌の及ぶ所にあらず、夢の間に過半の道程を過ぐる頃、急ぎ芝橇の進行を止めぬ、剛力は、對山に大櫻草あれば、採り來りて與へんと言ひ捨てて、走り行きぬ、この間余は橇の上に端坐し、附近の雄大なる光景を眺む、暫時にして剛力は、美くしき花盛の草四五本を携へ來る、其の懇切なる、謂ふに辭なし、又更にあらん限の力に曳かれて、下り、白馬尻の少し上方に晝飯を濟しぬ、これより草藪の間を潜りつゝ下る、案内者は又トカクシショウマを採り來り與へんとて、急ぎ去りしが、數分の間に、四五本の草本を持ち來る、余は始終案内者の、詳しく草名產地を知れるに一驚を喫せり、かくして無事山麓に辿りつき、再び下界の人となりぬ。（沼尻好）

日本アルプス探險者諸君に

信濃　百瀨亥三松

近年山岳研究の機運の勃興に連れ、種々の目的を以て、高山跋渉を企つる紳士學生等、歲を逐ひて倍蓰し、我信飛越の國境に、蜿蜒綿亘せる幾多の高岳峻嶺の如きも、既に本會員の先覺たる志村、小島等の諸先生が、あらゆる苦難不便を排し、率先登攀して、其の神秘を江湖に紹介せられしより、所謂日本アルプスの名聲俄然として天下に高く、從

來久しく世に埋れたる此大山脈も、漸次其の眞相を闡明せられつゝあるは、寔に快心の事とす。山神倘し靈あらば、欣然登山の志士を歡迎せんや必せり。余は日本アルプスの關門、燕嶽の脚下なる、有明山背の高原に位せる、中房温泉の營業者にして、祖先以來是等の高岳と密邇の關係あるもの、山靈の意を奉承して、登山者嚮待の方法を劃策すべきの責あるを自覺し、進んで其任に當り、先づ第一着手として、日本アルプス山系の巡回路を開き、道標を設置し、案内者强力等の賃銀を一定して、不當の貪婪を防遏し、更に山徑の適所に地を卜して、雨露を凌ぐに足るべき小屋を建設し、成るべく登山者の冗費を節し、危險の虞を去りて、安泰愉快に深山を跋渉するの便宜を圖らんとす。固より此の如きの大計劃を完成せんことは、微力の不肖一個人の能くし得べきに非ずと雖も、之を濟すに比較的好都合の境遇に在るを利用し、至誠以て是に當らば、他日成功の期あるべきを信じ、本年より着手し、年を逐ひて漸次其企劃を遂行せんとす。本會員諸君を始め一般高山探險の志士、此日本アルプスを訪はるゝあらば、請ふ來つて指導の勞を吝む勿らんことを。余の宿志たる、一意此地方の名山を、汎く内外に紹介せられんことを希ふに外ならざれば、及ぶ限りの便宜を計り、百事諸彦の高囑に戻らざらんことを期す。乞ふ焉を諒せられんことを。

越中劍嶽先登者に就て

今歲三月下旬、余は某友人の紹介に依り、彼の越中劍嶽先登者として有名なる、陸地測量部測量官柴崎芳太郎氏と會見し氏の登山談を拜聽せり、登山に關する事項は「山岳」第三年第三號所載のものと大差なき故、今之を再記する必要なし、只だ一言記し置くべきは同氏が明治三十九年に於ける佐伯某なるものゝ登山（前記「山岳」參照）を否認し居らるゝことなり、其理由とする處を聞くに凡そ左の如し。

(一)柴崎氏は、右佐伯某と、立山温泉に於て會談したるが、某は劍嶽山上に關する知識を缺く。

(二)柴崎氏の經驗に依れば、大日嶽方面より登攀することは、到底不可能なり。

(三)佐伯某が實際山頂に達せしとすれば、必ず彼の錫杖の頭と、槍の身とを發見すべかりしに、然らざるは如何。

山頂の遺物よりして論ずる時は、柴崎氏若くは佐伯某の登山は眞の先登山（First ascent）に非ず、然れども記錄ありてより以來、最初の登山なれば正否を決定すべき價値は充分あるべし、余は柴崎氏の論點に就き、批評を加ふべき能力を有せざる故、單に之を讀者に紹介するに止めむ。

（辻　本）

屋久島八重嶽について

屋久島八重嶽の最高峯、宮浦嶽は標高六千二百餘尺、三百餘尺、或は四百餘

尺と云ひ、區々一定せざれど、本誌第三年第一號の九州高山高度表によれば、他の九州諸嶽は、皆六千尺以下なれば、此山を以て、九州一の高嶽と見做すも差支なからん、只精確なる高度を得ざるが爲、かゝる斷定を下し得ざるを遺憾とす、余、薩の南端より、始めて此雄峰に接し、登山の念つのりて止み難く、二月下旬、遂に意を決して、此島に渡りたるも、未だ登山の時季には早く、唯一の目的は失敗に終りぬ、されど多少見聞せし事もあれば、蕪雜ながら、聊餘白を借りて、記さむ、多少の參考となるを得ば幸甚なり。

準備

參考書　此山に關しては『日本山岳誌』に記載なり、只寡聞なる余が眼にふれしは、『日本山水論』の山系概論の章と、鹿兒島縣教育會出版『薩隅日地理纂考』とのみ、『地理纂考』は屋久島に關し、數頁を費し、誤謬多きも先唯一の參考書たるを失はず、『日本名勝地誌』屋久島の條は、此書より引用せるものゝ如く、屋久杉に關しては、山岳第二年第一號雜報欄の記事を參照されたし、鹿兒島大林區署の報告あらむも、余は之を知らず。

地圖　は參謀本部二十萬分圖を携帶せしが、不完全にして殆ど用をなさず。

便船　鹿兒島種子屋久間を往復す、大和川丸（二七〇噸）大川丸（一五〇許）の二隻なり、大和川は大阪商船會社の船なり、共に鹿兒島を午後十一時出帆す、種子島西之表迄八時間、それより屋久宮之浦迄四時間、西之表にて多少荷役にて時間かゝる故、宮浦は大抵翌日午後二時頃となる、此兩船とも定期船にあらず、都合よくゆけば、毎晩交互に出帆出來る筈なれど、荷物を主とする故、一定せず、四月末よりなれば、屋久島の重要產物、飛魚と材木の輸出あれば、交通頻繁とならむも、余の行きし頃は、種子島の砂糖時期にして、屋久には荷のなき爲、船は皆種子より引返し、まのわるき時は、島流しとなり、一週間以上も、船待ちせねばならず、郵便物は停滯し、電報ならでは用も便じ兼ぬる有樣、不便此上もなし、是非改良せられたきものなり。

宮浦　は汽船の終點にして屋久島に於ける門戸なるも、碇泊地として宜しからず、少しく波高き時は、三里西にあたるイッサウに避難す、戸數二百、北國の如く屋根に石を載せあるは奇なり、上屋久村役場、また小林區署あり。

宿屋　宮浦は風儀ゐしき處にして、曖昧なる宿多きも、吉元旅館ならば確實なり（余は西表薩摩屋旅館の案内にて此宿に投ず）茲の主人は、吉元秀之助と云ひ、鹿兒島人にして、益救（ヤク）神社（在宮浦）の神官なり、嘗て村長も勤めし位なれば、物のよくわかりたる人にて、八重嶽には精通せり、登山者は、此宿にて、旅裝を調へ、案内を傭ふを可とす。

八重嶽

概說　「日向の南部に起れる一脈は、屋久島の八重嶽に聯絡せり、屋久島は相環りて山、故に「八重」を以て嶽に名く、全部皆花崗石、翠綠蒙翳、深谷底無きが如く、絶壁空より垂れ、蒼々欝々、喬樹長幹蒼穹に入る、熱帶に近けれども、冬はなほ氷雪を冠る」日本山水論　「八重嶽の中にて、最高きを宮浦嶽と呼ぶ、長田嶽是に次ぐ、又其に亞ぐを栗生（クリフ）嶽と呼べり、三嶽對立して、鼎足の形をなせり、又三峰の四

方、衆峰立回て兒孫の爺姥に服從せるに似たり、海上に漕出る事、三里にして、始て三峰の頂を望む」地理纂考　山の大半、花崗岩より成る故、是等露出せる山峰は、浸蝕作用を受け、尖端を有す、宛然南海に於ける槍ヶ嶽なり、且萬山重疊、他の九州諸嶽の如く、低山性のものにあらず、信飛ならねば到底見られぬ光景なり、然し水蒸氣多き爲、壯觀を恣にし得ざるを恨む、余の見たる中にては、屋久島の遠望は、屋久に最接近せる、南種子、鹽屋海岸（島間、西之村間」よりせるに如くはなし、此日は天氣晴朗にして、雪の冠せる三峰は、勿論、八重嶽の諸峰を、一覽するを得たり、海中に峭立せる事とて、其壯觀言語に絶し、此世のものにあらず、須彌山もかくやと思はれたり、大梵高臺上の眺望は、登山せぬ故、知るを得ざれど、心なき土民にても、恍惚となる程なりと云へば、畧察するに難からず。

深林　屋久島の山腹は、斧斤を入れざる大深林なり（九合目より上は、笹原なりと）樅椹等の大木、及有名なる屋久杉あり、獸類の棲息せるは猿と鹿のみなりと云ふ、余は登山を斷念せし故、せめては、林相の一般にても見て、土產になさんと、案内を傭ひ、未明に大雨を冒して、出發す、宮之浦を去る八町なる、楠川の里より、海岸をはなれ、山路につく、傾斜六十度許頗急なり、森林は漸次密に（然し此附近の杉は、皆植林なり）ヘゴ、羊齒などは所狹き許繁茂す、半熱帶の事とて、內地にて見馴れぬ植物多し、登る事一里許、稍平坦になる、之より幾度も、溪流を橫斷し、棧道によりて、山腹をめぐる、危き事限なし、更に上る事一里半、前山の頂に達す、晴天の時は、前面に三峯、及三船嶽の頂を認め得る由なるも、雨天の爲、何等の眺望もなし、此邊積雪既に一二寸、南海としては珍らしき事なり、下る事約十町、九時半大阪人所有の堪場（カンバ）に到る、官林を拂下て、茲に貯木す、小杉谷或はマサヌキ川と云ひ、又此附近は、以前島津家の禁伐林なりし故、俗に御建山（オタテヤマ）と云ふ、宮之浦を距る三里、四時間半を費やせり、此附近に至りて、始めて屋久杉を見る、茲より三船嶽に向ひて、下る事二里半、三船嶽の麓に、第二の堪場あり、茲に製材所あり、黃楊（ツゲ）材は此附近に多しと聞きしも、雨益々繁しければ踵を廻らす。

屋久杉　「屋久杉は、屋久島、各國有林の特產物にして、樹齡二千有餘年を經過せしものあり、此樹は海拔約一二〇〇米突の位置より、樅、栂其他濶葉樹に、混生或は群生し、海拔約一八〇〇米突に至りてやむ、材質は充密多脂にして、光澤を有す云々」、雨量多き此島にありて、挫折木の其儘になりて、少しも腐蝕せられざるは、充密多脂の爲ならむ、瘤諸處にありて、極めて醜く、擡腫にして、繩墨に中らずと形容すべきか、到底杉樹とは思はれざるなり。

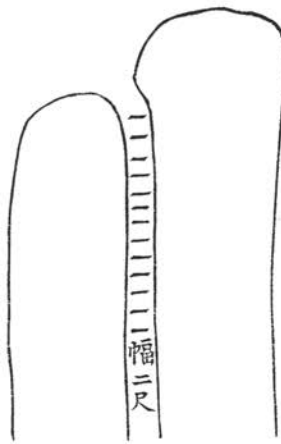
種子島との比較　種子屋久兩島とも、川邊七島の如き、琉球灣の火山に屬せず、此兩島は姉妹島の觀あるも、諸種の點に於て、反對せるは奇なり、種子島は丘陵なり、屋久島は高山なり、種子は農產に富み、屋久は林產地、種子は文

雅にして、鎌倉言葉を存し、屋久は素朴にして鹿兒島訛を用ふ、換言すれば、前者は人文に於て勝り、後者は自然に於て秀づ、遊覽者は、其一を缺く可らず。

山中諸勝

三船嶽　三峰に次げる高峰なり、古來人跡未踏なりと云傳へらる、先年吉元氏、此山に登りしに、其頂は三十間許の一大岩石にして、中間に幅二尺許の溝を穿つ、其凹みは自然に梯子の如く、段をなし居り、極めて奇異の思をなせりと。

立生嶽　八重嶽の低き一峰の名なり、此頂に天柱石なるあり、（安房、より二里半）「高さ三十三尋、周廻亦同じ、此石の根は大磐石、自然に四角にして、礎の形を成せり、又此石の八分目に、大きなる穴あり、時として聲を發す、其音貝を吹が如し、此穴鳴る時は、三日を過ぎずして、大風吹起るとぞ、島民立神權現と稱し、參詣する者多しとぞ」纂考



花江川　池の名なり、平内（安房より約五里）より四里、平内よりの登路の畧中間にあり、其路甚險難なり、其間半里許、殊に險難にして、或は深溪に棧を架し、或は嵓壁に梯子を掛く、此池二ッあり、風景絶佳「石楠華（一般に此山の七八合目最美しと）の盛には、滿地錦と變じ、其香四方に薫りて、實に神仙の住所と云ふべし、島民相傳へて山中鼓の聲を聞者ありと云ふ、歸路に赴き、山下に下る時は、斷巖絶壁眼を眩して、危き事登路に倍すれば、此地に至れるもの稀にして、勝景世に顯れず、一度遊觀せる者、其奇勝を歎息せざるはなし」纂考　又口碑に塩槌翁の舊跡なりとも云傳ふ。

城之平　宮之浦にある小丘、赭山にして頂に一老松あり、傳へて云ふ、壇之浦の平氏の落武者、茲に據れりと。

登山

登路　は主なるもの四條あり、宮之浦よりする北路、安房よりする東路、平内よりする南路、長田よりする西路なり、宮之浦より絶頂迄は十三里、他は各八里位なり、余は遊覽の順序として、宮之浦より登り、平内路を下り、東海岸を廻れば、花江川、尾の間温泉立生嶽等の諸名勝と、島の一般を見るを得て、好都合ならむと思ふ、山路何れも險峻、山中一泊、或は二泊、露宿の覺悟を要す、但岩崛の如きものあれば、登山時期ならば、格別困難を感せずと云ふ。

登山時期　陰暦四月より九月迄なり、各村にて年に一回、或は二回、頂上の祠に、參詣の爲、天候を窺ひ、快晴の日を選びて登る、宮之浦にては、秋の彼岸に上り、三日目に歸り來る由。

登山者　宿帳によれば、外人の來島せしもの四名あり、皆植物地質等の學者にて、全島を周遊し、山巔を極め、種々調査をなしたる由、彼等の探險を好み、學に忠なる、驚嘆の外なし、然るに邦人の登山者は、此島に緣故ある者を除き、僅に高等學校學生兩三名に過ぎずとは、情なき次第にあらずや。

今や登山の好時期は來らんとす、余は切に、山岳會員諸氏の、八重嶽を、僅に南海の一孤島の山と輕視せらるゝ事なく、大に其探險を望み、此不遇の名山を、天下に紹介されんことを期待するものなり。

（井　上　玄　一）

日本山岳志跋

久　保　輗

人孰無嗜好。嗜好之病謂之癖。癖之善者益己利人。惡者損己害人。損己害人。小人之徒也。益己利人。君子之徒也。可不察乎。」蓋我國富豪之多。以新潟縣爲最。而蓄美妾。起別業。或遊妓館。耽博奕。徒費數萬金。遂致病敗家。流毒於世者。不可一二數。是非小人之徒何哉。」海峰高頭君亦縣之富豪也。介其間。而如未嘗聞見之者。專意於山嶽登攀。概無虛月。而於奢侈一無所費也。是以身益强。家益富。以其所既得、又將及人。著日本山岳誌。廣布於世。可不謂君子之徒乎。」夫小人之惡癖。其損害如彼。而君子之善癖。其利益如此。此志一出。有感奮興起以君之癖爲癖者。則其利更何如哉。

池田蘆洲曰。竿頭進步妙。
細田劍堂曰。平實雅潔。

雜報

雜報材料の寄送を乞ふ

本誌の本欄は、多く新聞よりの切抜き、稀に會員又は讀者諸君よりの、通信を載するに過ぎざる如くなれど、編輯者の微意は、單に本欄を以て「切抜貼込み帖」の代用となすだけにて、甘んずるものにあらず、尨然として大なる**山岳史料**を本欄に堆積して、他日、日本山岳史を作らんとする人々のために、好適の材料を供給せんとするにあるを以て、會員及び讀者諸君よりの通信を希望するは勿論、各地方發行の新聞雜誌にして、苟くも記事の山岳に渉るものあらば、編輯所宛てにて、惠送を賜はりたし、編輯に關はる我等の閲覽するところは、東京にて發行する、新聞の或る物に止まり、その全體にあらず、山岳史料に最も必要なる、地方新聞雜誌の如きは、全く我等閲覽の便宜を缺けるものゝみにて、貴重の材料を反古にせられむは、同好者のため、いかにも惜しきはみならずやと信ずるを以て、これらの材料蒐集に關して、弘く會員及び讀者諸君の、助力を仰ぐものなり。

樽前山の噴火諸報

北海道膽振國樽前山は、本年三月に入りて、強烈に噴烟を開始したり、今諸新聞に見えたる電報及び雜報を、一束して左に載す。

樽前山噴火公報　北海道膽振國勇拂郡苫小牧村樽前山は去る三月十九日午後九時百雷の一時に降下したるが如き音響と共に噴火したるが其後道廳に於て取調べ内務省へ報告し來れる處に依れば該山の噴火口は今より三十年前は直徑百餘間ありて底に石を投ずれば約二分間經過したる後始めて反響ありて其深さ何百尺なるか豫測し難く每年周圍埋沒し現今は口徑卅間位縮少し今回の噴火個所は三個にて横面は小坑數十個所より白煙濛々として立昇れりと。

樽前山依然噴煙　（肉眼にて炎を認む）　樽前山の噴煙は依然歇まず四月十五日は雨天の爲噴煙を認めざりしも同日午後五時頃に至り晴天となり噴煙は日頃に十倍せるを認め得たり而して同夜九時より恰かも遠雷を聞くが如く十六日に至り鳴動益々甚だしく神戸瓦燐株式會社第四工場附近に降灰あり十七日に至り更に甚だしきを見るに至り噴煙中朱色交り昇騰するを肉眼にて明かに認め得たるが夜に入り鳴動と共に火焔凄まじく人心恟々たる旨以上は苫小牧分署より道廳への報告なり猶吾社室蘭支局員も現に目擊したる旨報じ來れり。

樽前山の噴火　札幌卅日午後特電　二月十九日より異狀ありたる勇拂郡

樽前山は今朝七時より又噴火し灰を降らし當也より黑煙立上るを肉眼にて認むる旨札幌測候所より公報ありたり。

樽前山又々噴煙　札幌十四日午前特電　樽前山は去る十二日午後十一時頃又々盛に噴烟したる旨公電あり之と同時刻に岩見澤町に強震あり戸障子の鳴動甚しく同地の人々は何れも噴烟と關係無きやと憂慮し居れり。

樽前山噴火の光景　札幌一日午前特電　樽前山噴火の光景に凄しき有樣にて苫小牧村及びヲニシ村方面は黑烟を以て包まれ附近數里に亘りて胡麻の如き灰を降らし山の八九分を覆ひたる積雪は全く黑色と化しまれり幸に死傷者を出さゞるも人心恟々たり右に付道廳より視察の爲め警視一名　技師一名巡査二名を派遣せり。

樽前山の其後　樽前山は其後引續き鳴動噴煙ある由前號に記載せしが右に付道廳にては苫小牧分署に對し其程度を照會せしに昨二十日午前九時發にて「差當り危險の虞なし」との返電ありたりと。

樽前山の噴煙後聞　（三月廿一日午前十時二十分　錦多峰にて金田特派員報）本日午前七時異樣の音響とともに噴火の勢凄じく降灰二三丈の高さに騰り蓮華の散るが如く輕氣球の飛が如く忽ち東北に靄靄き同四十分頃に至るや錦多峰苫小牧附近及び輪西方面は黑煙漠々日光を遮り間もなく約四里四方の地は胡麻の如き噴火灰薄く降り山に接近するに隨ひ降灰の分量厚く樽前村は殊に甚しきを見たり而して山の八九分は見る〳〵積雪黑色に變じたり是れが爲登別溫泉にも多少の異狀ありしも未だ然したるとなし本日探査したる所に依れば幸にして人畜に死傷なく附近各地とも人心恟々たりといへども比較的靜穩なり。

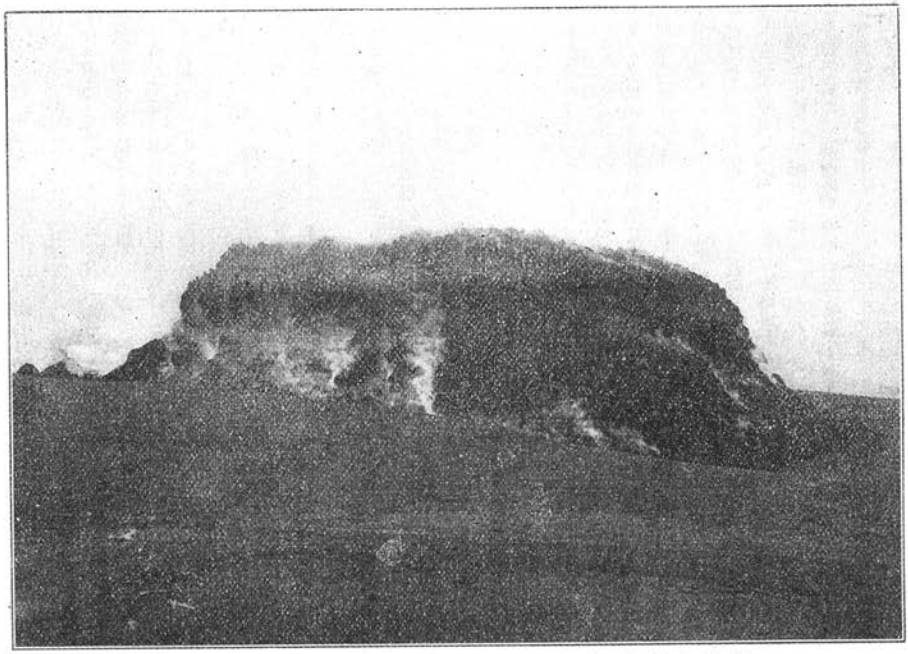
樽前山昨朝又噴火　（今回は危險の虞なき歟、札幌より肉眼で見ゐる）

謄振國苫小牧村大字樽前の樽前噴火山鳴動及び降灰の事は昨紙詳記せし所なるが近來は鳴動もなく且噴火降灰も稀薄なりしに昨日苫小牧特置員よりの發電に依れば三十日午前七時頃より又々噴火し初めたりとあり猶昨日午前七時札幌一等測候所に於て曾根技術員が確かに樽前山と覺しき山巔より直立せる雲の如き一條の黑煙を發見し電話もて道廳第四部に照會したるが當時は未だ何等の消息なかりしも幾もなく十時頃に至りて苫小牧分署より今朝又々噴火し灰を降らしつゝある旨の電報達したる由又豐藏道廳氣象係の正午觀測したる處にては盛んに噴火を續けつゝあり風位に依り或は少しく他方に靄靄きたるを示し肉眼にて明に認むるを得たりと云ふ。

室蘭署長樽前山に向ふ　（三十日室蘭支局發電）本日午前七時樽前山黑煙烈しく噴火し降灰量頗る厚く事態容易ならざるを以て飯田署長は岡部長を隨へ今現場に向ひたり。

最近の樽前山　（噴煙中に火光を認む）其後苫小牧分署よりの報告に依れば二十一日は前日に引續き午前中は噴煙を認むる能はざりしも漸次快晴となるに隨ひ正午頃より多量の黑煙昇騰し居り同日午後八時過よりは更に黑煙中の下方即ち山巔の所に於て火光即ち火焰を望むに至りたるが該火光は翌二十二日午前一時頃まで之れを認めしも其より山霞漸く厚く棚引き引續き靈霧深くなり午前七時よりは更に細雨をさへ加ふるに至りたる爲噴煙をも見るを得ざるに至りたる由因に二十一日札幌鑛山監督署技師林金四郎、同大井上義近の兩氏は技手二名を連れ別に道廳第三部員一名出張實地視察に赴き二十二日登山せりと猶昨日札幌より正南に當り肉眼にて一朶の噴煙積雲の狀を成せるを明らかに認め得たりといへり。

樽前山巔に小山　（今後爆發の虞ならん）樽前山麓にある神戸良雄合資會社監督者治田久氏二十三日付豐藏道廳氣象係に報じて曰く「十七日午後八時頃より噴煙薄弱となり終夜火光を噴出し十八日曇天、十九日雨天二十日は曇天にして午後八時頃より鳴動し二十一日午後三時迄續き同日午前五時頃大鳴動、其後一時間置位に大鳴動を交へ午後六時頃全く絶ゑ終夜火光を認め二十二日雨天鳴動なし二十三日噴煙薄弱噴火口方向に當りて新に小山の突起したるを認む同日鑛山監督署より技師二名技手二名苫小牧分署長等登山、午後五時引揚げられたるが同一行の談に依れば小山の如きは全く噴火口より突起したる岩石にて新たに噴火口を埋めて山頂に出來たる譯なり今後は最早爆發はなれあるまじと語られたりと猶豐藏技手の談に依れば右は客月三十日に噴火したる舊噴火口砂礫の爲に埋沒せられ更に一段高く推積したるものゝ隆起



樽前山頂新噴出のドーム形峰　（神東悍氏寄贈）

したるものなるべしと。

樽前山の噴火詳報

三月三十一日道廳より實地踏査の爲出張せる今村警視、豐藏技手兩氏の精密調査報告書左の如し。

（一）位置及び地形　樽前山は勇拂、千歳の郡界にあり北緯四十二度四十二分東經百四十一度二十三分（概測）に位し海拔一千十六米突あり北方は一溪谷を距て「フウプシスプク」（一名タップコップ）に對し支笏湖を山下に望み西方に白老嶽あり東方より南方面は最も傾斜緩にして山趾長く延いて太平洋岸に達す海に面せる一帶の地は所謂火山灰地にして耕作に適せざるを以て耕地は甚だ稀なり唯僅に一二牧場の散在するあるのみ然れども海岸に沿ひて苫小牧小糸魚、錦多布、覺生、樽前、社臺、白老等の漁村斷續して連り各多少市街の體裁を爲せり就中苫小牧は最も繁盛の地にして戸數約千有餘あり王子製紙會社は同地に大規模の工場を新設せんとし目下盛んに其工事を營めり此等の數地を除けば又他に部落なしと雖も錦多布より約一里餘山麓に入れば神戸良遂合資會社の第一工場あり マッチ箱の原料を製作し更に二十餘町を登れば其第二工場あり（目下休業中にて住民なし）更に其北方約三里の山中に第三工場ありて各數戸の住民あり苫小牧方面より登山せんとするときは先づ錦多布に出でゝ更に第一工場を經第二工場を過ぎ森林を穿ちて攀登せざるべからず這回亦此方面を採りて登山せり山麓の樹林は殆んど全部蝦夷松及濶葉樹の大森林にして御料局の管轄に屬し王子製紙會社は其原料を之れに仰ぐもの殆んど五十ヶ年の間供給することを得べしと云ふ山麓より登ること約五百二十米突の間は樹林にして傾斜緩なれども夫れより傾斜急となり赤裸々にして攀登頗る困難なり登ること約四百二十五米突にして山頂の外輪低部に達す是より約三十米突を登り行程六百米突餘にして噴火口に達す火口は山の西隅にありて直徑約五百五十米突あり。

（二）噴火の沿革　樽前山は從前より常に白煙絶えず世人は一般に之を活火山として見たるものにして今回の如き大噴火こそ近く數年中にはあらざりしと雖も時々間歇的に大噴煙をなすものなりとは附近古老の齊しく信ずる所之れを記錄に徵するに容易く其事實を見出すを得往古の噴火狀況は今姑く之を措

くも日本山岳史及本廳員河野常吉氏の記錄に依れば左の如き記事あるを見る。

△元文四年七月十四日より二十五日迄山鳴（タルマイ）山燒く下蝦夷地「タルマイ」近所二三日の內晝夜暗く燒灰降る。（松前年々記百六十八年前）

△北游乘（安政三年菅野潔著）二日間文化中山項發炎、傍近數十里內砂石紛飛死傷無算、距今四十餘年、噴煙火仍不已。

△明治七年二月八日樽前山噴火砂石雨の如く下り震動數回三日にして止む。

△明治十六年十一月五日樽前山噴火し其燒灰札幌市街に吹き來る。（札幌沿革史）

以上は河野常吉氏の調査に依る

△明治十八年一月四日樽前山噴火

△明治二十年十月八日樽前山噴火砂石迸出すること數百丈苫小牧灰下る雪の如し。

△明治二十七年八月十七日樽前山黑烟を吐き灰を降らし平常に十倍す。

以上は日本山岳史に依る。

因に今回の噴火は明治二十七年に比し甚だ大ならざりしと云ふ。

（三）大噴煙の前兆　元來新たに噴火口を現はし若くは從來の火口を擴大するが如き場合にありては多くは地鳴若くは地震を起し次で爆發と共に大噴煙を爲すと一般の例なるが如しと雖も樽前山今回の大噴煙の前兆として觀るべきものは敢て著大の現象あるを認めず唯三月三十日に大噴煙ありたる以前の事實としてポンニシタップ第一工場に居住する神戸眞燈合資會社工場監督員治田久、同小頭仲留藏兩人の談に依れば。

初期爆發に一月二十二日夜にして翌朝積雪上に降灰を認め第二回は二月六日にして午前九時頃噴煙を認め降灰あり第三回は二月十日にして午後三時頃大砲の如き音響二回あり噴煙多量なりしと云ふ第四回は二月十八日にして午後一時頃噴煙を認めたるも降灰なし第五回は即ち今回の大爆發に先ち約一時間絕にず鳴動を聞きたりと云ふ之より先三月三日には午前十一時頃、午後三時頃、同四時半頃の三回鳴動を聞きたりと云ふ又所轄警察署長飯田警視の登別溫泉場に就き取調べたる所によれば當時只溫泉の湧出多量なりし感ありしも平常に於ても盛衰あるを以て果して前兆なりしや否や不明なりしと云ふ口供を得たりと云ふ。

（四）噴火口の現狀　明治二十七年八月の噴火狀況取調の爲め出張したる元本廳技師水科七三郎氏の談に依れば。

當時は噴火口內の西側爆發したるものなりと云ふ而して其後登山したるものゝ談に依れば明治三十一二年頃は口壁の傾斜最も急にして噴火口約百間ありしも三十八年頃には三、四十間に縮少し口內北側は傾斜稍緩にして底部に下ることを得たりと云ふ今回實見したる所に依れば口內稍擂鉢形を爲し約二百米突の下に口底ありて三十八年頃の狀況と異ならざるも最も傾斜緩なりしと云ふ部分は破壞して垂直に變じ其底部に噴氣口數十個あり南東側にある五六個は最も小にして北西側にあるもの之に次ぎ其數約十個あり又上部の口壁より噴出するものも約五六個あり南西側に在るもの最も大にして蒸氣黑煙の噴煙最も旺盛を極め口內熱湯の沸騰するが如き音響を聞く又噴火口上の外側南東方には二個の小噴氣口ありて其附近は積雪融解せり。

活火山は絕にず震動を發作するものなりと云ふも微動計及びコンダクトメートル等を携帶せざりしを以て微動を觀測することを得ざりしが山麓に於て取調べたる所に依れば人體に感ずる程のもの一回もなし又今回登山中一回も震動を感ぜざりしのみならず鳴動も聞かざりき。

三月三十日には第一回爆發後約二十分間に一回引續き猶一回爆發し黑煙の一團噴騰し其高さ樽前山の約三四倍位なりしと云ふ而して現在は始終同一の勢力を以て昇騰することなく間歇的に約三四分間隔てゝ盛衰を呈せし故に一日中に於ても盛衰あるものゝ如く山麓より噴煙を認むることゝ認めざることゝあり又數日を隔てゝ活動し。

即ち一月二十二日を始めとして數日或は十數日を隔てゝ噴煙の旺盛を極む而して初期よりの爆發と其後の爆發とは同一の部分なりしや否やは專門家にあらざれば知ること能はざるも口內の北西側の口壁は垂直に破壞して今回の爆發に原因するものゝ如く臆測せられたり登山は噴火後三日目なりしが當日は早朝より降雪多量にして山上の積雪約五寸を加へたると吹雪の烈しかりし爲岩石噴出の狀況を詳細に知る能はざりしが火口の北西部に當る上部平坦なる場所に無數の穴を認む之れ噴出したる岩石の非常なる速度を以て落下し丈餘

の積雪を穿ちて地中に埋沒したる痕跡なるものゝ如し又火口の南東方に當る山腹六七合目の邊には徑二三寸の燒石降下しあるを認めたり。

(五)降灰の狀況　降灰區域は前述の如く降雪の爲詳知するを得ざりしが爆發當時は風位北西にして後北方に轉じたりと云ふ之れを以て最初は南東方に當る苫小牧方面に降下し漸次南方に移り社臺に至る三角形の區域にして約十三方里に亘る地積なりとす而してポンニシタツプ真燈合資會社附近は降灰約十五分苫小牧は十分社臺は二十分にして止み積灰量は社臺五分別に七分ありて苫小牧最も稀薄なりしと云ふ然れとも降灰を仔細に檢するに苫小牧錦多布等に於て手にしたるものは灰をも含むこと勿論なりと雖も灰と謂はんよりは寧ろ細砂にして第一工場乃至森林中に於て手にせるものは細砂と謂はんよりは寧ろ小石塊と稱するを妥當とし漸次噴火口との距離近くなるに從ひ其形を大にして火口の四邊には直徑丈餘に亘るの大石數個噴出せられたるを見たり由是觀之五里を距つる苫小牧に於て細砂を降らしたりとせば其眞の輕灰は海上何里の邊まで飛散したるものなるやは殆んど想像に苦しむ所なれば當日の風向にして反對の方向を採れるものとせば直徑僅かに十里に足らざる札幌附近は勿論細砂、輕灰の墜ふ所となりたるや明かなり若し果して然りとせば其耕地其他に及ぼすの損害は蓋し意想の外に出でしなるべし。

(六)破害の狀況　大噴煙の狀況は大略上述の如しと雖も降灰區域は耕地少く且其量敢て甚しからざるを以て別段の被害なく又一二の牧場なきにあらずと雖も今現に放牧しあるもの甚だ少く殊に新草未だ發芽せざるを以て牧草に對しても敢て別段の被害あるを見ず世人或は噴煙の餘りに多きを見又降灰區域の非常に廣きを見て必ずや人畜にも多少の害あるべしと豫想したるものありと雖も幸ひにして何等の被害なし之れ蓋し各部落は皆火口を去る遠きに依れるものなり唯神戸真燈合資會社第一工場員が山中より材料を搬出するに平素馬橇を用ひ居たるに大噴煙當日は降砂の爲雪路滑り止むを得ず其一日運搬を休止せりと云へり。

(七)今後の豫想　以上各項に記述せる所を綜合して考ふるに樽前山の噴煙は全く間歇的にして駒ヶ嶽に酷似せるを覺ゆ而して今回の大噴煙は必ずや大爆發して新噴火口を現出せるに基くものなるや疑ふ所なしと雖も其原因は如何及び向後に於ける爆發の有無等に就ては專門家の調査に待たざるを得ざるも私に思ふに尚多少の日子を經ば更に亦噴煙を見ることあるべく又數年の後には更に大爆發なきを保し得ざるが如し。(完)

樽前山の噴火豫言

米人ジヤーガー氏樽前山調査の結果今後尚ほ危險狀態にありて五月十九、廿七日、六月四、十二、十七、廿五日、七月五、十、十七、廿五日等に破裂すべし來る十九日は甚だ危險にて六月四、廿五日、七月十七、廿五日の破裂も強く其の他は稍々弱きも六月十二日は最も注意すべし去る一月廿三日第一回の破裂より九ヶ月目最も危險なりと豫言せり噴火口より更に高き五百尺餘の熔岩出出現せり是まで世界中に於て熔岩出質山はアリューシアン列島又びせり山の二ヶ所あるのみなりしが今は二ヶ所共熔岩山消滅し現在は樽前山一ヶ所のみなる由にて室蘭警察署は危險豫防の爲め一切登山を禁じ山麓二里四方の住民に避難退去を命じ西多布驛に臨時派出所を設置し警官を派遣せり。

樽前山登山禁止

(室蘭十五日午後特電)樽前山は昨今大異狀を呈したれば其筋にては登山者を嚴禁せり。

樽前山爆發と避難注意

(札幌十五日午後特電)米人ジヤーガー氏樽前山視察の結果來る十九日頃大爆發を見るべしとの說により道廳は山の附近住民に對し本日避難用意を注意したり氏の說によれば從來の學說は氣候の關係にて低氣壓より來るとの說を普通とするもジヤーガー氏の說は引力の關係より來るとの說なり十月頃には又も爆發すべしと。

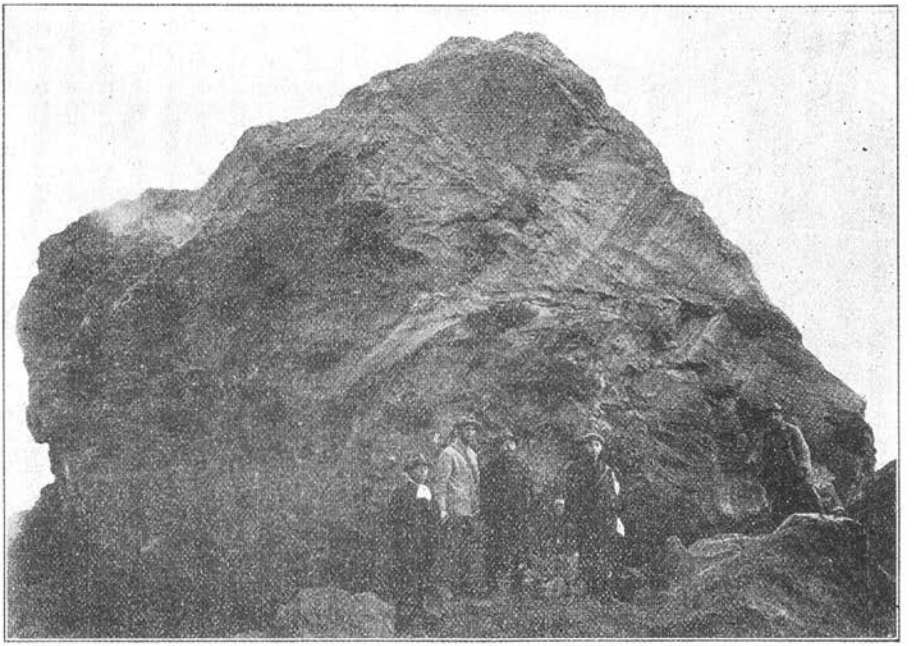
樽前山又爆發

五月十五日樽前山又復鳴動爆發し二里四方に灰を降らし山麓のシコツ湖濁濁す又新に二町餘の龜裂を噴火口に生ぜり。

樽前山爆發

(佐藤技師の談)五月一日米國マサチウセツツ高等工業學校長兼教授にして地質學特に火山學に精通せるジヤーガー氏と共に北海道樽前山の噴火狀態を調査して歸京せる農商務省技師佐藤傳藏氏は左の如く社員に語れり。

▲樽前山の位置　樽前山は蹈振國勇拂と千歲の兩郡に跨り海拔千十六米突室蘭より汽車にて一時間を要する錦多峰停車場より其頂上迄約四里にして同停車



樽前山頂(ドームの一破片と佐藤ツヤーガーヤー行)　(神東惇氏寄贈)

場を距る約一里の地點に神戸良蹤會社の軸木工場あり夫より山頂迄約三里也。

▲噴火の沿革　に就ては松前年々記中に「元文四年七月十四日より二十四日まで山鳴り樽前山燒く」とあり又北遊乘には「文化中山頂發煙、傍近數十里の內砂石紛飛、死傷等なし」とあり尙又札幌沿革史中に「明治七年二月八日樽前山噴火砂石雨の如く下り震動數回、三日にして止む」「明治十六年十一月五日樽前山噴火し其燒灰札幌市街に吹き下る」との二節あり而して今回は本年一月二十二日夜鳴動を聞きて翌朝積雪上に降灰を認め二月六日午前九時頃噴火を認めて降灰あり二月十日午後三時頃大砲の如き音響二回ありて噴煙多量なり一月十八日午後一時頃噴煙を認むるも降灰を認めず三月三十日午前七時大爆發あり四月三日より四日までは未だ新山を見ず四月十二日より十三日まで鳴動續きて地大いに震動す四月二十三日札幌鑛山監督局の大井上技師一行登山して始めて新山を認めたり。

▲樽前山今昔　海拔三千三百餘尺にして直徑十六町の外輪山を總稱し(第一圖に左右兩側の山は即ち其外輪山なり)其內部に直徑三百六十五間の中央噴火丘ありき然るに今回の噴火は四月三四日頃迄は水蒸氣又はアリューサン瓦斯を噴出し時としては灰を噴出せるが二十三日に登りて見れば何ぞ知らん中央噴火壁の最高點よりは五百七十尺、外輪山の最高點よりは百尺高き新なる暗黑色の大山を以て中央噴火丘の全部は(第一圖中央の山なり)蓋ほれたり之が爲め從來中央噴火丘を越えて眺めたる蝦夷富士は見る能はざる事となれり。

▲珍奇なる現象　從來の噴火は悉く溶岩を外部に流出せしむるか或は水蒸氣又は瓦斯を噴出するに止まれるも今回は巨大なる溶岩を以て其噴火口全部を蓋ひたるは實に有史以來前例なき新現象と言ふべし茲に又不思議なるは之と前後してアリューサン群島のボゝスロフ、西印度マルチニーグのペーレーの兩火山の噴出が同一現象を呈して而も其高さ廣さ及頂上に於ける角狀の突出物、噴出物の性質が酷似せることなり。

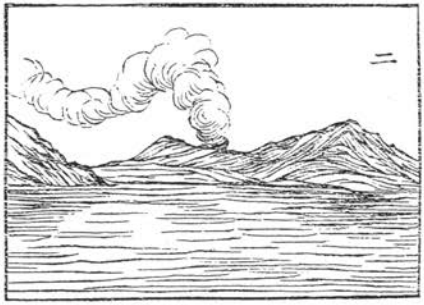
▲形狀時々變化　するが其所以は新山は南方に傾斜せるを以て自然其方向に溶岩の時々墜落するのみならず一度外氣に觸れたる溶岩は冷氣のため收縮して割目を生じたる場合に地球の引力に依りて墜落し其場所より著るしく水蒸氣又はアリューサン瓦斯を噴出す其墜落せる溶岩は其殘部と著るしく赤色を

帶び雪中にあるも頗る熱くして其傍に立てば恰もストーブの傍に立てる感あり以上の事情にて第一圖が示す如く此方面は急斜して凸凹あるも他の部分は平坦なり。

▲被害更になし　今回の爆發は前記の如く主として溶岩を噴出し而して噴出されたる溶岩は外部に飛散せず噴火口内に止まりて新山を形成せるを以て幸ひに被害なく降灰の如きも山麓に於て一寸、鐵道沿線に於て一分位なるのみならず此邊は人口稀薄なるを以て人畜に死傷なきは勿論作物にも殆んど被害なかるべし。

樽前新噴火口　樽前嶽五月十九日背面へ新たに一の噴火口を生じ盛に噴烟するも異狀なし。（札幌發電）

▲第一圖は支笏湖畔より觀望したるもの山頂の黑きものは噴火後噴出したる熔岩にして其高さ五百尺餘、周圍十五丁餘なり若しジヤーガー氏の豫言通り大爆發あらば該熔岩の全部吹き飛ばさるべしと



▲第二圖は樽前山の後面より見たるもの頂上は噴出したる熔岩にて其の熔岩の高さ千五百尺餘なり、若し一大噴火事實とならば其被害二里四方に及び地上堆積は五六寸ならんと。

◎雜　報　樽前山の噴火諸報

樽前山の現狀　米國ジヤーガー博士に依て大噴火の兆ありと豫言されたる北海道膽振の樽前山の現狀に關し頃日現場視察を終りて歸京せる佐藤地質調査所技師は語つて曰く。

▲樽前山位置と經歷　同山の位置は膽振國の勇拂、千歲兩郡界線上北緯四十二度四二、東經百四十一度、二三の個所に在り室蘭より一時間にして山麓なる錦多布停車場に達するを得べく夫れより頂上迄約四里の行程あり同山は嘗て數回噴火せる歷史を有し居れる休火山にして其噴火口は直徑十二三町に亘る頂上の中央に約直徑六町の火口を有せるものなり。

▲今回噴火の經過　今回の噴火は去る一月二十二日夜多少の鳴動あり雪上に灰を認めしが其後二月六日午前九時に噴烟を認め同十時砲聲の如き鳴動あり十八日に至り再び噴烟を認め越へて三月三十日午前七時噴火に先ち約三時間の大鳴動ありて大豆大の灰方石其他硝子質のものを噴出せるも其後一時沈靜せり四月十一、十二の兩日に至り山地は大振動をなし鳴動と共に破裂を爲すに至りたれば山下三里の某工場の女工の如きは何れも避難仕度をなしたる程なりしが十三日に至りて再び一時沈靜せり。

▲新山の隆起　越へて二十三日北海道鑛山監督署技師等登山當時は中央火口（直徑三百六十五間に三百間）上に新たに高さ五百七十尺直徑二百二十間に二百間の新山隆起し居るを認めたり右は十二十三兩日の大鳴動の際溶岩の瘤起したるものにして我國に於ては嘗て斯の如き奇なる噴火狀態を爲せるものを認めず。

▲噴出物降下の範圍　は北方より南方への風強かりしため南岸苫小牧より錦多布を經て別々川、社臺川附近まで海岸附近へは大豆大の方石を山頂直下には二三間乃至七八間に亘る巨大なるラバを落下したるも幸に人畜には被害はなかりし。

▲十九日の大噴火如何　米國ジヤーガー博士が豫言せる如く果して十九日大噴火あるべきや否や固より疑問に屬するも余の考ふる所によれば元來火山の破裂には根本の原因は他にあるも多く副因に依り其時期を推測するを得べく其副因の主なるものは月の盈虧に依るものにして月の引力強きときは火山の

◎雜　報　信州燒嶽の噴煙益々熾

噴火、地震等多き事は統計の示す所なり而して恰も十九日は舊四月一日に相當すれば是等の點より豫言せるものなるべし云々。

噴火した樽前山

（佐藤理學士の視察談）北海道樽前山の噴火に就き農商務省の地質調査所から派遣されて實地を調査して來た理學士佐藤傳藏氏の話を聞くに。

▲噴火前の樽前山　室蘭から汽車で一時間計りで樽前山麓錦多布停車場に著く夫から頂上まで約四里程ある專門學士で此山を二重式火山と呼ぶ高さは三千三百尺兩端の內側は緩やかであるけれど外側には嶮しい山が聳へて居る極古い頃に噴出し其後又內の方へ中央火口丘と云て直徑三百六十五間許りの摺鉢形をした小山が出來た今度噴火したのは此摺鉢底の口から煙を噴き灰抔を降らしたのであるが勢が非度くなつて內の方から岩の熔けたやうなものを噴出した爲め中央火口丘の上へ。

▲熔岩の新しい山　が出來た何時出來たか好く判らないが四月十二三日頃大層鳴動して震動が激しかつたと云ふから其の時であらうと思はれる火山の破裂に山を噴き飛ばしたり新しい噴火口が出來て熔岩を流し出すことは隨分あるが今度の樣に山の出來たことは近頃世界に於て稀らしい事で千島の先きのアリユーシヤン列島のボコスロフ火山と米國西印度のマルチニツク島のペエレー火山が丁度同じ樣である此の新しく出來た。

▲山は饅頭の形體をして　火口丘から五百七十尺も高く是迄の樽前山より百尺も高くなつたから今迄苫小牧の方から樽前山の上に緞夷富士が見えたのが見えなくなつた饅頭の形をした頂上には角が出て居るボコスロフ火山には鳥の嘴の樣に二本出來たといふことであるが是れは噴き出した熔岩が半分熔け半分は固まつた樣なものであるから周圍は冷えても內は矢張熱くつて下から瓦斯抔を強く吹上げて皮を破つて心太を拔出す樣に角が出來たのである。

▲火山破裂の豫言　山に登るには寒いから外套抔を著て行つたが熔岩の山の傍へ行くと丸で暖爐の樣に熱かつた岩が欠て落て方々に瓦斯を噴いて居た火山破裂の豫言は仲々六ヶ敷いとであるけれども或程度迄は豫言が出來ないではない地球に對して太陽と月の引力が大きい時即ち大潮の時抔は噴出が盛になることは統計上是迄に知れて居る米人ジヤーガー氏が十九日に噴火があるといつたのは丁度十九日が新月に當るからで札幌抔でも騷いで居たけれどジヤーガー氏は噴火をすると豫言したのではなく十九日頃は注意して欲しいと云つたのだ其他低氣壓との關係抔もある。

▲樽前噴火の沿革　樽前山の噴火は是迄屢々あつたことで書物を調べて見ると松前年々記に元文四年七月十四日より二十六日まで山鳴り樽前山燒くとあり安政三年の北遊乘と云ふ本には文化中山頂發煙傍近數十里の內砂石噴飛死傷算なしとあり明治七年二月八日同十六年十一月五日に噴火して砂や灰を降らしたが今年になつてからは一月二十二日夜鳴動して灰を降らし二月六日同十日同十八日に煙を噴き三月三十日午前七時大砲の爆發した樣な音を聞き四月三日四日に盛に煙を噴き同十二三日に又非度く鳴動した。

樽前山の降灰

（札幌十七日午後特電）樽前山は五月十四日夜二回鳴動あり周圍約二里の間に灰を降らし支笏湖水は爲めに黃濁の狀を呈せり。

樽前嶽大鳴動

樽前嶽五月十五日午後一時半二回大鳴動し南方へ新たに噴火口出來熾んに黑烟を噴き約二里四方は灰降る支笏湖の水混濁し山麓住民避難多し。（五月十八日國民）

樽前山新噴火口

（札幌十九日午後特電）樽前山の背面に新に噴火口を認む支笏湖減水する事五寸附近の國道には長さ三間の龜裂三ヶ所を生じ山上には三個の噴火口合して盛に火焰を噴きつゝあり危險漸く迫れるが如し。

樽前山の降灰

（札幌十九日午後特電）樽前山は五月十八日午後少しく降灰ありたるのみにて只今（三時）迄は何等異狀の報なし。

信州燒嶽の噴煙益々熾

信州燒嶽は、本年三月及び五月に入りて、又々大噴煙を起したる如し、左に其諸報を、一束して出だす。

燒ヶ嶽の大噴火

黑煙安曇の天を覆ふ　（廿三日午後豐科電話）

本日當南安曇郡豐科より西の方町ヶ嶽の附近一帶に暗黑なる一條の煙の天に冲するを見たるが當地には前代未聞の事とて戶々家々より街上に飛び出し何

れも其の奇觀なるに驚かざるはなかりき黑煙は天に冲すること約十分間其後は漸次に北の天に廣がりつゝ行けるが日方一面薄暗くなるまでに空を覆へり穗高よりの急報に依れば穗高方面には降灰あり、五六分時に一寸以上積れる由にて一尺離るゝ時は物の黑白も分らぬ程今盛んに（一時四十五分）降りつつありと云へり西穗高、有明、東穗高諸村より北安曇へかけては降灰ありしなるべし煙りは尙越中の方に向へるならん尙當地の人は昨夜燒ヶ嶽の方面に當りてピカリ〳〵と輝くを認めたり。

火柱と硫黃の臭　（廿三日午後豐科電話）昨日當地にて燒ヶ嶽の方角に當りて望見せる火柱は非常に高く太く立てるものなりき又本日降灰前後には硫黃の臭氣紛々たりき。

白色黑色に變ず　（廿三日午後東穗高電話）降灰後町ヶ嶽以北有明一帶の山脈を眺むれば今迄白皚々たりしもの俄に黑色を呈して頗る異觀なり。

東穗高の大降灰　（廿二日午後三時三十分穗高電話）只今當地に於ける降灰の狀況を視察せるに屋上を始め一面に鼠色を呈し居れり初め黑雲の如きものを認め次で日蝕の時の如く暗澹たる天氣となりしかば人々安き心もなく雨戸を締めて屋內に閉籠りたり降灰は約二十分間にして止みたり燒ヶ嶽の噴煙なることは疑ひなし最も多量に降りたるは西穗高の西部有明の東部東穗高の北部北穗高の狐嶋附近なり降灰最中一羽の大鷹氣息奄々として東穗高に來りしが遂に勢ひ極りて地上に落ち人のために捕へられたり。

池田町の大降灰　（廿三日午後一時半大町特電）只今大降灰積ること地上二寸以上灰は玉の如くかたまり居りしが地上に落つるや否や碎けて細末となれり。

池田町別報　（廿三日午後二時廿二分池田町特電）本日午後一時一天俄に冥濛となり南風共に降灰夥しく其の間約二十分に及べり降灰は漸次北に向ひて進み南方より次第に霽れ來れり町家は板戸を鎖して避難せり硫黃の臭氣紛々として鼻を衝けり地上積ること一坪に付一合程燒ヶ嶽の噴火なるべし。

大町と北城の降灰　（廿三日午後大町特電）當地は午後三時十分より同四十分まで降灰ありたり北城村同上。

大町の降灰　（廿三日午後二時半大町特電）燒嶽噴火し降灰頗る多し。

麻績の大降灰　（廿三日午後一時半特電）只今大降灰恰も日蝕の時の如く屋內ランプを點ぜり。

稻荷山の大降灰　（廿三日午後稻荷山電話）本日午後一時四十五分より約二十分間大降灰あり地上三分積る盛に降りたる時は咫尺を辨ぜず信濃電氣會社は爲めに俄に送電點火せり。

屋代地方の降灰　午後一時半頃降灰の爲め殆ど暗黑となり同地警察署の如きは執務に差閊ゆる旨警察本部に報告し來れり。

長野地方の降灰　昨日午後二時頃より川中嶋方面より上高井方面に亘りて一面に暗黑となり南西の微風につれ降灰あり一時は目も開かれざる程なりしが約二三分間にして歇みたり。

須坂の大降灰　（廿三日午後須坂電話）本日午後一時三十分より降灰屋根甚色を呈せり街上通行人は傘をさせり。

下高井方面　降灰の爲め屋根上眞白となりたり。

何故灰が降つた乎　（今頃は有勝ちのこと）長野地方降灰に就て長野地方測候所長西澤順作氏の意見を叩きしに曰く降灰は某山の大噴火なりや否やは各所の報道を得ざれば知ること能はざるも想ふに別段大なる現象にはあらざるべし多くは南安の燒嶽が小活動せんとしつゝありし所に恰も本邦を包圍しつゝある一大高氣壓が東太平洋に去りて其後は急に氣壓の沈降となりたると春暖が漸次山上に及ぼし火口內に雪類が又は外輪廓の岩石の崩れ込み等が活動を誘起して少しく多量に噴灰せし所へ當時の風向は南乃至南西なりしを以て其風下に當りし地方に噴出せし灰を吹送りたる迄にて無論之が大噴火の前徵又は大地震の先驅などいふことにあらざるは信じて疑はざる所なり かくの如き現象の活火山を有する地方に於て冬季より春季に掛け有り勝ちのことなり云々。

池田地方　本月廿三日當地に降灰せる事實は昨紙電報の如くなるが其狀況を報ぜんに同日は朝來稀なる好天氣にて殆んど春色駘蕩の狀ありき然るに午

後一時半頃となるや急に一天掻き曇り一陣の南風起ると共に灰を降らす事夥多しく四望冥濛として天日爲めに光を蔽はれたり人々ヲ燒嶽の降灰よと打騷ぎ町家は皆恐れて板戸を閉して侵入を避く其間凡二十分にして煙の如き降灰は漸次北に向ひ南部は次第に陰濛濛らぎたりき霽れて後積量を檢むれば四尺四方に凡一合餘あり過日陸郷村小穴方面に降りたる灰と齊しく硫黄の臭氣紛々として鼻を穿ちたり製絲家に在りては折柄繰絲の最中にて窓戸より吹き荒み絲質を損じたりとて憂慮せる向もありき程經て遙かに大町方面を望見するに天光陰く當地其際の狀況を偲ばれたり一時は人々悚然として安き心地なかりき尙同日は夜に入りて强風吹き荒みたれば人心惴々として警戒せり。

大町地方　▲昨廿三日午後一時四十分頃より俄に一天掻き曇りて次第に大雨の前兆の如くなり次で殆んど日蝕の如くなれるに連れ池田方面より社村を經て東山なる大峰山續きを蓋ひ鷹狩山を蓋ふて見るまゝに霧の如くに地上に近きしかば人々驚き有明山の噴火か燒嶽の噴火か連華山の噴火かなど騷ぎ廻りしが灰は地面を直に眞白と化せしめて尙北城方面に靡き行けり。

東筑坂井　廿三日午後一時二十分より五分間程非常の降灰あり眞暗となり家中は燈火を點ぜざれば顏を見ること出來ざりき八十歳の老人も曾て覺へざりし事なりと語れり。

埴科東條　廿三日朝來好天氣なりしに午後一時三十分頃より天候急に一變し南天に黑雲起り見る〳〵中に北方に進行すると共に鼠色の砂を降せり積ること一分人家の家根及地面等は皆鼠色となれり降始より終り仕舞まで凡四十分位なりし。

燒嶽の大噴火　嶮惡なる天候と積雪丈餘のため遺憾ながら登山探險を見合せたり而して廿四日午後五時燒嶽の麓に於て同山にて野猪七頭を獲て歸來せる獵師に會ふ其談に曰く廿二日大鳴動と共に物凄き數丈の火柱天に冲し翌廿三日十二時頃再び猛烈なる鳴動あり之が爲め上高地温泉の戸障子ビリ〳〵と唸り間も無く黑煙濛々として天に冲し四邊暗黑となり悽愴暗憺たる光景を呈し黑煙は北方に急速力を以て進行し約二時間にて漸次薄らぎ鳴動亦減じたるが降灰は附近一面の積雪上に積ると二寸餘に達し光景實に慘憺たるものあり又燒嶽の火口次第に陷落して噴煙益々强し云々と更に上高地温泉の留守居番上條嘉門次氏當地に下山せるを聞き直ちに氏を訪ふて燒嶽の現狀に就き聞く處に依れば本年に入りてより同山の鳴動噴煙せしは今日まで數回に及び最初は一月廿二日午後六時半頃猛烈盛んに穗高嶽より蝶ヶ嶽を蔽ひ四邊の光景慘憺として物凄く爾來三月六日午後三時頃再び大噴火あり夫れより八日まで三日間引續きて猛烈に噴出し更に今回の大噴火に及びしものにて噴煙の量は昨年八月頃に比し倍加せる模樣なり殊に本年に入りて夜中時々大火柱天に冲するの壯觀を極め鳴動は時に依りて音響を異にし轟々雷鳴の如き事あり又恰かも火坑中に大石の轟弄され居るが如くゴト〳〵と地響きをなし約一里餘を距れる上高地温泉の家屋は戸障子ビリ〳〵震撼し物凄き事數回ありしと而して昨年八月余が探險登山せし當時に比し燒嶽附近の生木は漸次地熱に侵れて枯死するもの多く今や周圍約二里の面積に及べりと火坑附近は昨年の當時に比し如何なる形態に變ぜしか知るに由なきも諸種の情報より綜合すれば數個の火坑は漸次一の大火坑に合したるやも知れず但し上高地温泉及び白骨温泉等は何等被害を受けたる模樣更になし只上高地温泉附近は積雪上降灰あるのみ目下燒嶽附近の積雪一丈二三尺に達し居れり兎に角現場は五月上旬にあらざれば探險登山する能はざるべしと信ぜらる尙ほ上高地温泉の湧湯は近來非常に量を增したりと云ふ。(信濃毎日新聞)

探險者皆引返す　今回の燒嶽大噴烟につき探險を試みんとする者甚だ多く現に柳澤松本測候所長、大久保技手の兩氏は廿四日登山探險せんとせしも到底昨今の天候は危險多くして目的を達する能はざるを覺り嶋々にて中止し又長野大林區署の高松、齋藤兩氏も探險に赴きたるも廿五日檜峠に至り噴煙を遠望して歸れり。(嶋々にて松東生)

蝶ヶ嶽の黑雪　(燒嶽又々大噴煙)五月六七日信飛國境の燒嶽又々大噴煙あり同時に蝶ヶ嶽方面に灰を降らし爲めに白雪皚々たりし山巓一面は灰黑色と變じ常念嶽の皚々たる白雪と相對して一大異觀を呈せり。

諏訪の氷山と降灰　(長野十四日電話)三月十三日午前諏訪湖西北の烈風あり折柄暖氣の爲め解け初めたる諏訪湖の氷を湖岸に向つて吹き揚げたれば上諏訪町字片端なる田の上には高さ九尺長二十間に達するの氷山を築き其他數十間吹揚げたる場所もあり又同夜上諏訪始め諏訪郡内に降灰ありたり其最

も多量に降りたる所は屋上五厘位に達したるが果して火山の噴火なるやは不明なるも多分飛驒信濃の境なる燒嶽の噴火なるべしと云ふ。（別項燒ヶ嶽噴火記事參照）

硫黄嶽鳴動　（岐阜）五月十三日夜飛驒國硫黄嶽三回鳴動、十四日に至り、附近村落に路上二三寸、灰降り積もり、桑葉に被害あり、附近の一部は、養蠶を爲すこと能はず、困難せり。

大町へ又々降灰　信州北安曇郡大町へは、五月十五日夜十時頃より十一時頃まで、雨に交りて降灰ありたり、過般の降灰より甚だ多かりしも、夜分の事故人々も其程には驚かざりし。

硫黄嶽鳴動　（岐阜）飛驒國硫黄ヶ嶽は十五日夜より、廿餘回鳴動の後、一條の火煙立上り、山麓上寶村神岡村、附近震動甚だしく人心恟々たり。

燒嶽大噴煙　五月十三日午後十一時より、十四日午前七時頃迄、大噴煙、火煙天に達し、降灰甚しく、上寶村一帶、阿曾布村、袖川村、及び船津方面迄（七里餘）降灰せり、但し船津邊は僅少。十五日午後九時頃、大鳴動、火煙の立昇ること數回、鳴動は西北方面六里位迄達せり、併し降灰なし、目下蠶兒の掃立中なれば、降灰の被害なきやとて、村役場員調査中なり。（飛驒高山住廣造氏報）

燒ヶ嶽探檢　（長野）屢噴火したる飛驒信濃の境なる燒ヶ嶽に登山して實地を探檢したる者の談に據れば燒ヶ嶽の山上には中央に當りて一大噴火口を新に生じて此新噴火口より盛に噴煙しつゝあり昨年登山して認め置きたりし噴火口よりは本年は噴火せず全山は屢噴火する爲め全く生氣を失し草木は皆枯盡し附近には灰三寸餘積り居れり。

燒嶽大噴火降灰　（廿八日午前九時豐科電話）五月二十八日午前三時半頃より燒ヶ嶽大噴火の爲め常念嶽附近より日本アルプスの一體白馬山附近に至る迄黑烟の覆ふ所となりて多大の降灰あり之が爲め附近一面暗黑となりたり。

安曇地方の降灰　同日の朝南風に吹れて燒嶽より降灰南安穗高地方より北安池田松川地方に及び途行く人も南向なりしは目も口も開けず困難せりと。

稻荷山の降灰　五月廿七日朝更級郡同地方に降灰あり夫が爲め各養蠶家は詣桑に差支摘取りて洗滌し夫々給桑せり勿論燒嶽の噴火せるためなるべし。

上高井の降灰　五月二十八日午前六時半頃より八時頃まで上高井方面一帶少量の降灰ありたり桑の葉の面に薄鼠色を呈したるも差したる被害無き見込なりと。

中野地方の降灰　下高井郡中野地方五月廿八日午前七時頃より稍一時間程降灰ありたり。

豐井地方の降灰　下水内郡豐井村に五月廿八日午前七時頃より約一時間降灰ありたり。

長野にも降灰　五月二十八日午前學校通ひの小兒等の目にも當りて「アレ灰が降る〳〵」と云はれた位なりき。

榮村地方の降灰　五月二十八日朝上水内郡榮村地方へ降灰あり桑葉の上に積れるものは最も能く之を見るを得たり例の燒嶽の噴煙の風に送られたるものなるべし同地の養蠶家は降灰を蒙りたる桑葉は蠶兒に害なきかと懸念しつゝあり。

小布施地方の降灰　上高井郡同地方にては兩三日來何所の山とも判明せされど時々鳴動するを聞けりと云ふものあり多分部住地籍の雁田山なるべしなど噂とりく〻なりしが五月廿八日午前七時頃より降灰あり此前程にはあらざりしも住來する人々の頭髮等は灰色となり養蠶家は桑葉に附着せる灰を拂ひ取りたり。

硫黄嶽噴烟に就て　信濃飛驒の國境なる硫黄嶽噴烟に付ては既に記す所ありしが此の硫黄嶽は天正十三年大噴火以來沈靜し居たるに一昨年十二月及び昨年十一月頃より噴烟するに至り、本年に入り一、二、三の三ヶ月間は一度づゝ噴烟したる由右に付高山測候所長宮嶋氏は今月の噴火以前登山して實見したりとて語る所に依れば同山の地質は新火成岩より成り主成分は輝石黑母硫黄磁石灰にて五合目以上は黑松、樅、落葉松、櫻、唐楮繁茂し九合以上は氣候寒くして樹木皆無なるが噴煙の最も盛なるは午後一時過ぎにて白黑色を帶

び黄色に變ずる事あり微風の時は噴烟口より約三十間程立昇るを常とす又地勢は吉城郡の南東信州南安臺郡の西に屹立し北緯三十六度十五分東經百三十七度四十一分に位し乘鞍に次ぐの高山なり火口の形狀は噴火孔の遺跡として頂上の中央に一小丘を隔てゝ二個の摺鉢形の凹地あり周圍凡八町深さ二十間はあるべし此孔こそ天正年中大噴烟ありし遺跡にて夫れより西々北孔底に東西四十間南北十間程の新らしき火口あり二條の白烟立ち昇り居たるも其勢ひ強からず此口の南方に陸地測量部の三角點あれど噴煙の爲め一部分破壞されて西方に傾斜し居れり此外東南の舊孔の附近にも小新火口少からざるを見たり云々。

武州御嶽山大祭登山者

三月八日より、五月八日迄の、武州御嶽登山者は、青梅驛降者、六千七百六十七名、乘者六千二百三十三名の多きに達し居れるが、此外日向和田驛に、乘降せしも多ければ、優に萬以上に達したるならむといふ。

南極の大活火山

昨年英國より派遣したる、南極探險隊の一行は、全世界極南の一大活火山、エレバスに登攀せり、其詳報なの如し。

官民歡呼の間に英國を出發せるニムロド號は、印度洋を横斷して五ヶ月の航海の後無事新濠洲に安着、同地に於て二ヶ年間の糧食を積載し、昨年一月一日更にリットルトンを出發し、一九〇二年にスコット大尉が取れる航路に由つてエレバス山の麓なるマックマード灣に到着したれば、此處にて上陸し積載せる材料を以てロイド岬附近に小屋を建築してこゝを根據地と定め第一着に世界極南の活火山にして海拔一萬三千百二十呎のエレバス山（東經百六十五度南緯七十五度）の登攀を企てたり。

登山隊は少尉アダムス、製圖家ブロックハースト、シドニー大學教授ダヤ井ド、外科醫にて海圖製作を兼ねたるマアシャル、外科助手マッケー及び南濠洲の首府アデレードの科學者マアスンの六名より成り、三月五日雪車を驅つて根據地を發せしが、七日早朝海拔五千五百呎の高度に達して雪車を捨て、各員其食料寢具を負うて徒歩登攀し、其夜九千五百呎の地點に達したり。

然るに、其夜は寒威殊に凜烈、攝氏氷點下五十度なるに加へて、三十時間に亘る大風雪に襲はれたれば、止むなく其地點に露營し、天候の定まるを待ちて再び登攀を強行し、九日終に海拔一萬一千呎の地點に於て舊火山口に到達し之を探險したるが、其舊續煙口には長石、浮石及び硫黄の堆積せるを發見せり。

翌十日更に登山を續行して、一行は遂に其目的たるエレバス山頂を窮め、ここに活火山を探險するを得たり、活火山口は其直徑半哩、深さ八百呎、極南無人の地、滿目皓白の山脈中に特立して、巨量の水蒸氣と硫化瓦斯とを中空二千呎の高さに噴出する樣、水火相剋して壯觀を極む、一行は此の景を寫眞に收めて、即日歸路に就き、翌十一日ロイド岬の根據地に歸着したり此行ブロックハースト氏は足指に凍傷を受け、遂に一方の拇指を切斷せざるを得ざるに至りぬ。

半年間の冬籠　エレバス山の探險後、四月より九月まで約半年は南半球の冬にして探險に不便なれば、一行は小屋に冬籠りして、學術觀察に從ふことしアダムス、ダ井ド二氏はエレバス山の噴烟の搖曳に由つて、氣象學、上層氣圏氣の運動を觀察し、マーレー氏は根據地附近の淡水湖水中の細菌を研究して、其の最高最冷何れにも堪へ、鹹水中にも生活し得ることを確め、湖水には菌樣の植物並に特殊の苔類數種を發見し、海中にも特殊なる二種の海藻の繁茂せるを發見し、マーソン氏は極光の變化を記錄し且つ極光及びエレバス山の噴煙と月光の景等を撮影し、ブロックハースト氏は湖底の生物學を研究し潮流の方向を測量し、マーシャル氏は活動寫眞を以て博物學上の撮影を爲し、マアスン氏は專ら風景並に極光の描寫に從ひ、以て徐に夏の來るを待ちしが、此間の氣候は比較的溫和なりしも攝氏氷點下二十七度に下れる事ありき。（萬朝報）

ペンク博士講談

東京地學協會に於て、招待せる獨逸地形學の大家ペンク博士は本年三月廿日同會に於て講演を試られたり、其詳報左の如し。

氣候と地形　（ペンク博士の講演、講堂の盛況）三月廿日午後三時半から東

地學協會の催しで大學の講義室に滯京中の伯林大學教授ペンク博士の講演があつた、名にし負ふ地理學の泰斗のレクチュアであるから傍聽者非常に多く墺國大使を初め獨逸大使館員大學教授學生等で定刻には早や空席も殘さなかつた見れば正面の塗板には「氣候と地形」と大書して講演の題目を示し右には世界地質圖が懸けてある、地學協會の副會長として菊地男の紹介的挨拶が濟むと頓てペンク博士は拍手の内に講壇に顯はれ明瞭な獨逸語で趣味深き講演を始めた。

地形學とは何　地理學を地形の上から研究するのは頗る必要である、例へば或る山は大きな巖から出來てる又或る他の山は別の成立をして居る其の他地殼の作用、水の作用等で種々の異なつた地形が彼方此方に出來る、是等の形が地球上諸所に顯はれ各種々の特殊な狀態を呈して居るのを相互に比較して組織的に研究するのを地形學と云ふのである。

三種の地形　凡そ外界から働く水の作用には種々ある、即ち吾々の最も普通に觀る流水の作用もあり又今日の南極地方に於ける如き全部氷結した地形もあつてなか〳〵一定して居ない、然し今日我地球上に於ける地形を大別すると先づ三種となる、即ち（一）熱帶や溫帶地方で水の供給の充分な地形（二）水の無い所に出來た地形（三）氷で出來た地形。

日本の河は如何　第一の地形即ち熱帶や溫帶地方で水の供給の充分なる國々例へば我日本の如き歐米諸國の如き所謂土で出來た地形……植物が腐敗して出來た土で腐蝕土と稱するもので……最も普通のものであるから特に說明する必要はない、是れ等の地形では如何なる特色があるかと云ふに、例へば日本の河の組織に就て調べて見るもプレーヘーヤー氏の云つた如く河の源から河口に到る迄の高さの關係がアッシムプトートの典線を形造り、途中から本流に注ぎ込む幾多の支流も其の合流する點に於て別に高さの差異を示さない、然し是れが氷河の場合になると非常に違ふ。

氷河の造た地形　氷河の地殼を侵蝕して造つた河を見ると谷のシステムが普通の河と大に異つてるが是に就てはプレーヘヤも別に說を立てなかつた、自分の研究した所によると氷河の谷では支流と本流と出合ふ所は必らず段をなし其の高さを異にして居る、其の段の高さは三百米突乃至四百米突位のものもある瑞西國の如き墺地利のチロルの如き此の種の谷が澤山ある、其れ故水が其所を通ると飛瀑を懸け奔流を作り絕好の風景美を作る、又其水の直下の勢を利用して水力電氣を起し文明施設に幾多の貢献をする。

氷河は自然の石切　又氷河の谷の侵蝕の有樣は如何と云ふに一般に驚くべく深い、墺國のインスブルックの如き昔の氷河の厚さは確かに千四百米突內外に達して居るから其の非常なる重量で地殼を濾過して行くかと想像される、氷河は上述の樣な作用の外に又一種特別の浸蝕作用を演ずる、米國では「氷は石切り作用をする」と云はれるが全く左樣で石を運搬する外に石を切斷する、實際四十立方米突もある大きな石を浸蝕して切り放し他の場所に運んでしまつたのが幾何も見られる、其の爲めに出來た作用を普通の流水の作用と比較すると大に相違のあることが知れる。

流水は平野、氷河は堆石　氷河は普通の河流と同じ樣に運搬作用をすることは云ふ迄もないが普通の河はグラベルを運ぶのに氷河はゲシーベ即ち堆石を運ぶ、そして其の結果に面白い特殊の區別を生じる、即ち河流では上流から運搬したものが冲積して茫々たる平野を形ち造るのに、氷河の方ではモレイン即ち堆石を作りモレイン、ランドシャフトを形成し低い丘陵を建設する、然かも氷河は不規則に河流は規則的に仕事をするのだ。

無水地方は如何　それから水の無い地方若くは水の少ない地方即ち砂漠などでは普通如何なる地形を造るかと云ふと、地面は裸、岩石は露出して居て此處に働く力は風である、然し其れ以外にも特殊の力がある、自分は北米ニュー、メキンコ、アリゾナ其の他の地方で研究したが、第一は地殼の變動、第二は水の作用である、地殼の變動は隆起と陷落で水の作用は主として降雨の結果である、地殼の變動に就ては別に言ふ事はないが第二の水の作用には數言を要する、砂漠無水地方の河は河の形はして居ても水がない所が會々雨が降つて來ると急に水が溜り奔流し漲溢し破壞し元の地形を變じてしまう、其の例は澤山ある、埃及カイロより鐵道線路に近き地方は屢々洪水で線路迄も流され地形に大變化を來すなどが度々ある、されば風の外に水の地形に作用する事も決して忘るゝ事はできぬ、是等は實に地球の表面に働く彫刻的の作用ではあるまいか。

日本にも氷河の痕　さて氣候は常に同じ樣に地球表面を支配するかと云ふとさうはいかぬ、場所により時により種々の變化あるを免れぬ、某の場所は太古も今と同じ氣候同じ溫度であつたかと云ふと決してさうではない、太古は非常に寒かつた所も今は餘程溫暖になつてると云ふ樣な所もある、日本の如きも太古の氷河時代の痕がある、今考へると一寸疑はしい樣だが實は昔はシユニーグレンツエ即ち電線が今よりもズツト低かつたが其の後漸々高まつて來たのだ日本アルプスで山崎氏が發見した氷河の痕跡は即ち其の事實を說明するものだ。

記者曰く海拔一萬餘尺の高峰の連立して居る日本アルプスの白馬山に先年理學士山崎直方氏が氷河の痕跡を發見したと云ふ事は數日前の紙上「ペンク博士と氷河」中に一寸紹介して置いたが博士の此の講演によると正に事實で山崎學士の說は有力なる保證を得たものであらう、日本が果して氷河時代の影響を被つて居るか居ないかは確かに我理學者の研究すべき面白い問題である。

今の砂漠、昔の湖　博士は更らに語を續けて米國では氣候風土の變化した例が澤山ある、沙漠等は其の昔大抵湖水のあつた所で水が無くなつて途に今日の砂原と化したのだ、米國のジユルベル教授の說によると今のグレート、ベーズルには昔レーキ、ウオンチルと云ふ湖水があつたので其の證據には今も段丘が見られる、然し何れの沙漠も昔湖だつたと云ふ譯ではない、必らずしもさうは限らぬ、同じ沙漠でもアリゾナやメキシコにあるのは昔から沙漠で第三紀時代に出來たものである云々　博士の講演の大要は以上の如くであつたが講演中の博士は日本の大學講座等でなか〳〵見る事の出來ない巧妙なヂエスチユアーと抑揚あり緩急ある語調とを以て聽衆を醉はしむる程であつた、拍手の內に講演を畢つてから山崎學士が大意を邦譯し菊地男爵が英語で謝辭を述べて散會したが此の氣候と地形との關係は今日初めて發表したものださうな。（中央新聞）

淺間山大鳴動

五月十二日午前五時淺間山大鳴動あり濃霧の內に大砲を發する如く附近戶障子震動すといふ。

富士山上天拜所

山梨縣富士山下吉田村なる、富士教院にては同地の田邊次寸、菊吉多平、外河鯉太郎、小佐野鬱麿及び須走り村の米山安治等の諸氏發起となり、富士八合目の地所百二十坪を宮內省より拜借し、天拜所を新築せんとて、出願中なりしが、今回宮內省より許可せられたれば、來る六月より工事に着手し、出來上がりし上は、寶物展覽會を開く筈なりと。

英國軍醫雪中登山

五月初めより橫濱に碇泊中なる英國軍艦幾多の乘組員中キングアルフレッド號乘組の外科軍醫ピードチル（三十五）氏と云ふは本國より同行せる夫人と共に箱根の箱根ホテルに滯在して日夜明媚の山水を賞し居れるが平素より極めて冒險の所業を好み本國に於ても暇さへあれば夫處彼處の山野を跋涉するを樂みとなし一日に四十哩位を平氣にて步行すると云ふ赭顏痩軀身長六尺三寸餘に餘れる無髯の偉丈夫にて箱根に湯治中も妻と共に扁舟を操つて湖心に浮び或は山中に分け入りて木の根に焚火して自ら食を整へ日の暮るゝを忘れて宿の者を驚かす事さへ屢あり然るに朝夕な湖畔の眺めに富士の高根を望み且人々より登山の話を聞きては日頃の登山癖むら〳〵と起り雪の爲に中途より下山する迄も一度此秀峰に登らんと去る十日の午後急に心を決してホテルの通譯鈴木氏を從へ妻と共にボートに乘じて海尻に出で夫より徒步長尻峠を越えて午後六時御殿場に着し富士屋に投宿し玆にて剛力勝俣猪三吉を雇ひ入れ十一日午前四時半、妻を旅宿に殘し置き通譯剛力と共に愈登山の途に着けり氏が此日の服裝は全く。

▲着のみ着の儘　にて寬かに作れる半ズボンのポーチングドレスにハンテングを眉深に冠り靴は赤皮の編上の鐵を打ちたるものを穿ち散步用のステツキを携へたるのみ携帶品は牛乳と水を略等分に混合したるウイスキー一壜サンドウイツチ、ボーレークス七箇此他には一の防寒具をも着けず飄然として出發せり此日朝より天候險惡にして細雨霏々として降り四邊の展望に宜しからず且路は夫が爲に步行困難にして通譯は元より流石の剛力も少からず疲

勢したるも氏は一向に疲るゝ色なく常に數丁餘も先を進み行けり。

▲泥の如き雪路　纔て三合五勺四合目邊りより積雪の境に入りしが昨今の暖氣の爲めに稍溶解し初めたる雪は踏めば忽ち崩れて脚を沒し其困難中々に名狀すべからす五合目に至りて携帶の食料を出し晝食を濟ませ暫時休息元氣を回復して再び登山の途に就く、六合七合と分け上る中空は次第に險惡となり濛霧見る〳〵五體を包んで四顧咫尺を辨すべからす折しも。

▲雨を交へし大粒の雹　烈しく降り注きて恰も礫を擲つ如く面を向く可からす雪は此邊より堅くなりたれど却て歩行に困難に而も寒氣は次第に加はりて薄衣の一行は手足も冷え凍り骨も萎ゆる許り剛力と通譯は交る〳〵言葉を盡して登山を止めしも思ひ込んだる氏は毫も怯む色なく去らば是より余一人にて頂上に到らんと二人を七合目の岩室内に殘し置き結氷堅く鎖して削れる如き絶頂を目指し猛勇を振つて只眞一文字に登り行きぬ。

▲絶頂に達す　勢ひ込んだる氏は幾度か雪の爲めに足を辷らして顚倒するを物ともせず夏にても最も難所とせる胸突八丁を只三十分が程に馳せ上りて遂に絶頂に達せり。

▲頂上の紀念品　此の時の困難に就き氏自ら語りて曰く歩行の困難は云はずもあれ折節雨は雪と變じ霏々として面を打ち空氣極めて稀薄に呼吸逼迫し寒氣は骨に沁みて到底長く止まるに堪へざりしも噴火口の跡には結氷恰も水晶を並べたる如くに巍峨として聳え奇觀名狀すべからす思はず崇嚴の感に打たれて佇立せり此時山頂に誰が飲み棄てしものにや蓋なき土瓶と茶碗三箇雪の中に埋まり少しく上面を現し居り是ぞ絶好の紀念品として直に携へ歸れるが是は歸涼後サムライ商會に命じて銀製の蓋を作り夫に文字を刻して歸國後來賓に珈琲を勸むる器となすべしと云へり斯くて一二分間山頂の雪上に跼して休息の上。

▲疲勞の極昏倒　歸路に着きしが其困難は登山に倍し靴をスケートの代りとして結氷の上を辷り落ちたる爲幾回となく足を踏み辷らせては顚びつ起きつ洋服に解ける雪水の爲めに濡鼠の如くに化し加ふるに過激の運動の爲めに身體綿の如く疲勞し七合目迄下て剛力通譯に逢ひたる際の如きは一聲「ウイスキー」と叫びたる儘雪中に仆れたる程なりしも一杯のウイスキーに再び元氣を回復し三人打ち連れて午後六時下山せり。

▲雪に眼を傷む　氏が登山の困難と其勇氣は實に想像以上にて剛力の如きも外人にして斯くまで元氣旺盛なる人は未だ嘗て目擊せざる處なりと驚嘆せしが氏は此際あまりに脚下に注意したる結果翌朝に至り雪の反射の爲めに兩眼赤く腫れ涙類りに出でゝ痛みを感じ頗る困難の模樣なりしも尚元氣少しも衰へず自ら應急の手當を加へたる後昨朝も從者の勸を退け荷物を人足に擔がせ妻と共に再び徒歩箱根ホテルに引上げたり。（東京朝日新聞）

鐵道開業哩程

鐵道院にて目下建設工事中なる各線中、今明兩年度に於て二百五十七哩線の延長を見る筈なるがその内、信州各地の登山に、最も必要なる中央東線、及び西線にて、開業すべき區間哩程、新停車場開業年月左の如し。

▲中央西線　坂下三留野間　哩程　五哩五十七　新停車場　三留町　開業年月　四十二年七月　三留野　野尻間　五哩五十二　野尻四十二年十月。

▲中央東線　鹿尻奈良井間　十三哩十　新停車場洗馬　贄川　奈良井　四十二年十一月　野尻　須原間　四哩　須原　四十三年三月　奈良井藪原間　四哩三　藪原、四十三年十二月。

比律賓の火山破裂

三月十二日（長崎電報に曰く）外字新聞に據れば比律賓に火山大破裂の椿事あり其際噴火口の湖水を天空に噴き揚げて一大瀑布を現出せしめ其落ち來りたる田野道路橋梁等總て推し流されたり人畜の損害一切判明せず噴火したる山はラナダなりと報ぜらるゝも或はパンヂヨヴ山には非ずやとも信ぜらるゝ。

勘察加探險隊の報告

二月十日彼得堡に於て勘察加の學術的探險隊に加はりたる一人コマロフ氏は同探險隊の植物研究班の調査の結果の報告を爲せり勘察加半嶋探險隊の彼得堡を出發したるは昨年の露曆四月二十一日にて同探險隊は植物、地質、人種、氣象の各班を以て成立せり各班の探險隊はペトロパウローフスクに着し其處より探險作業の爲に各班の部隊に別れたり然るに各班其分擔の探險に着手す

るや 先づ忽ち非常の困難を感じたるは氣候の不良なるが爲に續々馬匹の斃死を來して 必要品の運送に大不便を生じ探險隊は止むを得ず 其の土地に適應したる方法を 取らざるを得ざるに至りたり之に依りて 地質調査班の如きは先づ帆船にて海路より 作業地點に入らざる可らざる有樣なりき。

植物研究班の前進したる經路は土地甚だ複雜にて 蚉もあれば 溪谷もあり 大河小流の貫流灌漑する大小の平原平地もあり 土壤は 堅土質及び 噴火土質にして噴火土質中には 粗砂黑砂及び多くの 礦物性土質を包含せり 植物班の調査の結果に依れば 勘察加の春期は 彼得堡に比して 一箇月後れ雪は 多くは七月二日より早くは解けず 其後は快晴打續き七月下旬に入りて 雨期となるなり 勘察加半嶋の南部一帶の植物は所謂山下植物にして 高山植物に次ぐ 種類なり半嶋は寒氣酷烈なるを以て 住民は七月二十二三日頃より前には 野菜を播き附くるを得ざるなり 耕種植物は 只小量の穀粒と蔬のみを多く收獲し得るの外に好果を得る望みなし。

勘察加半嶋保護上に最急務なる事業は 牧畜の奬勵とバタ 其他副産物の製造の催進酒精輸入嚴禁、土人の郵便負役免除、農具機械の供給、漁業の取締り等なり 特に無制限に大漁業組合を同半嶋に許可するの 結果は魚類の絶滅を招く可し云々。

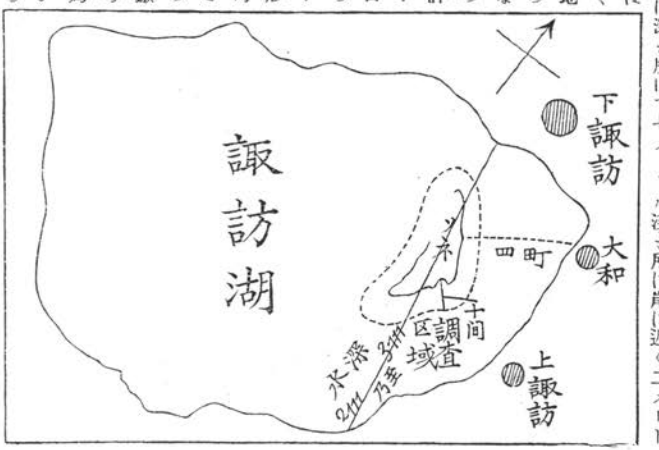
湖底の太古遺跡

（坪井博士の研究、水上生活の遺跡か）東京帝國大學理科大學人類學教室主任坪井博士が五月十七日 助手松村瞭氏を從へて 信州諏訪湖に赴き湖の東部即ち上諏訪と下諏訪の中間に位する大和より約四丁の處に在る暗礁（ソヲ）俗に「大和ソヲ」の周圍約十間ばかりの湖底に於て太古水上生活の名殘かとも認めらるゝ遺物を發見し目下研究中なる事は 既記せしが 尙ほ十九日を以て歸京したる博士の談を左に揭ぐべし。

△研究の動機　久しく諏訪湖附近に住みて湖學の研究及び湖底地質の研究に腐心しつゝありたる橋本福松氏は曾て 魴を漁る三分目の鐵鏈を以てソヲ附近の泥土を掬取したるに其中より思ひもかけぬ 石鏃を發見し而かも 前後二回に二個を得たる旨余に 報告し來りたり 地上にある石器時代の遺跡は別に珍らしからぬ事なるも水面下の遺跡に至つては 日本に於いて 實に始めての發見なれば是れ或は大古に於ける水上生活の遺跡にはあらざるか 何れにせよ 珍らしき次第なれば直ちに 出發研究に從事したり。

△大和ソヲ　諏訪の水深は深き所にて七メートル淺き所は岸に近く二メートル位なるべし而してソヲは 水底中他の塲所よりも高く 地質の稍や硬き處なり他地方にてソヲといへば 陸上の荒れたる土地を稱する語なれども水底に於けるソヲの名稱の意義及び起因は今詳にするに由なし元來此ソヲに二種あり其一は川の出口にある三角洲に似たるものなるが此湖の所謂大和ソヲは東西二丁南北三丁半、形石鏃に似て岸を距る約四町あり即ち前に云ふ三角洲とは其趣を異にし居なり此の大和ソヲより石鏃及び石鏃原料を發見したるより推考するに或は往昔地滑りの爲めに水面に現れ居たる地か水底となりたるものにあらざるか先ず此より程遠からぬ所に於て 地滑りの爲め 鐵道線路を埋沒したりとか 果して其事實ありとせば 大和ソヲも嘗ては一の嶋にして石器時代の人民が此に住居したるにはあらざるか 一說には此附近に寺院ありて 土石を運搬したとて現に嶋の存在を事實の如く云ひつゝあり或は參考の資料ともなすべきか。

△ソヲ附近の搜査　偖て十八日午前中余は三隻の船を雇ひ橋本氏の案内に依



りて大和下のソヲに至りしが土質は他より堅き事既に云ひたる如くなれば先づ鋤鍵を入れて掻き淡ひたるに石鏃の原料として用ひらるゝオブシデン（黒曜石）の出づること頗る多く中には形の崩れたるもあり未製もありしかば之に力を得て尙ほ掬ひ上ぐる中午前九時より十一時までの間に百二十餘箇を發見し一掬優に十箇に至る事もありき斯くの如き多大の收獲は從來余の餘り經驗せざる所なり既に斯く石鏃の出づる以上は必ず土器をも發見すべき道理なりと尙ほ仔細に取調べたるに完全なるものは見る能はざりしも水中にて擦れたる土器の破片（不完全ながらも）とも見るべき淡赤黒のものを見出せり左れど餘りに小さく薄く表の模樣を認むるによしなきは遺憾なり余は又之と同時に水上生活の遺跡に於て見らるゝ水中の杭の端らしき木片二三個をも拾ひ取れり參考の資として持歸りたるが更に進んで報告したき一物あり。

▲植物の實　木上住居の遺跡の發見されたるは西暦千八百五十三年より千八百五十四年にかけ始めて歐洲に於てせられしを嚆矢とし端西の チューリッヒ湖附近の學校教師の手に依りて公表せられ次で ケラー 氏は水上住居に必ず見らるゝ杭をも發見し又石鏃土器の發見と同時に 植物の實をも發見したるが今回大和ソヲの泥土を何心なく洗ひたるにケラー氏の稱せる植物の實と極めて酷肖せるものを得たり胡椒の皮の如く其色淡灰色を帶び中に暗黒色を呈せるもあり稻の類としては稜角なく且つ其面平滑に過ぎたり又硬質にして稗にもあらず麥にもあらず余はその最も興味ある研究材料なる事を思ひ大切に保存し居れり。

▲水上生活の必要　水上生活の必要は自衛的に出でたるものにて他部落と爭ふ場合隘地にあるよりも防禦上利益あればなり動物の襲擊、蟲類の害毒を防ぐにも亦便利なればなり恰も城塞が四方に濠を穿てると同じ理なるべし此水上生活をなせるものは世界を通じて頗る多く前記端西の外佛、英、伊、墺、獨或は南米南洋諸嶋にも散在し居れり數年前諏訪にて諏訪史料なるものゝ出版ありたるが中に杭を打ちたる形跡ありとの傳說ありしも果して此水上生活の遺跡なるや否やケラー氏の書に依るも杭の上には多少の泥土あり重に縱に打込まれ居りて探るに多少の手答へありとぞ今度のものも或は遺跡と見るべきか。

◎雜　報　湖底の太古遺跡

▲今後の研究　今回の調査は全く初歩にて趣味は是より益々深くなるべく實際學術上に資せんには更に大仕掛けの調査を爲すの必要あり兎に角日本に於て始めて此發見をなし得しは喜ぶべき事なり。（時事）

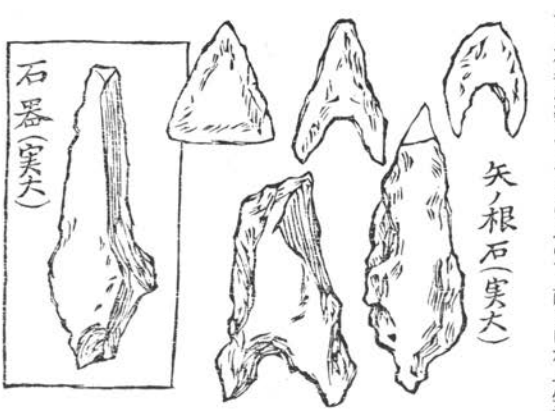
坪井理學博士は信州諏訪湖から石器時代の矢の根石を採集して歸つて來た其の談に曰く。

▲頗る澤山な石鏃　私は松村理學博士と五月十七日に立ち十八日に俗稱丸木といふ三艘の舟に乘つて出掛たが今度石鏃を見付たのは上諏訪と下諏訪との間に當る大和といふ所の下にある「ソヲ」で川の口ではなく山の方の岩石と同じ性質の岩から出來て居るといふことで其の上に土が重なつて居る樣です此所は岸から四町許離れた所で岸に沿ふて細長く高い所は二三町の廣さの所で中央の方は堅い石器の出るのは全體の場所ではなく其の內十間四方の所なのです鋤鍵を以て土を抄び取り其の儘引上げて丸で砂金でも取る樣にして搜がすと原料の缺ぬ澤山出る石の質は天然硝子と稱る黑燿石で或は石鏃の造り掛や夫から造ろうとするものやら種々なもの出る中に形の完全なのは一ツ二ツ容つて居て午前九時から十二時過迄の間に完全なものが百餘種で原料は桝を以て量る樣に出た土器の破片は二ツ三ツ取つたが極薄く又た模樣杯も一向ない多分永く水の中に這入つて居た爲めに曝されたのでしやう。

▲湖水の上の生活　諏訪湖は昔大きなものであつたのが段々小さくなつたもので水の多い時に「ソヲ」といふ所抔は島であつたのが地辷の爲に落たといふのも一說であるけれど石器時代の人民の中には湖水の上に住居をしたとはある歐羅巴で一八五三年の冬瑞西で湖水が干て チュリッヒといふ湖の脇に居た教員が湖水の底から石鏃石器類を發見し考古學者の ケラー 氏に報告したので實地を見れば遺物の石器許りでなく杭の澤山あるのを發見し曾つて 水上生活をした跡であることが判かつた佛、伊、獨、墺英の各國でも幾も湖上住居の跡が判つた現在の野蠻未開人の中にも南洋ニュゲーランドの土人とか南米の土人又は亞非利加及馬來地方等所々に杭を打つて其上に小屋を造つて住で居るものがある其家のあつた跡から器物の外食物に供した植物の實や皮や織物抔が出て來る。

▲杭の殘つた跡乎　太古遺蹟の研究の中でも湖上生活の跡は他に得られない

材料が殘つて居るので專門家は又た多大の興味を以て注意して居るが諏訪湖から石器を發見したといふので直ちに水上生活をしたとは斷言が出來ないけれど今後充分調査したら面白い據り所を發見する望がないではない殊に湖水の中から瓦斯や湯を噴出す所がある其三ツ釜といふ傍に棒を入れたら三四尺の下に木に當る樣な手答へがしたといふ漁師の話で其の杭も堅に太くない棒が並んで幾つもあるといふことだ又た諏訪資料といふ書き物には南の方に杭を打つた樣な跡があると云ふて居る夫れから知らないで持つて出た泥の中から植物の實の殼が幾つも出たし石器の外にモ一ツ研究する種が出來た何に使ふのか同じ黑燿石で石鏃と違つて居る何しろ眞實の研究は之れからである。(國民)



淺間山郵便局

淺間山郵便局設置に就ては一昨年來の問題なるが長野郵便局にては既に充分なる調査を遂げ又遞信省に於ても同局託置の必要を認め居る赴きなれば本年度豫算の都合を以て設置の運びに至るべく若し設置するとせば其の期間は登山者の最も多き七月中旬頃より九月二十日前後迄なるべしと尙ほ本件に關し小山小諸局長外一名は過日來長野局に出頭し本年夏期中是非設置せられたき旨懇々陳情する處ありたり。

富士山の晩雪

五月十二日以來の寒氣に、富士山五合目以上に降雪あり、氣溫は五十二度を上下せりといふ。

高山植物保護請願

學術の進歩に伴ひ未知の深山谿谷も普く世に紹介せらるゝは喜ぶべきとなるも同時に一種の惡流行を見るに至れるは憂慮すべきとなり即ち高山植物盆栽の大流行にして東部の植木商の如きは人夫を傭ひ馬を引いて登山し珍稀の植物を濫採する者年々增加の傾向あり元來高山植物は移植に難く平地に移せば大部分は枯死するか若くは形態を變じ色を失ひ賞するに足らざるに至るものなりされば現今の如く放任せば濫採年々甚だしく遂に絕滅するに至らむとは識者の唱へつゝある所なるが長田諏訪敎育會長は先づ八ケ嶽所產記稀品に對し相當の保護を加へられ度き旨同縣知事に請願する所あり縣當局者は目下考案中の由。

▲クロハナヘウタンボク　▲クモマキンポウゲ　▲キンロバイ　▲ユキバキンバイ　▲キバナノアツモリサウ　▲コマクサ　▲クロユリ　▲ムカゴユキノシタ　▲ホテイラン。

導者松澤菊一郎の死

本誌前號、三枝氏の「日本北アルプス縱走の話」の內に記されたる、人夫松澤菊一郎なるものは、無慘や、歸らぬ命を谷底深く崩雪と共に葬つてしまつたのである。

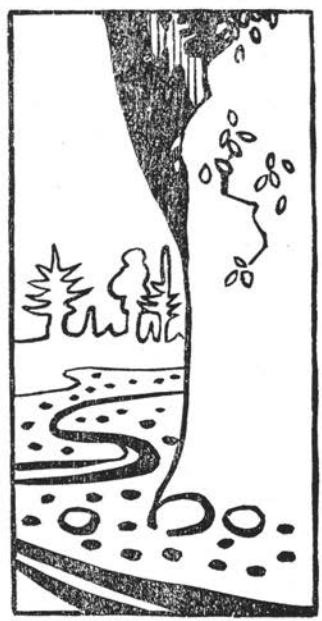
三枝氏の元に達したる詳報を載せて、悲慘なる松澤の死を報じ吾人登山の注意周到ならざる可からざるを云ふものである。

共有山林境界蹈査の爲め共有者一同は倉下山に登るの約束にて二月三日近所の者より誘はれた菊一も何時になき今日はなんだか イヤナ氣がすると言つて出掛くるのは遲かつた爲め待居る者が皆先に出掛くる事に成つた其內仕度も

出來たれば近隣の者一名と兎狩乍ら行くべしと兼て用意の銃砲を引掛け出掛くる時は前九時頃で有つた一里計り行くと倉下山と云ふが有る其山のフモトに狐の足形ありし爲め跡を追掛けよと二人がだん〳〵登ると絶頂に行つて足跡を見失なつたから其處彼處と崖端を通ると長二十間に厚さ六尺位の雪が一度に缺け落ち其雪と共に菊一が三十丈も有る絶急なる處に落ちて仕舞つた菊一と並んで行つた一人は一足違ひにて片足を踏み外したるもヒラリと飛び付き危難を免れ死に物狂ひにて連中の集り居る處へ急報した二十人餘の者が大に驚き直樣菊一の落ち居る處へ掛け付き見るに一時は氣絶して居たが一同の爲めにモックリと起上り大丈夫安んじないと言つたから足が立てるかと言つたら大丈夫と片足丈けは突つ立つたが迚も叶はざる身なれば殘念〳〵頼む頼むと言つて目を閉ぢ胸をヂサヘ横に成つての苦悶で有つたから體を調べて見ても傷處もない察するに落る途中に於て一足に立ち何かにツカマリ立ち止りたるも松菊の後より落ちたる雪が又菊一に當り夫れが爲め顚々して下には木の切り口が有る其根株に心臟を甚だしく打ちたる如く想像された一時手當をなし直樣橇に乘せ一同にて實家へ來た時は午後四時で有つた直ちに醫療を施したるも兩便不通となり血を吐くにも拘はらず正氣にて見舞人へは應答したれ共兩便の通じ付くる事出來ずして總ての飲用物は血と共に吐き出して同日午後九時頃遂にアノ世の人と成つた實に殘念の變死である松菊には母親と妻と子供四人（十七才以下四人）有る切りにて家計上困る其悲〻と言つたら目も當てられぬ有樣で有る。

◎會　報　本會名稱の改正　會員章の制定

會　報



本會名稱の改正

本會は從來、單に山岳會とのみ呼び居りしが、今回會則第二十條に依り、本會役員及び特別會員の協議を經て、本年六月一日より、日本山岳會と改稱したり、日本の「山岳會」といふ意味なり、日本の山岳をのみ研究する會といふ意味にはあらず。

會員章の制定

本會會員にして、歐米山岳會の例に倣ひ、會員章の制定を希望せらるゝもの多く、或は有志晩餐會の席上に於て、或は書面の上にて、その速成を促さるゝもあり、實は役員一同も、疾くより其意向ありたることゝて、今回會員章として、一個のメタルを鑄造することゝなりたり、雛形は左の如く「山」字を、山體そのものに象りたる三角形に抽き出でて、三體に組み合せ、その頂點の集中せる空位には、山岳

の神秘と壯嚴とを包容且つ示現する雪を、六花に刻みて、配することゝしたり、武井眞澄氏の意匠に係はる。純銀臺七寶にて山字形は白、空位に色彩を配合し、其色種によりて會員の種別を示せり。

名譽會員　赤、雪輪金
特別會員　赤
正會員　橄欖（オリーブ）
役員　紫

尙ほ裏面には「日本山岳會會員章」の文字を刻し、一々番號を打ち出し、會員諸君の姓名と番號とを記帳して其所有者を明にせり。

本會の希望するところは、本會會員は、登山旅行の際は、成るべく、見易きところに、本章を佩用せられ、山中、偶ま他の本會會員と邂逅するとき、一見して輙ち同士の間柄なるを知り、相互に談話を交換せられ、溫たかき新交を結び、或は舊盟を訂さるゝ便宜に供せられたきこと、是れなり、一片の雲間相知らず、三十里外の山中、跫音互ひに近づきて、メタルの一見に、初めてそれと知り、忽ち十年の知己も如かざる親密の友人となる嬉しさは、又格別なるべし。

本會は當メタルを、鑄造實費を以て、普ねく會員諸君に頒付す、希望の諸君は、實費金壹圓（書留小包料共）相添へ日本山岳會事務所宛て、申込まれたし、但し上記費用を添へざる注文は、受理せず、（振替貯金にて、御送金の塲合には、登記料一件に付貳錢增加の事）。

尙ほ上記の徽章は、常用には大形にして適せざるの感あり、されば特に希望の諸君の爲めに、ネクタイ、ピンに作りて、實費金五拾錢（郵稅二錢）を以て會員に限り頒付せんとす、鑄造高極めて僅少なれば此際至急申込れたし。

第二回山岳會大會紀念繪ハガキ僅少殘部發賣

去る五月十六日、東京一ッ橋帝國敎育會會堂に於て開きたる、山岳會第二大會（別項大會記事參照）の當席にて、發賣したる紀念繪ハガキは、紀念スタムプ付きのもの、僅少の殘部あり、包紙及び說明文をも添えたるまゝにて、日本山岳會事務所にて、發賣することにしたれば、賣り切れぬ中、至急注文ありたし（定價一組二枚にて十錢、郵送料二錢、振替貯金にて申込の塲合は、口座料二錢增の事）。

本繪ハガキの紙質の精選、寫眞の巧妙、意匠の淡白なる中に數奇を凝らしたるは、大會當日、來會諸君の賞賛を得たるものなり、說明左の如し。

信濃國上高地（カミカウチ）、田代池（タシロ）より仰ぎたる穗高山（ホダカ）（寫眞）　高野鷹藏氏撮影

神代ながらの俤ある大天井、常念坊、蝶が嶽の峰傳ひに下りて來た自分は今神河内の隅に佇んだ。

鼻の先には穂高山が削り立つてゐる、水の平らに列なる波動に對して、直角に嚴かつい肩を聳やかしてゐる、胸毛の底に、白い紫を點じたのは雪である、アルプス一帶に雪の降るのは、それは早いもので、九月の末には、白くなる程つもらぬまでも、氷の毛の樣なのが石角を彈き初る、來年の七八月まで消えない、最も北へ行く程深くて、其雪田も大きくなるが、穂高山などは、傾斜が急なのと、外氣に曝されてゐるので、雪は蓮華山ほどには無い、紫黑色の大岩が脚下に吼へる水に脚を洗はせて、こゝのみは冬の雪壁動くかと見るとき、自然の活動元素は水に集中されてゐるやうだ、水は氷雪の結晶象から、流通大自在の性を享け、新たなる生命を賦與せられたるものゝ特權として盛んに奔放する。

低きには森あり、林あり、野の花あり、しかして高きには雪あり、氷あり、我等の不二山は小さい山だが、熱帶地方の二倍も高い山より偉大なるは、雪と氷に包まれてゐるためである。穂高といはず槍ヶ嶽といはず、奥常念、大天井に至るまで、萬古の雪は蒸發しないで下層から解ける雪だ、死の如く靜霜に、珠の如く淨美な雪から解けた水の、純粹性の緣を有することは、言ふまでもない。小鳥烏水氏作……『雲表』の中「梓川の上流」の一節。

自馬嶽の絶頂より望める鑓嶽及び釋師嶽（寫眞）

三枝威之介氏　撮影

之より登ること七八町にして、絶頂に達す、こゝに參謀本部一等三角點あり。山骨現はにして草短く、巒氣常に磅礴雲霧徂徠す、足は信濃、越中、越後の三國に跨がり、身は俗界を拔くこと一萬尺、今や人界と自然界との交關に立ち縹渺紫微に入るの想あり。此高遠雄大なる宇宙の大觀に接しては、口言ふ能はず、筆紙も盡し難し、胸中一塵事なく愴然として涙の滂沱たるを覺えず。志村烏嶺氏作……『やま』の一節。

◎會　報　會費未拂込の會員諸君に告ぐ

會費未拂込の會員諸君に告ぐ

會員の中、未だに會費の御拂ひ込みなき御方有之、本會素とより營利事業にあらざれども、自己の義務を果されざる會員に對して、本會經濟機關に及ぼさるべき、尠からぬ影響を忍びてまで、雜誌を發送する理由と、必要とを、認め候はず。

茲に本誌を以て、滯納分の御拂ひ込みを、御依賴いたし候間、此際、至急御拂ひ込み被下度、本號發行以來、相當日限を經るも猶滯納分、御拂ひ込みなき會員に對しては、

次號より『山岳』の發送を斷然停止可仕候

右特に御注意を乞ひ候也。

會費御拂込の時は、振替貯金口座へ御振込を乞ふ（表紙第三面參照）。

猶會費を添えざる入會申込者に對しては、入會と認め申さず候に就き、會員名簿に、登錄致さず、又『山岳』も發送不仕候。最も、確實なる紹介者によりて、入會致されたる諸君は、一時會費を添えられざるも、

便宜上名簿に登錄いたし候間、本誌受領と同時に、御拂ひ込み被下度候。

『山岳』の殘本發賣に就きて

本誌前號に『山岳』殘本發賣を披露するや、殆んど發市と同時に、續々と注文を賜はる向き、引きも切らず、殊に第一年の如きは、殘本僅かに四五冊或は二三冊しか備はらざるものに對して、數十通の御注文狀を一時に受けたるため、事務員をして、斷はり狀に忙殺せしめらるゝに至りたるほどの、盛況を呈したりき。

目下の殘本は、左の如く、これとて多數の冊子を儲藏せる次第にあらねば、缺本ある諸君は、此際至急注文せられたし（代價は一冊參拾五錢、郵稅本會負擔、部數によりて割引なし）一旦賣切れたる『山岳』は、斷じて再版せず。

○第二年　第二號
同　第三號
○第三年　第二號
同　第三號

第一年　第一號
同　第二號
同　第三號
第二年　第一號
第三年　第一號
賣切れ

『山岳』御注文御斷はり

左記號數の『山岳』は、悉皆賣り切れて、本會に一部も存せざるに就き、如何に御交渉ありとも、徒らに應酬の手數を重ぬるに過ぎざれば、御注文は御見合せありたし。

飛驒山岳會の成立

飛驒國大名田村高等小學校長古瀨鶴之助氏の主唱にて、飛驒山岳會なるもの、設立せられ、會規六章を結びて、會員を募集し居れり、會規左の如し。

飛驒山岳會規約

一、名稱　飛驒山岳會
二、目的　1 山岳ヲ探檢シテ科學文藝ヲ研究スルヿ
　2 山岳ノ偉大壯嚴ニ接シテ精神體力ヲ修養スルヿ
　3 飛驒ノ山岳ヲ世ニ紹介スルヿ
三、事業　1 隔月一回例會ヲ開キ前揭ノ目的ヲ遂行スル爲メ登山ノ準備及整理ヲナシ且互ニ思想ヲ陳述シテ研究ニ資スルヿ
　2 本會會員ノ研究シタル事項ハ之ヲ東京ノ山岳會ニ報告シテ『山岳』（雜誌）ニ登載セシメ又ハ諸新聞雜誌ニ投稿スルヿアルベシ
四、會場及事務所　當分大名田尋常高等小學校內ニ置ク
五、委員　會員中ヨリ委員一名ヲ選擧シ諸般ノ事務ヲ處理セシム
六、會費　年額金貳拾錢トス

會員通信

會員及び讀者諸氏よりの通信を載す、何に限らず、寄せらるべし。

◉植物交換希望

蘚類標本多數あり、各地方の顯隱花植物との交換を希望す、苔類數十種、野、信地方及び奥羽地方產顯隱花植物にも少々の餘分あり、他地方の顯隱花植物と交換の交換に應ずべし。（仙臺市東七番町　飯柴永吉）

▲旅信（一）

小生儀昨年十月十七日より、五日間下野國栗山の奥深く分け入り、湯西川溫泉より、行人稀なる「イノカワタワ」峠（昇降五里許）を越えて、鬼怒川の上流、川俣に下り、更に金田峠を越えて、日光の湯本に出で申候、殊に鬼怒川、五十里川、湯西川沿岸の溪山の奇、紅葉の美、「イノカワタワ」峠より見たる日光山塊の裏面、鬼怒沼群峰の雄暉、奇絕なる山容は言語に絕し申候。

又四月三日より六日迄で、日原より仙元峠を越えて、秩父に出で、三峰山に登山仕候、仙元峠頂上より浦山側へ半里許りの間は、殘雪四尺餘にて、剩さへ風雨の日なりしかば又もや凍死の二の舞を演するかと、大に非觀致し候ひし、先づは一寸御報告迄で。（須田正雄）

▲正誤

前號「羽後の森吉山」の文中第五十六頁九行淺見書店とあるは成見書店の誤

（山本鐵坊）

▲旅信（二）

昨年度の小生が登り候山々御報知申上べく候、最も低き山々―丘―のみにて御報知の價値無之候へども、曾つてはあんな山にも登つたかと思ふ折もあるべくと、且は、あんな山に登る人も、あるかなと思つて、頂きたい好奇心より、敢て御通知に及び候。

赤城山―三月廿六日　雪を踏んで冬の壯大を眺め候（紀行は先日御送附致候）

榛名山―三月廿八日　赤城山より續いて（伊香保より室田に下る）

高尾山―小佛嶺―十月十八日　淺川より淺川に下る

御嶽―大嶽―十一月二日　日向和田より……御嶽一泊……檜原に下る

鋸山―鹿野山―十一月二十三日　保田（ホダ）より……金谷（カナヤ）に下る……湊村より……木更津に下る

猶四十二年度の活動を期し申候（岩佐定一）

▲旅信（三）

本日輕井澤より當地、着明朝上高地に向ふつもりに有之候久しぶりにて乘鞍の英姿を仰ぎ、梓川の清流を望みて、にわかに人生の壓迫を除かれし心地致し候。山なるかな山なるかなと思ひつゝ今、淺聲に耳をかたむけ居候以上。

六月十六日（島々清水やにて　辻村伊助）

▲旅信（四）

上高地溫泉の改善

その後は御無音に打ちすぎ失禮仕候、小生儀去る十五日より上高地に向ひ一昨夜歸京仕り候。

山中頗無事、少々心細き位に有之上高地は梨及山櫻の盛りにて再、佐保姫が御園に入りたる如き心地也、これ梓河畔にありて日々綠の間を逍遙致し居り候、槍嶽の噴烟は左程にても無之、只、笹、榊等の葉には火山灰一面に附着し居り多少當時の景況は窺はれ候。

清水屋にては待遇法にも一新をほどこし萬事ぬけめなく働らき候樣見受けられ候、特に山岳會員には特別の關係もあれば一層好取扱を致すべしと申し居候、人足の費用も一日八拾錢乃至壹圓位にて雇ひ、宿料は一日四拾錢にて日に平均二回の茶菓子を出し候事もやゝ氣がきゝて感ぜられ候。

宿泊中の料理は大凡次の如くに有之候。

十七日　（菓子）　氷餅　ビスケット
夜　汁　吸物（岩魚、馬齢薯、フキ）　岩魚煮付ケ
十八日　（菓子）　アルヘイ　馬齢薯
朝　汁　吸物（鰍）　鰍の味噌付ケ
晝　牛肉鑵詰
夕　汁　岩魚鹽燒　吸物（凍豆腐、貝、野菜）
十九日　（菓子）　氷餅　卷センベイ
朝　岩魚付ケ燒　汁　吸物（鰍）
晝　岩魚味噌付（木ノ芽味噌）
夕　岩魚鹽燒　汁　吸物（氷豆腐、フキ、岩魚）
二十日　ビスケット
朝　鰍味噌付ケ　吸物（鰍）　汁
晝　佃煮
夕　汁　岩魚味噌付ケ　汁　吸物（岩魚、茸、馬齢薯）
二十一日
朝　汁　岩魚付ケ燒　吸物（鰍）
以上　高野兄　辻村伊助

第二回山岳會有志晩餐會

本年一月十六日に、第一回有志晩餐會が開かれてから、もはや三ヶ月半餘、五月二日、其の第二回目を神田區淡路町多加羅亭で午後六時から催した、會するものは、次の二十二名である。

磯野敬。二階堂保則。川島祿郎。加藤竹三郎。上山六助。河田默。高頭式。高野鷹藏。辻本滿丸。辻村伊助。那須皓。中村清太郎。梅澤親光。大下藤次郎。大内武次。山内淳一。増田吾助。正木多吉。小倉伸吉。小島久太。三枝威之介。角倉邦彦。（イロハ順）

食卓は七時に開かれ。今回の幹事の一人なる、梅澤氏の開會の辭があり、それより例によつて、各自名乘をなしたる後、前回の如くテーブル、スピーチに移り、諸氏の本會に對する希望、注文其の他登山旅行に關する考案等面白く、殊に、二階堂氏の高山と衞生に關する談、及び大下氏の山地旅行と繪畫に關する談等は、頗る興味あるものであつた。餐後は一同思ひ〳〵に椅子を乘り出して、一椀の澁茶、一片の煙草に山岳談を取り換はし、夜十時頃に至り全く散會した。

前回には諸氏の持參展覽に供せられた山岳參考品の陳列をなしたるが、今回は大會も間もなきこと故、二三諸氏の出品もありたれども、これは大會の際に陳列することゝして一切參考品の陳列をしなかつた。

終に臨み次回は九月頃開くことゝして、幹事には會員川島祿郎、角倉邦彦、増田吾助の三氏が指命された。又次回に御出席御希望の方は、前以て往復はがきで、事務所宛に申し込まれたい、さすれば時日、場所、會費等、確定次第御通知申します。

内外交換雜誌

地學雜誌	自第二十一年 至同	二百四十一號 二百四十五號	東京地學協會
地質學雜誌	第十六卷	自百八十四號 至百八十八號	東京地質學會

Alpine Journal Vol. XXIVNo. 183. The Alpine Club (London).
Sierra Club Bulletin Vol. II No. 1. Sierra Club (San Francisco).
The Canadian Alpine Journal. The Alpine Club of Canada (Winipeg).
Oesterreichische Alpen-Vereeniging XXXI. Nos. 777 786. Oesterreichische Alpine-Club.
Butlleti del Centre Excursionista Catalunya Nos. 168-171. Centre Excursionista Catalunya.
Meeteelingen der Nederlandsche Alpen-Vereeniging Nos. 1, 2. Nederlandsche Alpen-Vereeniging.
La Montagne 4 Vols. Club Alpino Francais.
博物之友　九ノ六〇　九ノ六一　日本博物學同志會

寄贈書目

京都帝國大學一覽、一　京都帝國大學圖書館
さゝやき　〃　慶應義塾内　岳窓會
The Geographical Journal. 〃　Rev. A. E. Webb.
The Illustrated London News. 3rd October, 1903.　〃
地質調査所報告第十二號　地質調査所

寄附金

大阪の會員、高木忠次郎氏は、山岳會維持費として、金五圓を寄附せられたり、こゝに掲げて好意を謝す。

前號正誤

圖版　「白水の澤」英文に Hakusui（クスイ）とあるは Shiro-Midzu（シロ・ミヅ）の誤
同　「燒嶽噴火口」北尾錦之助氏撮影とあるは早川藍生氏撮影の誤

◎會報　寄贈書目　寄附金　前號正誤　新入會員

圖版　「信越國境五龍嶽」の英文に Echigo（エチゴ）とあるは Echu（エチウ）の誤
裏表紙　英文目錄に Koyube（コヤベ）（小矢部）とあるは Oyabe（オヤベ）（同上）の誤

新入會員

其後の入會者左の如し

大會記事

大會スケッチ

山岳會第二大會の記

山岳會第一大會は、昨年五月東京地學協會に於て開催したるところ、車軸を流さむばかりの大雨なりしにも係はらず、非常の盛況にて、講堂及び陳列室とも、狹隘を感じたりしかば、本年は去年に比べて、會員の人數も倍加したるのみならず、當日晴天にてもあらば、一入(ひとしほ)混雜することならむといふ豫想より、一ッ橋帝國教育會堂を借ることゝして、會員諸吾には遍ねく案内狀を發し、開會の當日、即ち五月十六日となりたるに、生憎我等の期待は空しうされて、雨烈しく降り出でたるに風さへ強く加はりて、我が大會の、雨に緣あるに呆れたりしが、扨あるべきにあらぬば、幹事は午前より詰めかけて、陳列室の物品を展ぶるもの、講堂の下檢分をするもの紙札を認むるもの、それ〴〵手配して、準備大方成らむとするころ、會員及び以外の觀覽者、又は聽講者等、チラホラ會場に見受けられしが、何分の風雨にて、去年第一大會の同時刻と比ぶれば、來會者も寂寥なるに、一同少しは安からざりしが、山岳愛好者の熱心は、必ず風雨に打ち克たるべきを信じ、準備萬端を整ひたりしが、その内、來賓なる知名の士も續々見えられ、高頭式氏、辻本滿丸氏、ともに接待やら、場内の指揮やらにて忙がしく、陳列室は次第に來會者にて充滿し、往來織るが如くなりしが、やがて陳列品前には、人の二重垣三重垣を作るほどに賑ひて、初めは廣過ぎはせざりしやといふ懸念も、ギッシリ一杯に詰まりて、四時五時頃ともなれば、陳列室に連なれる休憩室も、數脚のテーブルの周回は、人の椅子にて包圍され紀念繪ハガキの賣れ行きも羽が生えて飛ぶやうであつた、今回はこの前の大會に經驗を得たることあれば、來會諸君の御注文に應じて、晩餐を供することにしたるため、食事用にて、雨の中を出入往還するの不便を省き得たりしは、せめてもの幸ひなりき、來會者の姓名は、本記事の終に掲げたるが、その重なるものを擧ぐれば、科學者には子爵田中阿歌麿氏、理學博士神保小虎氏、地質調査所長井上禧之助氏、理學士山崎直方氏、同福地信世氏、同中村新太郎氏、及び東京地學協會の小林房太郎氏、美術家には大下藤次郎氏、吉田博氏、伊上凡骨氏、法律家には法制局參事官法學士柳田國男氏、詩人には與謝野寛氏、河井酔茗氏、小說家には吉江孤雁氏、教育家には梅澤親行氏等にして、右

の内田中子爵、神保博士、大下氏、與謝野氏は、孰れも少年の令息を同伴せられたり、其他新聞記者諸氏（時事新報、やまと新聞、報知新聞、中央新聞、讀賣新聞）參謀本部陸地測量部員諸氏を初めとして、本誌寄稿家には、岩佐定一、川島祿郎、中村清太郎、北澤基幸、辻村伊助、三枝威之介、伊達九郎の諸氏あり。

陳列室の光況　（たゝた氏撮影）

來會者の職業分けを以て言へば、商人、農業家、學校教員、官吏、學生、著作家、工業家、銀行家、宣教師、水産講習所員等にて中には陳列室を閉鎖して、夜間講堂に入りてより後、參會せられたるもあれど、之を總計するに會員九十人（役員を含む）會員以外七十九人計百六十九人にして、この外入口一時混雜のため、受付の參會者名簿に、記名を請ひ能はざりし人々も、少なからざりし模樣なれば、多分百八十人に上りしならむと考ふ、即ち第一大會に比すれば約二倍の來會者にして、さしもに廣き講堂も、殆んどギッシリ詰まりしを以て、その盛況を伺ふを得べく、この日の大雨にも滅けざる同好の士の、燃ゆるが如き熱心を見るべし。

この日の來會者中、殊に異彩を放ちて見えたりしは、英人ウエッブ氏（會員）なり、氏は東京芝榮町セント、アンドリウス教會の牧師にして『日本アルプス』の著者なるウエストン氏と親交ある由、十五年以前、日本に渡航せられ、中央日本の高山大岳には、隨分足跡を印せられたる由にて中央新聞の學術記者なる神東惇氏（會員）と休憩室にて語られたるを聞くに、富士山に四回登られ、御嶽（信州）駒ヶ嶽（甲州）八ヶ嶽、妙高山、白根山（上州草津）丹澤山等へは案内者も連れず、只一人にて登り、駒ヶ嶽（信州）鳳凰山、地藏嶽、淺間山、金峰山（甲州）、塔ヶ嶽には一回づつ登られたりと、陳列室巡覽には、嚮導說明の本會役員に、山岳の既測米突等を聞かれ、一々手帖に認め、その他の出品に就きても熱心に質問を試みらるゝ等、我が山岳會が、氏の如き敬虔熱誠なる愛山家の先輩を有するは、誇りとするところなり

陳列室の目錄は、本文の終に掲げたる通りにて、一々こゝに說明を揭ぐる餘裕を有せざれども、山岳國の古地圖、錦

繪、風土記、道中記類、及び登山術等に關する內外新古の書籍、植物標本、模型圖、山岳寫眞、及び山岳水彩畫、鉛筆スケッチ、登山用具、山岳地產物製品、繪ハガキ等にして本會よりは、陸地測量部の柴崎氏が、越中劔山の絕頂にて採取せられたる錫杖の頭、及び槍身の原物に、右の記事登載ある本誌第三年第三號を添えて、出品したるが、最も觀覽者の注意を惹きたる如くなりき。

陳列室の光況　（たゝた氏撮影）

これら出品物の評判は、投書、聞き書、書信等より拔抄して、後に掲ぐることゝしたり、たゞ遺憾なりしは、田中子爵の諸出品の如き、又小林房太郎氏の伊能忠敬先生自筆の日記帳の如き、學術上又は歷史上、頗る有益なる參考品ながら、陳列室閉鎖時間前幾干もなきときに、會場に到着したるため、出陳後未だ多く會衆の眼に觸れずして、早くも室內取りかたづけに着手するに至りたる等これなり、これ等出品の中には、次回に請ふて、更に展覽に供するものもあるべし。

陳列室は正五時にて閉鎖する筈なりしが、後れて到れる來會者のために、四十分を延期し、六時には來會者悉く二階の講堂に集まり、六時十分、小島烏水氏登壇して開會の辭を述べ（其速記は別項にあり）終りて梅澤親光氏の會務報告あり、去年の第一大會以後、約一年の本會經歷を、口叙せるものにて、其要點は、五月十三日の現在會員は、六百三十八人（內に外國人十二名、在外國者八人）事務所移轉後、會員は六十九人を增して、二人を減じたり、支部の所在地は、新潟縣、長野市、橫濱市の三ヶ所にして、會員は殆んど全國に行き亘り居れども、全く有せざる縣は、滋賀、山形、廣島、鹿兒島、沖繩、樺太にて、最多數の會員を有せるは第一東京（百七十五名）第二新潟（百三十四名）を最とし、第三長野、第四橫濱、第五大阪府といふ順序なり、雜誌寄贈先は、官廳、各主要なる圖書館、學會等にて、外國の山岳會と交換を開始せるところは十八、內地の交換雜誌は東京地學協會の『地學雜誌』及び東京地質學會の『地質學雜誌』等なる旨の諸項目に亘り、猶會名を日本山岳會と改稱する事、會員章を作る計畫ある事等の豫告、及び會員に對する事務所の希望等を述べて次いで柳田法學士は、河

田默氏の紹介にて、塲に登られ、講演第一席として、「山民の生活」なる題にて、山民生活の種々なる發展を述べられ、或は言語學より、或は人類學より、地名の釋義、山岳地の勞作等の講述より、間々八方に輕妙且つ痛快なる揶揄を浴びせかけ、一時間半といふもの、滿堂を靜肅に醉はせられたる縱横の快辯と、且つ内容の豐富なるとは、來會の諸新聞記者をして、有益なる講演と、口を揃へて讃嘆せしめ、下壇の後も、聽衆の中にて、握手を求めたる人ありたるにても、その如何ばかり聽衆を動かしたるかを察せらるべし。

第二席は、理學士中村新太郎氏にて、題は「赤石山系」二葉の地圖と、黑板上數箇の畧圖を加へて、同山脈全體に就きて、懇切に說明あり、同理學士の講演は、專門的に傾き易き地質學上の事實を、何人にも解され易きやう、務めて平易に、くだきて說きたるところに、おそらく人に知られぬ苦心ありたるなるべく、先づ自分の調査は、必ずしも各山巔を究めたるにあらず、同地方の山岳は「トテモオゾイ」ので「メタ」行かんと駄目なりなど、此山岳地方の方言を挾みて、聽者を笑倒せしめ、山脈を說き、地質を論じ、主要なる各座の山岳に就きて語られ、最後にその時代と、成因とに就いての、同氏の嶄新なる意見を述べられ、喝采の中に降壇せられたり、猶同理學士は、本講演に關する數葉のスケッチを、書間陳列室にて、展覽に供せられたるが、同氏の講演速記は、校訂を經て本號に、又柳田法學士の講演速記は、これ又同法學士の訂刪を經て、次號に全文を登載する筈なれば、就いて見られたし。

第三席は、高野鷹藏氏の「上高地幻燈講演」にて、氏自身及び三枝、辻村三氏の撮影に係はれる、十八枚の寫眞を、氏の手製にて幻燈板に仕立てたるもの、島々の清水屋に始まり、日本中央アルプスの仙境、上高地に兀座する、恠奇なる穗高山、同地を奔放する梓川上流の麗水、仙人嘉門次の話、燒嶽の噴烟景等、孰れも聽衆の耳目共に聳やせ、一枚出づる毎に、感嘆の聲は、各所に起りたりき。

これにて豫定の講演は終結となりたるが、猶少しく時間の

柳田氏の講演　（たゝた氏撮影）

餘裕ありたるを以て。

第四席、小島烏水氏は、昨年夏の「白峰山脈縱斷の旅行談」を、數葉の幻燈にて示し、說明的に簡單に述べらるゝ事となりたり、勿論急の事にて、充分の腹案もあらせられざりしなるべきを以て、氏が獨得の快辯をきくに由なかりしも、農鳥、間嶽、北嶽、さては赤石嶽、惡澤嶽等の豪快、天下無比の光景は、目を駭かすばかりにて、殊に大雷雨前に、眺めし富嶽の惡彩の如き、氏の談と共に、心身のおのゝくの思ありたり、尙最後の一葉に、越中五龍嶽よりの立山連峰を眺めたる圖にして、撮影者、三枝威之介氏の說明ありたり。

かくて小島氏閉會を告げられ、散會したるは午後十時にして、朝來の豪雨全く收まり、一天の星はけろりと冴え渡り「さつき泣いた顏は誰あれ」といふが如くなりき。

終に臨んで、當日幹事等と共に、始終場內の整理、斡旋、其他の雜務に當られたる、芝崎惣吉、岡謙吾、高頭麟一郎、井上專敬、三枝威之介諸氏の、好意を謹謝す。

來會者人名

來賓及會員氏名左の如し

（到着順のつもりなれど、多少の前後はあるべく、又字體讀みにくきため、誤まりたるものも、稀にはあるべし。）

三枝威之介　井上伊八　田中阿歌麿
辻村太郎　永島重吉　岩佐定一
上山六助　加山龍之助　北村大作
野崎靜太郎　中村清太郎　杉山正治
小林兼次郎　村上元次郎　池田金太郎
杉山正重　忽滑谷安美　加藤竹三郎
濱名增雄　田中富彌　小高秀一
武田信　北澤基幸　松本卓爾
エー、イー、ウェブ　犬井英夫　野崎長之助
竹下政之助　與謝野寬　小谷國次郎
濱谷末太郎　守田豐藏　小林敏行
矢野宗幹　增田吾助　山內淳一
石田竹太郎　吉江喬松　柳田國男
岩佐秀五郎　二階堂保則　角倉邦彥
貴島憲　田部隆次　山本政三郎
桑山益二　大內武次　龜谷德太郎
辻村伊助　加賀慶之助　本山佗吉
竹內運平　室井平藏　須田正雄
小倉伸吉　神東惇　松山忠三
鈴木孝雄　高橋幸太郎　井上玄一
加賀正太郎　小林房太郎　桑原金之助
齋藤菊三郎　山崎直方　金高增藏
伊達九郎　鵜殿正雄　今村巳之助
井上禧之助　恩田逸策　大下藤次郎
正木多吉　河合良藏　川島祿郎
石谷讓二　小泉和雄　鈴木防人
高森庸雄　山本暉吉　吉田孫四郎
北上宇八　河井幸三郎　勝山秀尾

（役員六名）

河田默　辻本滿丸　高頭仁兵衛
梅澤親光　高野麿藏　小島久太

又會員外にて來會されたる諸氏左の如し

森木純　中條菜　藤瑛
前田蔓村　小島橋次　河野勝次郎
飯山七三郎　島峰徽　神保小虎
中村磯太郎　高梨幾之助　藏田也
富永直次郎　柳澤隆三　河野卯三郎
島村久七　中光良介　稻波與一
吉田博　山口秀三郎　養松三郎
高島和雄　橋本義太郎　恩田經介
兒玉八郎　岸田松若　杉谷佐久馬
出內通敏　吉村芳政　佐藤讓
尙內通政　高松道　八木定祐
今津健槌　飯田宗吉　宮坂鑑吉
正木德太郎　武山長次　田中鑑太郎
田中林三　木俣安規　左納一郎
赤城泰舒　茨木猪三吉　阿部俊三
新井一郎　小宮八十三　末岡彥次郎
林喜三衛　山本作三　梅澤親行
小島榮　中村新太郎　大下正男
兒玉親輔　鈴木慶駒　松坂齊之助
瀨川甲　谷永輔　冠藤之助
高島賢德　矢田部達郎　荒井惠
伊上純藏　與津三郎　小西兵太郎
福地信世　一色義胡　中山三郎
原辰司　興謝野光　岡村千秋
齋藤正直　成澤武雄　外島傳
飯田留吉　金井泰二郎　鈴木友三郎
松平正充

總計百六十九名

陳列室出品目錄

當日陳列室に出品せられたる出品目錄及び出品主氏名左の如し、（イロハ順）

石崎光瑤氏出品

一同氏撮影立山連峰寫眞　五葉
一同氏畫白山絕巓の朝暾　横物　一幅
一同氏畫絹本極彩色高山植物帖　マクリ　一帖

星忠芳氏出品

一甲斐國繪圖　一折

大下藤次郎氏出品

一水彩畫　六點
（一）國府津より見たる大山
（二）信州大町附近より見たる鑓々嶽の一部（？）
（三）尾瀨沼堂小屋附近
（四）岩代燈嶽（七月中旬）
（五）本栖湖より見たる雨ヶ嶽（未成）
（六）右左口（ウバクチ）峠新道より見たる白峰の一角

河田默氏出品

一高山植物標品額面　三面
一ふじのますがた　一册
一ばびまつ　一葉

學海指針社出品

一日本地理模型圖（四十萬分一）　一組
一日光模型圖　一
一阿蘇模型圖　一
一箱根模型圖　一
一京都模型圖　一

吉田博氏出品

一水彩畫アルプス湖沼の景額面十四點　十八葉

（一）瑞西ロテルブルネン山村の絶壁と霧降の瀑布
（二）瑞西インターラークンの山市よりユンフラウを望む夏の朝
（三）瑞西ルセルン湖を隔てゝリギを望む
（四）グリンデルホルム高原より見たるエテルホルンの夏
（五）瑞西グリンデルチールドの山家よりエテルホルンの夏の朝
（六）瑞西ミユレンの大氷河
（七）瑞西スタンダホルムの夏雲
（八）瑞西クーインシヤイデグの高原より見たるユンフラウとシルバーホルムのヘ氷河を望む
（九）瑞西ルセルン市街と同湖を隔てゝリギを望む
（十）瑞西夏夕のルセルン市街とピラタス
（十一）瑞西ルセルン市端よりルセルン湖を隔てゝピラタスを望む夏の月夜
（十二）瑞西グリンデルチルドよりマンクを望む夏の午後
（十三）瑞西グリンデルチールド山村のエテルホルンの夏の月
（十四）伊太利北部ルガノの山岳
（十五）西班牙トレドーの山岳
（十六）阿弗利加大沙漠の巨崖
（十七）阿弗利加テベスの山岳（午後三時の光景）
（十八）北米大陸バイクシイヤーの山岳

高頭式氏出品

一飛州志附圖　一折
一信濃國繪圖　一折
一信濃國大繪圖　一折
一信濃國全圖　一折
一甲斐國全圖　一折

一上野國全圖　一折
一下野國全圖　一折
一カナカンヅキ　一足

高野鷹藏氏出品

一雪中富士登山に用ひしカンヅキと鳶口
一白樺の皮にて作りし額緣と上高地の寫眞
一コンプリートマウンテニーア
（チヨルヂ、デイー、アブラハム）

子爵田中阿歌麿氏出品

一諏訪湖にて用ふる氷滑り下駄（價金六拾錢）　四葉
一諏訪湖御渡（みわたり）寫眞
一スイス國地形圖ゼネーブ圖幅（二萬五千分の一）
一スイス國地形圖センチス圖幅（二萬五千分の一）
一スイス國地形圖チエルマット圖幅（五萬分の一）
一スイス國地形圖エンフラオ圖幅（五萬分の一）
一スイス國レマン湖（十萬分の一）
一イタリア國地質圖ロ！マ附近（十萬分の一）
一イタリア國地形圖ロ！マ附近（二萬五千分の一）
一ノルウエー國地形圖クリスチヤニア圖幅（二萬五千分の一）
一ノルウエー國地形圖ベルゲン圖幅（十萬分の一）
一歐洲アルプスの植物

工學士辻本滿丸氏出品

一アルパイン、ジョーナル、
（ウエストン氏日本南アルプス登山記所載）
一越中立山、繪圖、杯、案内等
一日光山名跡誌

理學士中村新太郎氏出品

一赤石山系寫生圖

（同氏講演の參考品）

中村清太郎氏出品

一大天井より望める日本アルプス大觀　一

梅澤親光氏出品

一アルプス繪葉書　八葉
一シヤモニイ及びモンブラン附近のアルバム　一
一御嶽大神拜祠記　一
一十返舍一九著諸國道中金の草鞋　二十三冊

桑山益二郎氏出品

一日本名山圖會初版　三冊

山内淳一氏出品

一立山寫眞　三葉

理學士山崎直方氏出品

一越中國立山山頂より飛驒山脈を望む　一
明治三十七年八月二十四日同氏寫景
一信濃越中國境針ノ木峠より南方飛驒山脈を望む　一
同年八月二十日同氏寫景　一
一アルプ寫眞　七葉
一アルプス登山者の護符（おまもり）　一
一十津川寫眞　五葉
（一）紀伊山脈を横斷して流るゝ十津川の峽谷寫眞　一葉
（二）熊野川峽流と北山川峽流との會點
（三）十津川紀伊に入りて熊野川となる
（熊野川舟航の極點）
（四）熊野地方の峽流と海岸
（五）熊野海岸

丸山晩霞氏出品

一淺間山頂上　三葉
一淺間噴火口壁　一
一蓼科山の夏雲　一
一上州吾妻河畔　一
一吾妻山草原スケッチ　一
一飛驒平湯夜の寫生　一
一日本アルプス鉛筆寫生　數葉

小林次郎氏出品

一山岳繪はがき帖　一冊

小島烏水氏出品

一日光戰場原油繪スケッチ（河合新藏氏作）　一面
一山岳肉筆繪はがき　二十四葉
一ヒマラヤ寫眞　二葉
一雪の岩手山寫眞　一葉
一鳳凰山塊寫生　一葉
一富士山舊圖　一葉
一北齋畫電光の富士（錦繪）　一葉
一北齋畫鰯雲の富士（同上）　一葉

三枝威之助氏出品

一同氏撮影寫眞白馬絶頂　一
一同五龍山頂より見たる立山連峰　一

山岳會出品

一越中劔嶽絶頂にて獲たる錫杖頭及び槍の穗先
一山岳表紙　原畫及び印刷
丸山晩霞氏畫
一志村烏嶺氏撮影寫眞白馬山頂の日の出

岸田松若氏出品

一富士山寫眞

理學博士神保小虎氏出品

（一）秩父地質繪はがき　六枚
參照秩父巡見事項　一冊
（二）ポレポイ氏カラフト東北岸探檢寫眞帖　一冊
（三）北海道タルマイ火山新噴出寫眞及び繪はがき
參照北海道地質圖
北海道火山分布圖　タルマイ地方地形圖
（四）古代に想像せられたる世界の山脈　二葉
古圖模寫
（五）舊幕府時代、北海道地質探檢之圖
（六）旅行の乘もの
竹の筏、馴鹿の橇、三頭曳馬車　三枚
（七）諏訪の山崩れ寫眞
參照山崩れ記事　一冊
（八）ジャバの火山寫眞
參照プロモ火山の噴出物　八枚
（九）ノルウエーの氷河寫眞
（十）清國小孤山寫眞
（十一）北海道アイヌ語地勢單語表
（訂正したるものは明治二十五年北海道地質報文にあり）
目錄中洩れたるものあらば、補ふべきにつき、出品主よりの、御注意を願ふ。

陳列品雜記

○石崎光瑤氏の立山連峰の寫眞を見て、科學者連中の立話甲『マルデ歐羅巴アルプスのやうだね』、乙『こんな立派な寫眞が、出るやうでは、內地の迂ッカリした寫眞は出せない、外國のものでも持つて來て、並べて置くに限る。（立聞生）

◎大會記事　陳列品雜記

○大下藤次郎氏の水彩畫六點の中、「岩代燧嶽」は、同氏が去年の文部省美術展覽會に出された作品の、原畫で、又「國府津より見たる大山」は、この大會のあつた翌月、上野の太平洋畫會に出品して、賞約になつてしまつた、同氏の水彩畫の特長は、「虛心で自然を受け納めた」といふ點が、如何にも、正直に出てゐて、厭味が少しも無いところにある思ふ。

○河田默氏の植物標品額面も、面白かつたが、生の高山の植物の鉢があつたらばと、望蜀の念が一寸起つた、同氏出品「ふじのますがた」といふ淡彩の折本は、春から夏、夏から秋冬と、富士が雪の衣を着たり、脫いだりする、一年間を寫生したもので、時代は解らぬが、意匠が氣に入つた。

○學海指針社の日本全國模型圖、各地山岳模型圖は、塲內を壓して、軍艦のやうに聳えてゐた、日本全國を二三分で週遊されるのは、ありがたい。

○高頭式氏の山岳國古圖は、よくも揃へたものだが、飛州志附圖（古寫本）の、槍ヶ嶽、笠が嶽、乘鞍嶽などの形は、頗る振つたものだ、マルデ蠟燭を立てたやうな山になつてゐる、古人の山岳に對する觀念が、覗へてれもしろい。

○中村清太郎氏スケッチの、大天井嶽より望める日本アルプスは、スケッチとしては、大作だ、諸新聞で、中村新太郎氏の作と、誤報されたのは、これである。

○山崎理學士（直方）の立山及び針ノ木から見た飛驒山脈スケッチ二大面は、精緻明細、最も人目を惹いた作で同氏の

多能に敬服しないものは無い、一體科學者は、素描がうまい。

○丸山晩霞氏の水彩及び鉛筆寫生數點は、生地丸出しの描き方で、少しも粉飾の加へてないところが活々として、私は却つて展覽會の濃厚な作品（敢へて誰の作品と限つたわけではない）より、面白く見た、蠶の種紙の裏に、スケッチした裾野の寫生や、夜間盲探しに寫生した平湯溫泉の景など、孰れも荒削りであるが、旅の興味が、動いて來て堪まらなひ程だ。

○神保小虎、田中阿歌麿二氏の出品は、流石に學者だけあつて、遊興的のものは無く、教科書の材料になりさうなものが多いやうに見受けられた。

○高野鷹藏氏の白樺の皮から製した額縁は、何やら物産共進會にでも、擔ぎ出しさうな、代物であつた。（以上Y・T・生）

○陳列室にて、最も人目をひきたるものは、山岳會出品の越中劍嶽の紀念品と、石崎光瑤氏の立山の寫眞の樣なりき。

○神保博士と、田中阿歌麿氏が、親しく自身出品物說明の勞に當られしは、感謝の辭なきほどなり。

○昨年の大會も、雨なりし爲、山岳會と雨と、は何か關係がある事か等と笑ふ人もありたり、或人解て曰く、風雨に阻まれて、來會が出來ぬ樣ではと、天の御威しなるべしと。

○小島烏水氏出品の、富士の古圖を見て「これに何所の富士です」ととひたる人あり、實にも見れば、面白き形の圖なりけり。

○高野氏のコンプリートマウンテンヤー中の、寫眞に、惡絶嶮絶口語に絶すと云ひたき所に登る圖版數葉あり、見終りて「輕業を習はなくては、アルプスには登れませんよ」と感歎したる人あるを見たり。

○田中阿歌麿氏出品の諏訪湖中の湧泉の寫眞には、岸の人家を多くうつしたり、神保博士これを見て「田舍の人は妙に人家をうつしたがる」と云へば田中氏「いや實にこれは家の形が面白いので、特にたのんで入れて撮つてもらつたのです」。（C・U・）

△石崎氏の立山寫眞は、日本山岳寫眞の逸品とも申すべく歐洲アルプスの寫眞を見るが如き感があり候、高山植物畫帖も、氏の丹精、多くの外なく感服仕候。

△河田氏の高山植物額面は、美事に存じ候。

△吉田博氏のアルプス水彩畫は、實景に接したる人々より、善く出來てゐるといふ聲を、多く聞き申候。

△小島氏出品の、山岳繪端書は、當時の水彩畫大家の氏に送りし肉筆のみにして、就中晩霞氏が、寫景最中に驟雨に逢ひ、繪を濡らさじと、狼狽せられたる、自筆畫の如き、頗る興味あるものなりし。

△神保氏出品の舊幕時代北海道地質探險圖の如きも、珍品なりと思ひ候。

△山崎氏の寫生畫は大作、アルプス寫眞は、印刷が美事で

日本でも早くアンナモノが出したいと思はれたり、れ守も面白く存じ候。

△梅澤氏が一九の金のわらじの山岳の處をのみ、列されしも面白く殊に石槌登りの圖など、興あるやう存じ候。(H・H)

開會の辭（山岳會第二大會に於ける）

今夕、山岳會第二大會を、此席で開くことになりました、山岳會も、同志者諸君の御賛助に依つて、前途益々發展の見込があるやうに成りましたのは、我々山岳會役員一同の、滿足に堪へぬ次第でございます、で山岳會會務のことは、梅澤幹事から、後刻御報告をする筈になつて居りますから、私からは、別段何も申上げませぬ、只だ今夕此會を開くに當りまして、聊か山岳會の立場に就いて、述べて置かうと思ふことがあります。

日本も明治以來今までに半世紀に近くなりましたが、此間に日本に這入って來た、海外思想の潮流は、餘ほど急速且つ激甚なものであったやうに思ひます、私の考へでは、今までの日本は、丁度高山深谷に夏が來まして、春や夏や秋の草花が、一遍に開くと云った工合に、開國以來諸ろの國から、色々な思潮が流れ込んで來てゐる、それで今現に奔流して居る思潮の中には、十八世紀後半時代のものもありませうし、又十九世紀前半時代、或はその後半もありませう、又現在二十世紀の初期のものも無論あるわけです、若し此思潮と云ふものが、假に眼に見えるものであったとしたならば、此中央集權地なる東京の平原には、種々雜多な色彩が絡み合ひ、押合ひして流れて居るに相違ない、自然の王さまともいふべき、山岳の研究を主意とする、山岳會の起りましたのも、その思潮の一支脈であります。

そこで二十世紀的とは何であるかといへば、これは言ふまでもありませぬ、例へば無線電信が出來る、空中飛行機も現はれる、又二萬噸の軍艦も海に浮ぶと云ふやうに、科學上の發明から來た物質の進歩でありますが、十八世紀後半に似てゐると云ふのは、如何なることを言ふのであるかと申しますと、これは或る英學者の御說であります、十八世紀の末に、英國ではポープ一流の古典主義が廢れて、今でいふ自然主義の萠芽が起りかけた、それから人間が非常に智識を渴望して居って、外國の飜譯物とか、辭典の編纂とか云ふ類が盛んに行はれる、又貴族主義が段々勢ひを失って平民主義が勃興して來るといったやうな所は、丁度今の日本がそれで、英國の十八世紀後半と同じやうだと云ふことでありました、で私の考へます所では、此山岳會が、初めて日本に起ったのは恰度十九世紀の前半あたりに似て居ると思ふ、それは御承知の一此山岳會の第一大會でも、私が極く概畧を申し述べましたが、あのラスキンの書いた『近世畫家論』第四卷の、「山岳美論」、あれが出たのは千八百五十六年、日本で言へば安政三年米國の使節ハルリスが來て、國中大變に騷いで居った時でありました、其翌年則ち安政四年に全世界の山岳會の鼻祖といふべき英國の山岳會が初

めて成立った、それは果してラスキンの「山岳美論」に動かされて、成立ったのであるかドウかは、輕々に判斷することは出來ませぬが、ともかく其れ以來、登山熱、山岳探險熱が盛に流行して來た、丁度日本でも明治二十七年に志賀重昂氏の「日本風景論」が出來まして、「登山の氣風を奬勵すべし」と書かれたので、私ども當時の少年は非常に、あれに刺激され、感動いたしたもので、それから十二年經て三十九年になつて、此山岳會が初めて日本に創立されました、是はラスキンからして、山岳會が英國に出來たのとどこか似て居る、或は皮相の見かも知れませぬが、事蹟の上から言ふと似て居る。

猶一つ似て居ることは、十九世紀になって歐羅巴のアルプスは、盛んに登られた、其前十七世紀時代には、僅に七千呎ばかりの山に登つたと云ふに過ぎなかつたであつたが、本當に高山大岳が陸續と征服されて、パイオニーア即ち開山第一世といふものが方々の山岳に出來たのは十九世紀に至つて殊に多かったのであります、今の日本の山岳はドウかと云ふと、勿論アルプスで云ふ意味のパイオニーアは、現在の日本では見られ無いことゝ思ひます、何故なれば、日本の高山大岳は、書物などにこそ傳へられてありませぬが、昔から隨分宗教上からの山岳崇拜者が登ったし、又土地の獵師なども大分に登って居る、近頃になっては、參謀本部陸地測量部の御方々が、職業上から登られて、三角測量標が到る處の高山大岳に建てられると云ふ風である、唯何年に誰がどの方面から某山に登ったと云ふやうな記錄が無いから、明かに指定しては言はれませぬが、要するに如何なる山岳も既に登り盡くされたと云ふことは、先づ事實であります、それであるから、これからの登山者といふのは、アトから登って、初めてその山岳の記錄を作って、之を公けなる性質の文書に據りて世に發表するといふのに過ぎない、隨つて、アルプスのパイオニアとは、無論大分意味が違ひますが、先づ大體から言へば、未だ世に紹介されない山岳が澤山ある、それらが追々に我々愛山家の手から紹介せられると云ふことは、向ふの十九世紀の、初め時代に、ザッと似て居るのであります。

それから唯今では歐米に、アルパイン倶樂部が即ち山岳會が澤山出來て、殊に歐羅巴アルプスでは、山と云ふ山は悉く登り盡くされて、唯せめては、人の行かない、新しい道から登らう、新しい山に登りたくも、登り盡くされて最早出來ないから、新しい道からでも登って、初めてのリコルドを作らうと云ふ風になって居るかの話を聞きました、で日本では、未だなか〳〵そこまで行って居りませぬ、片ッ方に於て二十世紀的に進歩した事業があるのに、我々は十九世紀前半後半の境ひ目時代の仕事をして居るかと思ふと、少々肩身の狹い譯でありますが、又飜へつて一方から考へると、山岳に對する研究は、二十世紀、二十一世紀と、ドン〳〵進むが宜い、が併し山岳其者だけは依然十九世紀前半の狀態で、私は喰ひ留めて貰ひたい、其理由は山岳に

登ると云ふことは、今では一つの遊戯、マルデ見世物興行になって仕舞った、丁度去年の暮に、海外から送って呉れた米國の新聞を見ると、五歳とか六歳とかの子供が、アルプスの最高點モン、ブランと云ふ嶮山に登った寫眞が出て居った、どうして少年がそのやうな高山に登たかと云ふ、と右の繪で見ると、笊みたやうな奇があって、其中に少年を入れて、強力（ガウリキ）が綱で引ッ張り上げてゐる、それを寫眞に取って、二號大の活字で得々と書き立てゝゐる、私はどう云ふ必要があってさう云ふことをするのか理由が分らぬ、唯人のやらぬことをやって、場當りを取らうと云ふやうな見世物的の野心以外に何もない我々はさう云ふことをするのは絶對的に嫌ひである。

大勢の赴く所致し方もないか知れませぬが、富士山でもさう云った風が大分近頃は見える、山の中で洋食を食べられると云ふことも結構であらう、或は自轉車で曲乘り曲降りをやる、又騎馬で登山を試みる、甚だしきは三味線を擔いで絶頂で活惚れを踊つたと云ふことが、靜岡の新聞に出て居った、さう云ふ風に、山岳を翫弄物として居る、それだけなら、何も態々山に登る必要は無い、淺草の凌雲閣の天邊に行ってやっても宜いわけだ、かういつた遊戯的登山はアチラでも一方の人々は非常に嫌って居る、例へば瑞西のマテルホンと云ふ日本の槍ヶ嶽に能く似て居る嶮山がある、あの山に穴を開けて汽車を通ずるといふ、企てがあるさうで、之に對してマテルホン鐵道反對同盟會が出來ましたた、全歐羅巴の山岳愛好家がその反對同盟に賛成して、四萬人の請願署名者が出來て、今では一つの政治問題になつて來たといふ話であります、又英國などの山岳雜誌を見ても隨分必要のない危險を冒して、山師的の方法で、登山をする記事などが、登載されると、山岳雜誌第何號の某の登山方法に對しては我々會員は裏書きすることを好まずと云ふやうな一種の抗議書を送って反省と注意とを與へて居る、日本では何ぼ富士山が俗化しても、流石にまだソコまでは落ち行かぬやうである、併しモウ今も行きつゝあるのである、今に山岳に窓を開ける鐵道も出來るであらう、又子供を脊負って槍ヶ岳の天邊に登って、それを自慢に新聞に書くやうなことがあるかも知れない、我々は山岳を對象にして、研究を進めると云ふことは宜いが、翫弄的、見世物的興行的の態度に出ることは嚴に避けたいと思ひます、又一方に於て我々自身がさういふ嫌疑を招き易い位置にゐるから、殊に愼重な態度を取らなければ、ならぬと思ひます。

私どもが此山岳會を起して、雜誌を發行した時に、人から能く聞かれる言葉がある、全體山に登って何が面白い、又何の利益があるかと云ふことである、成程解釋の仕方に依つては、面白いから登る、利益があるから登ると言っても差支ないが、併し普通にいふ利益と興味との意味が違ふ、我々は自然の中に包まれて居る、人間と雖も自然の一片である、自然と人間とは、他人でない、親類でもないかも知

れぬが兎に角共同合體して居る以上は全く絶縁することは出來ない、我々は自然に近寄った方が利益であるか、或は遠ざかった方が利益であるか、それは時と場合とに依ってドッチにでも理窟が付くのであります、が兎に角私は山岳會員全體を代表して言ふのではありませぬが、又種々雜多な理由から山が好きになった人々の嗜好や感情を統一して、誰にも遺憾のないに申上げることは出來ませぬから、是は私一人の事柄として御聽きを願ひます。

私の考へでは人間は今申した通り自然の一片であるから、自然に包まれて棲息して居る、ところが此自然を我々人間が、正しく理解して居るか、正しく自然を見て居るかと云ふことは、極めて愼重の態度と、冷靜な判斷力と、又適當の位地に立つことを要する、それにはお祭り騷ぎや、見世物興行と云ふやうな附景氣は要らない、我々が山を愛するといふのは、山岳に立脚して、即ち山岳といふ適當の位地に身を置いて、自然を觀察すると云ふ點に於て畧ぼ一致して居やうと思ふ、然らば此自然を觀察することは何故山に登るに限るかと云ふと、どうも平原の自然は、人間の手に傷けられて、或る點は變造又は改造されて居る、空氣を見れば煤烟で眞黑になって居るまだしも日光を見られるだけが、目付物と云ふ所まで汚されて居る、そこで眞の自然を見るには、人間の手に破壞されない、人間と同等に對立して居る自然に接觸しなければ味はれないのである、それには高原に出ても宜い、又町外れの平原に出ても惡いことはない、

私の考へでは山岳は中心となつて、物を纏める性質がある、散漫な平原に比べて締め括りのついた自然の舞臺である、諸ろの自然はそこに統一綜合されてゐるのである、春夏秋冬の植物の花も一時に展開されるし、雲の觀察にも、星の觀察にも宜いし、又水は色々の態度を山に依って示現して居る、極端に濃い硬い水も、又極端に淡い柔かい水も、變化萬千の姿態を作つて流れて居る、さう云ふやうな傷けられない、奔放自由の自然が、我々と同等の權利を有って對立して居る、變造されない自然を見るには、我々は今のところ山に行かなければ、先づ見られないのであります。

それ等の理由から私は山が好きである好きであるから登りますが、どうか眞率な態度は失ひたくない、偶ま一二の興行的態度に出る者がある爲に、山岳に登ると云ふと、唯もうムヤミに探險とか冒險とかいつて、山を這ひずり廻って、「山荒し」をする者と、愛山家とを、一ッに世間から誤解されることは、甚だ殘念である、其誤解を取除きたい、それには登る人は勿論、又これから登らうとする人にも第一に山岳を知しめ、若くは知らせる方法を採る外はない、山のありがたい點が解れば、世間では山を他界扱ひにするものも減少すると同時に、又玩弄物視する人も考へ直すであらうと思ふ。

扨今夕は柳田法學士の「山民の生活」中村理學士の「赤石山系」高野君の上高地の幻燈話と、それから私の白峰山脈縱斷と云ふ題をも一つ案内狀に掲げて置きましたが、之に

就いて一應御斷はりして置きます、實は今度講演を御依頼したときは未だ中村理學士が御出席下さるかドウかも、分って居りませぬので、至つて人數に乏しかったから、ほんの數に加はる積りで斯う云ふ題を書いたのであります、ところが中村理學士が御講演下されると云ふので、私は、先づ遁れたと申しては、甚だ無責任に聞えますが、當初の希望通りに參ったのは、本會のために滿足の次第であります、又時間もさうはありませぬから、私の白峰山脈縱斷の御話だけは、今夕は致さぬことになりました、是から會務の報告を致して、それから講演に移ります、どうか暫く御淸聽を願ひます（拍手）（小島烏水）

校正者（辻本高野滿麿丸）

明治四十二年六月三十日印刷
明治四十二年六月三十日發行

定價金參拾五錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町六丁目九十三番地　廣瀨安七

印刷所　横濱市太田町六丁目九十三番地　東京印刷株式會社　横濱分社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九號　電話最長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

附錄

本篇は、第二回山岳會大會の席上中村理學士の講演の速記なり、編輯の都合上止むなく附錄として卷末に載せたり。

赤石山系

理學士　中村新太郎君講演

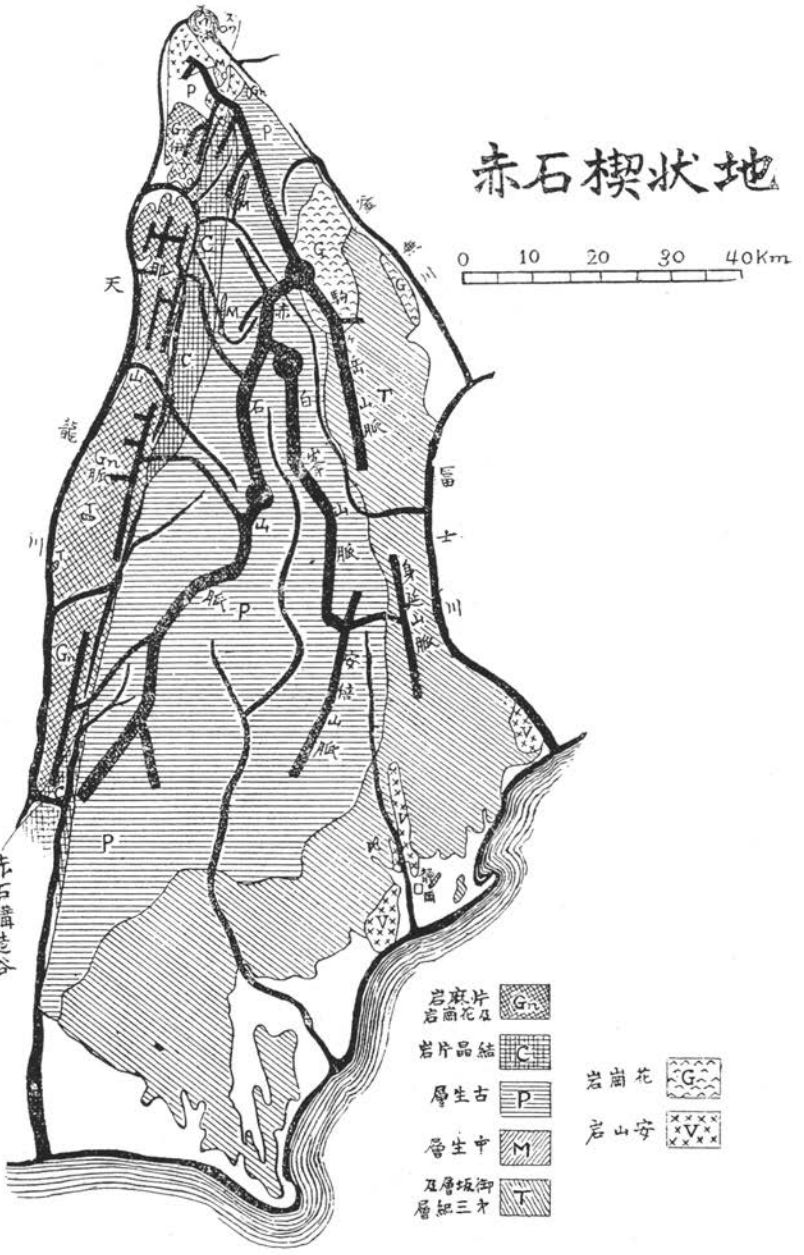
私は今晩赤石山系の御話を致します、一つ御斷りをして置くのは、赤石山系の御話はしても私は赤石嶽に登ったことは無いのであります、又小島烏水君のやうに赤石山系中の最高峰海拔三千百五十一メートルの白峰の北岳を極めたことも無いのであります、又其北東にある鳳凰の山巔、地藏佛をウォルターウエストンのやうに攀ぢたことも無い、又自分の職掌柄として一部分は山の底の事を御話するのであって山岳會で地の中の御話をすると云ふ工合であります。

先づ御話の順序と致しまして日本に於ける赤石山系の位置に就いて述べやうと思ひます、此赤石山系は南日本の外帶の一部分を成して居る山であります、南日本の外帶と申しますと、九州の南部から四國を通って紀伊に這入って一度び伊勢の海に沒し遠州に這入って今度は北に折れて諏訪湖附近まで行って居る山地であります、此外帶には山岳重疊として人跡の到らぬ場所が甚だ多いので、肥後の五ヶの庄、阿波の祖谷等の落武者が逃込んだ場所、言換れば開けた平地との交通が無い場所が此帶中に多いのであります、赤石山系はさう云ふ南日本の外帶の中で東の極端に座って居るのであります、(南日本と北日本との區別はドナタも御承知の通り富士の火山帶を以て分けてあります)。

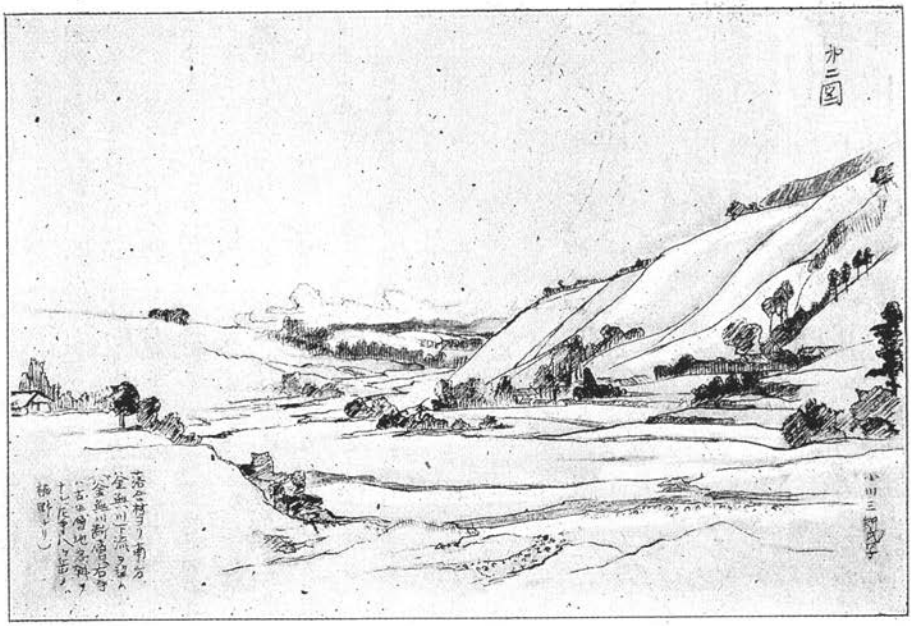
此赤石山系と云ふのは古い名ではありませぬ、最も古い名は赤石楔狀地、(赤石スフェノイド)と云ふ名であります、東海道に二つの姉妹川がある、一つは本流五十五里の富士川、一つは本流四十一里の天龍川である、此二つの姉妹川の間に挾まれた南北の長さ三十里、幅平均十里ある、三角形の地域を其形態から呼んで赤石楔形地と云うたので是はエドマンド、ナウマンが付けた名であります、其命名された時分(一八八五年)には此楔狀地中赤石嶽が最も高いと認められて赤石楔狀地の名を得たのであります、現今は白峰の北岳が一層高いとなつてをる、又赤石山系の名は其後(一八八八年)故原田博士が赤石ゲビルゲと書かれたに初まります。

所で赤石の赤石嶽といふ語源に就いては「山岳」誌上でも色々述べられたことであります、私の推測を以て申上げますと、

矢張り赤い石の山であるのであります、併し山の頂上が赤いとは申上げませぬ、山の南側に東流する赤石澤がある、即ち大井川の上流田代川の一支流になります、此赤石澤にラヂオラリヤ板岩と申す赤い岩が露出してゐる、其赤い石が出る所



第一圖

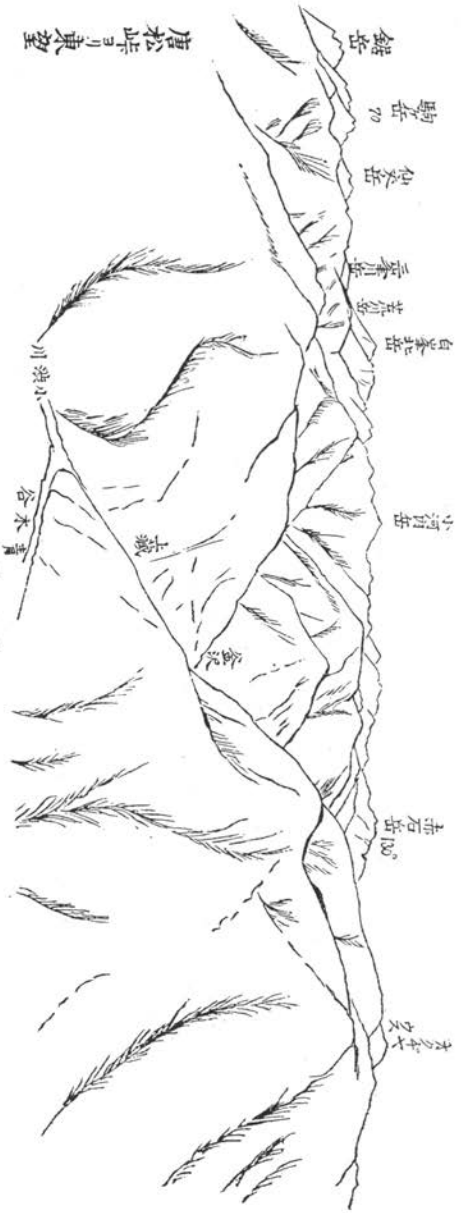


から赤石澤と云ひ、其赤石澤なる名から赤石嶽と云ふ名が出來たと想像して居る、又それが一番良い考へであると信じます、其故信州の小澁湯から登山して又小澁湯へ降りた者には此赤石なる名を説明することは出來ない、須く赤石澤を渉つて赤石の名を論ずべきである。

さて此赤石楔狀地は中國山地や飛驒の樣に一つの高原でない、其間に幾つかの山脈を見ることが出來る、其山脈は四筋ばかりあります、之を圖式で顯はすと第一圖の樣で諏訪湖の南岸から起つて、初め南南東に向ひ駒ヶ嶽に至つて南南西に向ふ一脈がある、之が赤石山系の主脈赤石山脈であります、此西に於て一列或は二列を成した山脈があります之を伊那山脈と呼びます、それから又駒ヶ嶽より南微東に向つて一つの短かい山脈が赤石山脈より分れて居ります、此山脈は駒ヶ嶽山脈と名を付けるが宜い、或は早川山脈の名を以て呼ばれて居られるが駒ヶ嶽山脈の方にプライオリチーがあります、其が早川で一反斷たれて尙ほ南に延びて身延山脈に成ります、それから駒ヶ嶽の南東の三峰川岳で赤石本脈から分れて高い山脈が南に向つて出て居る、これが白峰山脈であります、之が南に延びて身延山脈と並んだ邊を安倍山脈と呼んで居る、斯樣に諏訪湖即ち、赤石楔狀地の頂點に於て一つに集まつて居る、四山脈を認める事が出來る、それで駒ヶ嶽山脈と白峰山脈との間には、早川があり、身延山脈と安倍山脈との間に、大井川があり、赤石山脈と白峰及安倍兩山脈の間に、安倍川があり、赤石山脈と、伊那山脈との間には、谷の一系統があると云ふやうな順序になって居るのであります

す、斯樣に赤石楔狀地には縱走して居る、四つの山脈と從て縱走して居る、河谷とがあって一つの高原ではないのであります。

赤石山系の東の境はドウなって居るかと申しますと、一部分は斷層線に依つて界されて居ります、其有樣は北の方で能く判ります、東方に八ヶ嶽火山が聳えて其西麓は緩い裾野を成して釜無川に達して居ると川の西方には赤石山系の東側が急に高まつて居る、釜無川は一大斷層に當つて居るといふことであるが地形上此事は能く判るのである、(第二圖を看よ)富士川の下流の方では其斷層が判然分りませぬ、兎に角一部分は斷層で東方が落込んで居ります、赤石山系の西の境は天龍川でありますが、北部は谷成盆地(Talbecken)でありまして南部は浸蝕谷であります、所謂天龍峽なるものは南部にあつて中流に在るのであります、天龍の谷成盆地より東方赤石山系を望みますと(第三圖參照)中山性の伊那山脈が前に横はつて其後ろに赤石の三千メートルに達する山脈があります、赤石山脈は實に高山性を呈してゐて其峰の高秀なものは前山たる伊那山脈に對して著しい對照を顯はしてをります、私は明治三十八年の夏秋と同三十九年の夏とで百日餘此地方を歩きましたが其範圍は極く小部分でありまして、赤石楔狀地の全體から言へば七分の一か八分の一に過ぎませぬ、赤石山系を横

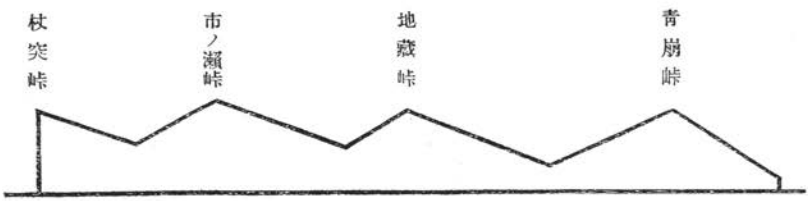


第三圖

斷して信州甲州を結ぶ交通線は道と云ふ道でない、信州の言葉で申すと「トテモヲゾイデ、メタイケバイクニイ、」と云ふ所である、即ち道が惡くて滅茶滅茶に歩けば行く事は出來る所である、行くにい

いと云つてもたゞゆかれるといふに過ぎない、例へば大井川の上流田代の山奥の如きは殆ど人跡稀れであつて山岳會員としては荻野君が歩かれたに過ぎないと思ひます、實際田代の奥、赤石嶽の東の蔭は赤石山系のハートと言つて宜い所であります。是から私の見た重に北部赤石楔狀地に就いて少しく委曲に亘つて申上げやうと思ひます、先づ一番西の伊那山脈から申上げます、この山脈は平均千五百メートルの海拔を持つて居て地質の方から申しますと、所謂片麻岩系に屬する花崗岩及片麻岩類の古い石で出來て居るのであります、御記憶になる爲に桃色で塗つた所と致します、此所を伊那山脈とは申しますが南北に亘つて一續きの山脈ではない、天龍川の三つの支流に依つて、四つに切られて居ります、一體茲は前にも申上げた樣に中山性の山であつて上はノッペリと圓くて決して山岳會の會員諸君が行くやうな山ではありませぬ、然かし登るに足らぬ山ばかりでなく、高遠町の南西にある高鳥屋山(タカヅヤ)の如きは此附近の崇拜の對照物になつて居り、市ノ瀨のすぐ西の戸倉山は北西から望むと富士形を成して居る爲めに伊那富士と呼ばれ此地方の風景に趣きを添へて居る、一般に山容は緩慢ではあるが東方赤石山脈との間にある谷に臨んでは非常な急傾斜を成して居る、大河原の西の唐松峠の如きは其著しい例であります。

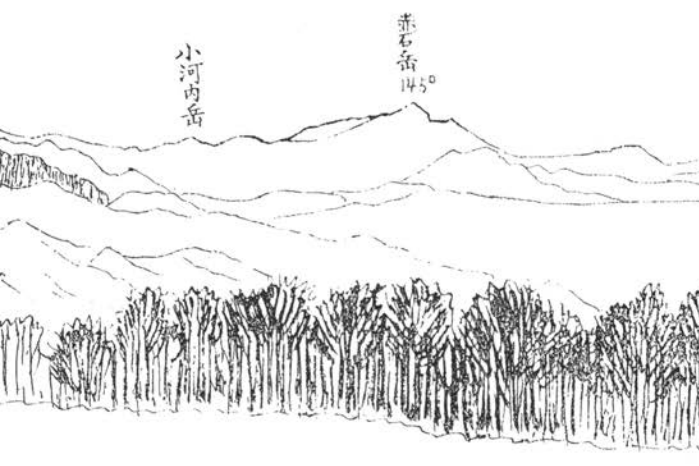
此伊那山脈と赤石山脈との間には一繋りの狹い谷が出來て居る、天龍の支流が又北或は南に向つて小枝を出しこれが一繋りに成つて居る、三峰川、小澁川、和田川が伊那山脈を切斷して居る所は畧西に流れて居る、然るに伊那山脈の東の界では是が北



1×10

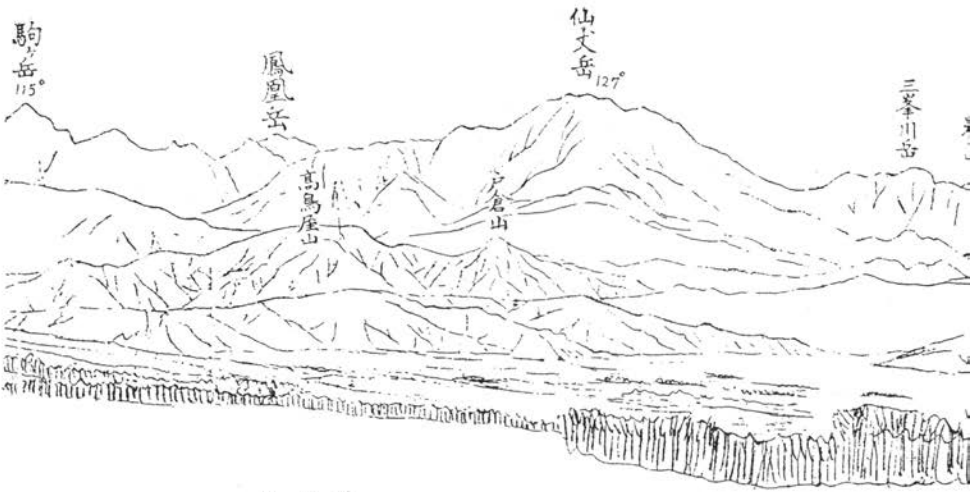
赤石構造縱谷斷圖

第四圖



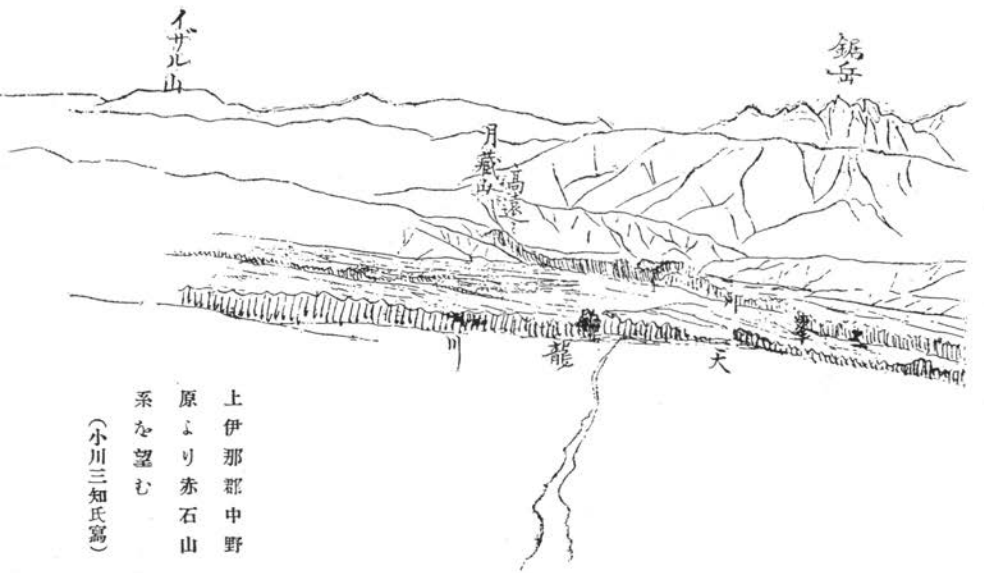
或は南に流れて居る、此等の南又は北に流れる小支流の間は皆峠になって居る、又支流の本源は此南北に走れる小谷でなくてもつと東の赤石山脈の最も高い邊から流れ出すのである、斯樣な川の形狀は三峰川、小澁川、和田川を通じて皆明かである、一番南の水窪川は天龍の本流が東に曲つて來た爲めに規則に從はない、此等は圖を注意して御覽になればすぐ了解される事です。此赤石山脈と伊那山脈との境を北から南に向つて歩いて見ませう、(第四圖參照) 上諏訪から南西一里許に神宮寺と云ふ所がある、其處から南に登る峠が杖突峠であります、峠を登るとこゝに南に向つて藤澤川と申す谷があります、これを下つて高遠町にゆき、それから幾分か三峰川の本流を上りまして市ノ瀨から本流に別れて小さな栗澤と云ふ谷を上るのであります今度の峠を市ノ瀨峠と云ひます、それを南に越せば北入川に這入り之に沿うて下つて鹿鹽市場の南に行くと小澁川の本流に出合ひます、それから本流を幾らか上つて大河原から本流に別れて小さな青木谷に這入る、それから地藏峠を越えると和田川に出る、其下流は遠山川と申して天龍に出ます、それから和田から八重河内の谷を登ると青崩峠にかゝります、それを越えますと道は遠州路に這入って水窪に達します、青崩峠には實際青石が出るのであります、所謂鹿鹽片麻岩の青く崩れて居るので青崩と言はれたのである、かく伊那山脈と赤石山脈との境は規則正しい面白い形をした一つの谷の系統で境を致して居ります、詰り神宮寺から水窪、其南の西渡と云ふ天龍川の船の着く所までは千二百メートル以上の峠を四つ越さねければならぬのであります。

次に赤石山系中の赤石山脈に移ります、此所は登山家が行く所であります、この山脈は普通綠色で顯はします結晶片岩と鼠色で示します古生層から主に出來て居ります、そして山脈の絕巔は皆古生層の岩類である砂岩や粘板岩から出來て居る其山の有樣は謂はゆる高山性即ちアルプス的であります、天龍の方から眺めますと其峰の頭は角ばつて激しい形を有って居ります、駒ヶ嶽以北を特に釜無山脈と申



第五圖

して居ります、其高さは約二千メートルであります、赤石山脈を越えるのは餘ほど困難でありますが、北の方は比較的低い爲に容易であります、釜無山脈を越すには金澤峠と佛平峠と二つ峠の名を持って路がありますが、駒ヶ嶽以南の赤石山脈中には峠の名を持つた路はないと言って宜いほどであります、此山脈中で山の形の著しいのは駒ヶ嶽であります、此は古生層でなくして花崗岩から出來て居て風化の爲に岩がザラザラに崩れます、それが爲に信州では駒ヶ嶽を白崩嶽と申して居ります、此白崩嶽は天龍谷から見れば餘ほど立派であってアルプスの白い白雲岩の山を見るやうであると原田博士は申されて居ります、それから此駒ヶ嶽の南西に仙丈嶽と云ふのがあります、是は偉大な形を有った山であります、此山へはウエストンが東の方から登った道を地圖に書いて居りますが、西方市の瀬から尾根傳ひに登れる樣であります、此邊では之を前嶽と言って居る、其南には三峰川嶽地藏嶽とも申します荒川嶽小河内嶽を經て赤石嶽に至る連嶂が赤石山系の本城を成して居ります、（第五圖參照）最も荒川嶽と赤石嶽との中間には赤石山脈從て赤石山系を横斷する事の出來る樵路があります、是から南は餘ほど高さが減じまして、或は大無間山となり、池口嶽となつて居る。それで此赤石山脈の西側の方の谷はドンなものかと云ふと、谷は非常に深く幽邃であって都人士には餘ほど珍らしい有樣を呈して居ります、殊に駒ヶ嶽の西方からの登路にあたる黑川の谷などは斷崖絶壁を爲してオタカ岩とか或は白岩とか云ふ奇勝があります、谷の中の戸臺上の二軒屋の如きは小松と云つて平家の落武者だとか云つて居りますが此に宿ると全く一世紀位は遲れて居る樣な氣がします、又此三峰川の上流を登っても綠色の大きな崖があつて谷の中の景色は餘ほど面白いのであります、小澁川の上流も矢張り幽邃で赤石へ登られた方は絶壁と淵との爲めに苦められると同時に登山の成功を一層深く自認される樣であります。



上伊那郡中野原より赤石山系を望む
（小川三知氏寫）

それから此邊の町のことを一寸申上げますが、三峰川河畔に高遠町があります、それから其南に市ノ瀨と云ふ小さな村があります、小澁河畔には大河原があり、和田河畔には和田があります、是等の町や村の位置を御覽になると餘ほど面白い關係を有って居ります、丁度本流が南或は北から流れて來て西に折れる其曲り角に斯う云ふ大きな集落があるのであります、河の流れ方が同じ形を有って居ると共に集落の位置に同じ形を有って居るのであります、かう云ふ風な同じ形を地理學の方からホモロヂー（同形）を持って居ると云ふ又はホムタイプであると申します、是等の町や村は皆此邊の高い山に登る出發點になって居る、詰り案内を雇ったり或は準備をする處になって居る。

駒ヶ嶽から分れた駒ヶ嶽山脈、三峰川嶽から分れた白峰山脈に就ては歩いたことがありません、で特に申し上げる事が出來ません。

南と北とに同じ地形を現はして居るのと一致して地質の方でも南北には同じ岩頭が露はれ東と西とはマルで違って居るのである、先きほど申上げました薄桃色で塗る地質は伊那山脈、次に赤石山脈の西の裾を成して綠色の筋が來、其次に灰色で塗られてゐる赤石山脈の主な部分が來ると云ふ形になって居る、尙ほ細かく見ますと灰色の中の種々の石が狹い縞をして北から南に繫がつて居るのであります、それでかういふ規則正しい縞は褶曲山に常に見る顯象で赤石山系も亦地殼の褶曲で出來たものであります、それから赤石山系が何時頃出來たかと云ふことをチョッと申上げてそれで御免を蒙らうと思ひます、此問題は非常に大きな問題でありますが既にナンマンが論じて居る、ナウマンの考へに據りますと、地質時代の區分中、中生代中の三疊紀の末葉より以前に今の赤石山系が高く出來たと言って居るのであります、私の考へではモッと遲い時代で、少く

も中生代の一番終ひの白堊紀より後に此山が出來たのであって、或は第三紀の初期に屬しはせぬかと思ふのであります、詰り地質上新しい時代に赤石山系が出來たのであります、其理由は色々ありますが、一つ二つ掻摘んで申上げますと、黒川の一支流で戸臺で黒川に合する小黒川と云ふのがある、此谷は木が多くして夏は餘ほど涼しい所であります、此黒川を溯ると佛平峠のすぐ下に出る、そこに清水屋といふ石灰小屋があります、高さは千五六百メートルありますこゝで八月の上旬に火燵にアタッたことがあります、此小黒川の谷に沿ひまして中生代中の白堊紀水成岩が出て居る、尙ほ南では市ノ瀨の東の鹽平にも出て居るらしいのであります、此所にある白堊紀層は秩父から信州の甘樂郡、南佐久郡に掛けまして細く顯はれて居る白堊紀層と續きの地層と見らるゝのであります、此白堊紀層は非常に地層がモメて居り且つ千六百メートルもある高位置にあるのは白堊紀の後に非常な壓迫を受けた證據であります、それから先きほど申上げました赤石山脈と伊那山脈との間の谷は地體構造上これ迄赤石裂線と稱せられましたが斷層の線でなくして或る特別の構造線であります、即ち斷層に沿うて特別の地動が起って其面の一端が現はれた所であります、それは、どう云ふ地動かと云ふと、伊那山脈を成して居る地體が赤石山脈の西側を成して居る地體の上に辷り上ったのである、此辷り上り即ち衝動の證據に就ていては純構造論になりますからこゝには省きます、私は此衝動を赤石スラストと名付たいと思ひます、此辷り上りの起つた時代と先きほど申しました白堊紀層が變位した時代とは同一であります、此白堊紀層が變位し、赤石スラストが起つたのは地殼の大變動に依つたので其時に多分此赤石山系が高くなったと思ふ、是だけでは白堊紀の後に山が高くなったと云ふほか申し得られないのであります、併し此赤石山系の東及南東の麓に露はれた第三紀層も變動を受けた跡があるからモウ少し後の新世代の初め即ち第三紀の初期に此大變動があったと思はれます、兎に角白堊紀より後である、アルプスやヒマラヤの世界の高山が出來た時代に矢張り赤石も高くなったと思はれるのであります、今申上げました大變動は地殼の側壓が西から來て地表が膨れて赤石が高くなったのであります、之に關聯してどうして赤石が紀州や四國や或は九州のやうに東西に走った山脈とならずに斯う南北に走った山脈を爲したかと云ふ問題が起るのであります、それは元々九州より秩父に達する東西に走った一つの山脈があった所へ北方から非常な力が來て遠州から諏訪に至る一部の地が特に南に押された爲めである、この地體が移動したと同時に赤石が出來たのであります、是で大抵申上げたいと思ったことは申上げました、今晩は小島君白峰縱斷の御話の前置を申上げる積りでありました、此赤石はまだ分って居ない所が非常に多い、例へば赤石山の南方の山巓又は大井川の上流、田代川の流域などであります、山岳會員或は山岳に興味を有って居られる諸君は此邊の地理を明かにする義務があると考へます、此邊の山や谷を跋渉せられたら大なる自然の賞嘆者となれるかと思ひます、又ジョン、ラスキンのやうに一人のターナ!を見付

けて其畫家の爲にモダンペインタースを書かうと思ふ方は一度は赤石のハートを見舞ふべきである、極くザッとした御話でありますが、此くらゐで今晩は御免を蒙りたいと思ひます（拍手）

志村烏嶺氏著

高山植物採集及培養法

本邦唯一の著書、發刊以來大好評　三色版、コロタイプ、寫眞銅版等約二十葉挿入、內容は本誌前號の廣告を見よ、本書に對する批評は都下各新聞にあり

定價　壹圓貳拾錢
送料　拾貳錢

志村烏嶺氏著　谷畵伯表裝圖案

山岳美觀

日本の山岳及高山植物大版寫眞和英兩文解說附

定價　金九拾錢
六月中發行

（第壹輯目次）

第一圖　信州白馬山　其一
第二圖　信州白馬山　其二
第三圖　越中立山　其一
第四圖　越中立山　其二
第五圖　トガクシショウマ
第六圖　ヒメハナワラビ

著者の寫眞に對する批評

志村氏の山岳寫眞の巧妙なのは山岳毎號に見らるゝ通りである氏の寫眞が美術の妙域に達して居るのは（一）山岳に對する熱愛（二）山岳に對する觀察眼（三）手練、先づ此三點である手練は暫く之を措いて山岳を愛する念が人に超えてゐるから往古日本の畵家が佛畵に丹精をこめ西のラフエールなどいふ巨匠だちが聖母の像に大手腕を振つた樣に氏が山岳といふ巨人に向つてピントを合せる態度は寫眞師のそれでなく美術家のそれである刷毛を借る腕と器械に便る腕とは性質上全然異つた者であらうが態度に相異が有うとは思はれぬかくして成た印畵には作者の山岳に對する崇敬（アトモスフィーア）の氣味を佩びてゐる寫眞とは云ひながら日本アルプスと云ふ樣な大氣（アトモスフィーア）がどこかに充ちてゐる自分は多くの寫眞師が富士山を寫したのを見て奇麗（エステイシツアドオス）と感じた事はある修飾がうまいと思てたこともある併し高山共通の大丈夫的粗剛に打たれた事はない山を物品扱ひにして英靈扱ひにしないから作品にも俗氣がある志村氏の山岳印畵は彼等の作品に比べて確に山岳に對する敬虔の氣が溢れて見えるのは爭はれぬ（以下畧　烏水氏）

上高地温泉塲

日本アルプスなる地殼の大波濤の底に、一仙境あり、人稱して上高地と云ふ。地は長野縣南安曇郡安曇村島々より入る事五里。日本アルプスと本温泉塲との關係は、地方と都會との如し。日本アルプスに登らんには先づ上高地に足跡を印せざる可らず。

本温泉塲の地位、順路、名所等は、本誌前號に高野鷹藏氏の記されたる、「上高地の記」に詳かなり、本温泉塲は、大に觀る所ありて、本年よりは、特に島々清水屋旅館主、加藤惣吉主任となりて、親しく計營以て、來塲諸君の便利と愉快とを計らんとす。

宿料

金參拾錢より八拾錢迄

但し御來塲の砌御指命を乞ふ

外國人

は日本食金壹圓貳拾錢より金壹圓四拾錢位迄

人夫

本年は一人一日金壹圓にて御引受申すべく候

尙ほ常雇人夫として當地小林善平、野口清五郎、和仁清市等御希望に應じ申すべく候

尙ほ御來塲の砌は人夫等前以て島々清水屋宛御一報被下候はゞ御便利御取計ひ申すべく候

日本山岳會會員諸君は特に御便宜御計ひ申すべく候、上高地宛郵便物等は當館に於て御便宜申上ぐべく候

長野縣南安曇郡上高地

上高地温泉塲

長野縣南安曇郡島々

清水屋 加藤惣吉